

東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

- 10 -

福岡県京都郡みやこ町皆見・下原所在遺跡

皆見川ノ上遺跡
カワラケ田遺跡2次調査2（Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区）
八ッ重遺跡2次調査

2013

九州歴史資料館



1. カワラケ田遺跡2次調査地遠景（西から）



2. カワラケ田遺跡2次調査地遠景（西から）



1. カワラケ田遺跡2次調査 Ⅲ-1区道路跡（真上から）



2. カワラケ田遺跡2次調査 Ⅲ-2区道路跡（真上から）



1. カワラケ田遺跡2次調査 III-3区道路跡 (真上から)



2. カワラケ田遺跡2次調査 VI区道路跡 (東から)



1. カワラケ田遺跡2次調査 Ⅲ-1区道路跡土層（東から）



2. カワラケ田遺跡2次調査 Ⅲ-1区波板状遺構検出（北から）



3. カワラケ田遺跡2次調査 Ⅲ-1区波板状遺構完掘（北から）

序

福岡県では、平成19年度から西日本高速道路株式会社からの委託を受けて、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

本報告書は平成20～23年度にかけて行った京都郡みやこ町砦見・下原に所在する砦見川ノ上遺跡、カワラケ田遺跡2次調査（Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区）、八ッ重遺跡2次調査の記録です。

今回報告する3つの遺跡からは、いずれも祓川右岸の河岸段丘上に立地した古代～中世の集落に関する遺構・遺物を確認しました。その中でもカワラケ田遺跡2次調査では、大宰府から豊後国府とを結ぶ幅9mの古代道路跡を確認し、当地域の古代道路研究の良好な資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成25年9月30日

九州歴史資料館
館長 荒巻俊彦

例言

1. 本書は東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した福岡県京都郡みやこ町砦見・下原に所在する砦見川ノ上遺跡、カワラケ田遺跡2次調査、八ッ重遺跡2次調査の記録と草場角名遺跡の石器・木製品の補足で、東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告書の第10集である。
2. 発掘調査および整理報告は西日本高速道路株式会社の委託を受けて、九州歴史資料館（平成22年度までは福岡県教育庁総務部文化財保護課）が実施した。
3. 本遺跡は、東九州自動車道福岡工事事務所管内の第38～41地点にあたる。
4. 本書に掲載した図は、カワラケ田遺跡2次調査を坂本真一、城門義廣と臨時職員の宮田剛、海出淳平、藤島志考とその他発掘作業員が行った。八ッ重遺跡2次調査は城門が、砦見川ノ上遺跡については宮田が行った。
5. 本書に掲載した写真は、遺構をカワラケ田遺跡2次調査を坂本、城門、宮田、海出、八ッ重遺跡2次調査は城門、砦見川ノ上遺跡は宮田が行った。遺物は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は東亜航空技研株式会社と九州航空株式会社に委託し、ラジコンによる撮影を行った。
6. 出土遺物の整理作業は、当館にて小池史哲の指導の下に実施した。
7. 出土遺物及び図面・写真の記録類は九州歴史資料館に保管した。
8. 本書に使用した図面の中には、国土地理院発行の1/50,000「行橋・簗島・中津・田川」と1/25,000「行橋・簗島・豊前本庄・椎田」の地形図を改変したものである。本書で使用する方位は世界測地系による座標北である。
9. カワラケ田遺跡2次調査と八ッ重遺跡2次調査については下記のような遺跡名の変更を行った。

○遺跡名の変更

調査	報告
下原七反田遺跡Ⅰ区	カワラケ田遺跡2次調査Ⅰ区（平成23年度報告済）
下原七反田遺跡Ⅱ区	八ッ重遺跡2次調査（今回、報告）
下原七反田遺跡Ⅲ区	カワラケ田遺跡2次調査Ⅲ区（今回、報告）
下原七反田遺跡Ⅳ区	カワラケ田遺跡2次調査Ⅳ区（平成26年度、報告予定）
カワラケ田遺跡2次調査Ⅴ区	カワラケ田遺跡2次調査Ⅴ区（今回、報告）
カワラケ田遺跡2次調査Ⅵ区	カワラケ田遺跡2次調査Ⅵ区（今回、報告）
カワラケ田遺跡2次調査Ⅶ区	カワラケ田遺跡2次調査Ⅱ区（平成23年度、報告済）

10. 本書の執筆は、砦見川ノ上遺跡については宮田が、八ッ重遺跡2次調査については城門が行い、カワラケ田遺跡2次調査の執筆および編集を坂本が行った。
なお砦見川ノ上遺跡の科学分析を株式会社古環境研究所が、カワラケ田遺跡の古代道路の分析を佐賀大学低平地研究センターが作成した。

本文目次

I	はじめに	1
	1. 調査に至る経緯と経過	1
	2. 調査・報告の組織	2
II	位置と歴史的環境	6
III	皆見川ノ上遺跡	11
	1. 調査の概要	11
	2. 竪穴住居跡	11
	3. 土坑	13
	4. 水田	24
	5. 溝状遺構	27
	6. 不明遺構	30
	7. その他の遺構	34
	8. 特殊品	38
	9. まとめ	44
	10. 草場角名遺跡出土の石器・木器	48
	11. 皆見川ノ上遺跡における自然科学分析	51
IV	カワラケ田遺跡2次調査	69
	1. 調査の概要	69
	2. 掘立柱建物跡	71
	3. 竪穴住居跡	84
	4. 土坑	96
	5. 溝	106
	6. 道路跡	108
	7. その他の遺構	136
	8. 特殊品	140
	9. まとめ	146
	10. カワラケ田遺跡の古代道路土壌の理化学的分析	152
V	ハッ重遺跡2次調査	161
	1. 調査の概要	161
	2. 土坑	161
	3. 溝	165
	4. まとめ	168

図版目次

- 図版 1 1. 皆見川ノ上遺跡2区全景（真上から） 2. 皆見川ノ上遺跡3区全景（真上から）
- 図版 2 1. 皆見川ノ上遺跡1区全景（南東から） 2. 皆見川ノ上遺跡2区全景（南東から）
3. 皆見川ノ上遺跡3区全景（南東から）
- 図版3 1. 1～3号竪穴住居跡（南西から） 2. 1号竪穴住居跡完掘（北東から）
3. 2・3号竪穴住居跡（西から）
- 図版4 1. 1号土坑（北から） 2. 2号土坑（東から） 3. 3号土坑（北東から）
- 図版5 1. 7号土坑（南から） 2. 9号土坑（南から） 3. 10号土坑（南東から）
- 図版6 1. 11号土坑（南から） 2. 12号土坑（南から） 3. 13号土坑（南から）
- 図版7 1. 水田（南西から） 2. 水田土層（南西から） 3. 土器出土状況（西から）
- 図版8 1. 水口状遺構（西から） 2. 水口状遺構（北から） 3. 水口状遺構（北から）
- 図版9 1. 3号溝状遺構土器出土状況(南東から) 2. 4号溝状遺構木製品出土状況(北から)
3. 9号不明遺構（北から）
- 図版10 1. 13号不明遺構（南から） 2. 18号不明遺構（西から）
3. P103・104検出状況（北東から）
- 図版11 皆見川ノ上遺跡 出土土器1
- 図版12 皆見川ノ上遺跡 出土土器2
- 図版13 皆見川ノ上遺跡 出土土器3
- 図版14 皆見川ノ上遺跡 瓦・製塩土器・緑釉陶器・土製品
- 図版15 皆見川ノ上遺跡 石器・石製品
- 図版16 皆見川ノ上遺跡 金属製品・木製品
- 図版17 草場角名遺跡 石器
- 図版18 草場角名遺跡 石器・木製品
- 図版19 1. カワラケ田遺跡2次調査地遠景（東から） 2. Ⅲ-1区全景（真上から）
- 図版20 1. Ⅲ-2区全景（真上から） 2. Ⅲ-3区全景（真上から）
- 図版21 1. V区北側全景（真上から） 2. V区南側全景（真上から） 3. VI区全景（真上から）
- 図版22 1. 32号掘立柱建物跡（南から） 2. 33～35号掘立柱建物跡（真上から）
3. 33号掘立柱建物跡（東から）
- 図版23 1. 44～46号掘立柱建物跡（北から） 2. 47号掘立柱建物跡（東から）
3. 48号掘立柱建物跡（東から）
- 図版24 1. 1号竪穴住居跡（南から） 2. 1号竪穴住居跡竈（南から）
3. 2号竪穴住居跡（南から）
- 図版25 1. 2号竪穴住居跡土器出土状況（東から）
2. 3号竪穴住居跡土器出土状況（東から） 3. 4号竪穴住居跡（北東から）
- 図版26 1. 6号竪穴住居跡（南から） 2. 6号竪穴住居跡土器出土状況（東から）
3. 7・8号竪穴住居跡（東から）

- 図版27 1. 42号土坑（南西から） 2. 44号土坑（北から） 3. 45号土坑（北東から）
- 図版28 1. 46号土坑（東から） 2. 47号土坑（西から） 3. 49号土坑（北から）
- 図版29 1. 54号土坑（南西から） 2. 55号土坑（東から） 3. 56号土坑（西から）
- 図版30 1. 57号土坑（南東から） 2. 59号土坑（西から） 3. 61号土坑（東から）
- 図版31 1. Ⅲ-1区道路跡黒色土検出(南東から) 2. Ⅲ-1区道路跡黒色土掘削後(南東から)
3. Ⅲ-1区波板状遺構検出（南東から）
- 図版32 1. Ⅲ-1区波板状遺構検出（南東から） 2. Ⅲ-1区波板状遺構検出（南東から）
3. Ⅲ-1区波板状遺構検出（北から）
- 図版33 1. 道路跡完掘（南東から） 2. 波板状遺構完掘（北から）
3. Ⅲ-1区東拡張全景（西から）
- 図版34 1. Ⅲ-2区西側道路跡黒色土検出(東から) 2. 西側道路跡波板状遺構検出(東から)
3. 東側道路跡波板状遺構検出（西から）
- 図版35 1. Ⅲ-2区道路跡完掘（東から） 2. 波板状遺構土器出土状況（南から）
3. Ⅲ-2区東側道路跡ベルト土層（東から）
- 図版36 1. Ⅲ-3区道路跡検出（東から） 2. Ⅲ-3区道路跡黒色土検出（西から）
3. Ⅲ-3区道路跡完掘（西から）
- 図版37 1. Ⅲ-3区道路跡黒色土検出（西から） 2. Ⅲ-3区道路跡礫検出（南から）
3. Ⅲ-3区道路跡土器・礫検出（南から）
- 図版38 1. 波板状遺構検出（東から） 2. 波板状遺構完掘（東から）
3. 波板状遺構検出（東から） 4. 波板状遺構完掘（東から）
- 図版39 1. Ⅲ-3区道路跡土器出土状況（東から） 2. Ⅲ-3区東壁土層（西から）
3. Ⅲ-3区道路跡中央ベルト土層（南から）
- 図版40 1. Ⅲ-3区道路跡中央ベルト土層（西から） 2. Ⅲ-3区西壁土層（東から）
3. Ⅲ-3区南壁土層（西から）
- 図版41 1. VI区道路跡（西から） 2. VI区道路跡（東から） 3. VI区道路跡土層（東から）
- 図版42 カワラケ田遺跡2次調査 出土土器1
- 図版43 カワラケ田遺跡2次調査 出土土器2
- 図版44 カワラケ田遺跡2次調査 出土土器3
- 図版45 カワラケ田遺跡2次調査 出土土器4・瓦
- 図版46 カワラケ田遺跡2次調査 瓦・土製品・石器
- 図版47 カワラケ田遺跡2次調査 石器・石製品
- 図版48 カワラケ田遺跡2次調査 石製品・金属製品・ガラス玉
- 図版49 1. ハッ重遺跡2次調査全景（西から） 2. 2・3号溝（小谷）完掘状況（真上から）
- 図版50 1. 1号土坑土層（南から） 2. 2・3号溝（小谷）完掘（南から）
3. 2・3号溝（小谷）配石状況（南から）
- 図版51 1. 7~9号溝完掘（東から） 2. P1南土層 3. P9土器出土状況（北から）
- 図版52 1. 北側調査区全景（東から） 2. 北側調査区2・3号溝（南から）
3. ハッ重遺跡2次調査 出土遺物

挿図目次

第1図	京都郡みやこ町の位置	1
第2図	東九州自動車道調査地点 (1/ 100,000)	4
第3図	周辺遺跡分布地図 (1/ 100,000)	7
第4図	皆見川ノ上、カワラケ田、八ッ重遺跡2次調査区割り図 (1/ 3,000)	9
第5図	皆見川ノ上遺跡全体図 (1/ 300)	12
第6図	1～3号竪穴住居跡実測図 (1/ 40)	14
第7図	1・2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/ 3)	15
第8図	1～3・5・7～9号土坑実測図 (1/ 30)	17
第9図	10～12号土坑実測図 (1/ 30)	19
第10図	1・3・8～11号土坑出土土器実測図 (1/ 3)	20
第11図	11号土坑出土土器実測図 (1/ 3)	21
第12図	11・12号土坑出土土器実測図 (1/ 3)	22
第13図	13号土坑および出土土器実測図 (1/ 30、1/ 3)	23
第14図	水田土層図 (1/ 60)	24
第15図	水田 (5号溝状遺構) 出土土器実測図 (1/ 3)	25
第16図	水口状遺構実測図 (1/ 30)	26
第17図	溝状遺構断面実測図 (1/ 40)	28
第18図	溝状遺構出土土器実測図 1 (1/ 3)	29
第19図	溝状遺構出土土器実測図 2 (1/ 3)	30
第20図	不明遺構実測図 (1/ 30)	31
第21図	不明遺構出土土器実測図 (135・136は1/ 4、他は1/ 3)	33
第22図	ピット (103・104) 実測図 (1/ 30)	35
第23図	ピット出土土器実測図 (1/ 3)	36
第24図	遺構検出出土土器実測図 (190は1/ 4、他は1/ 3)	37
第25図	遺構検出出土土器実測図 (1/ 3)	38
第26図	瓦・土製品実測図 (1/ 3)	40
第27図	土製品・石器・石製品実測図 (1/ 2)	41
第28図	石器実測図1 (1/ 2)	43
第29図	石器実測図2 (259は1/ 4、他は1/ 3)	44
第30図	鉄器・鉄製品・鑄造関連遺物実測図 (1/ 2)	45
第31図	木製品実測図 (1/ 2)	46
第32図	草場角名遺跡出土石器実測図1 (1～4は1/ 2、他は1/ 3)	49
第33図	草場角名遺跡出土石器2・木製品実測図 (9～13は1/ 3、他は1/ 4)	50
第34図	皆見川ノ上遺跡における植物珪酸体分析結果	55
第35図	皆見川ノ上遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)	56

第36図	皆見川ノ上遺跡における花粉ダイアグラム	61
第37図	皆見川ノ上遺跡の花粉・孢子・寄生虫卵	62
第38図	カワラケ田遺跡2次調査Ⅲ-2区全体図 (1/100)	63
第39図	カワラケ田遺跡2次調査Ⅴ区全体図 (1/300)	65
第40図	カワラケ田遺跡2次調査Ⅵ区全体図 (1/300)	67
第41図	32号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	72
第42図	33号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	73
第43図	34号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	74
第44図	35号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	75
第45図	33~35号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)	76
第46図	36・37号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60、1/3)	77
第47図	39号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60、1/3)	79
第48図	42号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	80
第49図	44・45号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60、1/3)	81
第50図	46号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60、1/3)	82
第51図	47号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60、1/3)	83
第52図	48号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	85
第53図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)	86
第54図	1号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)	87
第55図	1号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)	88
第56図	2・3号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)	90
第57図	2号竪穴住居跡出土土器実測図 (71は1/4、他は1/3)	91
第58図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	92
第59図	4・6号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/60、1/3)	93
第60図	7・8号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)	94
第61図	7・8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	95
第62図	土坑実測図1 (1/30)	98
第63図	土坑実測図2 (1/30)	99
第64図	土坑出土土器実測図1 (1/3)	100
第65図	土坑実測図3 (1/30)	102
第66図	土坑実測図4 (1/60)	104
第67図	土坑出土土器実測図2 (1/3)	105
第68図	溝および出土土器実測図 (1/40、1/3)	107
第69図	Ⅲ-1区道路跡実測図 (1/60)	109
第70図	Ⅲ-1区土層図1 (1/50)	111
第71図	Ⅲ-1区土層図2 (1/50)	112
第72図	Ⅲ-1区波板状遺構実測図1 (1/50)	113
第73図	Ⅲ-1区波板状遺構実測図2 (1/50)	114

第74図	Ⅲ-1区波板状遺構実測図3 (1/50) ……………	115
第75図	Ⅲ-1区波板状遺構実測図4 (1/50) ……………	116
第76図	Ⅲ-1区道路跡出土土器実測図 (1/3) ……………	117
第77図	Ⅲ-2区土層図 (1/50) ……………	119
第78図	Ⅲ-2区波板状遺構実測図1 (1/50) ……………	121
第79図	Ⅲ-2区波板状遺構2および出土土器実測図 (1/50、1/3) ……………	122
第80図	Ⅲ-3区道路跡実測図 (1/60) ……………	123
第81図	Ⅲ-3区土層図 (1/50) ……………	125
第82図	Ⅲ-3区波板状遺構実測図1 (1/50) ……………	128
第83図	Ⅲ-3区波板状遺構実測図2 (1/50) ……………	129
第84図	Ⅲ-3区道路跡出土土器実測図1 (1/3) ……………	130
第85図	Ⅲ-3区道路跡出土土器実測図2 (1/3) ……………	131
第86図	Ⅲ-3区道路跡出土土器実測図3 (1/3) ……………	132
第87図	Ⅲ-3区道路跡出土土器実測図4 (1/3) ……………	133
第88図	Ⅲ-3区西壁土層および谷出土土器実測図 (1/3) ……………	135
第89図	Ⅵ区道路跡実測図 (1/60) ……………	137
第90図	Ⅲ-3区その他出土土器実測図 (1/3) ……………	138
第91図	Ⅴ・Ⅵ区その他出土土器実測図 (1/3) ……………	139
第92図	Ⅲ区出土瓦実測図 (1/3) ……………	140
第93図	Ⅴ区出土瓦実測図 (1/3) ……………	141
第94図	土製品実測図 (1/2) ……………	142
第95図	石器実測図 (464~468は2/3、469~471は1/2、472~474は1/4) ……	143
第96図	石製品実測図 (486は1/3、487・488は1/4、他は1/2) ……………	144
第97図	金属製品・ガラス玉実測図 (489~493は1/2、494・495は1/1) ……………	145
第98図	カワラケ田遺跡2次調査地周辺の道路 ……………	149
第99図	京築地域の古代道路 ……………	151
第100図	調査ポイントの概略図 ……………	155
第101図	試料1と試料2の粒径加積曲線 ……………	158
第102図	各試料の締固め曲線と不攪乱試料 (A-2地点) の乾燥密度 ……………	160
第103図	試料1の締固め曲線と不攪乱試料の乾燥密度との比較 ……………	160
第104図	ハッ重遺跡2次調査遺構配置図 (1/300) ……………	162
第105図	1・2号土坑、P1・9実測図 (1/30、1/20) ……………	163
第106図	2・3号溝実測図 (1/150) ……………	164
第107図	2・3号溝、小谷土層実測図 (1/40) ……………	165
第108図	出土遺物実測図 (1~15は1/1、13・14・19は1/2、他は1/3) ……………	167

付図1 カワラケ田遺跡2次調査Ⅲ-1区全体図 (1/100)

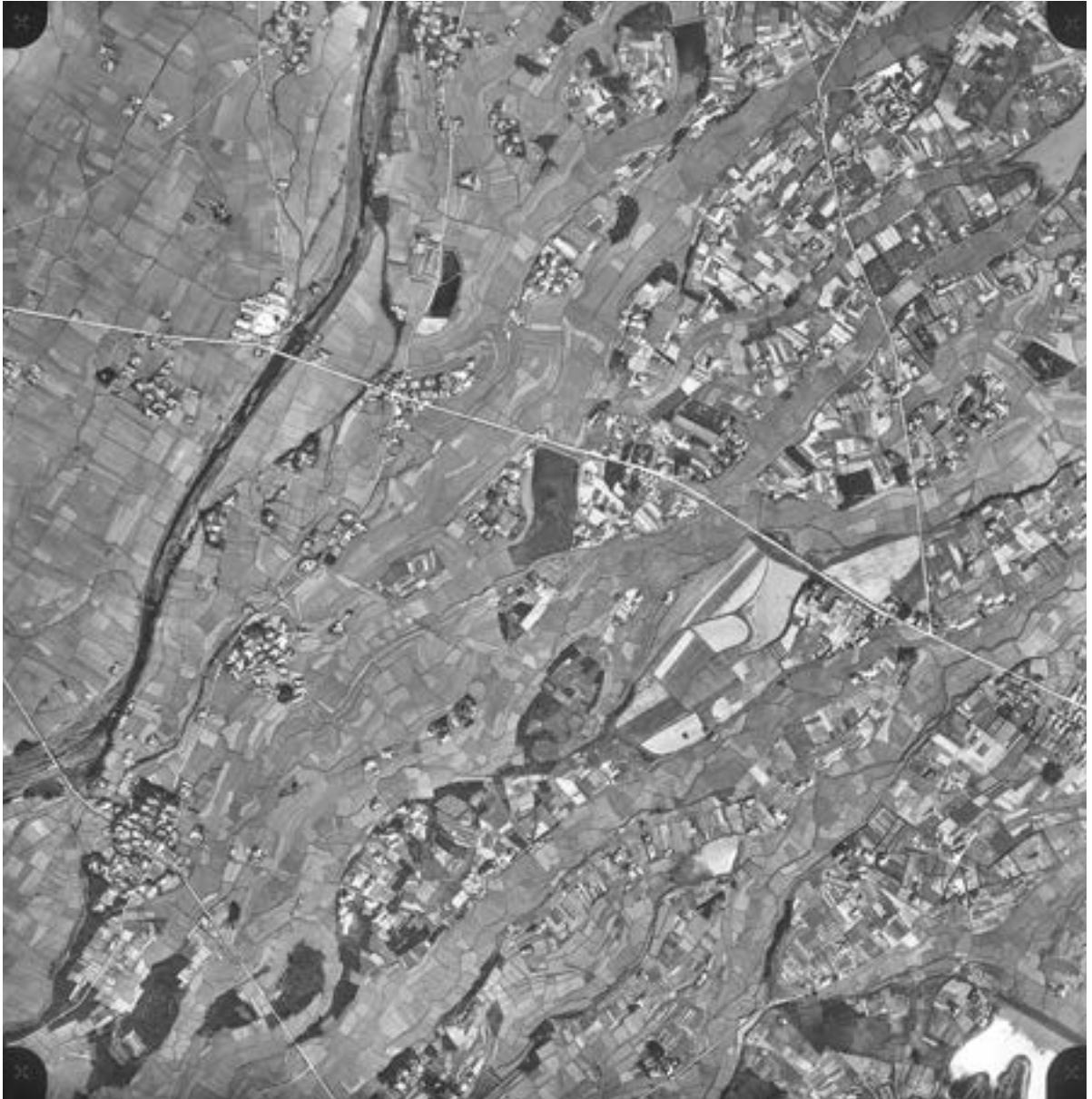
付図2 カワラケ田遺跡2次調査Ⅲ-3区全体図 (1/150)

表目次

表1	東九州自動車道関係発掘調査地点一覧	5
表2	皆見川ノ上遺跡出土石器・石製品	47
表3	草場角名遺跡出土石器	48
表4	皆見川ノ上遺跡における植物珪酸体分析結果	54
表5	皆見川ノ上遺跡における花粉分析結果	60
表6	カワラケ田遺跡2次調査出土石器・石製品	146
表7	実施試験の一覧	156
表8	各調査地点の不攪乱試料の状態	157
表9	試料1と試料2の物性一覧	158
表10	A-3地点の蛍光X線分析結果ならびに交換性陽イオン溶出試験結果	159
表11	M-1地点の蛍光X線分析結果ならびに交換性陽イオン溶出試験結果	159



雪に埋まる道路跡



カワラケ田遺跡2次調査周辺の空中写真（1962年 国土地理院撮影）

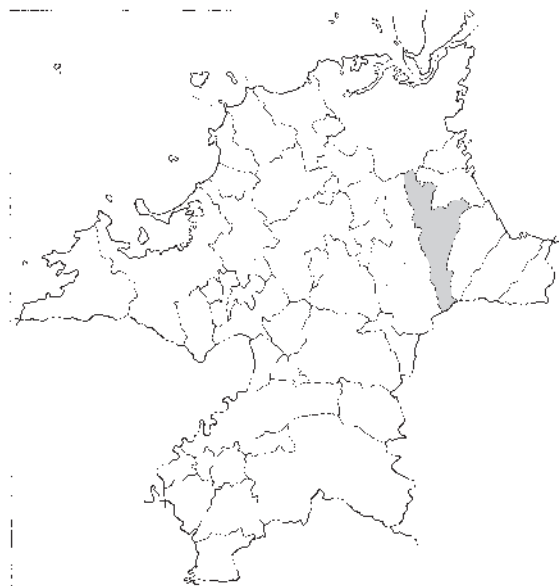
I はじめに

1. 調査に至る経緯と経過

今回報告する皆見川ノ上遺跡、カワラケ田遺跡2次調査(Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区)、ハッ重遺跡2次調査は京都郡みやこ町皆見・下原に所在し、東九州自動車道建設に伴い発掘調査をした遺跡である。

東九州自動車道とは、福岡県北九州市から大分県、宮崎県、鹿児島県鹿児島市までの東九州の各都市を繋ぐ総延長436kmの高速道路である。

福岡県内では、平成18年2月に小倉 JCT から苅田北九州空港 IC までが供用されている。それに先立つ発掘調査を京都郡苅田町大字雨窪で実施し、『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告1』(雨窪遺跡群)についての報告書を平成16年に刊行している。



第1図 京都郡みやこ町の位置

平成17年10月1日には日本道路公団が民営化し、同月11日には西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所との17・18年度の事業計画についての初めて協議を行った。平成18年には東九州自動車道建設予定地内の埋蔵文化財の有無について(照会)をした。平成19年3月26日には「東九州自動車道(苅田北九州空港 IC ～行橋 IC 間)埋蔵文化財協定書」を交わし、苅田町の岩屋古墳群で最初の調査を着手した。続く、平成20年4月22日には「東九州自動車道(行橋 IC ～豊津 IC 間)埋蔵文化財協定書」を交わし、同年10月3日には豊津 IC 内でカワラケ田遺跡2次調査を開始した。詳細については各報告書に記されている。今回、調査を行った3遺跡については、以下である。

皆見川ノ上遺跡は今回報告する中では祓川の東側に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていた。周辺では、皆見樋ノ口遺跡の調査が行われ、古代の道路跡が発見されていた。平成21年6月23日に確認調査を行い、22年7月11日から調査に着手した。

カワラケ田遺跡2次調査Ⅰ区・Ⅱ区の詳細については平成23年度に報告した、『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告3』を参照して頂きたい。Ⅲ区については現在も残る古代道路の延長線上に位置したことから、20年7月28～30日の試掘調査により道路跡が確認された。同年12月17日からまずⅢ-1・2区の調査を開始した。椎田道路に接するⅤ区は21年6月23日の確認調査により、溝やピットなどの遺構を確認したので、22年1月6日から調査を開始した。Ⅵ区については、21年1月8日および22年1月26日の試掘結果により、22年4月9日から調査を開始した。

ハッ重遺跡は昭和62年度に椎田バイパスの建設に伴い発掘調査が行われ、円形住居跡や井戸などが検出された。今回の2次調査の対象地は、1次調査地の南側に当たる。ハッ重遺跡についても平成20年7月28～30日の確認調査が行われた。確認調査の結果、ピットや土坑が検出されたため、同年11月5日より調査に入った。

道路を挟んで北側の調査区については、21年3月27日の確認調査の結果、南側で検出された溝の続きを検出したので、同年4月7日から調査を開始した。

2. 調査・報告の組織

平成20～25年度の調査・報告に関わる西日本高速道路株式会社九州支社と福岡県教育委員会の関係者は以下のとおりである。

西日本高速道路株式会社九州支社

	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
支社長	久保昌紀	久保昌紀	久保昌紀 (～9.30) 本間清輔 (10.1～)	本間清輔	本間清輔	本間清輔
同福岡工事事務所						
所長	竹國一也	福田美文	福田美文	中園明広	源谷秋義	源谷秋義
副所長(技術担当)	高尾英治	高尾英治 (～9.30) 岩尾 泉	岩尾 泉 (～9.30) 入江壮太 (10.1～)	入江壮太 今井栄蔵 (～9.30) 井 秀和 (10.1～)	松繁浩二 井 秀和	松繁浩二 井 秀和
副所長(事務担当)	塚本國博 (～9.30) 原野安博 (10.1～)	原野安博	原野安博	原野安博	原野安博 (用地課長兼務)	甲斐島武司
総務課長	白川雄二	白川雄二 (～9.30) 江口政秋 (10.1～)	江口政秋	江口政秋	馬場孝人	馬場孝人
用地課長	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之 (～5.10)	甲斐島武司
工務課長	大久保良和	大久保良和 (～9.30) 石塚 純 (10.1～)	石塚 純	石塚 純 (～9.30) 堅山哲二 (10.1～)	堅山哲二	田中康一郎
みやこ築上工事長	山根良知	山根良知 (～9.30) 大久保良和 (10.1～)	大久保良和	大久保良和	大久保良和 (～5.10) 大原和章 (5.11～)	大原和章

福岡県教育委員会

	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
総 括						
教育長	森山良一	森山良一	森山良一	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
教育次長	檜崎洋二郎	檜崎洋二郎	亀岡 靖	荒巻俊彦	荒巻俊彦	城戸秀明
総務部長	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄	今田義雄	西牟田龍治	西牟田龍治
文化財保護課課長	磯村幸男	平川昌弘	平川昌弘	伊崎俊秋	伊崎俊秋	伊崎俊秋
副課長	池邊元明	池邊元明	伊崎俊秋			
参事	新原正典	小池史哲	小池史哲			
	池邊元明	伊崎俊秋				
課長補佐	前原俊史	前原俊史	日高公德			
調査第一係長	小田和利	吉村靖徳	吉村靖徳			

庶務			
管理係長	富永育夫	富永育夫	富永育夫
庶務担当	小宮辰之	野田 雅	仲野洋輔
調査・整理			
調査第二係長	飛野博文	飛野博文	飛野博文
参事補佐		新原正典	新原正典
主任技師	坂本真一	坂本真一	坂本真一
技師	城門義廣		
臨時職員		藤島志考	宮田 剛 海出淳平
調査補助員	海出淳平		

	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度
九州歴史資料館						
総括						
館長				西谷 正	西谷 正	荒巻俊彦
副館長				南里正美	篠田隆行	篠田隆行
参事						飛野博文
企画主幹（総務室長）				圓城寺紀子	圓城寺紀子	圓城寺紀子
企画主幹（文化財調査室長）				飛野博文	飛野博文	
企画主幹（文化財調査室長補佐）					吉村靖徳	吉村靖徳
技術主査（文化財調査班長）				小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹
庶務						
企画主査（総務班長）				塩塚孝憲	長野良博	長野良博
事務主査					青木三保	青木三保 南里成子
主任主事				近藤一崇	近藤一崇	
主事				谷川賢治	谷川賢治	三好洸一
整理・報告						
技術主査（保存管理班長）				加藤和歳	加藤和歳	加藤和歳
参事補佐				小池史哲	小池史哲	池邊元明
主任技師				坂本真一	坂本真一	坂本真一
				城門義廣	城門義廣	城門義廣
臨時職員				宮田 剛	宮田 剛	宮田 剛

なお、発掘調査にあたってはみやこ町教育委員会、工事関係者、そして皆見・下原区長の御協力を得て、無事に終了することができました。記して謝意を表します。



第2図 東九州自動車道調査地点 (1/100,000)
 ※国土地理院発行の1/50,000『行橋』『田川』『蓑島』『中津』を改変

表1 東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	試掘年度	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告 書番号	備考
0	苅田 IC	雨窪遺跡群	京都郡苅田町大字雨窪		H12・13	4000	H13・14	H15	1集	
1	福岡		京都郡苅田町大字雨窪	1700	H22					遺跡なし
2	福岡		京都郡苅田町大字提	4500	H21					
3	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字提・馬場	13100	H16・20・21	1200	H20	H24	4集	
4	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字馬場・南原	35300	H18・19	3900	H19・20	H24	4集	
5	福岡		京都郡苅田町大字集	32100	H21・22					遺跡なし
6	福岡		京都郡苅田町大字下片島	30600	H18・20・21					
7	福岡		京都郡苅田町大字下片島	10700	H18					遺跡なし
8	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	24200	H20～22	5000	H19	H24	5集	
9	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	29600	H20～22		H19	H24	5集	
10	福岡		京都郡苅田町大字上片島	21500	H20					遺跡なし
11	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字岡崎・上片島	18200	H20	8440	H21～23	H24	5集	
12	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字上片島	7500	H20	6180	H21	H24	5集	
13	福岡		行橋市延永	12200	H19					遺跡なし
14	福岡		行橋市延永	17500	H19					遺跡なし
15	福岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉国	24810	H22	24810	H19～23	H23～	2・9集	
16	福岡		行橋市吉国	4400	H20					遺跡なし
17	福岡		行橋市吉国	5100	H19					遺跡なし
18	福岡		行橋市吉国・下検地	82500	H18・19					遺跡なし
19	福岡		行橋市下検地	12710	H22					遺跡なし
20	福岡		行橋市上検地・下検地	20650	H22					遺跡なし
21	福岡		行橋市上検地・中川・大野井	19190	H22					遺跡なし
22	福岡		行橋市大野井・宝山	4820	H20・22					遺跡なし
23	福岡		行橋市宝山	10050	H20					遺跡なし
24	福岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16100	H20	6360	H21・22			
25	福岡	宝山桑ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46620	H20・21	31550	H22～24			
26	福岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14710	H20・21	2900	H22			
27	福岡		行橋市流末	840						
28	福岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18590	H20	12750	H21～23			
29	福岡		行橋市矢留・南泉	7000	H20・22					
30	福岡	福原長者原遺跡 福原寄原遺跡	行橋市南泉	18774	H19・22	16574	H22～24			
31	福岡	福原寄原遺跡	行橋市南泉	10950	H21	3300	H21			
32	福岡	竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13888	H21・22	13888				H22 行橋市による調査
33	福岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17636	H20・21	4560	H21	H24	6集	
34	福岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15013	H20	15013	H21			H21 行橋市による調査
35	福岡	草場角名遺跡 国作三角遺跡	行橋市南泉・京都郡みやこ町国作	42940	H20～22	3420	H22・23	H24・25	6集	
36	福岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都郡みやこ町国作・田中・有久	29491	H20～22	29491	H21～23			H21 八反田遺跡はみやこ町による調査
37	福岡		京都郡みやこ町有久	1110	H21					遺跡なし
38	福岡	皆見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町皆見	1132	H21	1132	H22	H25	10集 (本冊)	
39	福岡	皆見中園遺跡 皆見大塚古墳	京都郡みやこ町皆見	8218	H21・22	5918	H21～23			H22 皆見中園遺跡はみやこ町による調査
40	福岡	カワラケ田遺跡 ハッ重遺跡	京都郡みやこ町皆見・下原	45510	H19～21	22763	H20～22	H23～	3・10集 (本冊)	
41	福岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町皆見	5080	H21	3580	H21・22	H23～	10集 (本冊)	
42	福岡	安武深田遺跡	築上郡築上町安武	26000	H21・22	26000	H22			一部築上町による調査
43	福岡		築上郡築上町小原	24359	H21					

II 位置と歴史的環境

今回報告する3遺跡の所在する京都地域とは福岡県の北東部に位置し、現在の行政区では一市二町で構成される。行橋市と京都郡苅田町、そして遺跡の所在するみやこ町である。古代では豊前国に含まれた地域の一つで、周囲は東に周防灘、西に英彦山山系が広がる自然と歴史が豊かな地域である。

豊前国内では五畿七道（古代の行政区画）のうちの一つ西海道が通る。この地域の西海道は到津駅で山陽道を分かれて、福岡県内の東側や豊前国内を通るルートから、研究者の間では西海道東路、西海道豊前路とも言われる。豊前国内の駅馬については、『延喜式』によると「杜崎、到津各十五疋。田河、多米、刈田、築城、下毛、宇佐、安覆各五疋」とある。豊前国内には九駅を設置し、京都地域には「多米、刈田、築城」の三駅を設置していた。現在、駅家の位置は推定されるが、発見までは至っていない。しかし、この京都地域内では今回報告するカワラケ田遺跡2次調査以外にも、大谷車堀、天生田矢萩、天生田大池、皆見樋ノ口、ハッ重、越路二月田、坂本正毛田遺跡の7遺跡で古代の道路跡が発見されている。京都地域の西海道はみやこ町で確認された豊前国府跡を中心に考えると大きく3つのルートがある。

1つ目は刈田駅～豊前国府とを結ぶルート、2つ目は大宰府と豊前国府とを結ぶルート、最後の3つ目は豊前国府と豊後国府とを結ぶルートである。この3つのルートについては日野尚志、戸祭由美夫、木下良と最近では木本雅康の研究があり、第3図で示すルートもこれらの研究者の考えを踏まえて作成している。

1つ目の刈田駅～豊前国府とを結ぶルートでは海際と山際の2つのルートにさらに分けられる。現在の所、どちらのルートも発掘調査で古代道路跡を確認していない。延喜式以前の道路と考えられている海際ルート沿いでは、みやこ町国作・惣社にある豊前国府の西側を北上して釜割池を横切り、現在は宅地になったが竹並遺跡東側の切通し状の痕跡、初期の豊前国府跡と考えられる福原長者原遺跡の東側を通る。北上する途中には、やや東へ離れる所に7～9世紀に比定される9棟の掘立柱建物跡が発見された在有力層の居館跡と考えられる崎野遺跡がある。そのまま現在の行橋市の中心部の西側を通過して高城山の南裾にぶつかり、その裾に沿って北上して刈田駅に向かう。刈田駅に向かう途中には東側に4・5世紀のこの地域の有力者の巨大古墳である御所山、番塚、石塚山古墳の近くを通る。

山際のルートでは多米駅推定地から、現在の県道長尾・稗田・平島線を北上する。途中、古墳時代終末期の古墳である橘塚・綾塚古墳の間を通り、行橋市須磨園の椿市廃寺の横を通る。8世紀前半頃に創建された椿市廃寺は、講堂と一部回廊が検出されている。また椿市廃寺の南西には、蛇紋岩製丸軛を出土した高来井正丸遺跡もある。さらに平尾台の東裾に沿って北上すると黒添赤木遺跡、唐三彩の陶枕片や緑釉陶器片が出土した谷遺跡の近くを通る。高城山の西にある京都峠を通過して、殿川ダムを通過し、刈田駅に向かう。なお、刈田駅についてはその所在については現在不明だが、戸祭が大字名の馬場の可能性を挙げている。そのことを示すように平成20年度の馬場長町遺跡の調査では、当地域内でも最も多くの越州系青磁、製塩土器などが出土し、官衙的施設の存在を伺わせている。

2つ目のルートでは田川郡内で古代の道路跡の発掘調査は行われていないが、障子ヶ岳越えをし



- 1 皆見川ノ上遺跡 2 カワラケ田遺跡2次調査 3 ハッ重遺跡2次調査 4 皆見大塚古墳 5 皆見樋ノ口遺跡 6 豊前国府跡
 7 豊前国分寺 8 豊前国分尼寺跡 9 上坂廃寺 10 船迫窯跡群 11 安武深田遺跡 12 赤幡森ヶ坪遺跡 13 築城千代遺跡
 14 越路貴船遺跡 15 越路六郎遺跡 16 越路二月田遺跡 17 坂本正毛田遺跡 18 彦徳甲塚古墳 19 甲塚方墳 20 竹並遺跡
 21 竹並ヒメコ塚古墳 22 福原長者原遺跡 23 崎野遺跡 24 天生田大池遺跡 25 天生田矢萩遺跡 26 大谷車堀遺跡
 27 御所ヶ谷神護石 28 大久保向原遺跡 29 橋塚古墳 30 綾塚古墳 31 延永ヤヨミ園遺跡 32 高来井正丸遺跡 33 椿市廃寺
 34 黒添赤木遺跡 35 谷遺跡 36 御所山古墳 37 番塚古墳 38 石塚山古墳 39 馬場長町遺跡 40 古代道路推定線(破線部分)

第3図 周辺遺跡分布地図 (1/100,000)

※国土地理院発行の1/50,000『行橋』『田川』『蓑島』『中津』を改変

て多米駅に向かい、そのまま真東に向かって御所ヶ谷神籠石のある御所ヶ岳や馬毛ヶ岳の北側の裾を通過して、八景山まで一直線に通る。八景山にある甲塚方墳で南東に向きを変えて、豊前国府の南側を通る。甲塚方墳から西側では、大谷車堀、天生田矢萩、天生田大池の3遺跡で古代道路跡の調査が行われているが、東側の豊前国府までは古代道路跡の発掘調査は行われていない。しかし木本によると松田池付近の窪地で小字名「足形」な



現代も残る古代道路の痕跡

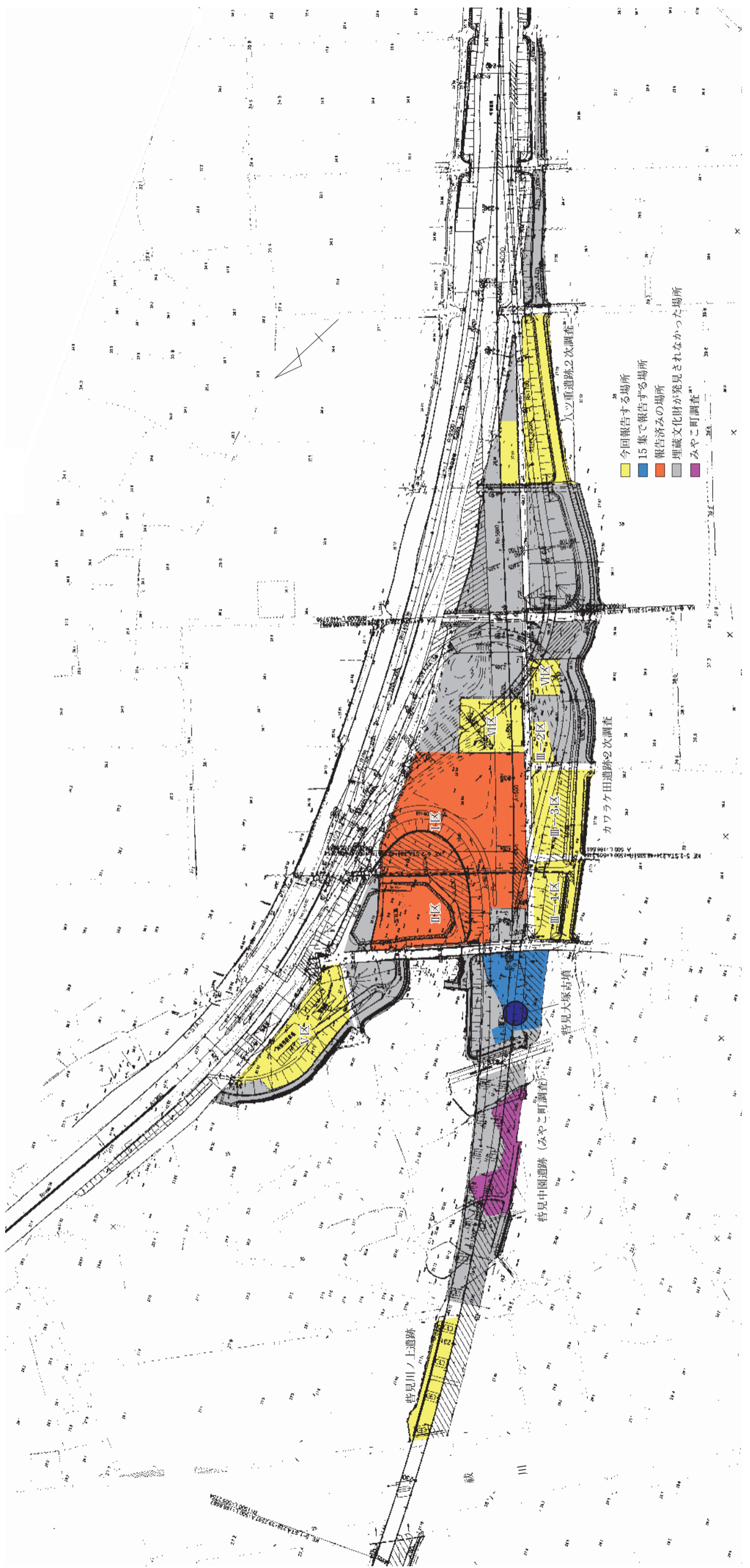
どの駅路に関する痕跡を確認している。また豊前国府周辺では、圃場整備以前の空中写真によりその存在を確認できる。

3つ目の豊前国府と豊後国府とを結ぶルートでは、豊前国府と豊前国分寺および豊前国分尼寺の間を南東方向へほぼ一直線で豊前市松江まで進む。ルート上ではみやこ町皆見・下原地区の祓川近くの皆見樋ノ口、本報告のカワラケ田、ハッ重、やや離れるが築上町越路・坂本地区の越路二月田、坂本正毛田遺跡の5遺跡で古代道路跡の発掘調査が行われている。また現在も自衛隊の築城基地内でも切り通し痕跡があり、複数の場所で古代道路跡が残っている。なお、このルート周辺では豊前国府とカワラケ田遺跡で巡方が、赤幡森ヶ坪遺跡と越路貴船遺跡では丸軛が出土するなど興味深い。今回、報告する皆見川ノ上遺跡では官衙的施設はないが、緑釉陶器片や製塩土器片が出土した。またカワラケ田遺跡2次調査より南東側には船迫窯跡群や安武深田遺跡や赤幡森ヶ坪遺跡など古代の集落や関連遺跡もある。

このように京都地域内では、古代道路跡およびその周辺遺跡について調査が行われているが、郡衙や駅家や伝路など関連遺跡については未発見が多く今後の新たな発見が待たれる。

(参考文献)

- 小川秀樹編2001『崎野遺跡』行橋市文化財調査報告書第28集 行橋市教育委員会
 - 小川秀樹編2012『大谷車堀遺跡』行橋市文化財調査報告書第42集 行橋市教育委員会
 - 木下良 1983『西海道の古代官道について』『大宰府古文化論叢 上巻』九州歴史資料館
 - 木本雅康2004「6 古代の官道」『行橋市史 上巻』行橋市史編纂委員会
 - 木本雅康2011「豊前国京都・仲津両郡における古代官道」『古代官道の歴史地理』同成社
 - 坂本真一編2012『カワラケ田遺跡2次調査1』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告3 九州歴史資料館
 - 坂本真一2013「研究ノート 京築地域の古代道路」九州歴史資料館研究論集38 九州歴史資料館
 - 未永弥義編1989『ハッ重遺跡』権田バイパス関係埋蔵文化財調査報告1 豊津町教育委員会
 - 未永弥義編2000『皆見樋ノ口遺跡』豊津町文化財調査報告書第22集 豊津町教育委員会
 - 未永弥義編2004「豊前国」『古代道路事典』古代交通研究会
 - 飛野博文編2004『雨窪遺跡群』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告1 福岡県教育委員会
 - 戸祭由美夫1979「第三節 豊前国」『古代日本の交通路IV』大明堂
 - 長嶺正秀編『谷遺跡』苅田町文化財調査報告書第11集 苅田町教育委員会
 - 日野尚志1974「豊前国京都・仲津・築城・上毛四郡における条里について」『佐賀大学教育学部研究論文集 第22集』佐賀大学教育学部
 - 日野尚志2001「豊前国京都の駅路について」『佐賀大学文化教育学部研究論文集 第5集』佐賀大学文化教育学部
 - 山本健太郎編2002『越路二月田遺跡 坂本正毛田遺跡』権田町文化財調査報告書第12集 権田町教育委員会
 - 吉村靖徳編1999『天生田大池遺跡』福岡県文化財調査報告書第137集 福岡県教育委員会
- ※皆見川ノ上遺跡、ハッ重遺跡2次調査、カワラケ田遺跡2次調査の所在するみやこ町皆見・下原地区周辺についての詳細な歴史的環境については『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告3』で報告しているので参照されたい。



第4図 皆見川ノ上、カワラケ田、ハツ重遺跡2次調査区割り図 (1/3,000)

皆見川ノ上遺跡

Ⅲ 皆見川ノ上遺跡

1. 調査の概要

皆見川ノ上遺跡は、平成21年の確認調査の結果により、みやこ町皆見777-1、779-1・2の970㎡を調査対象地とした。調査対象地は祓川右岸の河岸段丘上の岸際に立地する。調査前は圃場整備された田地であった。調査地は東西に細長い形であり、排土置き場との関係などで全面を表土剥ぎすることができなかった。そのため、調査区を3つに分けた。まず東側の手前部分を1区として、平成22年7月11日からバックホーによる表土剥ぎを開始した。1区終了後、調査対象地の東側約2/3を2区として調査を続けた。2区埋戻し後に、西側の約1/3を3区として調査を行った。10月20日は調査区を埋め戻して、約四ヶ月間の調査を終了した。

今回の調査では、表土および圃場整備時の盛土を約30cm除去すると遺構面を確認した。遺構はまばらであったが、竪穴住居跡3軒、土坑11基、水田、水口状遺構、溝状遺構9条、不明遺構7基とピット多数を検出した。

なお、調査と報告では、以下の遺構名の変更を行った。

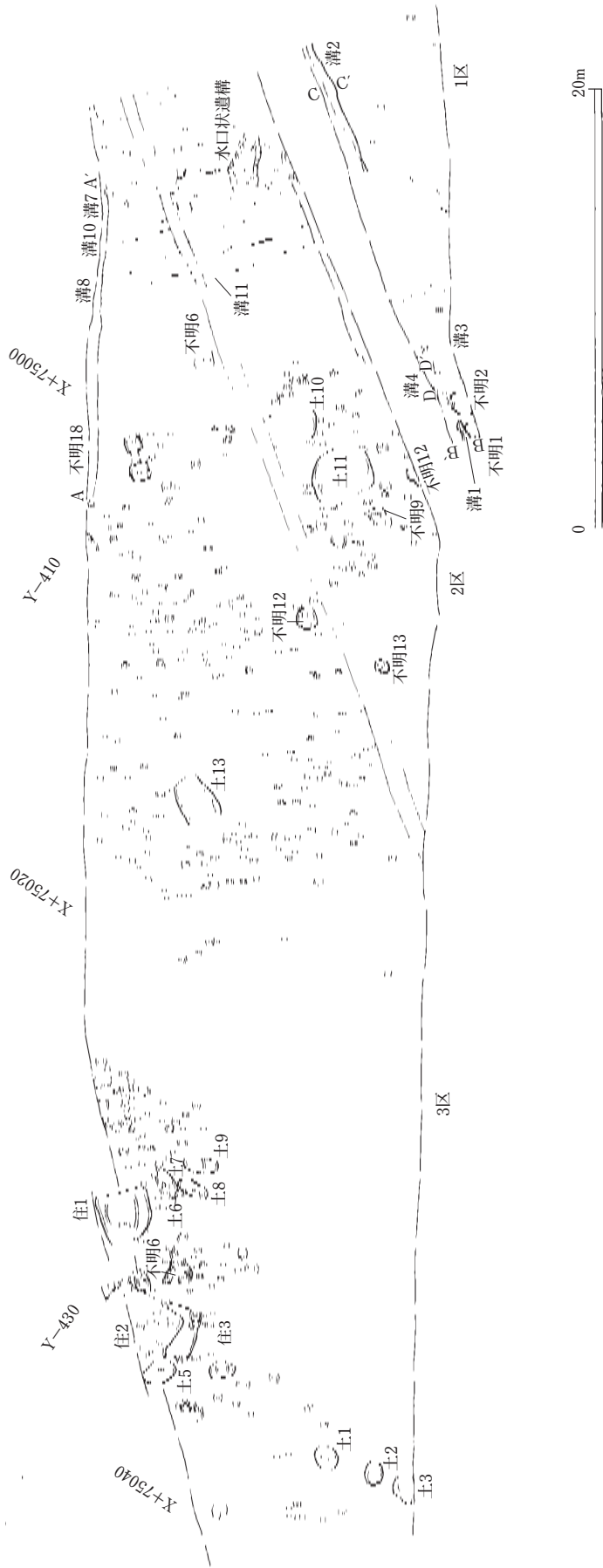
調査時		報告時
4号土坑 (SK04)	→	8号不明遺構 (SX08)
ピット276 (P26)	→	6号不明遺構 (SX06)
8号不明遺構 (SX08)	→	13号土坑 (SK13)
6号不明遺構 (SX06)	→	12号土坑 (SK12)
10号不明遺構 (SX10)	→	10号土坑 (SK10)
11号不明遺構 (SX11)	→	11号土坑 (SK11)
6号溝 (SD06)	→	18号不明遺構 (SX18)

2. 竪穴住居跡 (図版3、第6・7図)

竪穴住居跡はいずれも西側の3区で3軒検出した。

1号竪穴住居跡 (図版3、第6図)

3区北西側の調査区際で検出した住居跡である。当初、調査区際にあるため半分程しか検出しなかったが、その後残り半分を拡張して調査を行った。住居跡はやや不整形な台形状を呈するが、約2.4×2.0m、深さ約0.3mを測る。最初、土坑の可能性を考えたが、土層観察の結果、約5cmの厚みの貼り床層とやや西よりの中央には支柱穴と思われる径0.4mのピットを確認したので、竪穴住居跡とした。貼り床下は、中央の支柱穴部分を残して深さ0.3m程を掘ることができた。なお、1層からは古墳時代後期頃の須恵器片が出土し、それ以下からは古墳時代前期頃の土師器片が出土した。少なくとも古墳時代後期以前の住居跡と思われる。



第5図 皆見川ノ上遺跡全体図 (1/ 300)

1号竪穴住居跡出土土器（第7図）

1～6は土師器である。1と2は壺の口縁部片である。1は口縁端部手前で外側へ開く。2は1よりゆるやかに開く。3と4は複合口縁壺の破片である。3は内傾する口縁部片で、口縁端部がやや丸みを持ち、外面はナデ、内面に刷毛目を施す。4は頸部に近い口縁部が接合面で欠損した破片である。調整は内外面に刷毛目、内面には刷毛目と指による圧痕が残る。5も甕の口縁部片である。6は器台片又は高坏脚部片か。復元径17.6cm、焼成は良好で、内外面ともに刷毛目を施す。7と8は須恵器の坏身片である。7は口縁部を欠損するが、受け部径で15.8cmを測る。8は坏身の底部片である。

2号竪穴住居跡（図版3、第6図）

1号竪穴住居跡のすぐ北西側で検出した住居跡である。上部はほとんど削平されていたが、僅かに竈の袖部分が約5cm残存していた。住居跡は調査区際で検出したため、支柱穴と思われるピットをいくつか確認したがどれが該当するのか不明である。形状はほぼ方形状を呈し、長さ約3.6×3.2m以上、深さ約0.1mを測る。古墳時代前期頃の土師器片が出土したが、竈の周辺から須恵器の坏片が出土したことから、古墳時代後期頃の住居跡と思われる。

出土土器（第7図）

9・10は土師器である。9は高坏の脚部片である。復元径8.6cmを測る。外面はタテ方向、内面は横方向の刷毛目を施す。10は鉢片で、復元径15.8cmを測る。口縁部は少し厚手になるが、きれいに形づくられている。内外面には刷毛目を全体的に施すが、外面はナデにより、刷毛目が消える。11は須恵器の坏蓋片である。外面底部には僅かにヘラケズリの痕跡がある。

3号竪穴住居跡（図版3、第6図）

2号竪穴住居跡に切られる形で検出した住居跡で、2号住居跡と同様に上部を削平されていた。これも明確に支柱穴と思われる遺構は検出できなかった。検出状況からほぼ方形状を呈し、約2.4×2.3m以上、深さ約0.1mを測る。遺物はいずれも細片で図化できるものはなかったが、2号竪穴住居跡に切られることや周辺から古墳時代前期頃の遺物が出土するので、古墳時代後期以前の住居跡の可能性はある。

3. 土坑（図版4～6、第8～13図）

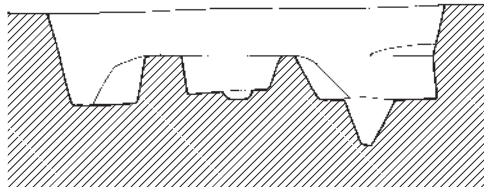
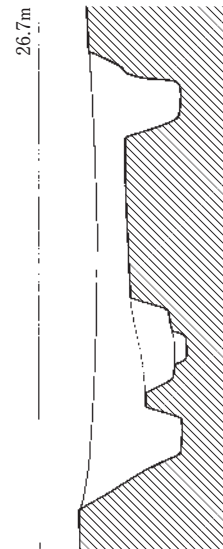
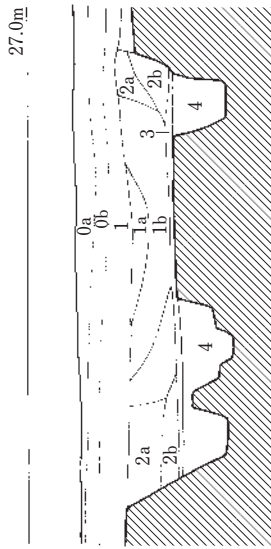
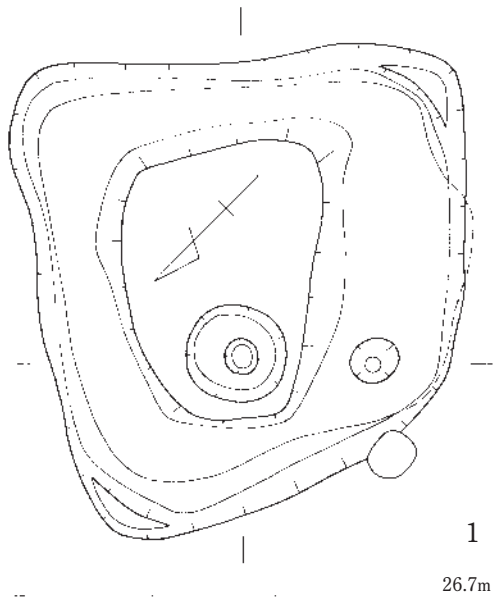
土坑は2・3区で11基検出した。ほとんどの土坑が上面を削平されていて遺構の状態としてはあまり良くない。整理報告時で、いくつかの番号を変更したため、4・6号は欠番である。

1号土坑（図版4、第8図）

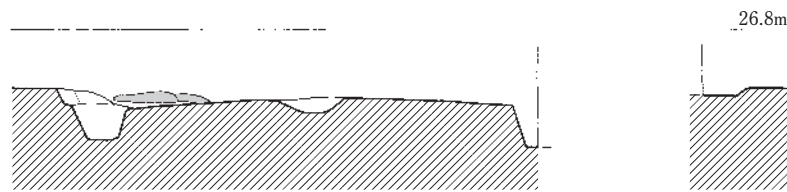
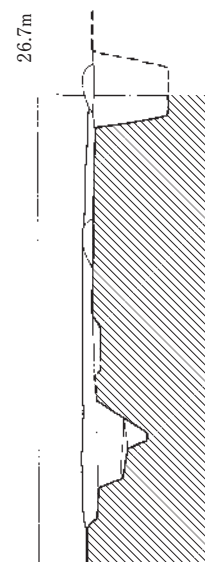
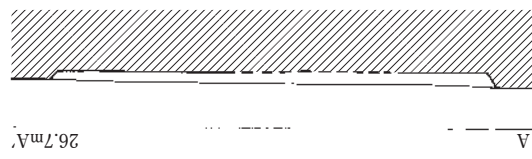
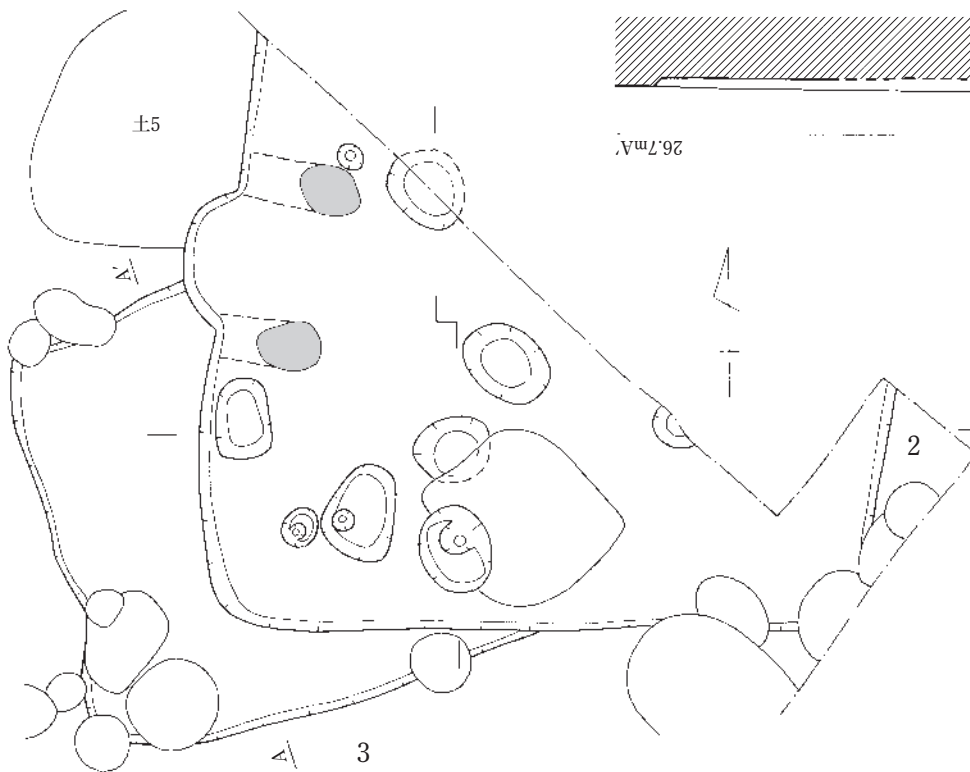
3区の北西隅で検出した土坑である。形状は円形で径約1.1m、深さ約0.4mを測る。埋土は黒褐色シルト質埴壌土の単層である。中央付近では土師器の甕が約1個体分出土した。時期はこの土器から考えると、6世紀後半頃と思われる。

出土土器（図版11、第10図）

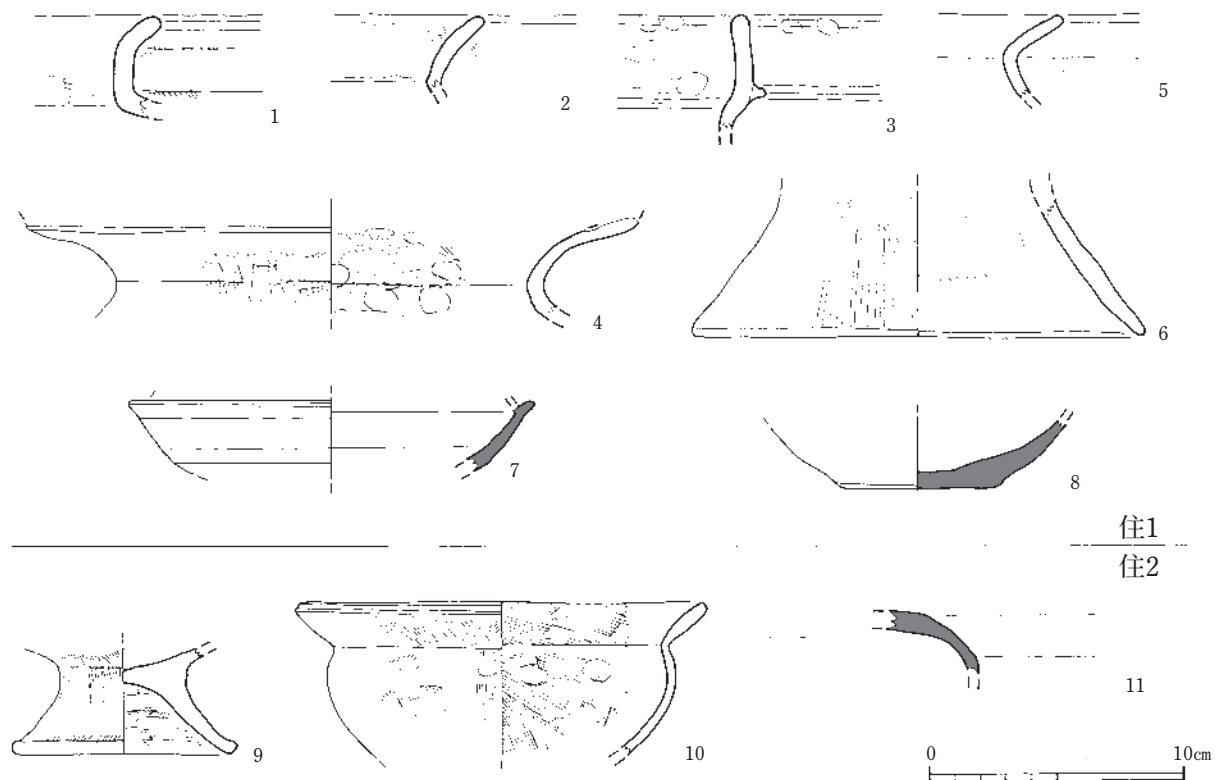
12は土師器の長胴甕で、口縁端部に向かって外側に開き、口径で15.2cmを測る。約9割は残存



- 0a 10YR 5/3 にぶい黄褐色植壤土 (現耕作土)
- 0b 7.5YR 6/4 ~ 6/6 にぶい橙色~橙色植壤土 (1970年代の圃場整備時埋土)
- 1a 7.5YR 3/1 黒褐色シルト質植壤土 やや締まる 地山ブロックを少量含む
- 1b 7.5YR 3/1.5 黒褐色シルト質植壤土 やや締まり砂質 地山ブロックを少量含む
- 1c 7.5YR 3/2 黒褐色シルト質植壤土 やや締まり砂質 地山ブロックを少量含む
- 2a 7.5YR 3/2 黒褐色シルト質植壤土 やや砂質 橙色粒子含む
- 2b 7.5YR 3/2 黒褐色シルト質植壤土 やや粘砂質 橙色粒子含む
- 3 5YR 3/2 暗赤褐色シルト質植壤土 やや粘質 炭化物を少量含む
- 4 10YR 3/2 ~ 3/3 黒褐色~暗褐色シルト質植壤土 やや粘砂質 炭化物含む



第6図 1~3号竖穴住居跡実測図 (1/ 40)



第7図 1・2号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

するが、底部のみ欠損する。全体的に薄手に作られ、調整は外面に縦方向の刷毛目、内面には横方向の刷毛目を施す。

2号土坑(図版4、第8図)

1号土坑の西側で検出した土坑である。形状は楕円形で、長軸約1m、短軸0.8m、深さ約0.15mを測る。埋土は黒褐シルト質埴壤土と土坑底面中央にあった焼土の塊などで大きく2層に分層できる。時期は図化のできなかつた土師質鉢の小片から中世頃と思われる。

3号土坑(図版4、第8図)

2号土坑の西側で検出した土坑である。調査区際で検出したので、半分のみ掘削した。形状はほぼ円形状で、長さ約1.3m、深さ約0.35mを測る。西側をピットに切られるが、断面では逆台形状となる。埋土は黒褐色シルト質埴壤土だが、粘質の度合いから2層分かれる。時期は須恵器の坏蓋片から6世紀末～7世紀初め頃か。また出土遺物には土器片以外に、混入した扁平打製石斧がある。

出土土器(第10図)

13と14は高坏の脚部片である。13は短い脚部片で、脚部の中程で外側に向かって大きく開く。脚部径12.4cm測る。14は長脚片で、脚部下半には円形に穿孔された痕跡が3ヶ所ある。外面には縦方向のミガキ、内面には刷毛目が施される。15は口縁端部を欠損する須恵器の坏蓋片である。

5号土坑(第8図)

2号竪穴住居跡に切られた状態で検出した土坑で、遺構の残り具合は悪く、上部は削平されていた。形状は不整形で、長軸約1.4m、短軸約1.1m、深さ約0.1mを測る。中央には円形の浅いピット

トがあり、径約0.25m、深さ約0.05mを測る。出土遺物はなかったが、中央にあるピットから弥生時代の貯蔵穴の可能性はある。

7号土坑（図版5、第8図）

3区の1号竪穴住居跡の南側で検出した土坑である。中央付近は木の根の攪乱を受け、また北西側と東側をピットに切られる。形状は長円形状で、長軸約0.9m、短軸約0.7m、深さ0.1mを測る。図化のできない「く」の字に曲がる土師器の甕の小片が出土した。その他には扁平磨製石斧などの石材片も出土した。

8号土坑（第8図）

7号土坑のすぐ南西側で検出した土坑である。形状は長円形状で、長軸約1.5m、短軸約0.6m、深さ約0.2mを測る。埋土の黒褐色シルト質埴壤土からは土師器片とそれ以外にも赤色顔料が付着した石材片が出土した。

出土土器（第10図）

16は土師器の甕底部片である。胴部下半以下が残存していて、底部は平底である。外面は摩滅し、指圧痕が所々に残る。内面は細かいケズリが施される。

9号土坑（図版5、第8図）

8号土坑の南東側で検出した土坑である。形状は長円形状で、長軸約1.6m、短軸約0.7m、深さ約0.25mを測る。東側の一段高いテラス部分では、土器が出土した。時期は弥生時代前期頃の甕片が出土したが、図化のできない土師器小皿片と瓦質鉢片も出土したので、中世頃と思われる。

出土土器（第10図）

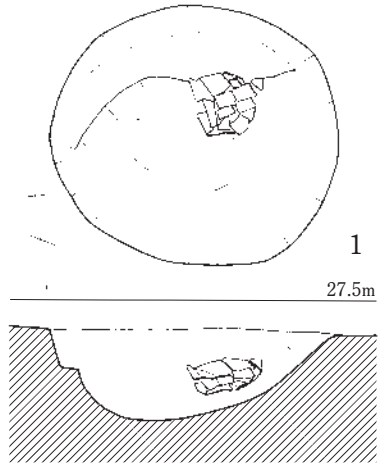
17は弥生土器の甕である。口縁端部で外側に向かって開き、厚手な作りである。頸部下には1本深い沈線が巡っている。調整は内外面ともに刷毛目であるが、内面には指押さえの痕跡が明瞭に残る。1号竪穴住居跡出土の破片と接合した。復元口径で22.8cmを測る。

10号土坑（図版5、第9図）

2区の南西側で検出した土坑である。上部は削平され、また北東側は現代の暗渠、東側は攪乱に一部切られていた。形状は長円形で、長軸約2.4m、短軸約1.7m、深さ0.15mを測る。埋土は主に黒褐色シルト質埴壤土で、中央やや西よりで土器や礫が出土した。

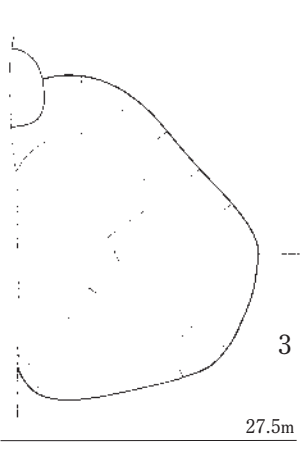
出土土器（第10図）

18と19は瓦器碗で、ともに復元口径15.8cmを測る。18は約1/6、19は約1/4しか残ってなかった。いずれも口縁端部に向かって内湾しながら開く。高台は逆台形と三角形になる。調整は外面にナデや指押さえの痕跡、内面には僅かに横方向のミガキの痕跡がある。20は瓦質に近い須恵質鉢の口縁部片か。断面が三角形で、内外面ともに横ナデ調整である。



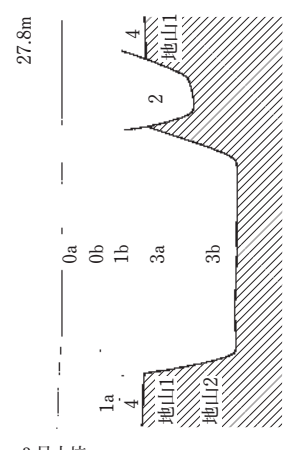
1

27.5m



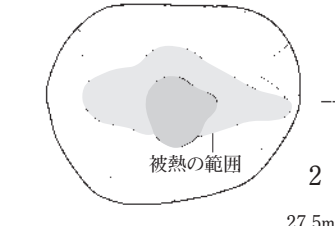
3

27.5m



3号土坑

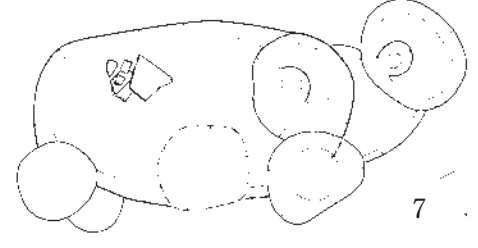
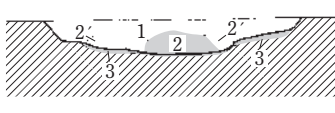
- 0a 10YR 5/3 にぶい黄褐色埴壤土 やや粘質 (現耕作土)
- 0b 7.5YR 6/4 ~ 6/6 にぶい橙~橙色埴壤土 粘質強く 締まる (1970年代圃場整備時埋土)
- 1a 10YR 3/2 黒褐色シルト質埴壤土 やや粘砂質 鉄・マンガン分沈着顕著 (旧耕作土)
- 1b 10YR 6/1 褐灰色埴壤土 粘質 鉄・マンガン分沈着顕著 (旧耕作土)
- 2 10YR 3/3 暗褐色シルト質埴壤土 やや粘砂質 やや締まるの1mmほどの炭化物粒を微量含む (ピット埋土)
- 3a 7.5YR 3/2 黒褐色シルト質埴壤土 やや粘質 礫の1~3mmの炭化物粒を微量含む 礫の30~80mmを少量含む
- 3b 3aに比べやや粘質強い 礫はほとんど含まない
- 4 7.5YR 3/3 暗褐色シルト質埴壤土 やや砂質で粘質弱い 部分的に上層からの攪乱・攪拌が及ぶ 土器片を含む (包含層)
- 地山1 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト質埴壤土 金雲母を多く含む 上部は4層と遷移的
- 地山2 地山1に礫を多く含む 地山1から地山2は遷移的



2

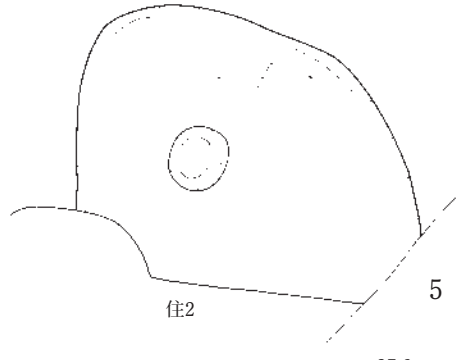
27.5m

- 2号土坑
- 1 7.5YR 2/2 黒褐色シルト質埴壤土 粘質少しあり 2層の2~8mmの小粒を含む
- 2 5YR 5/6~5/8 明赤褐色シルト質埴壤土 やや締まる(焼土) 2に1のブロック土が混じる
- 3 2.5YR 5/4~5/6 にぶい赤褐~明赤褐色シルト質埴壤土 やや砂質で(地山の)土坑底面が被熱し焼土化した部分 金雲母を多く含む



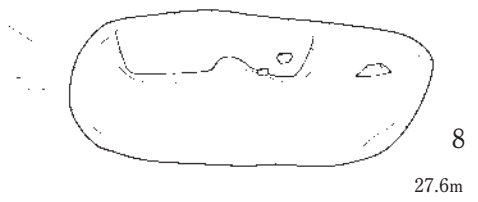
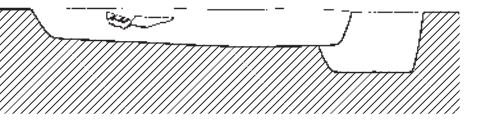
7

27.6m



5

27.6m



8

27.6m



9

27.6m



第8図 1~3・5・7~9号土坑実測図 (1/ 30)

11号土坑（図版6、第9図）

10号土坑の西側で検出した土坑で、遺構検出時から上面には礫が露出していた。形状は長円形状を呈し、長軸約2.8m、短軸2.5m、深さ0.15m以上を測る。埋土は主に黒褐色シルト質埴土である。土坑内部の中央付近からは約10～30cmの礫とパンケース2箱分の土器片を確認し、土師質の脚付鍋は少なくとも5個体はあるのではないかと思われる。当遺跡内でも最も多くの土器が出土しており、廃棄土坑ではないかと思われる。土器以外には5点の土錘が出土した。

出土土器（図版11、第10～12図）

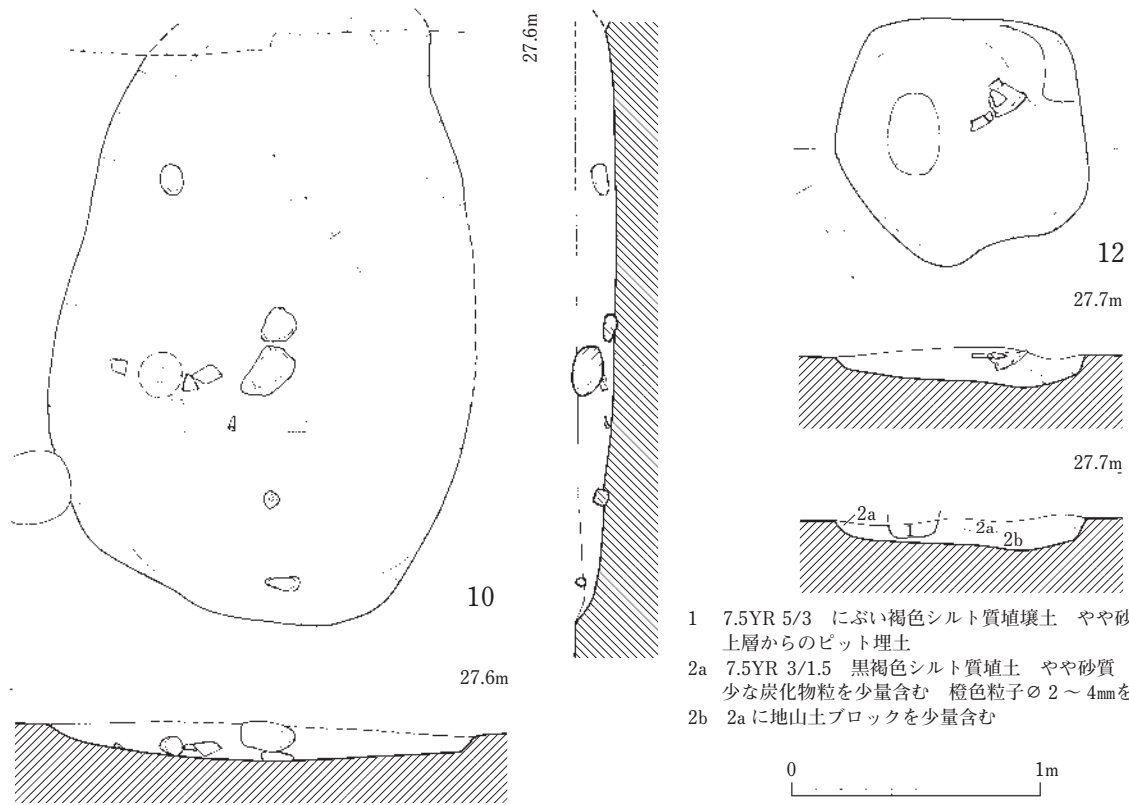
21から28は須恵器である。21～23は坏身片であるが、21のみ復元口径で12.0cmを測る。調整は外面底部のみヘラ削り、その他は内外面とも回転横ナデである。22と23は坏身の口縁部片である。24は高坏の脚部片で、坏部と脚部の接合付近から外側に開くタイプで、脚部は低い。25は平瓶又は壺の口縁部片か。頸部から口縁に向かって開き、口縁端部で真っ直ぐに立つ。26～28は甕の口縁部片である。26・27はそれぞれ復元口径17.0cm、25.2cmを測る。調整は内外面ともに回転横ナデである。28は他の須恵器と異なる。色調は黒褐色を呈し、焼成から瓦質に近い。また調整は外面に格子目状の叩きが頸部までである。色調、焼成や調整などから検討すると中世の須恵器か。29～31は古墳時代後期頃の土師器である。29と30は坏片か。胴部中程で外側に一段膨らむ。それぞれ復元口径で11.6cm、13.2cmを測る。調整は摩滅していて不明だが、僅かにミガキの痕跡及び指による圧痕が残る。31は高坏脚部片である。脚部自体は低いが、口縁端部に向かって外側に開く。これも内外面とも摩滅するが、外面にナデの痕跡がある。32～51は比較的残りが良い土師器皿及び坏である。32～37は小皿で、口径8.2～9.6cmを測り、全て外面底部は糸切りである。38～51は皿で、口径12.6cm～14.0cmを測る。小皿及び皿の調整は内外面ともに横ナデであるが、外面底部は糸切りで所々に板状圧痕が残る。51のみ底部片のみである。52～57は瓦器椀で、口径15.0～15.8cmを測る。52は特に内面の体部下半～底部にかけてミガキを巡らす。54の色調は灰橙色を呈し、やや焼成不良か。56・57は瓦器椀の底部片である。いずれの瓦器椀も調整は内外面に横方向のミガキの痕跡があるが、底面近くは指による圧痕が残る。高台は断面逆台形又は逆三角形状となる。58～63は土師質の脚付鍋である。頸部は「く」の字形になり、口縁端部には向かって大きく開く。口縁端部は四角形状である。58は底部中央と脚の先端部を欠損するが、ほぼ8割以上残る。煤が外面に付着していた。63は橙色の色調から60の脚ではないかと思われる。調整はいずれも外面に刷毛目と指による圧痕があり、内面には横方向の刷毛目が残る。復元口径26.0～31.0cmを測る。

12号土坑（図版6、第9図）

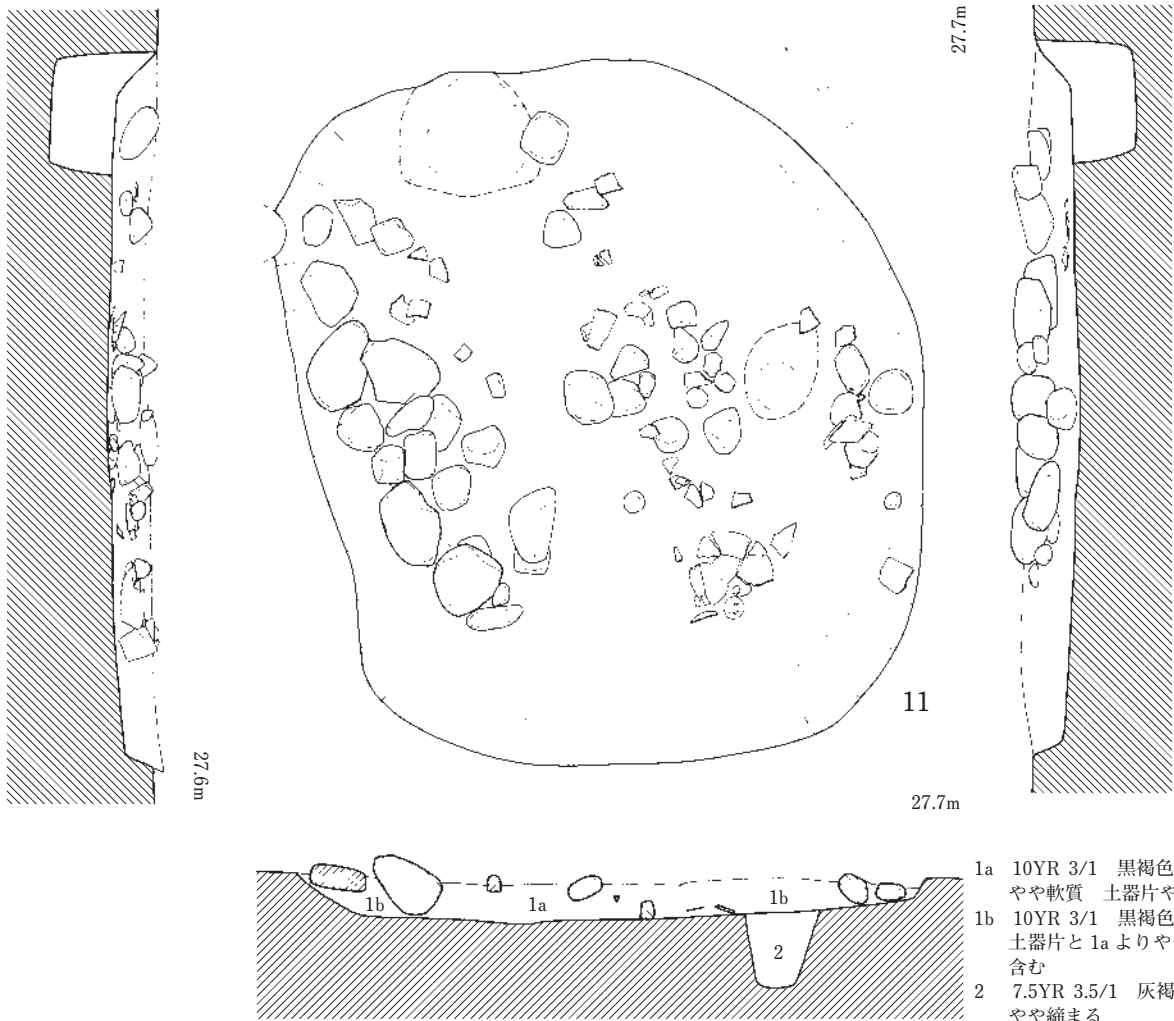
10・11号土坑の北西側で検出された土坑である。形状は不整円形状で、径約1m、深さ約0.15mを測る。上部は削平され、また北側をピットに切られるが、瓦質の土鍋片や土錘が出土した。

出土土器（第12図）

64は土師質の脚付鍋である。これも同様に頸部から口縁端部に向かって大きく開く。外面には煤が付着する。調整は内外面に刷毛目と指による圧痕が残る。復元口径31.0cmを測る。

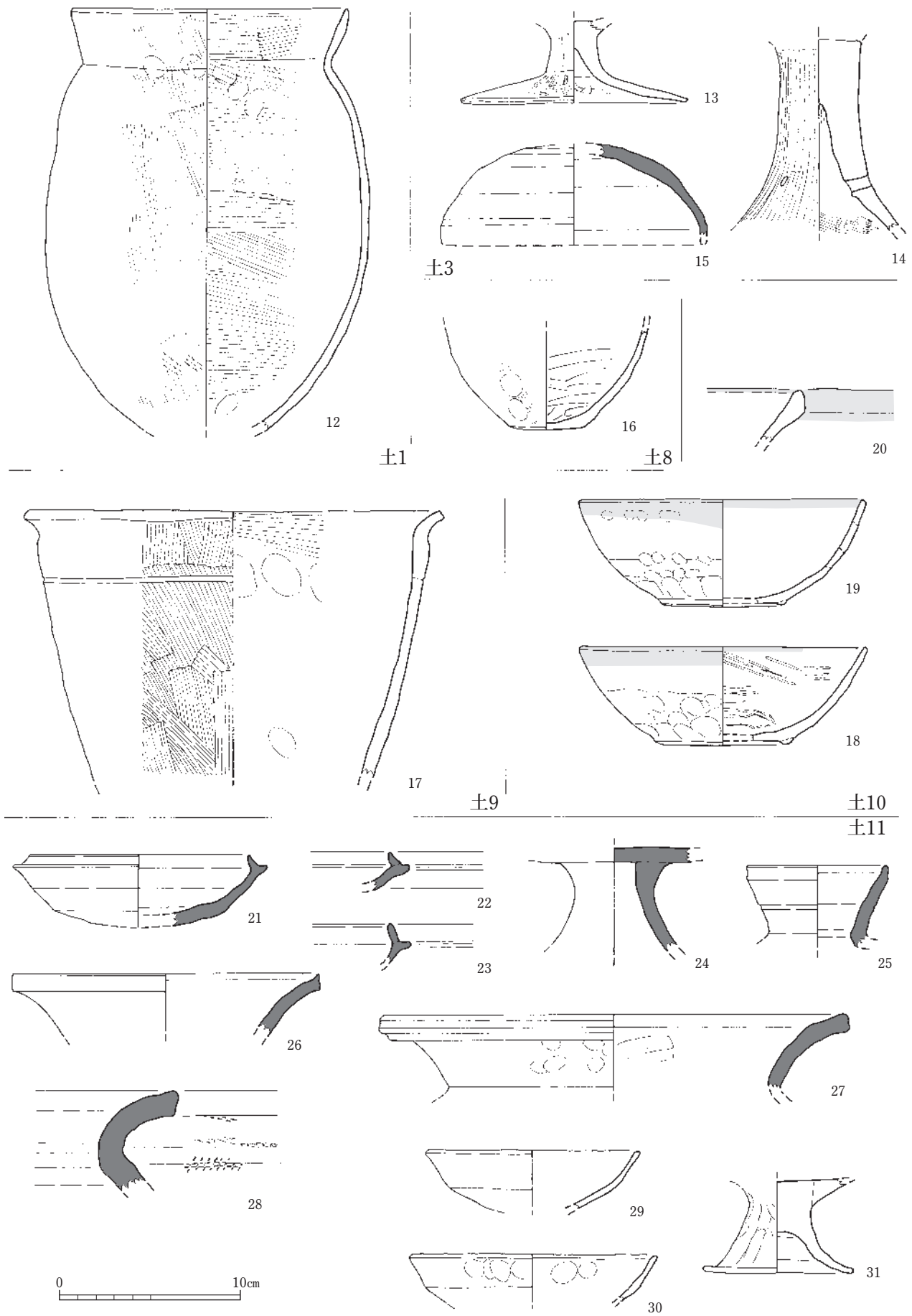


- 1 7.5YR 5/3 にぶい褐色シルト質埴土 やや砂質
上層からのピット埋土
- 2a 7.5YR 3/1.5 黒褐色シルト質埴土 やや砂質 0.1mmほどの微
少な炭化物粒を少量含む 橙色粒子の2~4mmを微量含む
- 2b 2aに地山土ブロックを少量含む

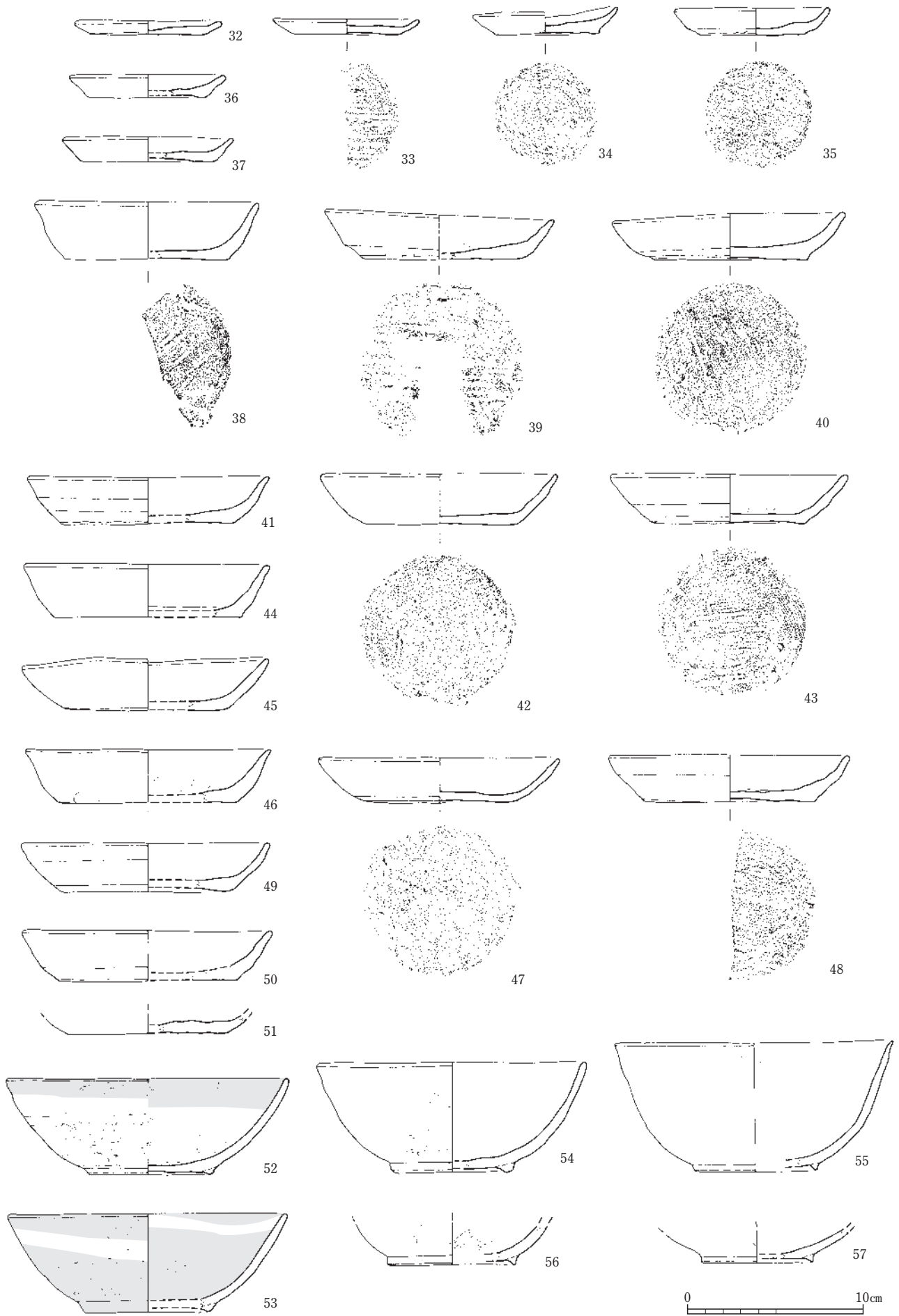


- 1a 10YR 3/1 黒褐色シルト質埴土
やや軟質 土器片や炭化物片を含む
- 1b 10YR 3/1 黒褐色シルト質埴土
土器片と1aよりやや大きい炭化物を
含む
- 2 7.5YR 3.5/1 灰褐色シルト質埴土
やや縮まる

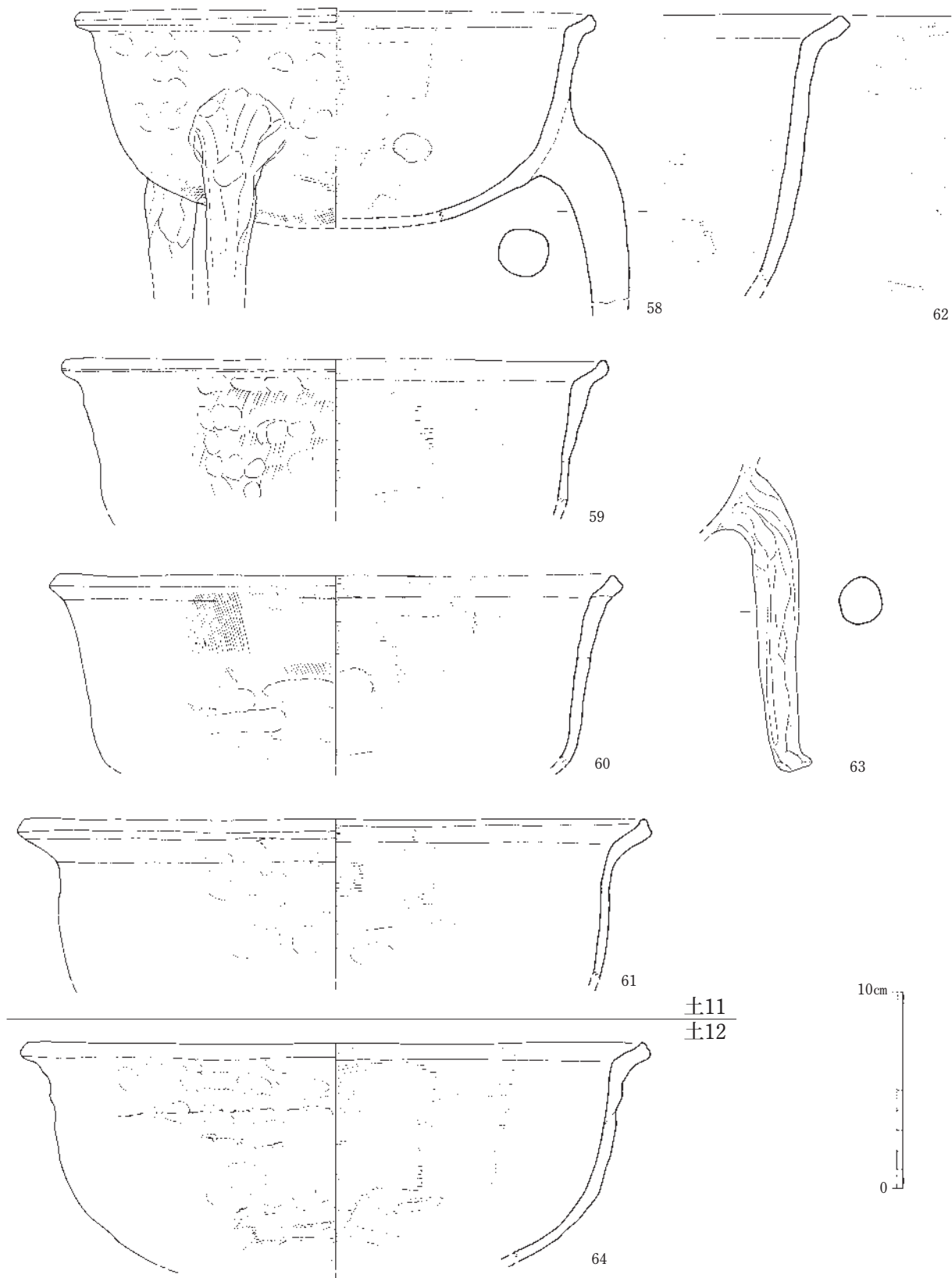
第9図 10~12号土坑実測図 (1/ 30)



第10图 1·3·8~11号土坑出土土器实测图 (1/3)



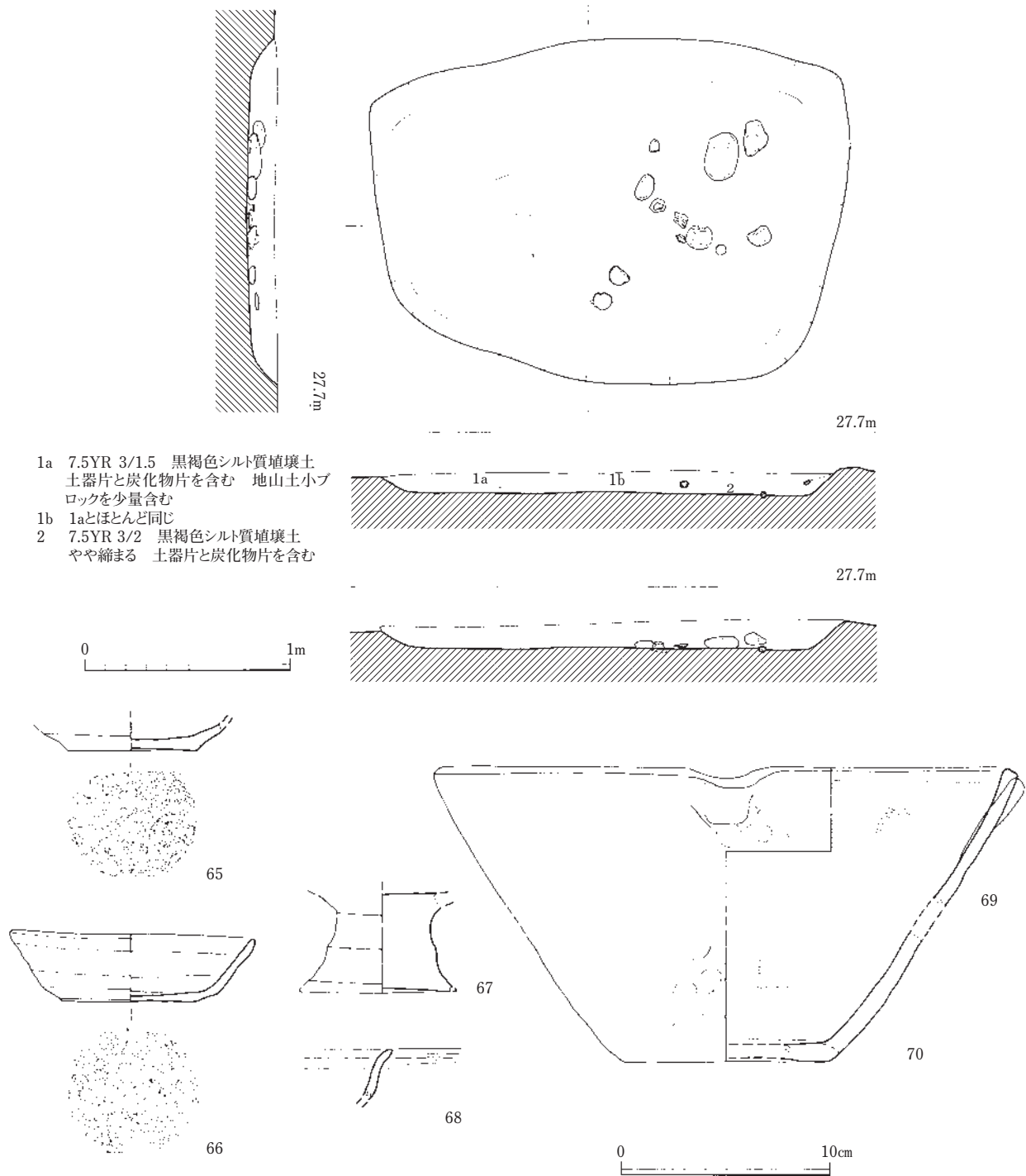
第11图 11号土坑出土土器实测图 (1/3)



第12図 11・12号土坑出土土器実測図 (1/ 3)

13号土坑 (図版6、第13図)

12号土坑からやや離れた北側で検出した土坑である。形状は隅丸長方形で長軸約2.3m、短軸約1.7m、深さ約0.15mを測る。上部は削平されていたが、断面は逆台形状を呈し、埋土は主に黒

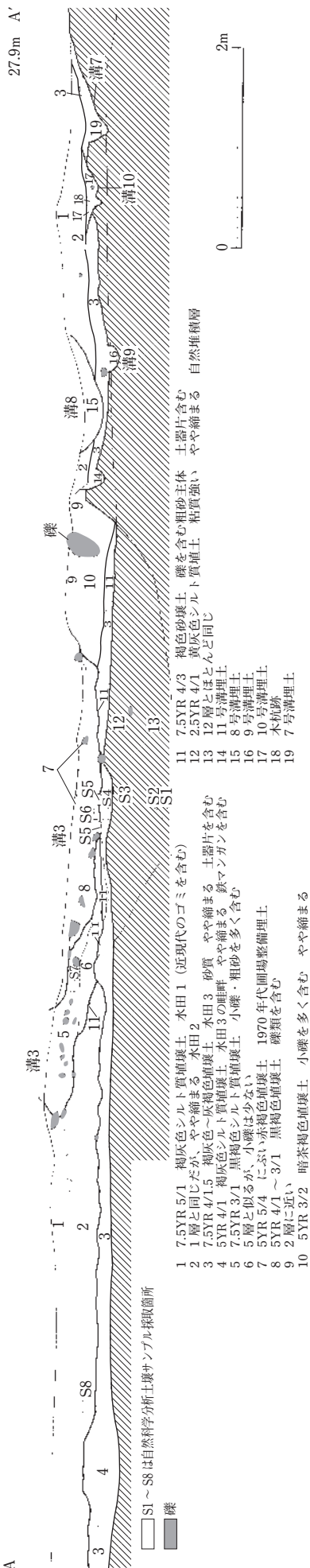


第13図 13号土坑および出土土器実測図 (1/30、1/3)

褐色のシルト質埴壤土で3層に分層できた。底面東側では、約10~20cmの礫と一緒に土師器の高坏片が出土した。時期は出土土器から14世紀頃と思われる。

出土土器 (図版11、第13図)

65~67は土師器である。65と66はいずれも底面は糸切りである。66は口径11.6cmを測る。67は高坏の脚部片である。かなり厚手の作りで、脚部中程で盛り上がり段ができる。68は緑釉陶器の碗片である。口縁部は外側に開き、外面の口縁部付近にミガキ状の痕跡がある。69と70は瓦質の片口鉢である。69は約1/8以下しか残存しなかったが、復元口径で37.0cmを測る。口縁部片と底部片に分かれるが、同一個体と思われるので、ここに復元して図化している。



第14図 水田土層図 (1/ 60)

4. 水田 (図版7・8、第14~16図)

2区中央土層において人為的攪拌された水田層を検出した。調査当初、5号溝状遺構としたが、土層観察により、5号溝状遺構の1層を水田1、2層を水田2、3層を水田3と変更した。水田と考えられる遺構は平面では確認できなかったが、層位で3箇所確認した。

水田1は圃場整備時埋土の下層で、近世から近代の旧水田と考えられる。埋土は褐灰～灰褐色シルト質埴壤土で、小礫と土器細片を検出した。

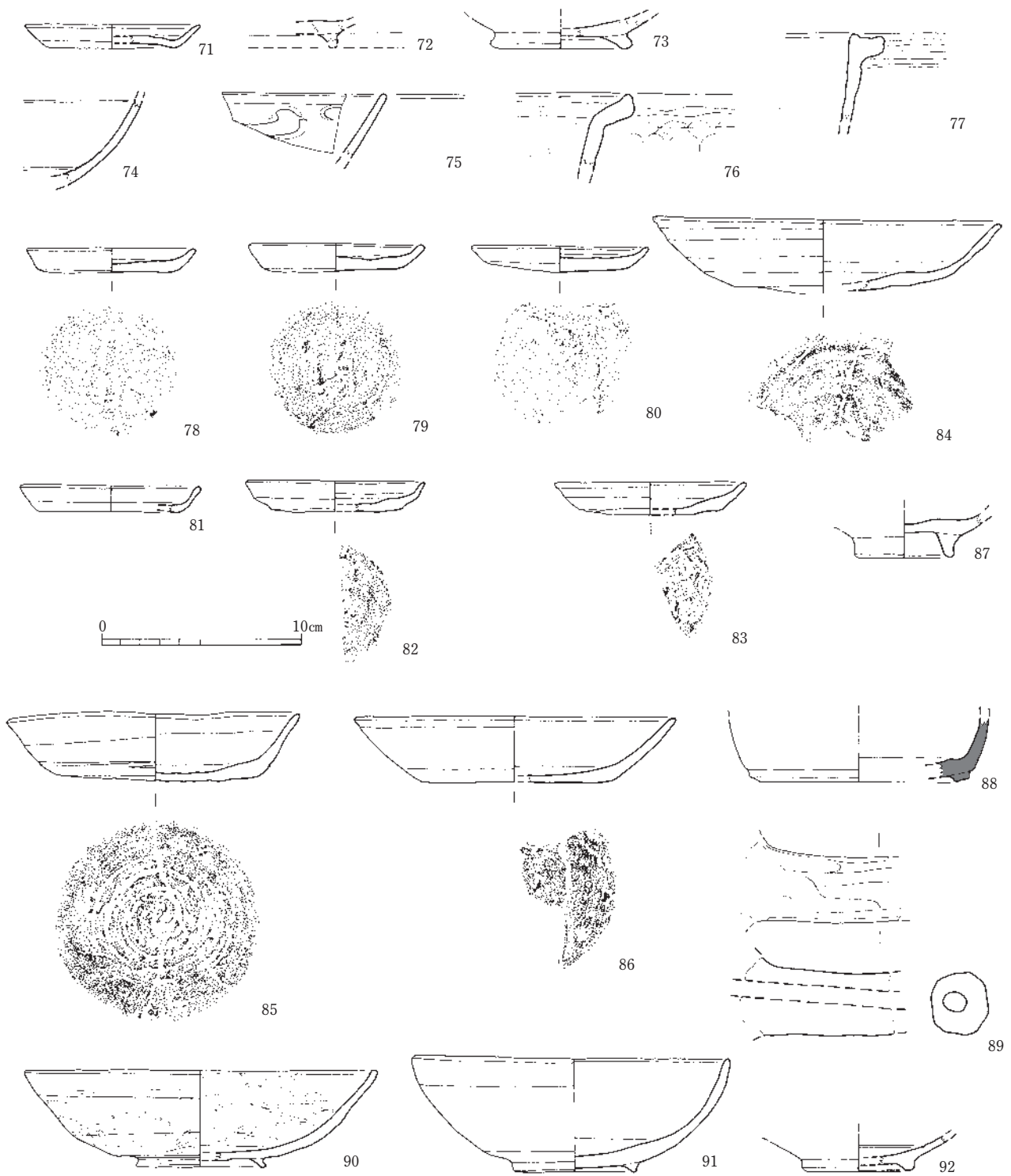
水田2は水田1の下層で検出し、8号溝状遺構に切られる。7・10号溝状遺構の上面に分布する。色調は褐灰～灰褐色のシルト質埴壤土で、土器の細片含んでいた。

水田3は水田2の下層で検出し、10号溝状遺構との前後関係は不明である。埋土は灰褐色埴壤土で、上部は人為的攪拌を受けているが、流水を示す砂層が間に堆積していた。なお、第14図で4層としている土層は畦畔状遺構の基底部の可能性がある。水田3の時期は、遺物がなく不明であるが、水田2で中世の遺物が出土しているので、それ以前の可能性がある。

なお、水田土層では8カ所、サンプリングを行って自然科学的調査を行った。(調査結果についてはP51を参照)

出土土器 (図版11、第15図)

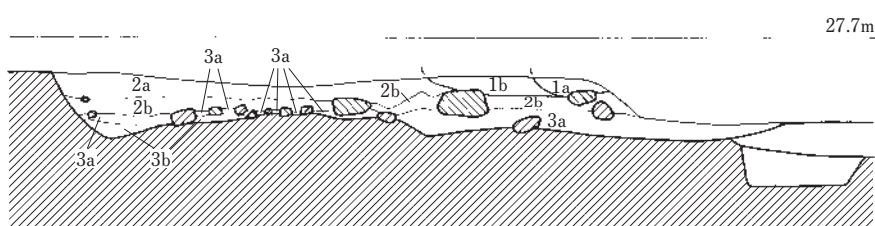
71~77は1層出土である。71は土師器小皿である。外面底部は糸切りである。復元口径で8.8cmを測る。72は緑釉陶器の高台片である。鮮やかな緑釉である。73は瓦器椀の高台片である。74は白磁碗の体部片である。内面に沈線が付く。75は青磁碗片である。内面に櫛書文が付く。76と77は土師質鍋や鉢片か。調整は内面に刷毛目、外面にはナデが明瞭に残る。78~89は2層出土である。その中には79、80、83は第1土器集中部出土、83は第4土器集中部出土である。78~83は土師器皿である。口径はそれぞれ8.4、8.8、8.9、9.0、9.0、9.6cmを測る。外面底部の調整が不鮮明なものもあるが、ほとんどはへら切りである。84~86は皿である。ともに外面底部はへら切りである。84は全体的に薄手であるが丁寧な作りで、外面には薄い稜線が複数巡る。87は碗の高台片である。88は須恵器碗の高台片である。口縁に向かって垂直に立つ。89は土師質の鍋の把手片か。径約1cmの穿孔が施されている。90と91は瓦器椀である。90は全体的な作りが薄手で、内外面ともに丁寧なミガキを施す。91は摩滅していて調整は不鮮明である。それぞれ口径17.6、15.8cmを測る。92は白磁碗の高台片である。内面に薄い沈線が巡る。



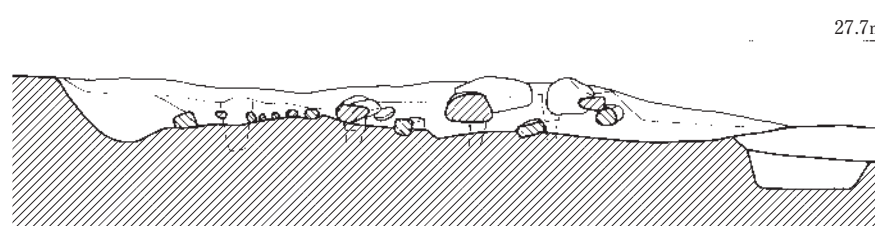
第15図 水田（5号溝状遺構）出土土器実測図（1/3）

水口状遺構（図版8、第16図）

2区の南側で検出した遺構である。南側が水流によって抉られた様な状況である。全体とし北に緩やかに傾斜し、長さ3m、幅1.5m、深さ0.3mを測る。水口状遺構の近くには東西両方に対称する位置で小ピットが存在し、また遺構の縁に沿って、径10cm前後の杭が打たれた痕跡を西側に5本、



- 1a 7.5YR 4/2 灰褐色埴壤土 やや締まる：水田埋土
- 1b 7.5YR 4/1 褐灰色砂壤土 1より砂質：水田埋土
- 2a 7.5YR 4/1 褐灰色シルト質埴壤土 やや締まる 少し粘質：水口状埋土上層
- 2b 7.5YR 4/1 褐灰色シルト質埴壤土 やや粘質 2aに地山土ブロックを含む：水口状埋土中層
- 3a 7.5YR 4/1 褐灰色シルト質埴壤土 やや粘質 礫を含む：水口状埋土下層
- 3b 7.5YR 4/1 褐灰色シルト質埴壤土 やや粘質 3aに比べやや砂質：水口状埋土下層
- 地山 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト質埴壤土 やや砂質 やや粘質 やや締まる 金雲母を多く含む 礫を少量含む



第16図 水口状遺構実測図 (1/ 30)

東側に4本確認した。杭の間隔は0.3～0.5mとばらつきがある。杭自体は出土しなかった。内部には並べ敷き詰めた状態ではなかったが、約30cm以下の小礫が入っていた。これらが、水口部の何らかな構造を示す可能性がある。

さらに水口状遺構の周辺では、炭化物が集中する範囲を2箇所検出した。水口状遺構の入り口部分の第2炭化物集中範囲は、長さ1.7m、0.96mになり、周辺からは土器も出土した。西側に約1.2離れた位置で検出した第1炭化物集中範囲は長さ0.4m、幅0.2mを測る。ここでは土器は出土しなかった。

第2炭化物集中範囲付近には土器が集中して出土し、廃棄されたような状態を4カ所で検出した。それぞれ西から第1～4と番号を付け、廃棄された土器は完形に近いものや、細片のものもある。それぞれの土器が集中している部分が土器廃棄などを示す可能性がある。

水田は層位のみのため、畦畔などは検出できなかったが、この水口状遺構の存在からも当遺跡および周辺には水田が広がっていた可能性がある。

5. 溝状遺構（図版9、第17～19図）

1・2区で溝状遺構を検出した。5号溝状遺構は水田、6号溝は18号不明遺構と変更した。

1号溝状遺構（第17図）

1区の南西隅で1号不明遺構を切って検出した溝で、延長線上には2号溝状遺構がある。北側は調査区外まで延び、南側は段々と浅くなって自然消滅する。長さ1.3m、幅0.4m以上を測り、深さ0.1m以下とかなり浅い。1号不明遺構を切ることから、土坑の時期は中世以降か。出土遺物はなく時期は不明である。

2号溝状遺構（図版9、第17図）

1号溝状遺構の東側に位置し、調査区西側の祓川に向かって流れる。1号溝状遺構とは一直線上に位置するが、12.5mと間が開くので関係は不明である。調査区際で検出したため、全て掘削できなかった。長さ17m以上、幅2.4m以上、深さ0.2mを測る。溝の時期は出土遺物から12世紀頃か。

出土遺物（図版11、第18図）

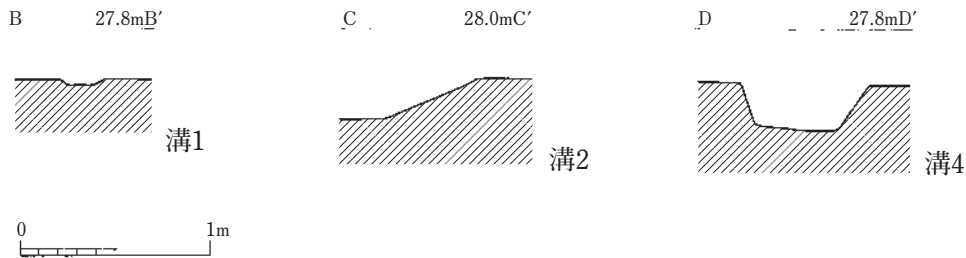
93と94は土師器小皿で、底部に厚く、口縁部に向かって細くなる。口径はそれぞれ8.8、8.9cmを測る。95は土師器碗の高台片である。少し高めな高台がつく。96は瓦器碗片である。調整は内外面とも丁寧なミガキである。97は同安窯系青磁の碗片である。内面には櫛描文を施す。

3号溝状遺構（第14図）

1区の北側で検出した溝で、5号溝状遺構に切られる。調査区の東西両側に延び、長さ17m以上、幅3m、深さ0.2mを測る。北側の延長部分を25号不明遺構とするが、一連の溝として繋がる。

出土土器（図版12、第18図）

98～101は土師器小皿である。口径はそれぞれ9.0、9.6、9.8、10.6cmを測る。102は土師器碗の高台片である。103は須恵器碗である。全体的に厚手な作りである。口径13.8cmを測る。



第17図 溝状遺構断面実測図 (1/40)

104は須恵器甕の口縁～肩部片である。外面肩部にはタタキが残る。105は瓦器椀の高台片である。断面三角形の高台が付く。106は白磁碗の高台片である。高台は低く厚い。

4号溝状遺構 (図版9、第17図)

1区の北側で検出した溝である。これも調査区の東西両側に延び、幅0.5～0.8mと西側が狭く、東側がやや広い。長さ4m以上、深さ0.3mを測る。埋土から木製品が多く出土し、その中には箸、角材片、板材片、杭などがある。

出土土器 (図版12、第18図)

107～113は土師器である。107～111は小皿である。外面底部の調整は107のみヘラ切りで、他は糸切りである。口径はそれぞれ9.1、9.1、9.2、9.4、10.0cmである。112と113は皿である。113の胎土は緻密で、薄手で丁寧に作られている。復元口径はそれぞれ15、15.6cmを測る。114は瓦器椀の高台片である。内外面ともミガキが残る。外面底部には糸切り状の痕跡がある。115～117は白磁碗片である。115は口縁端部が玉縁になる。118は土師質の脚付鍋の脚片である。

7号溝状遺構 (第14図)

2区の南東側で、水田3の下位で検出した溝である。長さ8.7m以上、幅0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は灰褐色のシルト質埴壤土である。水口状遺構周辺では、炭化物とともに土器が集中して出土したが、その部分については水田3として取り扱った。

出土土器 (第19図)

119は須恵器坏身の体部～底部片か。口縁はなく、蓋か身の判断はできない。

8号溝状遺構 (第14図)

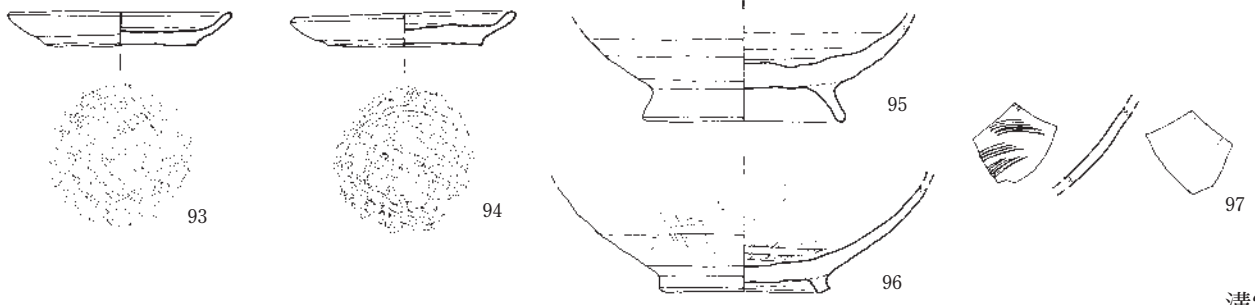
水田1におおわれるが、水田2は切る溝である。長さ11m以上、幅1.6m、深さ0.3mを測る。埋土は褐灰色シルト質埴壤土で、削りかすのような材木片と鉄滓が出土した。

出土土器 (図版12、第19図)

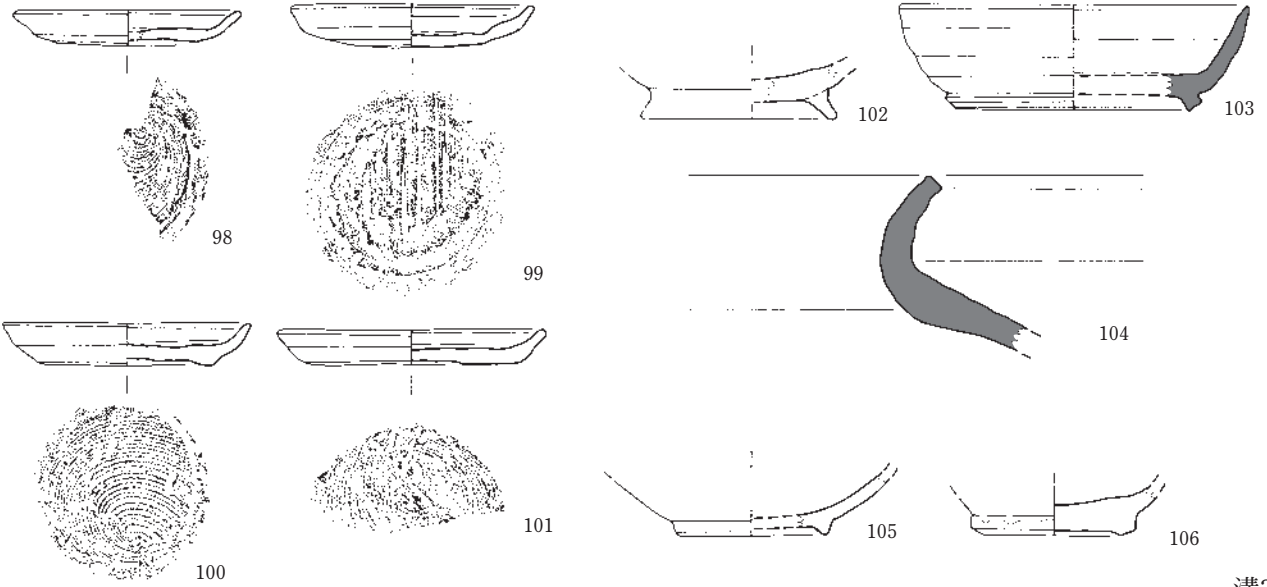
120は土師器小皿である。外面底部は糸切りである。底部は厚いが、口縁端部に向かって薄くなる。口径9.1cmを測る。121は青磁碗の底部片である。内面見込みには印が押されるが、不明である。

9号溝状遺構 (第14図)

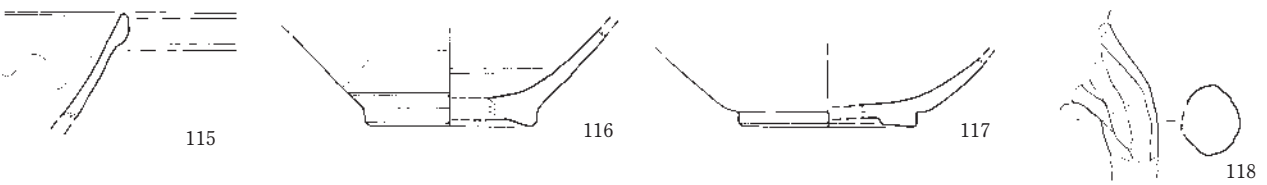
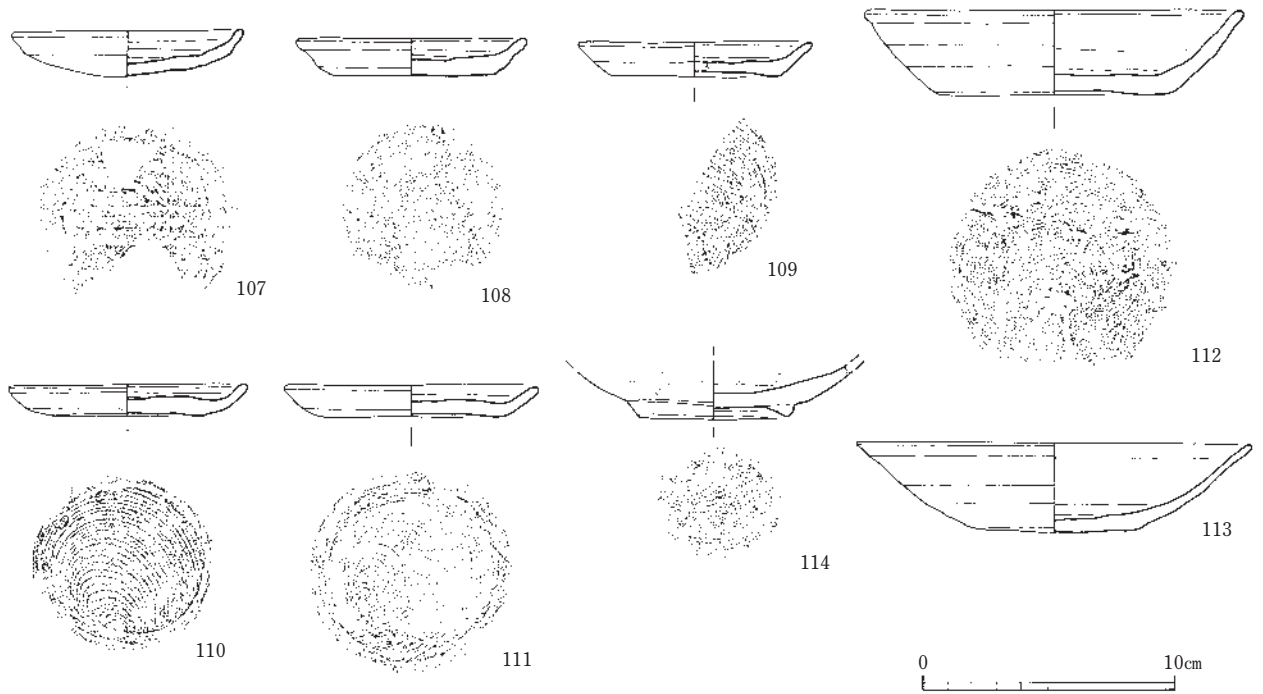
8号溝状遺構と水田3の下位にあり、土層のみで検出した溝である。平面では、西側を部分的にしか確認できなかった。長さ7m以上、幅0.2m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰色のシルト質埴壤土である。



溝2

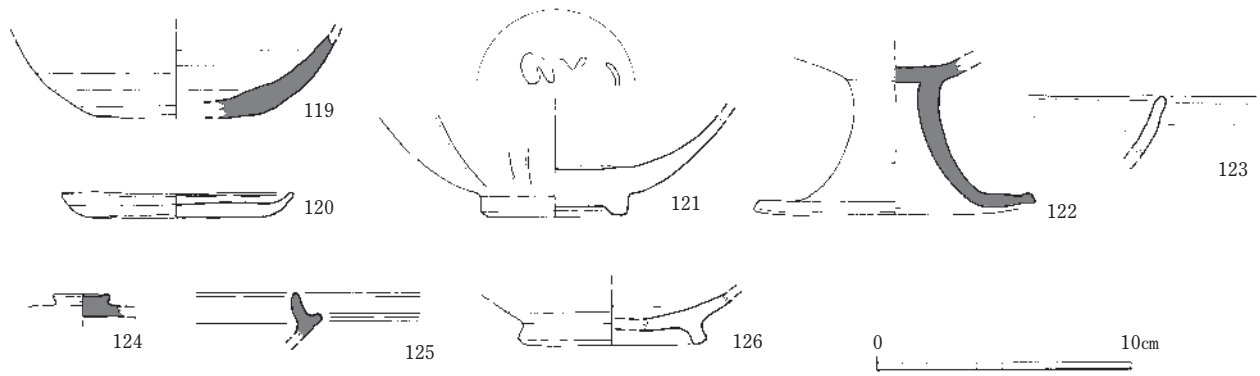


溝3



溝4

第18図 溝状遺構出土土器実測図1 (1/3)



第19図 溝状遺構出土土器実測図2 (1/3)

10号溝状遺構 (第14図)

7号と8号溝状遺構の間にある溝である。現代の暗渠で切られたため西側は消失する。長さ3.8m以上、幅0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は灰褐色シルト質埴壤土である。

出土土器 (図版12、第19図)

122は須恵器高坏の脚部片である。脚端部は歪んでいるが、脚部径で11.0cmを測る。123瓦器碗の口縁部片である。内面にはミガキが残る。

11号溝状遺構 (第14図)

8号溝状遺構に切られる形で検出した溝である。これも西側は消失して検出できなかった。長さ3.8m以上、幅0.2m、深さ0.2mを測る。埋土は灰褐色シルト質埴壤土である。

出土土器 (第19図)

124は須恵器坏蓋の撮みである。外面が僅かに凹む。125は須恵器坏身の口縁部片である。126は瓦器碗の高台片である。高台径7.4cmを測る。

6. 不明遺構 (図版9・10、第20・21図)

詳細不明遺構を、調査時はSXとしてそれぞれ番号をつけている。遺構の中には単なるピット状のものもあるが、ここでは主な遺構のみを報告する。

1号不明遺構 (第20図)

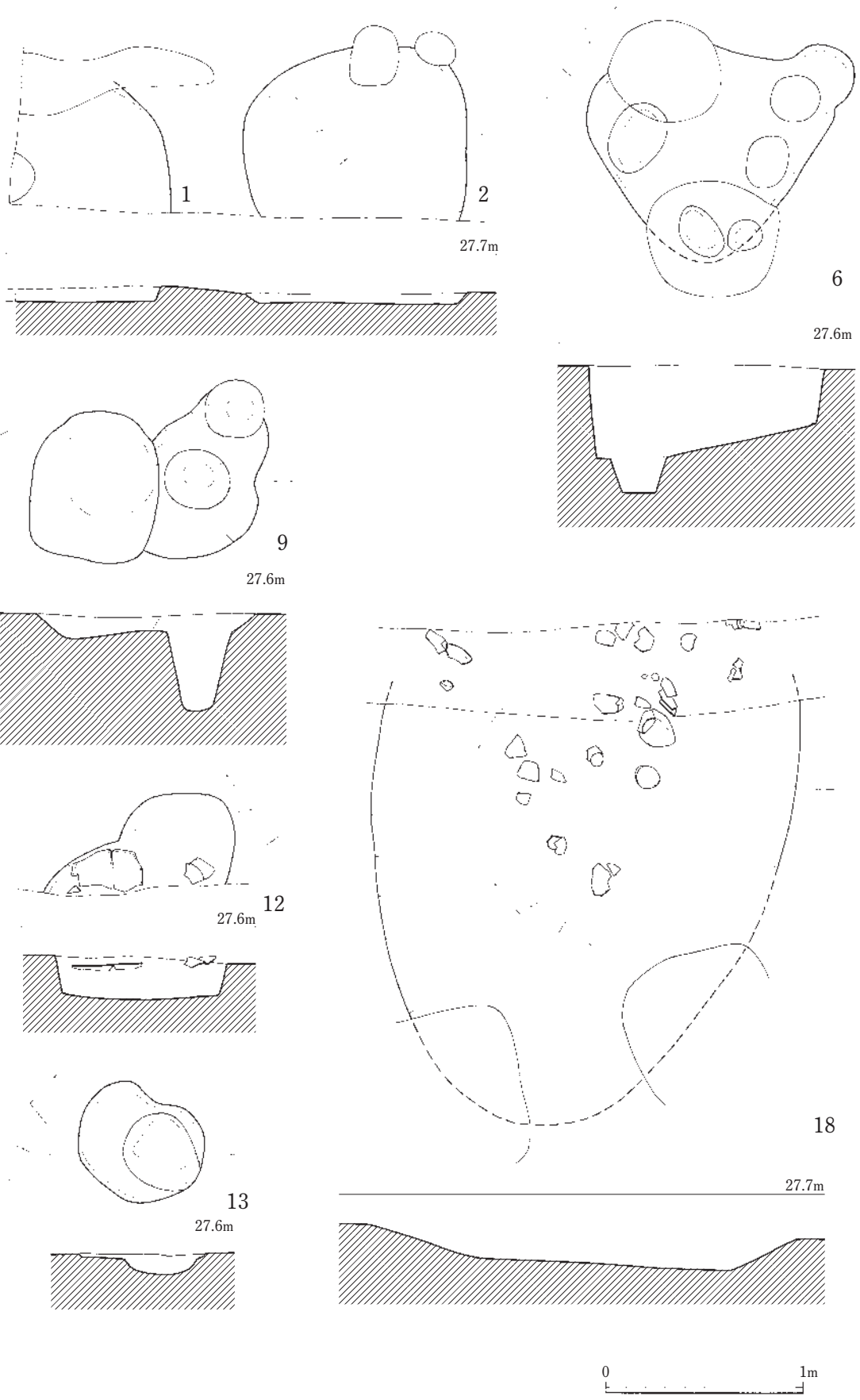
1区南西隅で、北側を1号溝状遺構に切られて検出した遺構である。調査区際で検出したため、形状は不明だが、長さ約0.7m、深さ約0.1mを測る。

出土土器 (第21図)

127は高台部分が剥落した瓦器碗の底部片である。焼成不良のため軟質である。

2号不明遺構 (第20図)

1号不明遺構の東側で検出した遺構で、東側をピットに切られる。これも調査区際で検出したが、形状は隅丸形状で長さ約1.1m、深さ0.1cm以下を測る。図化できるような遺物はなかったが、土師器や須恵器の小片が1袋出土した。



第20図 不明遺構実測図 (1/ 30)

6号不明遺構（第20図）

1号竪穴住居跡の南側で検出した遺構である。ピットが遺構内にいくつも切り込んで入るために、遺構の残り具合としては悪い。形状は不整形で、長さ約1.3×1.1mで、深さ約0.45cmを測る。底面ではピット状の掘り込みを検出し、さらに0.2m程下がる。須恵器や土師器の小片が出土した。

出土土器（第21図）

128は須恵器坏身片である。口縁端部は僅かに立ち上がる。体部下半には、ヘラケズリの痕跡が僅かに見える。復元口径で12.0cmを測る。

9号不明遺構（図版9、第20図）

11号土坑の西側で検出した遺構である。2つのピットが切り合うような形になり、長さ約1.1×0.8m、深さ約0.1mで東側のみピット状に約0.4mと一段低くなる。時期は出土遺物から14世紀頃か。

出土土器（第21図）

129は土師器の小皿で、復元口径8.4cmを測る。内外面とも摩滅するが、底部は糸切りか。130～132は瓦器碗片である。130と131は口縁部片である。内外面はミガキである。132は瓦器碗の高台片である。133は焼成不良の須恵質鉢の口縁部片である。調整は内外面とも回転横ナデである。

12号不明遺構（第20図）

調査区際で検出した遺構である。これも平面では、2つのピットが切り合う形になり、長さ約1.0×0.5m、深さ約0.2mを測る。上層から須恵器の甕片が出土した。

出土土器（図版12、第21図）

134は土師器甕の口縁～頸部片である。口縁端部は欠損する。調整は内外面に刷毛目である。135と136は須恵器の甕である。135は頸部以下～胴部上半片である。色調は灰色でやや焼成不良で軟質である。136は甕の頸部～胴部上半片である。外面には格子目、内面に同心円の叩きを施す。136は2/3残存するが、底部は欠損する。

13号不明遺構（図版10、第20図）

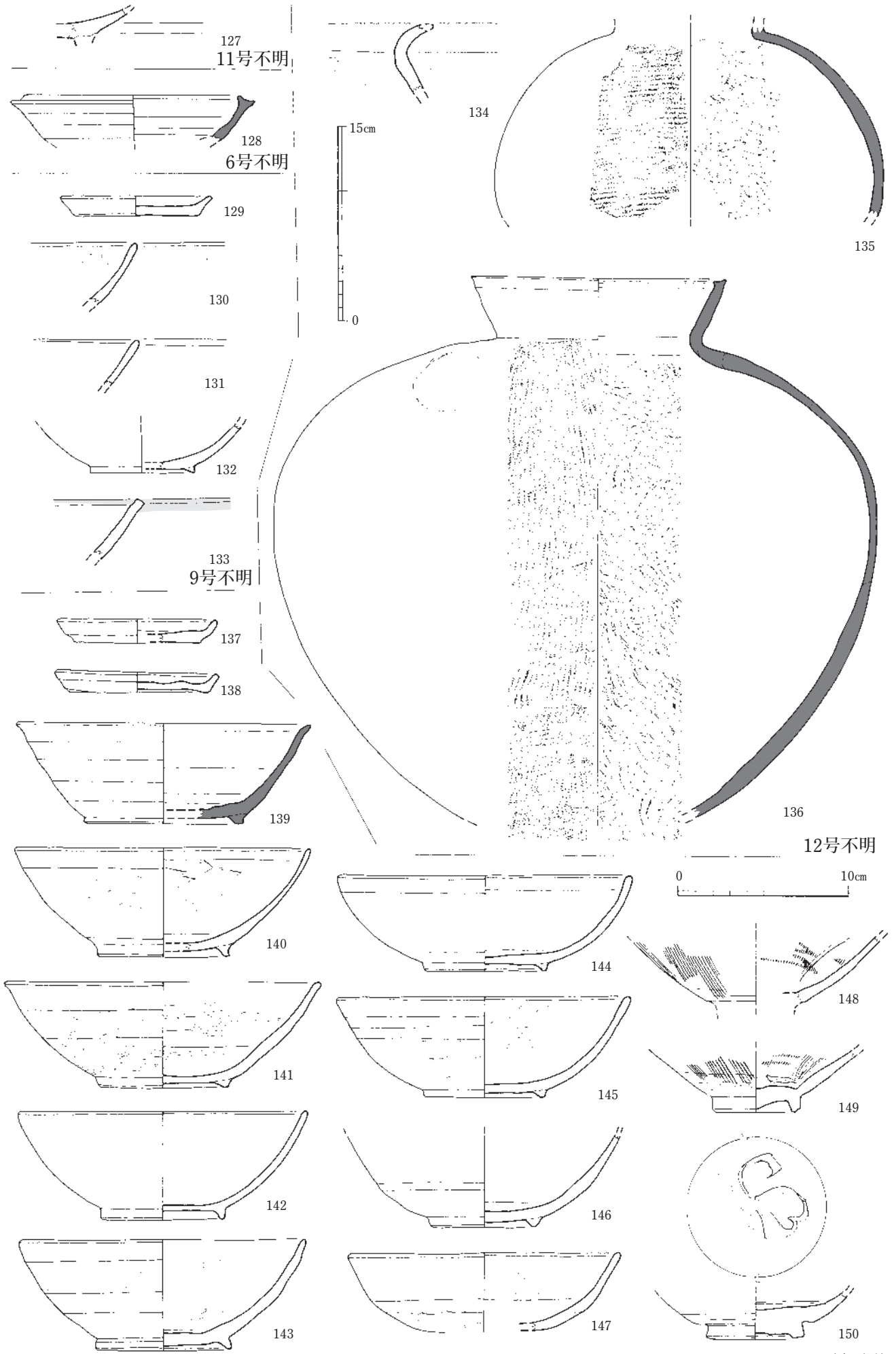
12号土坑の少し離れた西側で検出した遺構である。形状はややくずれた長円形状を呈し、長さ約6.5×6m、深さ0.1mを測る。東側がさらに一段低くなる。埋土は黒褐色シルト質埴壤土であるが、その下の2層に焼土を含む橙色シルト質埴壤土がある。焼土を含むが、被熱痕跡は見られなかった。

18号不明遺構（図版10、第20図）

16号不明遺構の北側の調査区際で検出した遺構である。検出時は6号溝状遺構の遺物としたが、遺構を掘削すると、緩やかな落ち込みが認められたので18号不明遺構と番号の変更を行った。西側は掘りすぎたため、遺構の輪郭がはっきりしないが、長さ約2.5×2.1m、深さ約0.2mを測る。埋土は褐灰～黒褐色シルト質埴壤土である。パンケースで1箱の遺物が出土し、瓦器碗も10点以上あると思われる。

出土土器（図版12・13、第21図）

137と138は土師器小皿である。137は1/5以下残存していて復元口径9.0cm、138は完形品で



第21図 不明遺構出土土器実測図 (135・136は1/4、他は1/3)

口径9.1cmを測る。いずれも糸切りである。139は須恵器塚で復元口径16.4cmを測る。底部と体部の境はなく、そのまま口縁端部まで開きながら延びる。140～147は瓦器碗で、口径は15.6～17.8cmを測る。140は出土した中では薄手に作られる。141のみ今回出土した中では最大径を測る。底部はやや嘴状で外に開く。144～147は体部が丸みをもつ、森田Ⅲ類に属す。147はやや肉厚になり、外面体部にはヘラケズリの痕跡がある。148と149は同安窯系の青磁碗である。内外面には櫛書き文が残る。149は体部に線状の櫛書きがある。150は龍泉窯系青磁碗の底部片である。底部内面には花文がある。

7. その他の遺構（図版10・13、第22・23図）

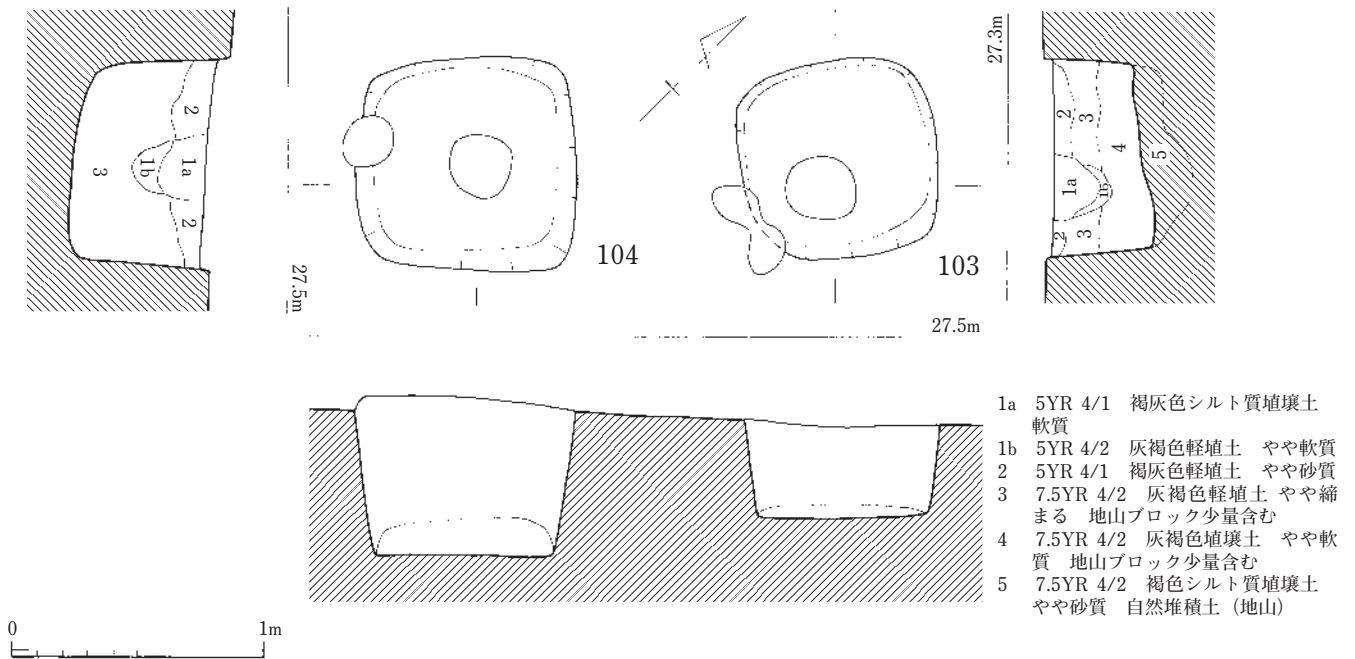
ピット103・104（図版10、第22図）

18号不明遺構を切る形で検出したピットである。103および104は芯々間で1.5m離れて検出した。103はやや崩れた隅丸方形の掘り方で0.8×0.8m、深さ0.4mを測る。一回り大きい104は、隅丸方形の掘り方で0.9×0.85m、深さ0.7mを測る。共に径0.25mの柱痕跡を確認した。調査区際で検出したため、他に対応する柱穴も検出されなかった。遺物はいずれも図化できない小片しかなかったが、古墳時代後期以降の建物もしくは門などの可能性がある。

ピット出土土器（図版13、第23図）

出土したピット番号についてはそれぞれの遺物図に記載した。出土土器は主に縄文時代及び古代～中世にかけての土器が出土した。

151は縄文土器片である。粗製の深鉢の口縁部片で、口縁端部に向かって外側に開く。口縁端部は刻目を施し、内面には条痕文、外面はナデを施す。152～158は土師器である。152は口縁部を欠損する坏身である。底部は厚く、体部中程で内湾する。外面は黒褐色と良く焼けるが、内面は橙色である。外面底部は細かいミガキを施していた。153は坏で、復元口径16.0cmを測る。154は小皿で、口径7.8cmを測る。調整は内外面とも摩滅するが、底面は僅かに糸切りと板状圧痕が残る。155は高坏の脚部である。全体的に肉厚な作りをし、脚端部に向かって大きく開く。調整は内面にケズリ、外面にナデの痕跡がある。156も高坏片で、坏部と脚部との接合部分である。157と158は甕片である。157は全体的に肉厚である。調整は外面に刷毛目、内面に縦方向のケズリを施す。158は口縁から頸部にかけて「く」の字形になる。調整は内外面とも刷毛目である。復元口径はそれぞれ21.6cm、26.6cmを測る。159～165は須恵器である。159～162は坏蓋片である。159の口縁の一部は欠損するが、ほぼ完形品である。口径11.6cmを測る。全体的に回転横ナデを施し、外面天井部はヘラケズリやヘラ切りである。160はP56とP198とで出土した坏蓋片である。復元口径9.2cmと少し小さいが、口縁部を少し窪ませ、外側に引っ張る。161と162はかえりをもつタイプの坏蓋片である。復元口径9.0cm、8.8cmを測る。163と164は坏身である。163は外面体部中程までヘラケズリを施す丁寧な作りである。それぞれ復元口径で10.6cm、11.2cmを測る。165は提瓶などの破片か。先端部は欠損する。166は黒色土器の塚である。高台は薄く、外側に大きく開く。167は越州系青磁碗の高台片である。168～170は瓦器碗の高台片である。169は焼成不良



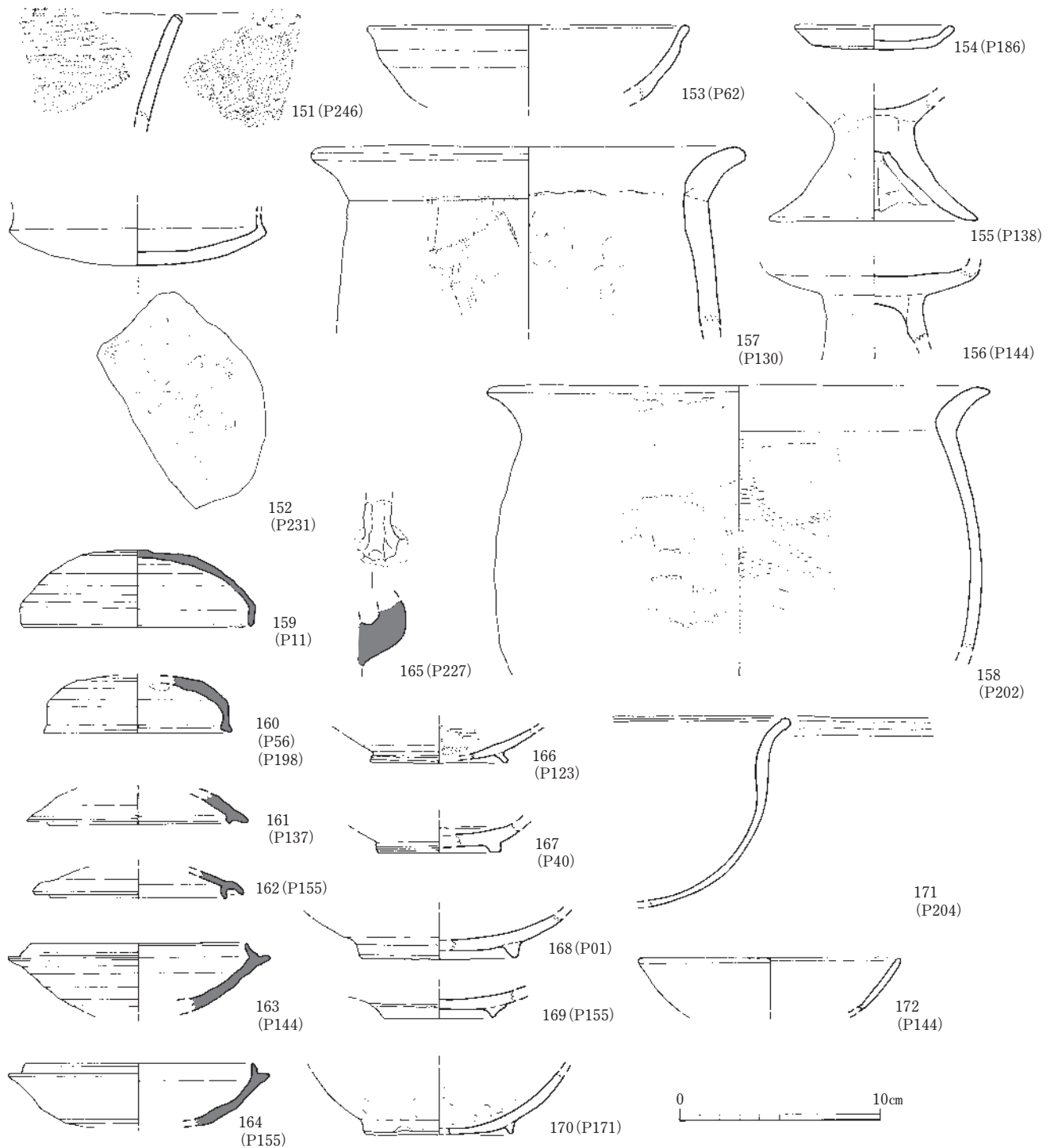
第22図 ピット (103・104) 実測図 (1/30)

で橙色を呈し、軟質である。170は内面に僅かにミガキの痕跡が残る。171は土師質の鉢片である。摩滅していて調整不明である。口縁端部は丸く、外側に開くが、底部に向かってゆるやかに外湾する。172は口剥げの白磁碗片である。内面の口縁端部を約3mm幅で削っている。復元口径13.0cmを測る。

遺構検出時出土土器 (図版13、第24・25図)

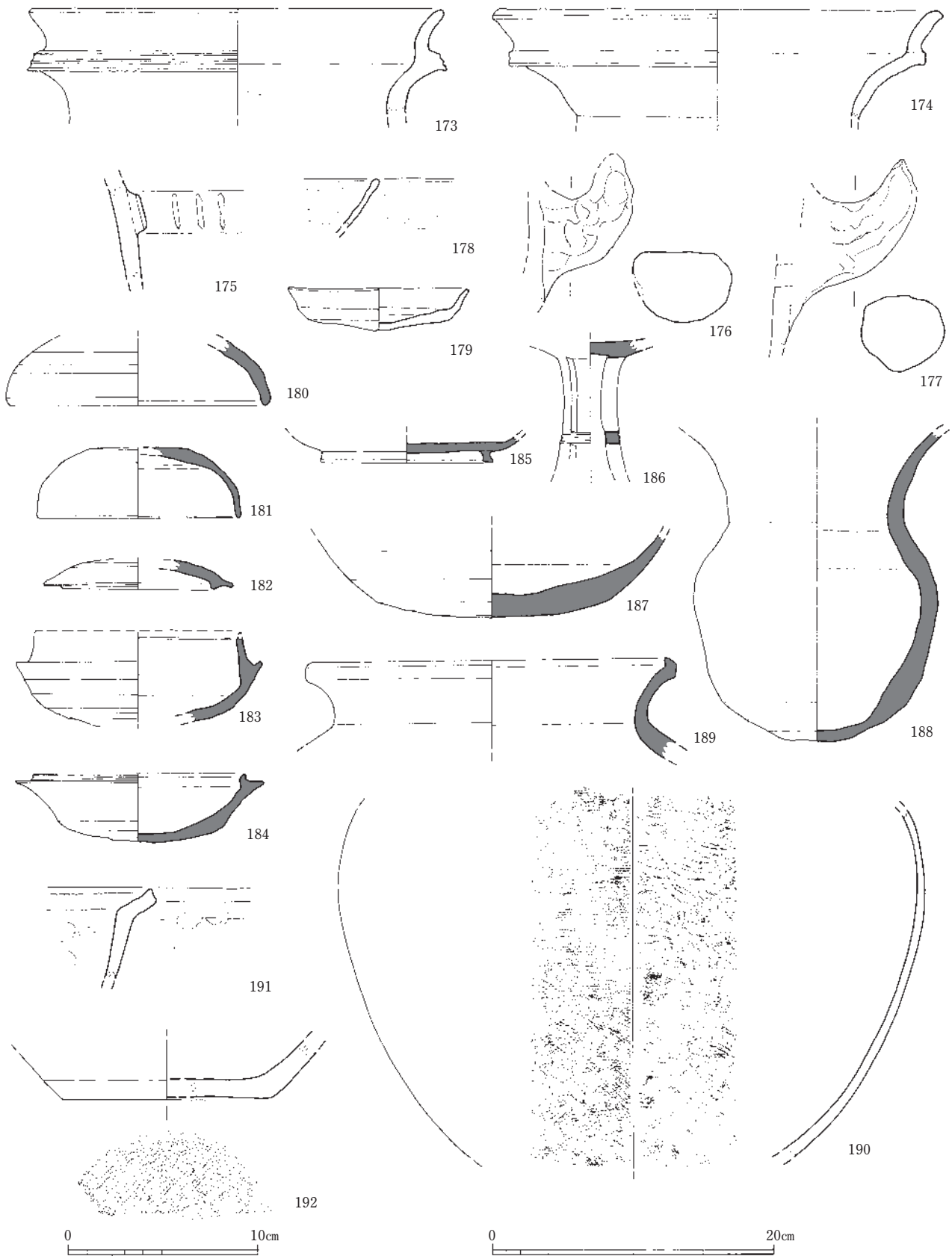
弥生時代から中世までの土器が出土している。

173～179は土師器である。173と174は複合口縁壺の口縁部片である。173は一段目の口縁部を親指と人差し指で挟んで外側に張り出したためか、爪による2本の浅い沈線が残る。174の調整は外面に刷毛目とナデ、内面にナデを施す。復元口径でそれぞれ22.0cm、23.0cmを測る。175は弥生土器の壺胴部片で、刻目の付く突帯がある。173～175は弥生終末頃か。176と177は甑の把手片である。177の方が掴む部分が厚い。178は坏片である。内外面に細かい横方向のミガキが施される。179は坏である。外面底部はヘラ切りされ、そのため底部がかなり歪んでいる。復元口径9.6cmを測る。180～189は須恵器である。180は坏蓋片で、体部中程まで丁寧にヘラケズリをする。口径14.0cmを測る。181は口径10.8cmと小さいサイズの坏蓋片である。182はかえりのある坏蓋片で、口縁と受け部との高低差が短い。口径8.0cmを測る。183は口縁端部に段を有する坏身片である。受け部には蓋と重ねて焼いたような痕跡がある。復元口径13.0cmを測る。184は赤茶色の坏身である。口縁は退化し、僅かに残る。口径11.2cmを測る。185は埴の高台片で、焼成はやや瓦質に近い。平底に高台を貼り付ける。186は長脚で2段の透かしの高坏脚部片である。187は壺の底部片である。外面の底部には丁寧にヘラケズリを施す。188は口縁端部を欠損する焼成不良の壺である。頸部があまりくびれず、口縁に向かっては大きく口が開く。また胴部はゆるやかな丸みをもち、胴部下半は厚手な作りをする。189は甕片である。口縁端部が嘴状になって、内



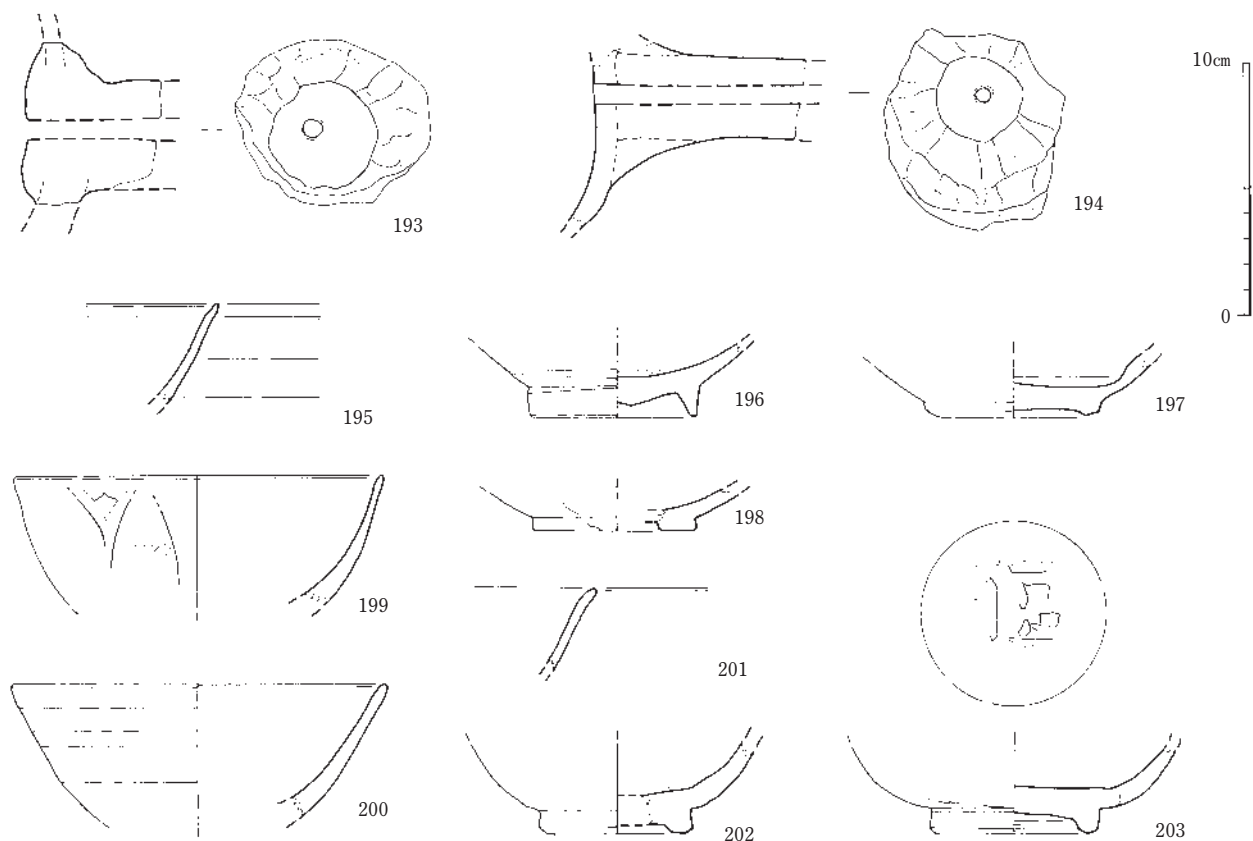
第23図 ピット出土土器実測図(1/3)

側に傾く。口径19.0cmを測る。190は須恵質の甕胴部片である。調整は内面に同心円叩きであるが、外面には平行叩きの後にカキ目を施す。191は土師質の土鍋口縁部片である。192は鉢の底部片である。やや焼成不良の須恵質鉢の底部片である。外面底部には板状圧痕がある。193と194は土師質の鍋把手片又は土瓶の注口片か。2点とも約8mmの孔が貫通している。接合部分は粘土を厚めにし、その部分を丁寧に指による調整をする。特に194は精良な作りである。195～198が白磁片である。195は口縁部片で、口縁端部は内面を窪ませて尖らせる。196～198は高台片である。197は内面に底部と体部の境に沈線を引く。198は接地面が幅広く、低い高台である。199～203は青磁碗片である。199と200は高台部分を欠損する破片である。199は外面に連弁文を有する



第24図 遺構検出出土土器実測図（190は1/4、他は1/3）

龍泉窯系の青磁碗片である。釉は200のみ薄い緑灰色である。201はやや内湾しながら口縁で外側開く。それぞれ復元口径14.6cm、14.8cmを測る。202と203は高台片である。203は内面の底部中央に印が押される。鮮明ではないが「福」と見える。



第25図 遺構検出出土土器実測図 (1/3)

8. 特殊品 (図版14～16、第26～31図)

瓦 (図版14、第26図)

204と205は水田出土の丸瓦片である。調整は凸面に比較的大きな格子目タタキと凹面に布面の痕跡がある。206は3号溝状遺構出土の平瓦片である。これのみ凸面に縄目タタキが残る。P11出土の207と排土出土の209のみ凸面が格子面タタキである。208と210は不鮮明だが、凹面に布面の痕跡が僅かに解る。

製塩土器 (図版14、第26図)

211と212は共に体部片で、213は底部片である。いずれも内面は布目痕で、外面には指頭圧痕である。211は西側トレンチ出土、212と213は11号溝状遺構出土である。

ミニチュア土器 (図版14、第26図)

214～219はミニチュア土器である。214と215は1号竪穴住居跡出土である。214は厚手に作られるが、215は薄手で、非常によく焼けていて黒灰色を呈す。216は5号土坑出土である。これも非常に良く焼け、黒灰褐色土を呈する。器壁には内外面ともに指押さえの痕跡が明瞭に残る。約1/3欠損するが、復元口径6.1cm、器高3.9cmを測る。217は表土剥ぎ出土である。肩部が張るような器形なので、壺を模倣したものか。それぞれ口径3.0cm、3.6cmを測る。218と219は少量の粘土を人指し指と親指で押さえながら整形した簡易な作りである。218はP159出土、219は遺

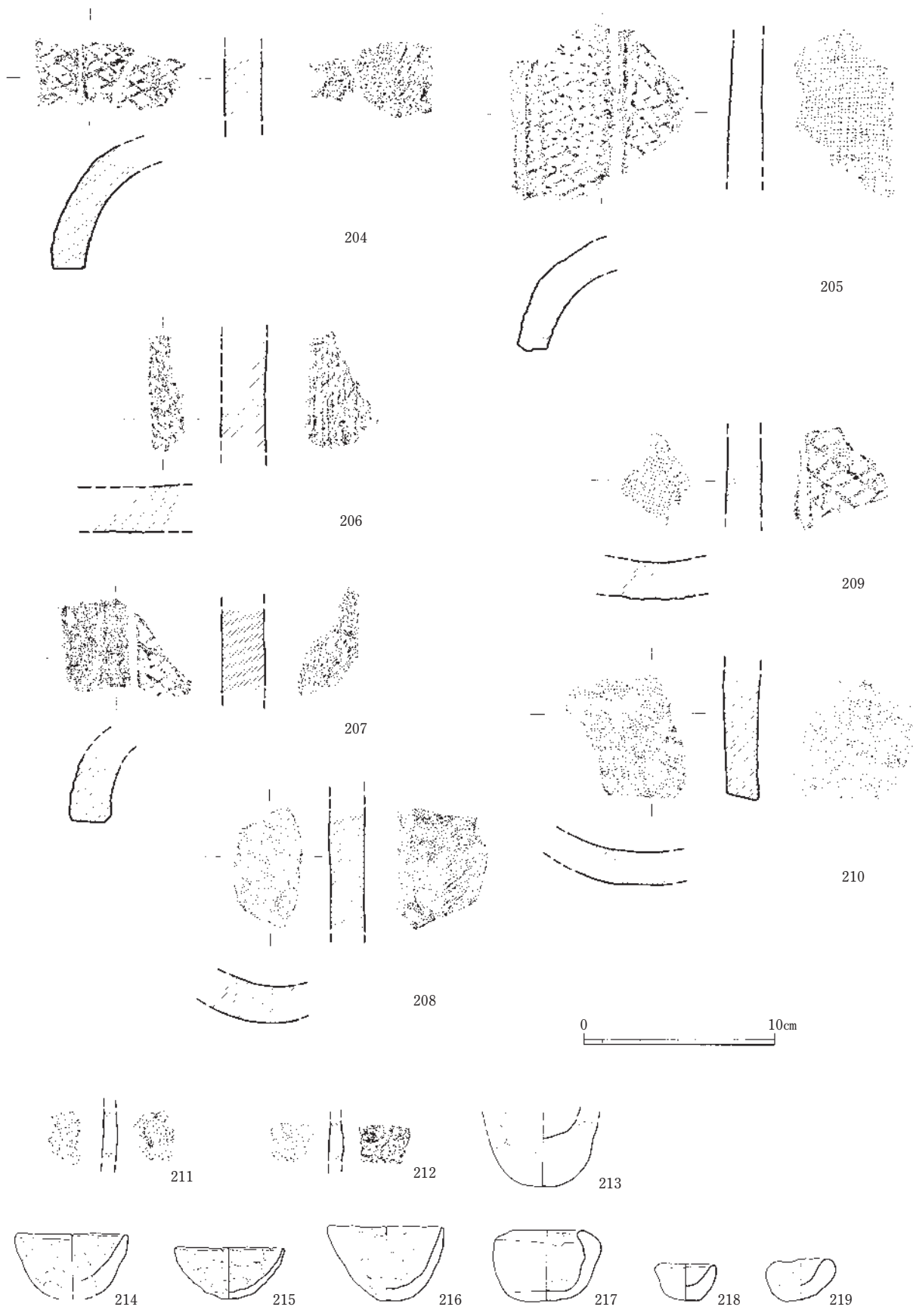
構検出出土である。いずれも調整は内外面とも指によるナデ調整である。明瞭に指圧痕跡がある。

土錘（図版14、第27図）

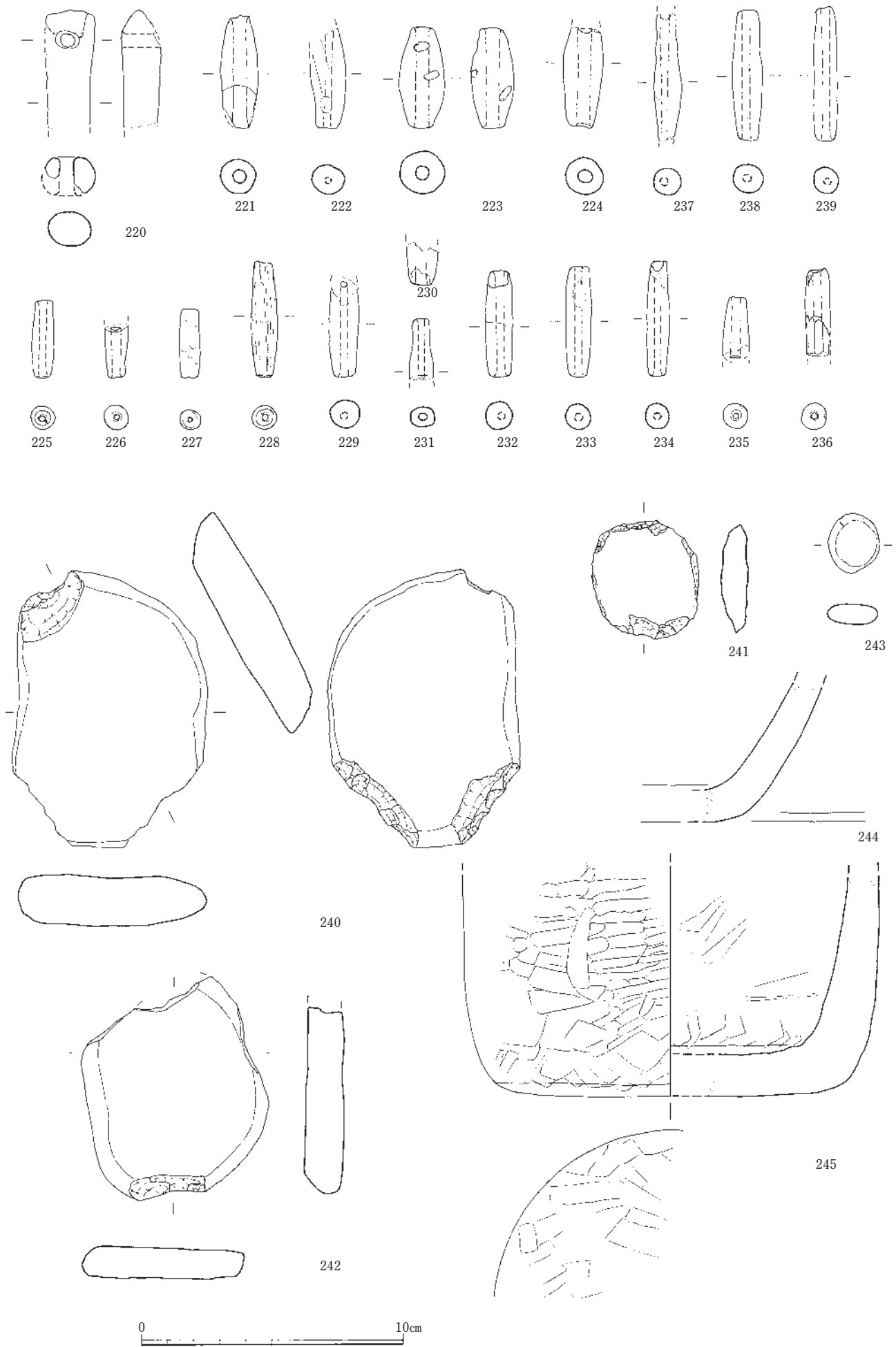
土錘はまず棒状土錘と管状土錘に分けられる。220は有孔棒状土錘で、1点のみ出土した。221～239は管状土錘で、大きさによって3つに分類できる。221から224は中程が大きく膨れるタイプで、径1.1～1.6cmを測る。221は上下両端の一部を欠損する。上側の一部に二次被熱による煤が付着する。222は上側を欠損し、左側が歪む。223は径1.6cmを測り、今回出土した中で一番大きな径になる。224の表面は摩滅し、上部は欠損して残りが悪い。225～227は長さ約3cm以下で、径1cm以下の小型である。225は完形品である。上下両端部を平坦に整え、丁寧にナデ調整をする。226は1/3を残して折損する。227も完形品で、ナデの痕跡がある。228は器表面が一部剥落するが上下両端部を平坦に整える。また器面は縦方向のミガキをする。229は上半約1/3を欠損する。ほぼ全体が黒～黒褐色を呈する。230は端部がややためで、全体の約1/4のみみかない。器表面の一部にヒビ割れがあり、被熱痕跡を受ける。231は中程で折損する。232も上端の一部を折損するが、丁寧なナデ調整をする。233は全体的に摩滅するが、丹塗りの痕跡によるものなのかにぶい橙色を呈する。234は上端の一部を欠損するが、丁寧なナデをする。235は1/3を残して折損する。236は1/2折損するが、ナデ以外にもミガキの痕跡が残る。237～239は長さ約5cm、径約1cmを測る今回出土した中では長いタイプである。237は両端部を一部欠損する。238と239は完形品である。

石器・石製品（図版15、第27～29図）

240～242は礫石錘である。240の石材は灰色を呈す安山岩である。隅丸長方形で扁平な礫を利用し、対角線の野門を意識して3カ所に打ち欠きを行い石錘とする。図左を表面とすると上側の加工は裏から、下側の加工は表側から打つ。241の石材は灰白色を呈す雲母片岩で金属光沢を示す1～2mmの雲母片を多く含む。素材は扁平で礫片または剥片か。周囲を粗く打ち欠いて楕円形に整形後、さらに長軸方向を打ち欠いて挟り入り紐掛け部を作り出す。242の石材は風化面が灰～灰白色、割れ口が暗い灰色を呈す安山岩である。隅丸長方形の扁平な礫を利用し、長軸方向の下側を打ち欠いて石錘とする。本来は上側にも加工が行われていたと思われるが、欠損する。短軸の右側縁には敲打により浅い凹みを作り出す。243は円盤状石製品で黒色を呈する硬質な頁岩製の碁石か。表面はローリング受けてはいるが、部分的に磨き痕が観察される。244と245は滑石製石鍋片である。244は鉢形に開く底部片か。調整は全体的にローリングを受け不明であるが、外面には煤が付着する。245は内外面にミガキの痕跡を多く残す底部片である。復元底部径約14.0cmを測る。246は加工痕・使用痕のある石核片である。石材は節理が多く入る姫島産黒曜岩である。部分的に小さな剥離痕や縁辺の潰れが見られ、スクレイパー的に使用されたものか。247は姫島産の灰白色黒曜石のスクレイパーである。裏面には平坦な節理面が大きく残り、板状または角礫状の石核から素材を獲得した剥片である。基部の右側縁は切断によって整形される。248は両側縁及び端部に使用痕のある剥片である。石材は姫島産の灰白色黒曜石である。左側に平坦な礫面を残すことから角礫～亜角礫を素材としたことが解る。249は器体の端で折れているが、約1/4残る石庖丁である。背部は直線的になり、弧刃が三角形になるものか。刃部には使用痕が残る。250も石庖



第26图 瓦・土製品実測図 (1/ 3)



第27図 土製品・石器・石製品実測図 (1/2)

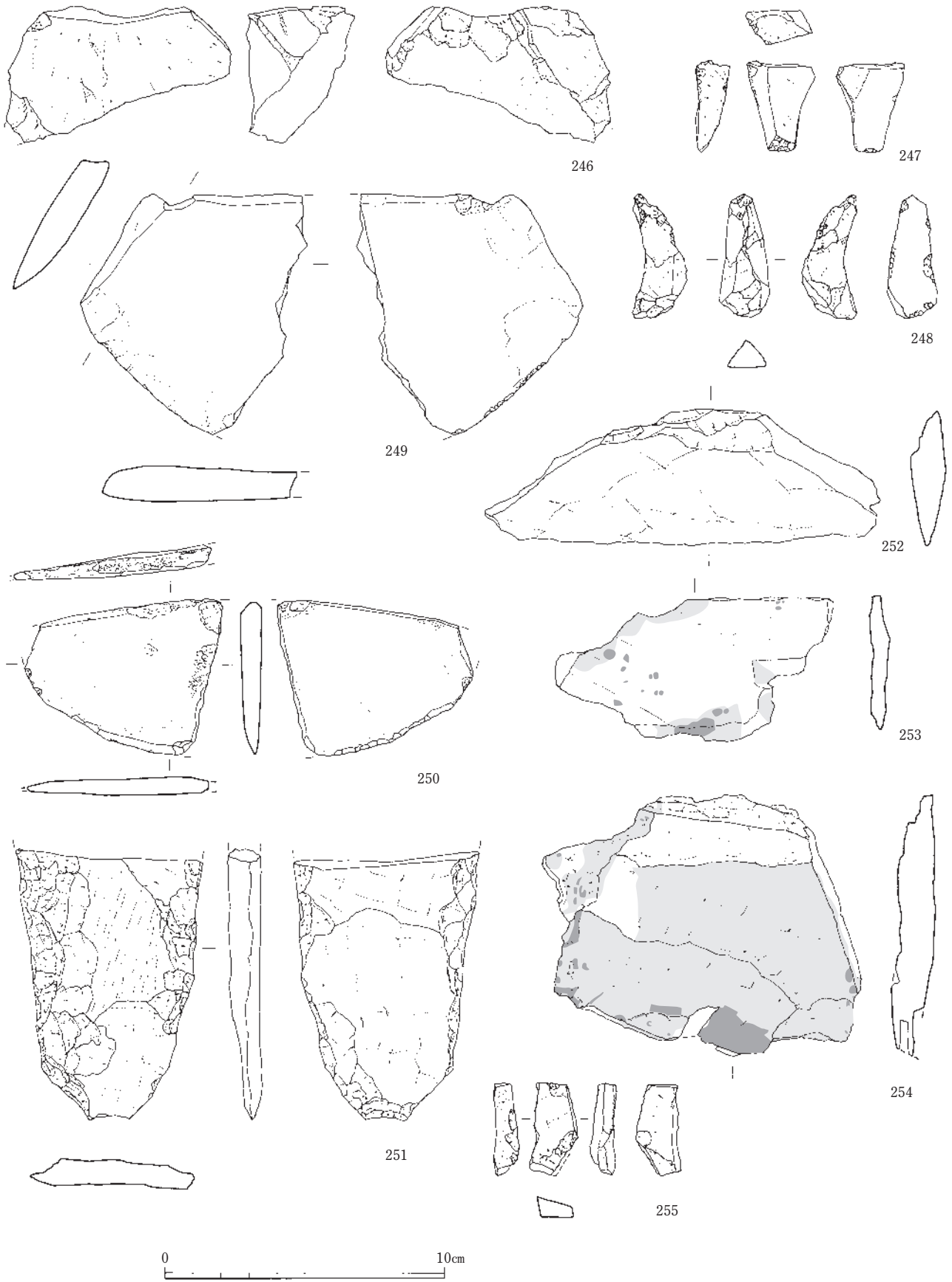
丁である。中央付近で折れていて、背部がやや弧を描く弧刃の形態になる。背部では素材に対して外側から内側に向けて厚さを減じるような剥離整形を行った後、剥離稜線の敲打による直線状に潰し後、粗い研磨調整が見られる。251は扁平打製石斧である。緑色の結晶片岩の板状礫から剥離された幅広い剥片を素材とする。背面には平坦な礫面を広く残す。周囲から加工を施し整形するが、背面側の加工が多い。先端付近の稜が幾分摩滅し、使用痕と考えられる。また基部側の稜も一部摩滅し、装着痕跡と考えられる。252は横剥ぎの剥片で、石材は片理のはっきりする緑色結晶片岩である。扁平打製石斧の調整剥片または石庖丁・石錘・磨製石鏃の素材であろう。253と254は赤色顔料が付着した片岩片である。253が少し青みがかかった黒灰色の泥質片岩で、254は緑泥片岩である。共に軟質で石理がはっきりとし、そこから容易に剥離する。251のような片岩系石材と比べると軟質で残りが悪く、石器に使用されるものではない。特筆されるのは、石材に部分的にやや鈍い赤色顔料が部分的に付着する。この赤色顔料は当館の蛍光 X 線分析により、ベンガラだと判明した。255は火打ち石である。石材は深緑白のチャートである。左側に平坦な礫面を残すことから角礫～亜角礫を素材にする。256は台石又は敲石である。石材はやや軟質で灰色を呈す凝灰岩である。やや扁平な楕円礫を利用する。円礫の周囲には小さめの敲打痕が見られるが、右側縁のやや突出する部分に集中する。これは器体の整形目的で生じただけでなく、突出部に集中することから敲石として使用されたものと考えられる。257は敲石である。灰白色を呈す角閃石を含む凝灰質安山岩の少し扁平な楕円礫を素材とする。長軸の両端部には敲打痕が見られる。258は磨石又は敲石である。石材はわずかに灰黄色で、角閃石を少量含む安山岩である。扁平な楕円礫を素材とする。側縁部全周には敲打痕があるが、長軸方向の端部付近がより顕著である。下側を磨石として使用し、平坦・平滑になる。259は台石である。石材長石や角閃石を含む安山岩である。扁平な平面および楕円形の礫を利用する。上面中央を中心とした広い部分に敲打痕が見られ、台石として使用か。また、上面中央やや右寄りには被熱痕跡と考えられる赤化がある。260は敲石で、石材は僅かに灰白黄色を呈す角閃石を含む安山岩である。楕円礫を素材として長軸の両端部を中心に敲打痕が見られる。

鉄製品および鑄造関連遺物（図版16、第30図）

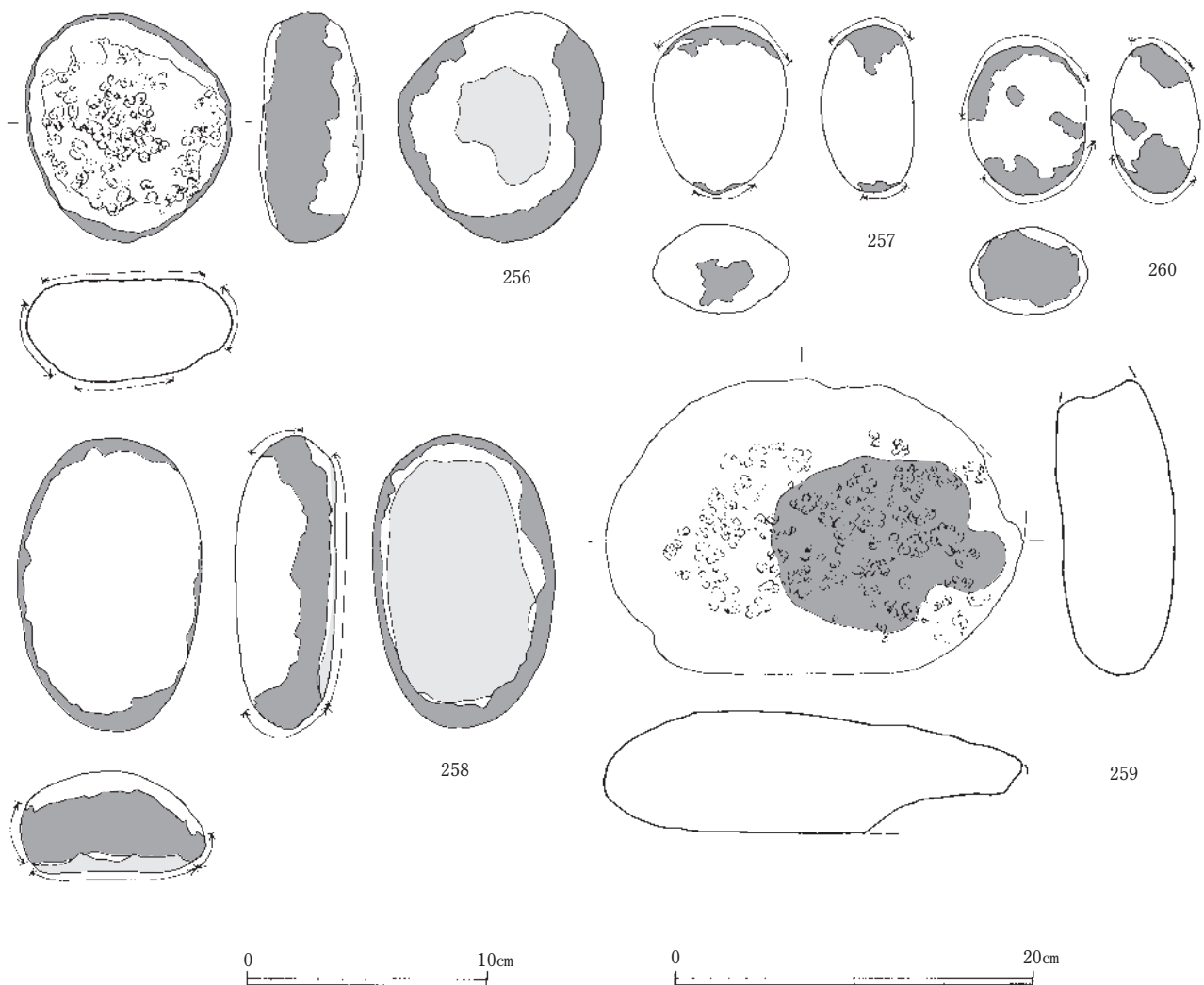
261は3号溝状遺構出土の刀子又は鏃の基部片か。262は不明鉄製品で10号土坑出土の流滴形状をする。263は鉄板状の不明鉄製品で、上下と左側を欠損する。P 113出土。264は鋤先で水田（5号溝状遺構）出土である。265は「皇宋通寶」の銅銭である。266～268は鉄滓、269と270は羽口片である。269は水田（5号溝状遺構）出土である。270はP 204出土で、表面が一部ガラス化する。

木製品（図版16、第31図）

271～280は4号溝状遺構出土である。271と272は板材である。共に下端部の一部が剥落するが、本来は上下両端部とも平滑に整えたものか。273は水分を含んでやや変形する薄い板材である。上下両端部は破損する。274、275は下半分～1/3を折損する箬か。細長い棒状で、断面が長方形である。276は角材または板材か。左側面は平滑に整えられるが、上下両端は欠損し残りは悪い。277は角材か。上下両端は折れているが、表面と右側面は平滑に整える。下側を斜めに



第 28 图 石器实测图1 (1/ 2)

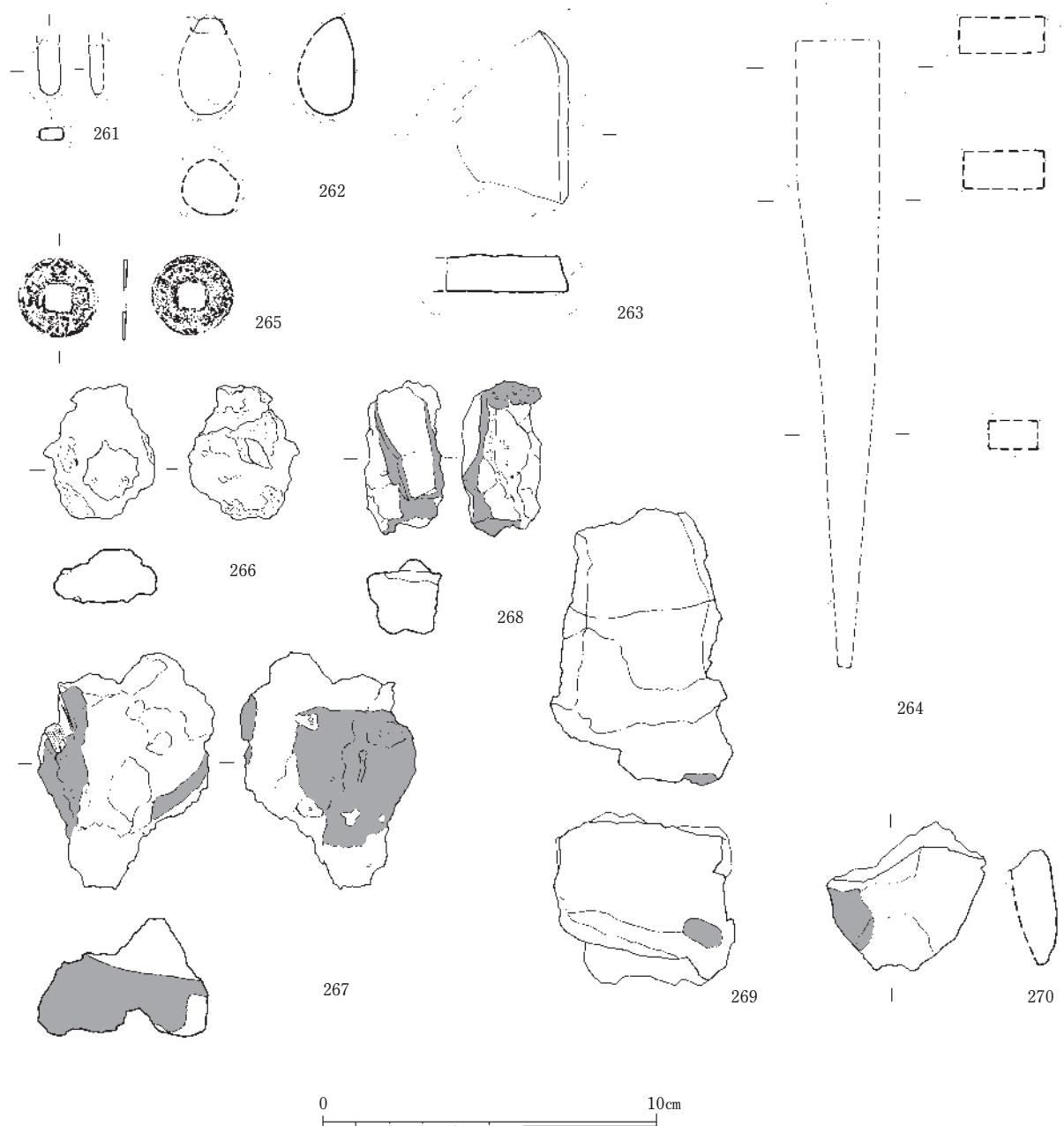


第29図 石器実測図2 (259は1/4、他は1/3)

尖らせているので杭の可能性もある。上面と右側面には軽く焼け焦げる。278の断面の形状は台形状を呈する角材か。表裏面とも平坦に整えるが、左側面は表皮を剥いただけで緩やかな曲線を描く。279は台形状を呈する角材か。下側は面取りされ、上側には鑿などによる工具痕がある。280は杭か。断面は矩形で、右側縁と下端に工具痕が残る。上端は折損するが、下端は先細になる。281は薄い板状で、下端はやや歪む不明木製品である。薄板の側縁木口を削ったものか。8号溝状遺構出土である。282と283は下端部を尖らせる角棒か。表面は平滑に整えられるが、特に右側面を丁寧に仕上げる。また282の下部と283の上端部には焼けた痕跡がある。11号溝状遺構出土である。284は上下端は折損するが、表面には工具痕がある用途不明の板材か。左側面はややゆるやかな曲線になるが、全体的には角張る。

9. まとめ

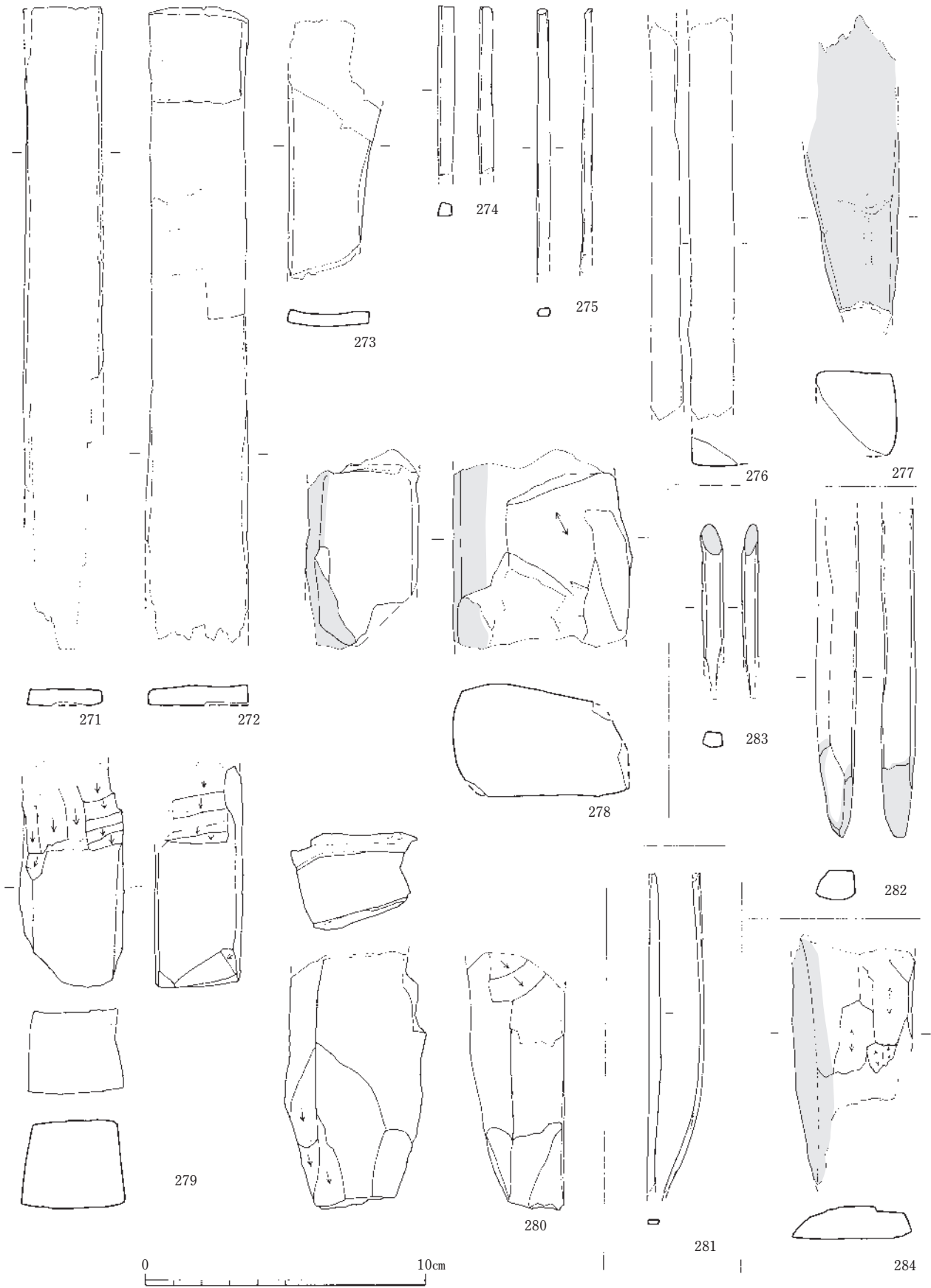
出土遺物や検出した遺構を時期ごとに概観すると、最も古い時期を示すのは縄文時代の遺物である。P246出土の縄文時代後期後頃の深鉢形土器片がある。その他にも小片だが、粗製の土器片が数点出土した。扁平打製石斧(251)もこの時期に属する可能性が高い。その次の時代としては、



第30図 鉄器・鉄製品・鑄造関連遺物実測図(1/2)

弥生時代前期後半～末頃である。板付Ⅱ式併行の甕(17)が出土し、石庖丁形石器が2点(249・250)出土した。石庖丁はいずれも溝状遺構から出土したもので、流れ込みと思われる。姫島産黒曜石や腰岳系の黒曜岩を使用した剥片石器類や磨石・敲石類の多くはこの縄文時代後期から弥生時代前期の間に使用されたものであろう。なお、これまでの時期の遺構は検出されなかった。

本遺跡で遺構が確認されるのは、弥生時代終末～古墳時代前期である。この時期の遺構としては、1号竪穴住居跡、2・3号土坑などがある。1号竪穴住居跡は古墳時代前期に掘削され、古墳時代後期～終末に再度掘り返された可能性がある。古墳時代後期～終末の2号竪穴住居跡に切られる3号竪穴住居は下位から古墳時代前期の遺物が出土した。また周辺にはこれ以外の住居や建物は検出されなかったが、古墳時代前期の遺物が出土しており、遺構が展開していたと思われる。3号土坑も出土遺物からこの時期の貯蔵穴であるが、2号土坑も図化はできなかったが、土師器鉢の小片が出土したのでこの時期の可能性はある。



第 31 図 木製品実測図 (1/2)

古墳時代後期～終末の遺構には2号竪穴住居跡、8号土坑などがある。2号竪穴住居跡の上面は削平されていたが、僅かに竈の痕跡がある。該当する時期の遺物は少なかったが、この時期に属すると思われる。また、土師器甕を出土した1号土坑や土師器片とともに赤色顔料が付着した石材が出土した8号土坑は、共に古墳時代後期である。

古代の遺構ははっきりしないが、出土遺物では須恵器、土師器以外にも布目痕のある瓦、製塩土器、緑釉陶器、越州窯系青磁などの破片が出土した。特に緑釉陶器や製塩土器等の破片が出土したが、それに該当する遺構は全く検出されなかった。

最後に、最も出土したのは中世である。特に12世紀以降の遺物を出土した10～13土坑、2～4号溝状遺構、9・18号不明遺構が挙げられる。また水田3もこの時期の可能性が高い。当地域はこの時期以降に、現代までに続く水田地帯となったようである。なお、今回検出した水田については、溝状や畦畔状の遺構が伴い、人為的攪拌が見られる土層を確認したが、水口状遺構周辺を除いて出土遺物は少なく詳細な時期の特定には至らなかった。

その他にも十分な検討ができなかったため、多くの課題を残したが、今後の周辺遺跡での類例の増加を期待したい。

表2 皆見川ノ上遺跡出土石器・石製品

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
27	240	15	2	5号溝状遺構南側	礫石錘	10.6	7.5	2.0	251.0	安山岩
27	241	15	1	1区表土剥ぎ	打欠石錘	4.5	4.0	1.1	27.6	雲母片岩
27	242	15	2	4cグリッド西側	礫石錘	(8.5)	7.1	1.6	147.2	安山岩
27	243	15	2	5号溝状遺構北東側	円盤状石製品 碁石	2.2	2.0	0.7	5.3	頁岩
27	244	15		表土剥ぎ	石鍋片	-	-	-	-	滑石
27	245	15	2	5号溝状遺構北側	石鍋片	-	-	-	-	滑石
28	246	15	2	3号溝状遺構北側	加工痕使用痕ある石核片	4.9	8.0	3.9	95.5	姫島産黒耀石
28	247	15	2	5号溝状遺構西側	スクレイパー	3.2	2.4	1.2	7.0	姫島産黒耀石
28	248	15	1	表土剥ぎ	使用痕ある剥片	4.4	1.7	1.9	11.2	姫島産黒耀石
28	249	15	2	5a号溝状遺構北側	大型石包丁	(8.2)	(8.6)	1.4	119.4	安山岩
28	250	15	2	10号溝状遺構下層	石庖丁	(7.1)	5.5	1.3	42.5	凝灰質粘板岩
28	251	15	3	3号土坑	扁平打製石斧	(9.5)	(6.7)	1.2	95.4	緑色結晶片岩
28	252	15	3	7号土坑	調整剥片または素材剥片	4.9	14.0	1.3	92.1	雲母片岩
28	253	15	3	8号土坑	顔料付着石材片	5.1	9.9	0.8	40.1	泥質片岩
28	254	15	3	8号土坑	顔料付着石材片	7.7	10.6	1.2	164.7	緑泥片岩
28	255	15	2	表土剥ぎ	火打ち石	3.3	1.7	0.9	5.6	チャート
29	256	15	3	1号竪穴状遺構	台石・敲石・磨石	9.5	8.5	4.3	407.0	凝灰岩
29	257	15	3	1号竪穴状遺構北西	敲石	6.9	5.5	3.7	194.0	凝灰質安山岩
29	258	15	2	10号土坑	敲石・磨石	12.1	7.6	4.2	599.0	安山岩
29	259	15	2	13号土坑	台石	16.7	23.3	5.9	3781.0	安山岩
29	260	15	2	4cグリッド	敲石	6.2	4.9	3.7	135.0	安山岩

補足資料

10. 草場角名遺跡出土の石器・木器（図版17・18、第32・33図）

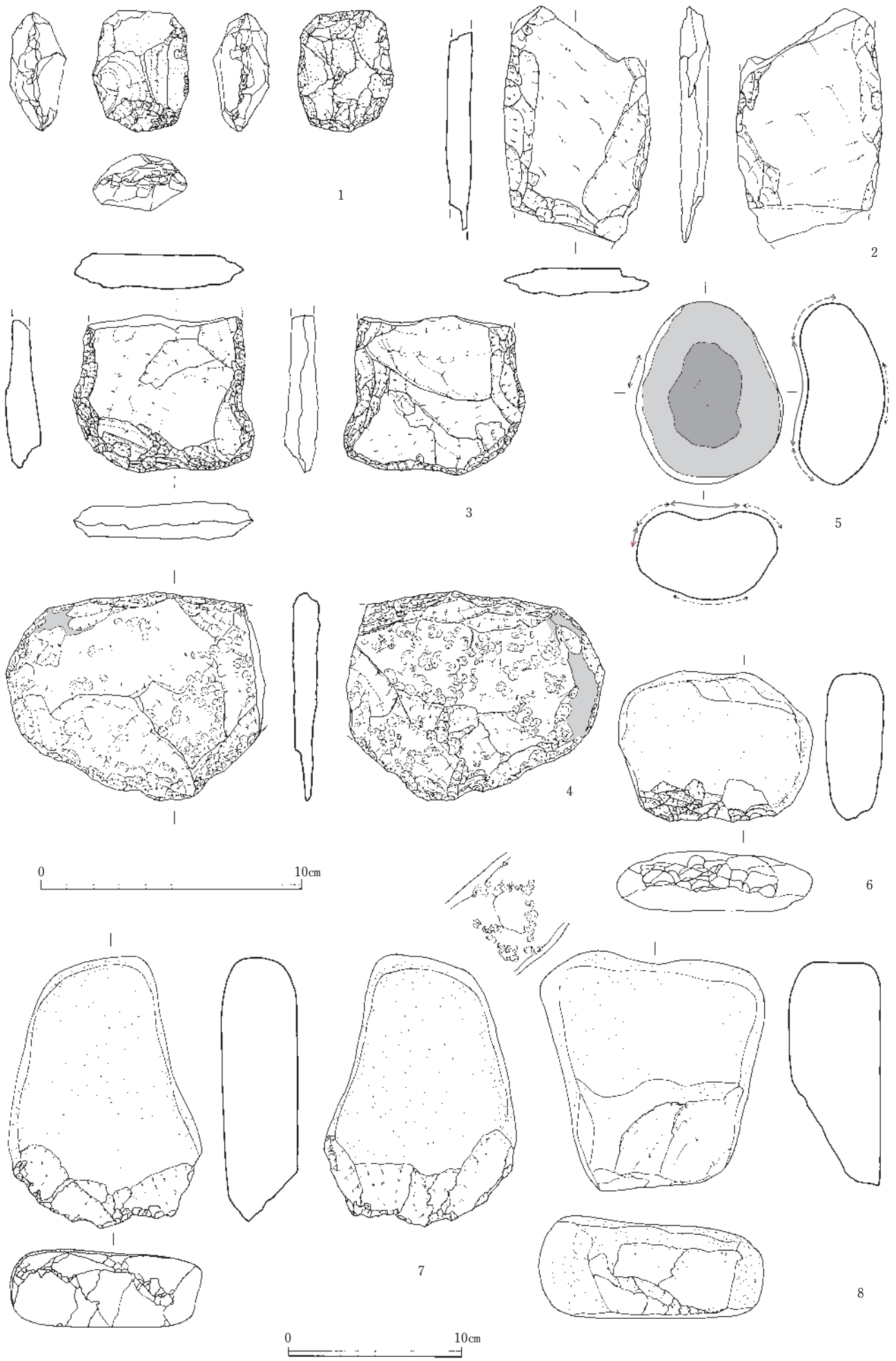
「東九州自動車道建設関係埋蔵文化財調査報告」(6) 草場角名遺跡で漏れていた石器及び木器をここで補足する。出土遺物の詳細については別表に記す。

1はクサビ形石器である。石材は地元で通称「ミソ石」と呼ばれる黄褐色の飴色を呈す。亜角礫を素材とし、亀甲状に周辺から剥離を行う小石核を転用する。背面中央付近には素材礫の古い風化面が残る。風化が著しいため旧石器～縄文時代前半のものか。2・3は淡灰褐色や灰色の扁平打製石斧で、周囲から両面に加工を施し整形する。2は横剥ぎと考えられる扁平な板状の剥片である。加工の稜線は軟質の石材のためすべて摩耗する。3も板状で、表面中央右側は素材のポジ面で分割時のものと考えられ、中央付近の剥離痕はバルバースカーに相当する。使用により刃部付近を中心に稜線の摩耗が見られる。4は部分磨製打製石庖丁形石器である。剥片の周辺を加撃し、両面に剥離整形をした後に厚みを減じるため敲打調整を行っている。小さいやや薄い剥離による刃部の形成をする。その後左右両端の一部を研磨する。5は凹石である。やや扁平な円礫を素材とする。上面をほぼ平坦に磨って整えた後、中央付近には敲打により凹みを付けている。左側縁の一部にも敲打痕がある。6～8は礫器で、亜円礫、亜角礫を素材とする。6は一側縁に刃を作る片刃礫器である。刃部には使用による潰れがある。7は両刃礫器で、長軸側一端に交互剥離状の調整を行い両刃を作る。8は片刃礫器又は敲石である。一端に剥離を行い片刃の礫器とするが、持ち手側の角には敲打痕が見られたので敲石としても使用か。

9は太形蛤歯石斧である。残存する部分は胴部のみで、右器表面が剥落する。ほぼ全面に研磨されているが、部分的には敲打による調整も残る。高槻型である。10は小型の磨製石斧である。部分的に敲打痕が残り、敲打の後に研磨整形を行っている。刃部付近は比較的丁寧な研磨される。11は砥石である。板状の塊石を素材とし、上面・右側縁・下面を作業面とする。12は敲石又は台石である。扁平な楕円礫を素材とし、長軸側の一端と右側縁に敲打痕が廻る。上面中央にも敲打痕があり、台石として使用か。13は磨石又は敲石である。これも扁平な円礫を素材とし、上下面を磨石として使用か。周囲には帯状に敲打痕が廻り、長軸側の一端には大きめの敲打痕が残る。14・

表3 草場角名遺跡出土石器

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
32	1	17	1A	1号溝状遺構西側	クサビ形石器	4.7	3.7	2.2	42.0	玉髄または珪質頁岩
32	2	17	1A	南側中央付近	扁平打製石斧	(9.1)	5.7	1.1	78.0	緑泥片岩
32	3	17	1B	15号溝状遺構北4区北側	扁平打製石斧	(6.0)	6.9	1.2	83.6	綠色片岩
32	4	17	1B	15号溝状遺構 p53	部分磨製打製石包丁形石器	7.9	9.9+	1.15	130.3	綠色結晶片岩
32	5	17	1B	15号溝状遺構 p72	凹石	10.4	8.4	5.0	499.0	凝灰質安山岩
32	6	17	1B	15号溝状遺構 p70	礫器	8.5	11.1	3.45	470.0	安山岩
32	7	17	1B	15号溝状遺構 p60	礫器	15.3	10.9	4.3	1,154.0	安山岩
32	8	17	1B	15号溝状遺構北2区中央	礫器・敲石	17.6	12.7	5.7	1,382.0	凝灰岩
33	9	17	1B	15号溝状遺構 p46	太形蛤刃石斧	(6.3)	6.95 (7.2)	5.8	396.0	凝灰質安山岩
33	10	17	2A	17号溝状遺構	磨製石斧	9.75+ (9.9)	4.4	1.4	97.1	蛇紋岩
33	11	17	2A	15号土坑	砥石	(8.5)	(16.0)	4.6	376.0	砂岩
33	12	17	1B	15号溝状遺構北4区南側	敲石・台石	(7.4)	6.2	3.1	213.0	安山岩
33	13	17	1B	15号溝状遺構北3区南側	磨石・敲石	(7.0)	9.8	4.2	476.0	凝灰質安山岩
33	14	17	1B	15号溝状遺構 p54	石皿	(10.8)	(12.5)	3.4	580.0	凝灰質安山岩
33	15	17	1B	15号溝状遺構 p66	石皿	(11.3)	14.0	3.45	881.0	凝灰質安山岩
33	16	18	1B	15号溝状遺構 p39	台石	19.8	19.5	6.7	3,928.0	安山岩
33	17	18	1B	15号溝状遺構 p69	台石	(18.8)	19.7	6.4	3,609.0	安山岩



第32図 草場角名遺跡出土石器実測図1 (1~4は1/2、他は1/3)

15は石皿である。ともに扁平な板状垂円礫を素材とし、上下両面ともに中央付近に単位がよく解らない程の細かな敲打痕が見られ、浅い凹み状になる。16・17は台石である。これもともに板状の垂円礫を素材とし、上下両面の中央付近に敲打痕が見られる。18は上下両面を製材した木材である。上面には中央付近で段がつくように加工され、幅約1~1.5cmの石製工具などによる加工痕が残る。



第33図 草場角名遺跡出土石器2・木製品実測図 (9~13は1/3、他は1/4)

11. 皆見川ノ上遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I 皆見川ノ上遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

2. 試料

分析試料は、2区土層断面の13層（試料1、2）、12層（試料3）、3層（試料4）、8層（試料6）、5層（試料7）、2層（試料8）から採取された計7点である。このうち3層は古墳時代、8層は10～12世紀、2層は9～10世紀代とされている。（※調査時点）

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、そ

の結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

[イネ科—タケ亜科]

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、はめ絵パズル状（ブナ科ブナ属など）、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

分析の結果、3層（試料4）、8層（試料6）、5層（試料7）、2層（試料8）からイネが検出された。このうち、5層（試料7）では密度が5,800個/gと高い値であり、8層（試料6）でも3,900個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

3層（試料4）と2層（試料8）では、密度が700個/gおよび1,400個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクヒエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。下位の13層から3層にかけては、ヨシ属、ウシクサ族A、ネザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木起源のクスノキ科などが検出されたが、いずれも少量である。8層から2層にかけては、ススキ属型および樹木起源のブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）が出現している。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢であり、8層と5層ではイネも多くなっている。

以上の結果から、3層より下位層の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（ネザサ節）やササ属（ミヤコザサ節）などの竹笹類が生育していたと推定される。また、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木（照葉樹）が分布していたと考えられる。

8層や5層でも、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、およびメダケ属（ネザサ節）やササ属（ミヤコザサ節）などの竹笹類が生育し、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの樹木（照葉樹）が分布していたと考えられる。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、10～12世紀とされる8層および5層では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、古墳時代とされる3層および9～10世紀代とされる2層でも、少量のイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。

8層や5層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、およびメダケ属（ネザサ節）やササ属（ミヤコザサ節）などの竹笹類が生育し、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、スノキ属などの樹木（照葉樹）が分布していたと考えられる。

文献

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—。考古学と自然科学, 19, p.69-84.

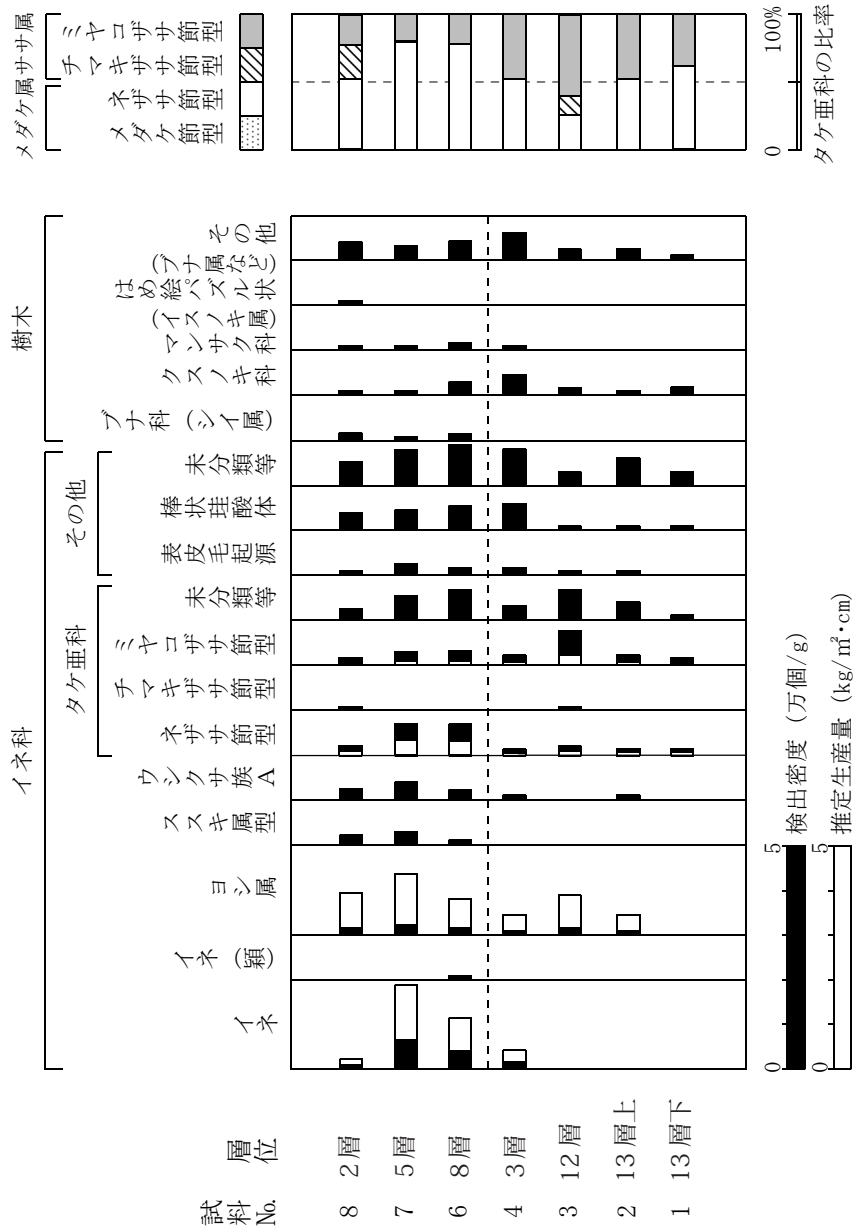
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学. 同成社, p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表4 皆見川ノ上遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: × 100 個/g)	分類群	地点・試料							
		13層下	13層上	12層	3層	8層	5層	2層	8層
	学名	1	2	3	4	6	7	8	
	イネ科								
	Gramineae								
	イネ				14	39	65	7	
	<i>Oryza sativa</i>								
	イネ籾殻 (穎の表皮細胞)								
	<i>Oryza sativa</i> (husk Phytolith)								
	ヨシ属		7	14	7	13	22	15	
	<i>Phragmites</i>								
	ススキ属型								
	<i>Miscanthus</i> type								
	ウシクサ族A		7		7	19	36	22	
	Andropogoneae A type								
	タケ亜科								
	Bambusoideae								
	ネガサ節型	15	15	21	14	71	72	22	
	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>								
	チマキガサ節型			7					
	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.								
	ミヤコガサ節型	15	22	78	22	32	29	15	
	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>								
	未分類等	8	37	64	29	64	50	22	
	Others								
	その他のイネ科								
	Others								
	表皮毛起源		7	7	14	13	22	7	
	Husk hair origin								
	棒状珪酸体	8	7	7	58	52	43	37	
	Rod-shaped								
	未分類等	30	60	28	80	90	79	52	
	Others								
	樹木起源								
	Arboreal								
	ブナ科 (シイ属)					13	7	15	
	<i>Castanopsis</i>								
	クスノキ科	15	7	14	43	26	7	7	
	Lauraceae								
	マンサク科 (イスノキ属)				7	13	7	7	
	<i>Disyllum</i>								
	はめ絵パズル状 (ブナ属など)								
	Jigsaw puzzle shaped (<i>Fagus</i> etc.)								
	その他	8	22	21	58	39	29	37	
	Others								
	Total	98	195	262	355	496	489	300	
	植物珪酸体総数								
	おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の反比重を 1.0 と仮定して算出								
	イネ				0.43	1.14	1.90	0.22	
	<i>Oryza sativa</i>								
	ヨシ属		0.47	0.90	0.46	0.81	1.36	0.95	
	<i>Phragmites</i>								
	ススキ属型					0.08	0.27	0.19	
	<i>Miscanthus</i> type								
	ネガサ節型	0.07	0.07	0.10	0.07	0.34	0.35	0.11	
	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>								
	チマキガサ節型			0.05				0.06	
	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.								
	ミヤコガサ節型	0.05	0.07	0.23	0.07	0.10	0.09	0.04	
	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>								
	タケ亜科の比率 (%)								
	ネガサ節型	62	52	26	52	78	80	52	
	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>								
	チマキガサ節型			14				27	
	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.								
	ミヤコガサ節型	38	48	60	48	22	20	22	
	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>								
	メダケ率	62	52	26	52	78	80	52	
	Medake ratio								



第34図 皆見川ノ上遺跡における植物珪酸体分析結果

第35図 皆見川ノ上遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)



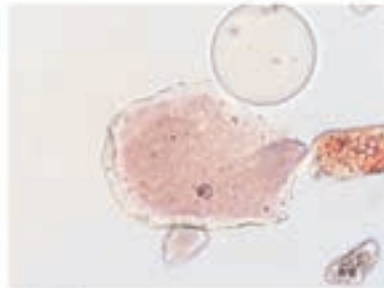
イネ

イネ

イネ



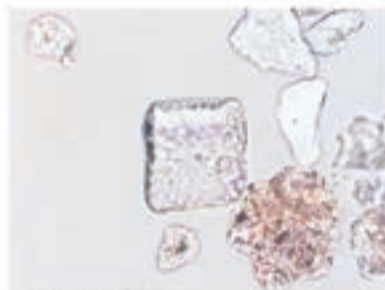
イネの糊殻 (穎の表皮細胞)



ヨシ属



ススキ属型



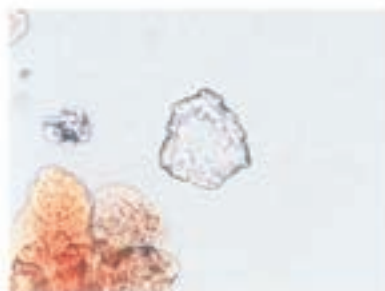
ウシクサ族A



ネザサ節型



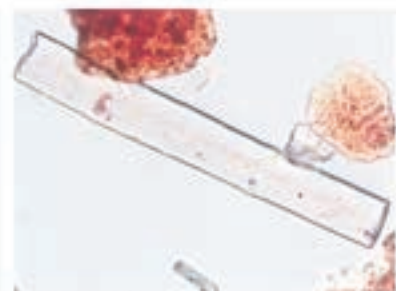
ネザサ節型



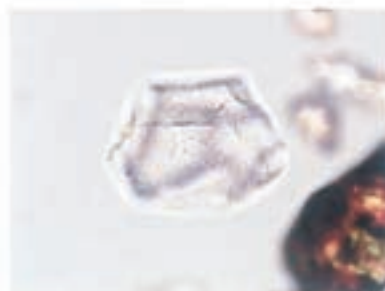
ミヤコザサ節型



表皮毛起源



棒状珪酸体



ブナ科 (シイ属)



クスノキ科



マンサク科 (イスノキ属)

— 50 μ m

II. 皆見川ノ上遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、2区の土層断面について13層（試料2）、12層（試料3）、3層（試料4）、8層（試料6）、5層（試料7）から採取された計5点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1) 試料から1cm³を秤量

2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎

3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す

6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理

7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（—）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉18、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉21、シダ植物孢子2形態の計44である。また、寄生虫卵2分類群が検出された。分析結果を表2に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、ヤナギ属、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属ーアサダ、クリ、シイ属ーマテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属ームクノキ、モチノキ属、ブドウ属、イスノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属ーミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ノブドウ、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

〔寄生虫卵〕

鞭虫卵、不明虫卵

(2) 花粉群集の特徴

下位の13層（試料2）と12層（試料3）では、花粉が検出されなかった。3層（試料4）では、樹木花粉のシイ属ーマテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属、クリ、草本花粉のヨモギ属、アカザ科ーヒユ科、カヤツリグサ科、イネ属型が検出されたが、いずれも少量である。

8層（試料6）では、草本花粉の占める割合が約 55%、樹木花粉が約 35%、樹木・草本花粉が約 10%である。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）とヨモギ属が優勢で、カヤツリグサ科、ガマ属ーミクリ属、アカザ科ーヒユ科、オモダカ属、ミズアオイ属、ソバ属などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、シイ属ーマテバシイ属が優勢で、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、クリなどが伴われ、樹木・草本花粉のクワ科ーイラクサ科も認められた。また、寄生虫卵の鞭虫卵、不明虫卵が少量検出された。

5層（試料7）では、樹木花粉のクマシデ属ーアサダ、シイ属ーマテバシイ属、クリ、コナラ属コナラ亜属、草本花粉のイネ属型、イネ科、ヨモギ属、樹木・草本花粉のクワ科ーイラクサ科、マメ科が検出されたが、いずれも少量である。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉分析の結果、10～12世紀とされるSX25-3層ではイネ属型やソバ属が検出され、オモダカ属、ミズアオイ属などの水田雑草も認められることから、調査地点もしくはその近辺で水田稲作をはじめソバの栽培も行われていたと考えられる。また、周辺の比較的乾燥したところにはイネ科、ヨモギ属、アカザ科ーヒユ科などの草本類が生育し、遺跡周辺にはコナラ属アカガシ亜属、シイ属ーマテバシイ属などの照葉樹をはじめ、マツ属複維管束亜属（クロマツ、アカマツ）、コナラ属コナラ亜属、

クワなども分布していたと推定される。同層では寄生虫卵の鞭虫卵が検出されたが、低密度であることから、集落周辺などの人為環境における通常的生活汚染に由来するものと考えられる。鞭虫は中間宿主を必要とせず、糞便とともに排泄された寄生虫卵が付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。

古墳時代とされる3層および5層では、花粉密度が低いことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、イネ属型が検出されることから、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

下位の13層と12層では、花粉が検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、土層の堆積速度が速かったこと、および水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262．

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p．

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110．

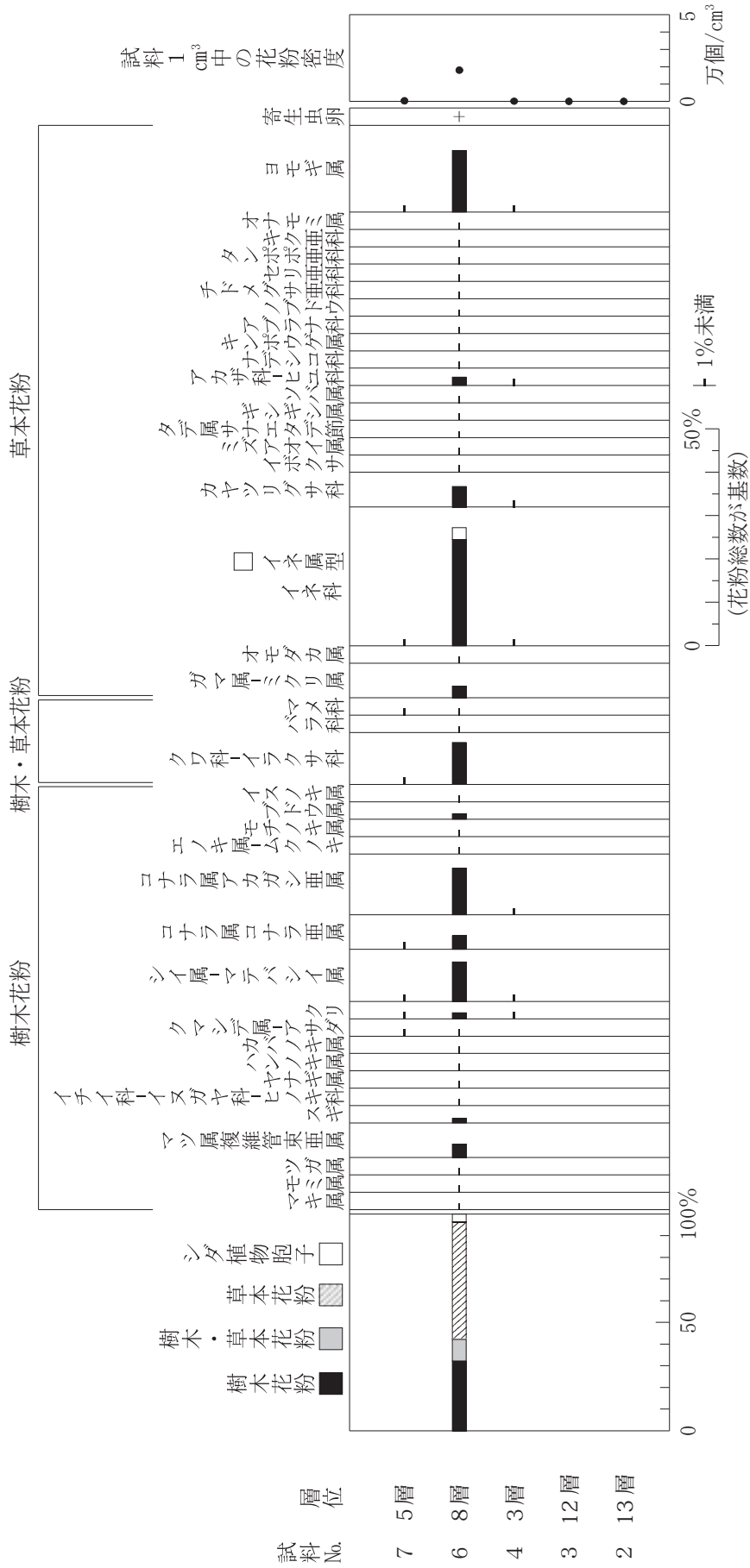
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として．第四紀研究，13,p.187-193．

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30．

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p．

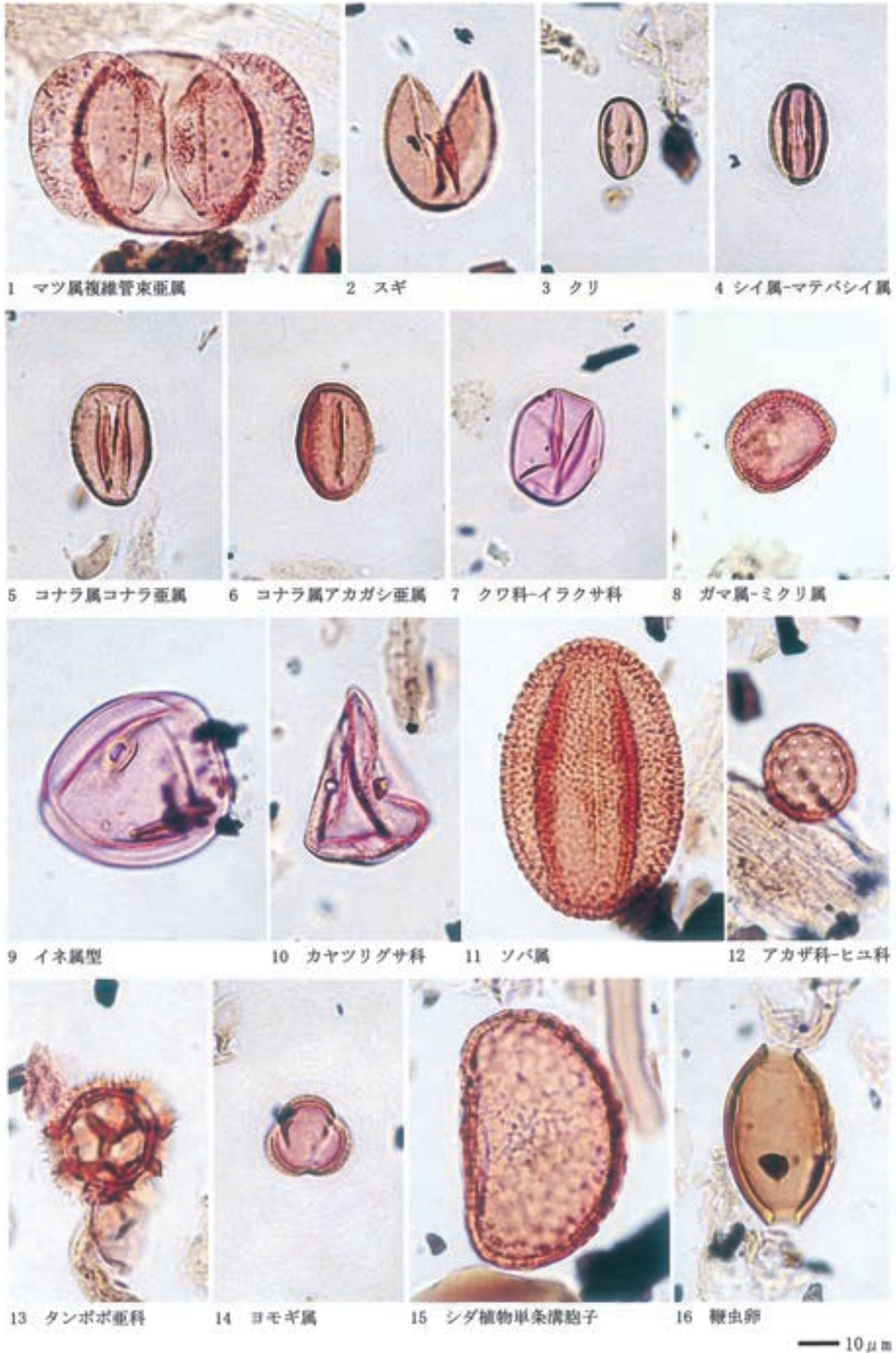
表5 皆見川ノ上遺跡における花粉分析結果

分類群		13層	12層	3層	8層	5層
学名	和名	2	3	4	6	7
Arboreal pollen	樹木花粉					
<i>Podocarpus</i>	マキ属				1	
<i>Abies</i>	モミ属				4	
<i>Tsuga</i>	ツガ属				1	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属				16	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ				5	
Taxaceae-Cephalotaxaceae -Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科 -ヒノキ科				3	
<i>Salix</i>	ヤナギ属				2	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属				1	
<i>Betula</i>	カバノキ属				1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ				1	2
<i>Castanea crenata</i>	クリ			1	7	1
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属-マテバシイ属			2	47	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属				16	1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属			2	55	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ				4	
<i>Ilex</i>	モチノキ属				1	
<i>Vitis</i>	ブドウ属				6	
<i>Distylium</i>	イスノキ属				1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科				50	18
Rosaceae	バラ科				1	
Leguminosae	マメ科				2	1
Nonarboreal pollen	草本花粉					
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属				14	
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属				4	
Gramineae	イネ科				126	2
<i>Oryza type</i>	イネ属型			1	14	3
Cyperaceae	カヤツリグサ科			2	24	
<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ				2	
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属				1	
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節				2	
<i>Rumex</i>	ギシギシ属				1	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属				1	
Chenopodiaceae -Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科			3	10	
Caryophyllaceae	ナデシコ科				1	
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属				1	
Cruciferae	アブラナ科				3	
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ				3	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科				2	
Apioideae	セリ亜科				1	
Lactucoideae	タンポポ亜科				2	
Asteroideae	キク亜科				3	
<i>Xanthium</i>	オナモミ属				1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属			5	73	1
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子		1		9	
Trilate type spore	三条溝胞子				10	1
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	5	172	6
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	53	19
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	11	289	6
Total pollen	花粉総数	0	0	16	514	31
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の花粉密度	0.0	0.0	1.4	1.8	3.6
				× 10 ²	× 10 ⁴	× 10 ²
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	2	11	2
Fern spore	シダ植物胞子	0	1	0	19	1
Helminth eggs	寄生虫卵					
<i>Trichuris(trichiura)</i>	鞭虫卵				1	
Unknown eggs	不明虫卵				1	
Total	計	0	0	0	2	0
Helminth eggs	試料 1cm ³ 中の	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0
frequencies of 1cm ³	寄生虫卵密度				× 10	
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)



第36図 皆見川ノ上遺跡における花粉ダイアグラム

第37図 皆見川ノ上遺跡の花粉・孢子・寄生虫卵





1. 皆見川ノ上遺跡2区
全景（真上から）



2. 皆見川ノ上遺跡3区
全景（真上から）



1. 皆見川ノ上遺跡 1 区
全景（南東から）



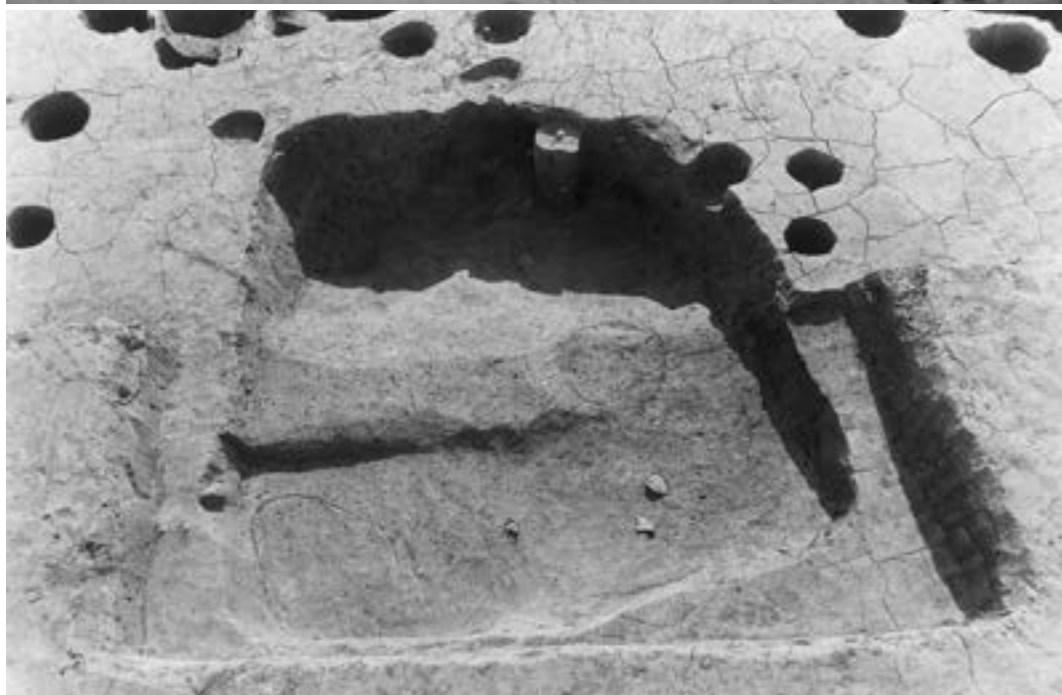
2. 皆見川ノ上遺跡 2 区
全景（南東から）



3. 皆見川ノ上遺跡 3 区
全景（南東から）



1. 1～3号竪穴住居跡
(南西から)



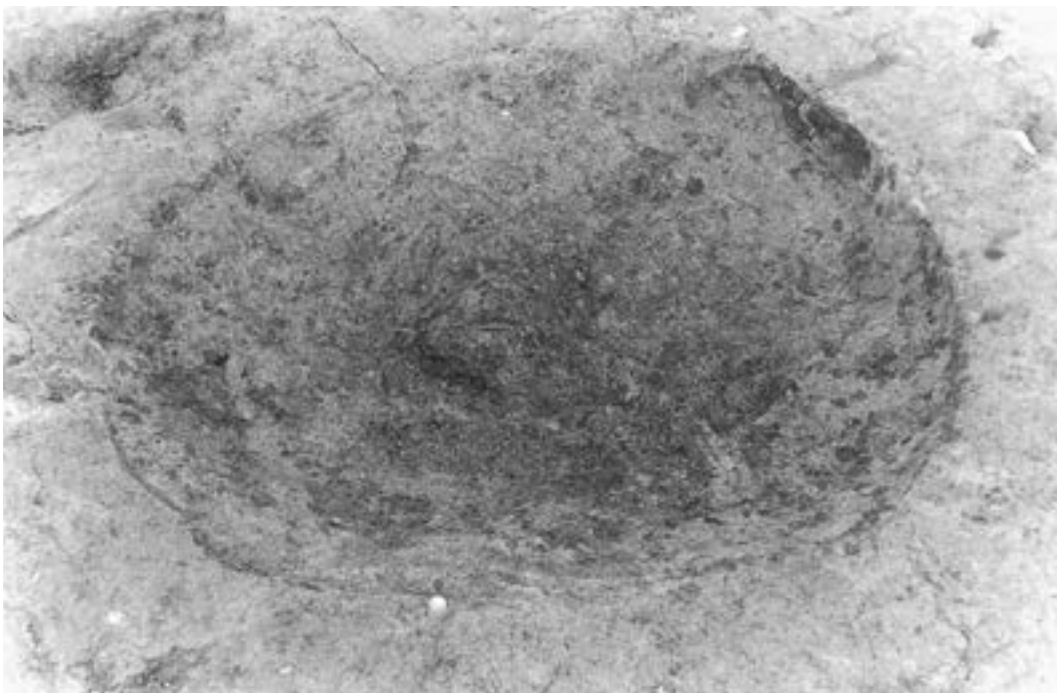
2. 1号竪穴住居跡完掘
(北東から)



3. 2・3号竪穴住居跡
(西から)



1. 1号土坑（北から）



2. 2号土坑（東から）



3. 3号土坑（北東から）



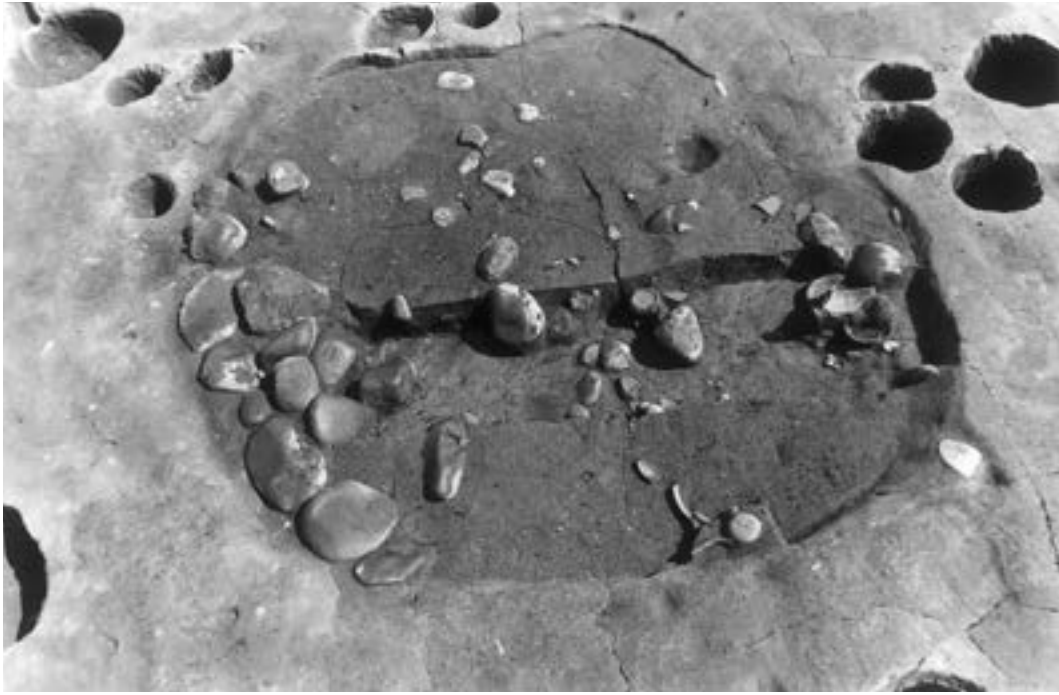
1. 7号土坑（南から）



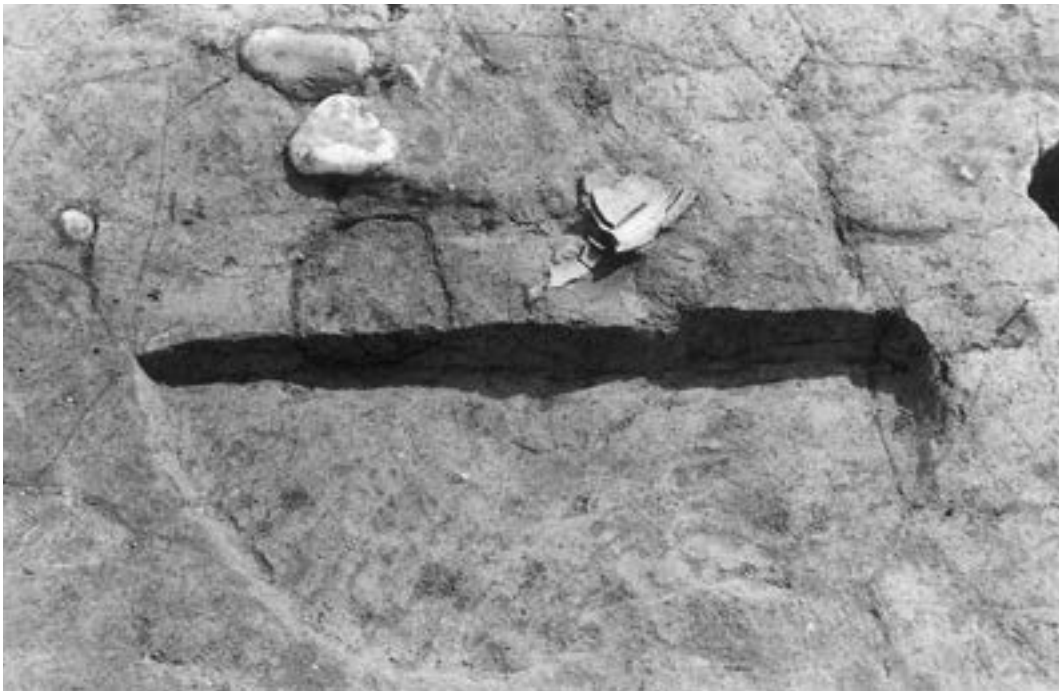
2. 9号土坑（南から）



3. 10号土坑（南東から）



1.11号土坑（南から）



2.12号土坑（南から）



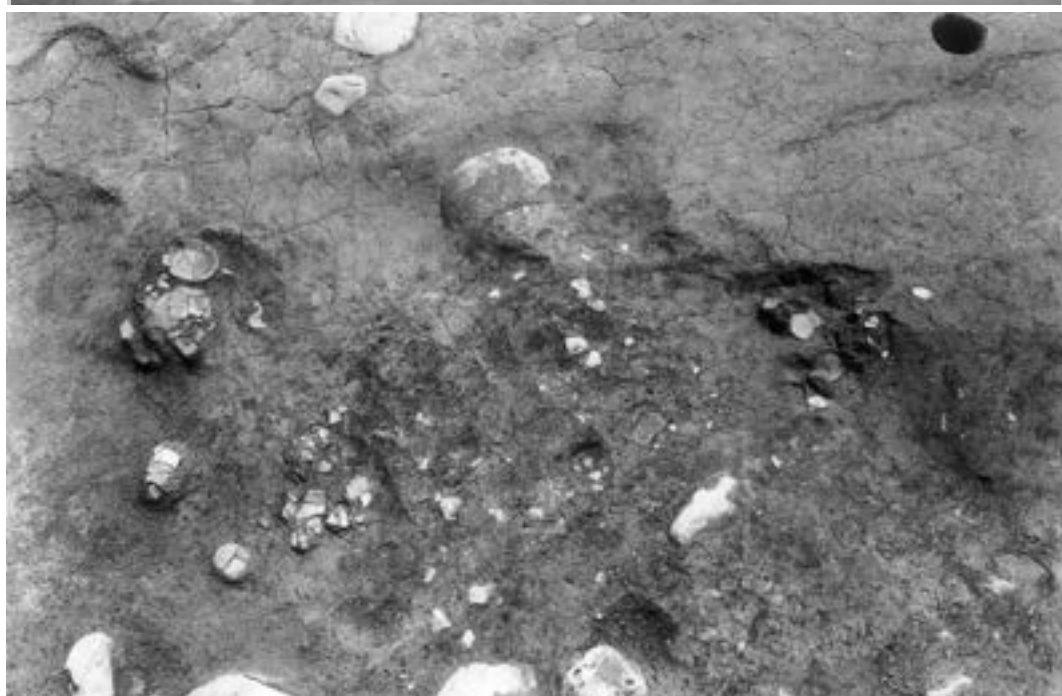
3.13号土坑（南から）



1. 水田（南西から）



2. 水田土層（南西から）



3. 土器出土状況
（西から）



1. 水口状遺構（西から）



2. 水口状遺構（北から）



3. 水口状遺構（北から）

1. 3号溝状遺構土器
出土状況（南東から）



2. 4号溝状遺構木製品
出土状況（北から）



3. 9号不明遺構（北から）





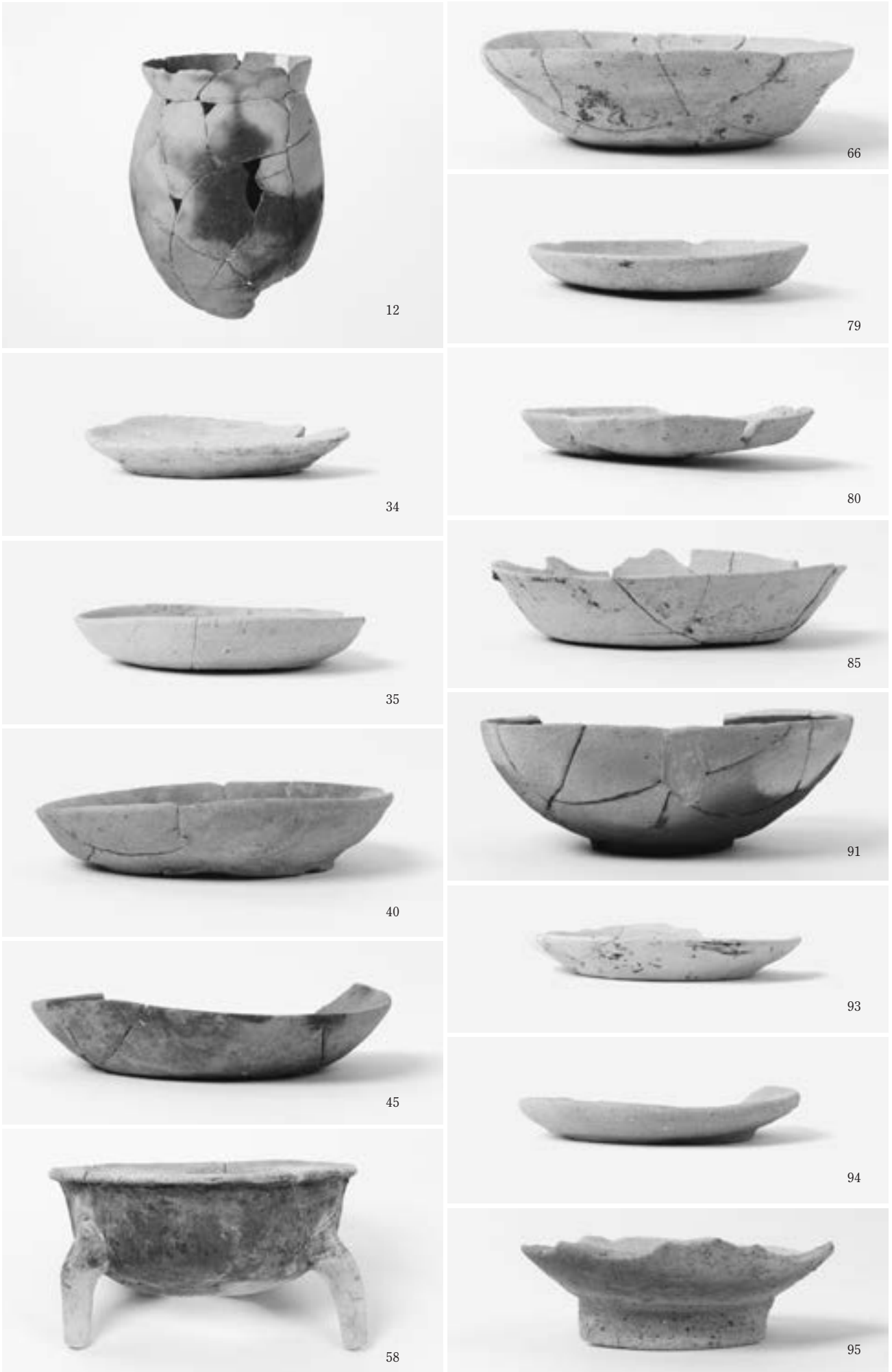
1. 13号不明遺構（南から）



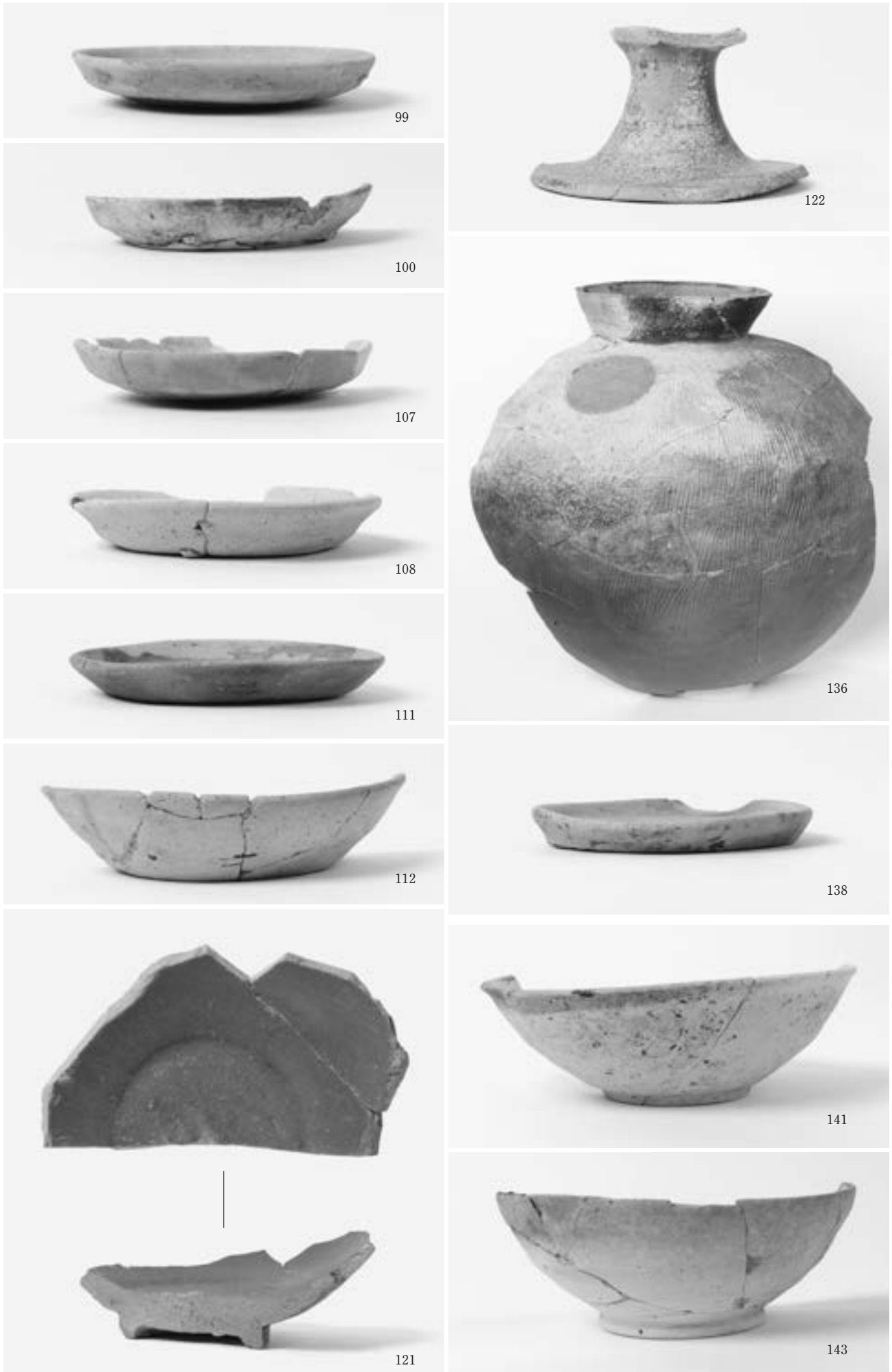
2. 18号不明遺構（西から）



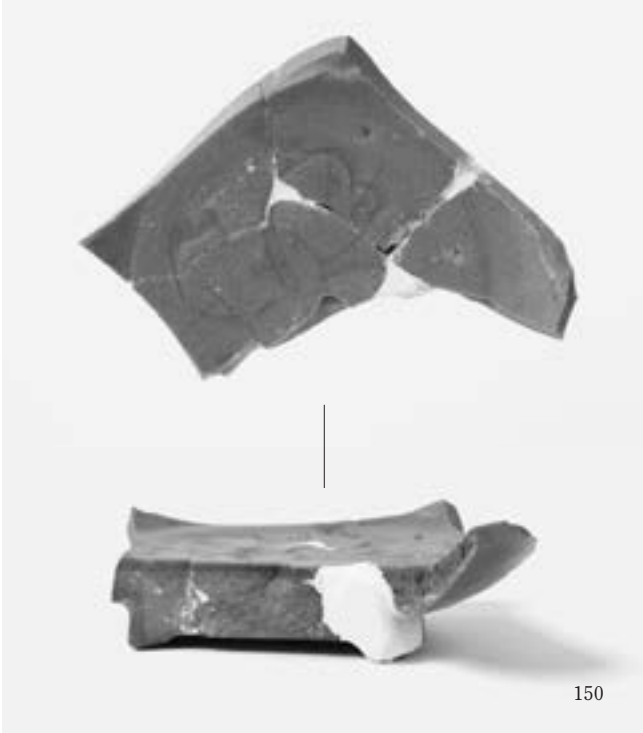
3. P103・104
検出状況（北東から）



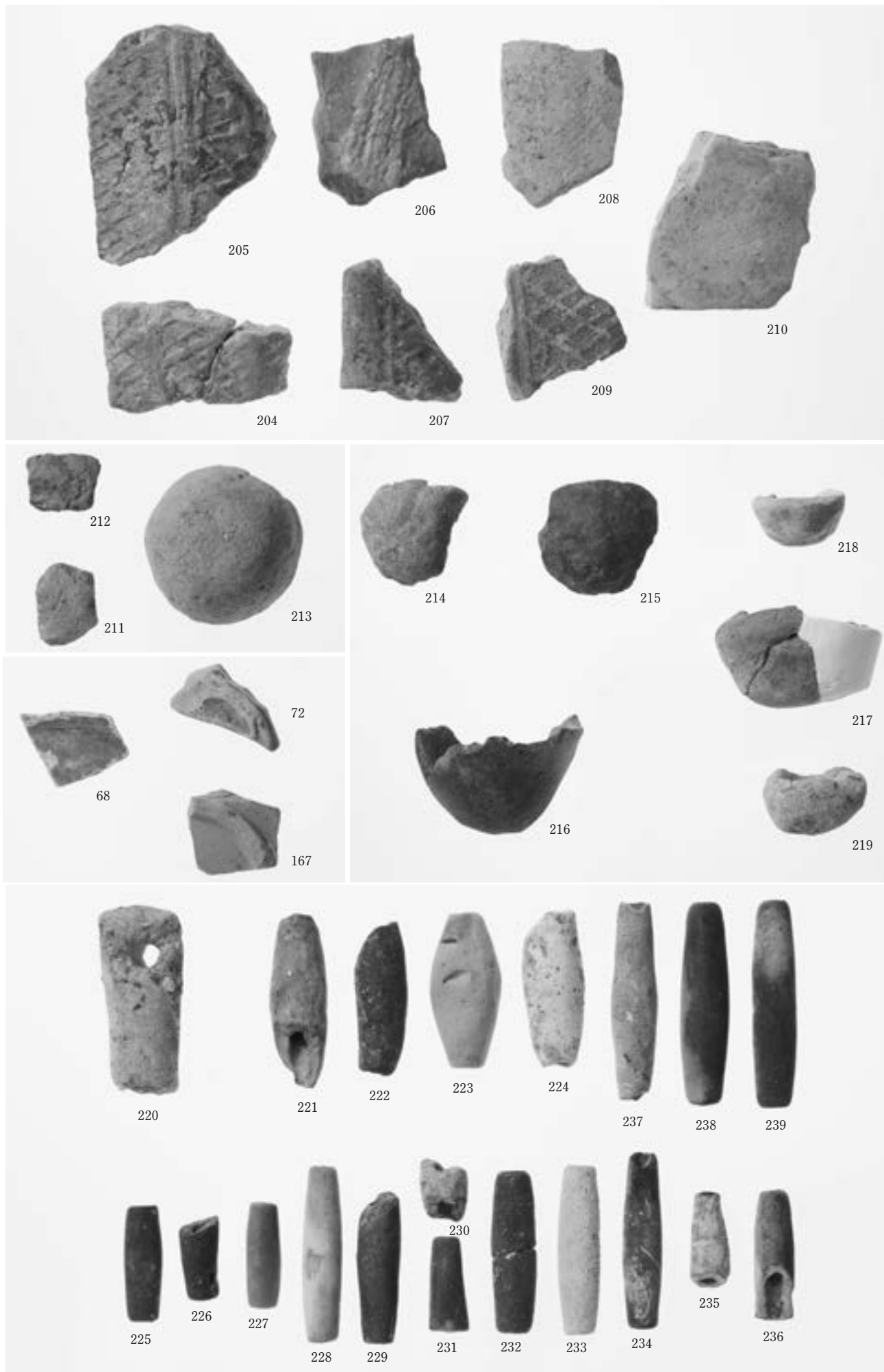
皆見川ノ上遺跡 出土土器 1



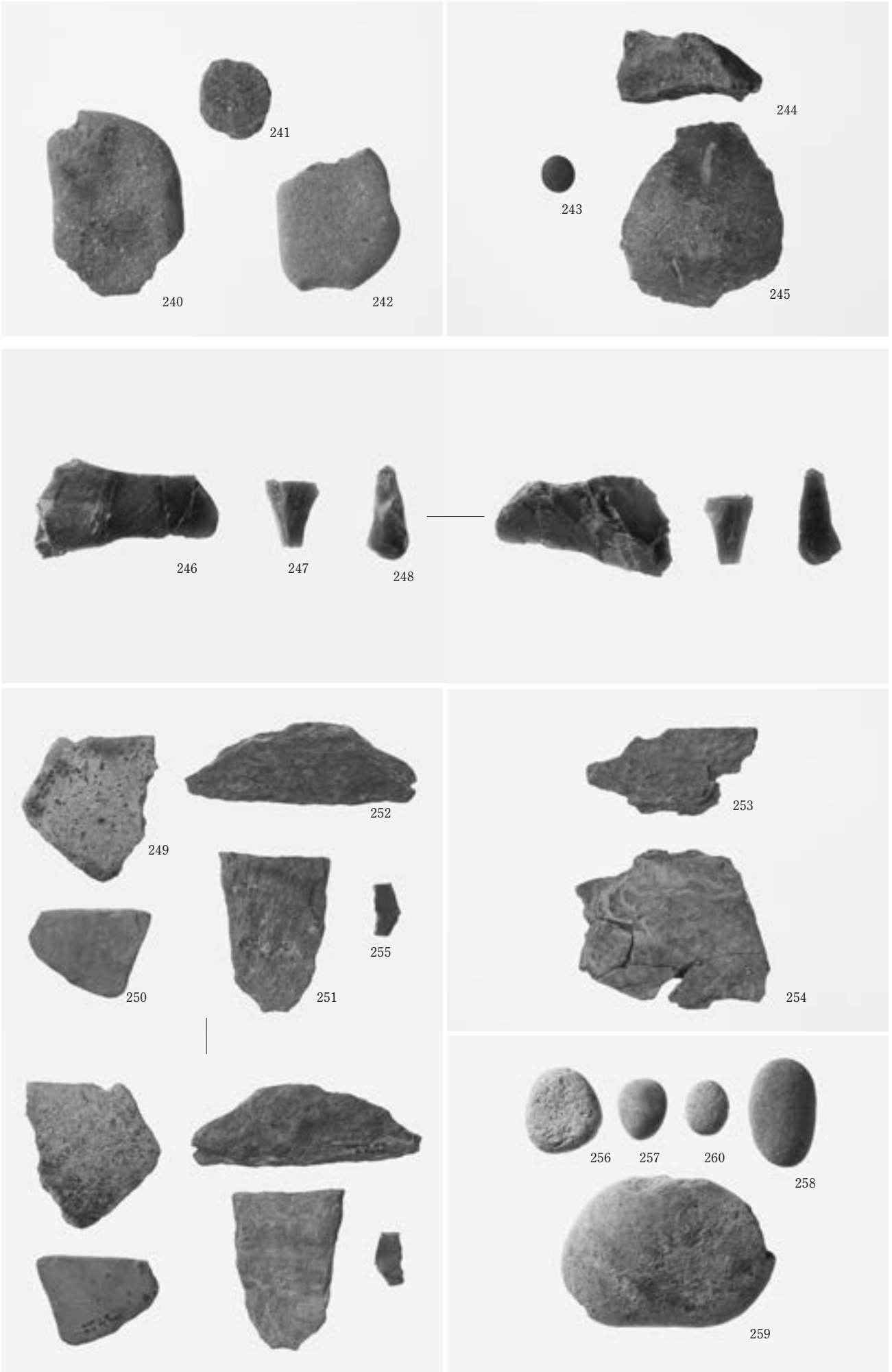
皆見川ノ上遺跡 出土土器 2



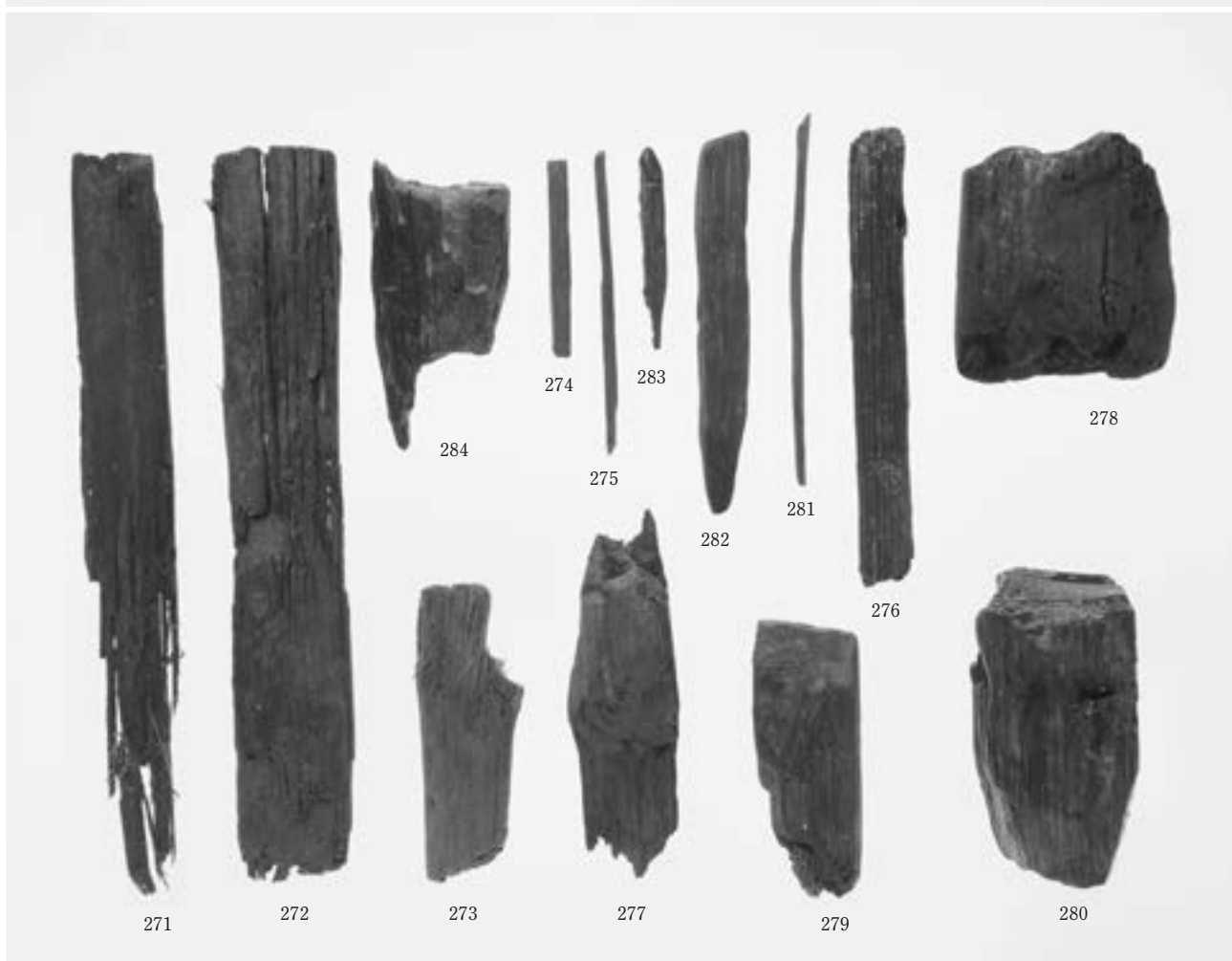
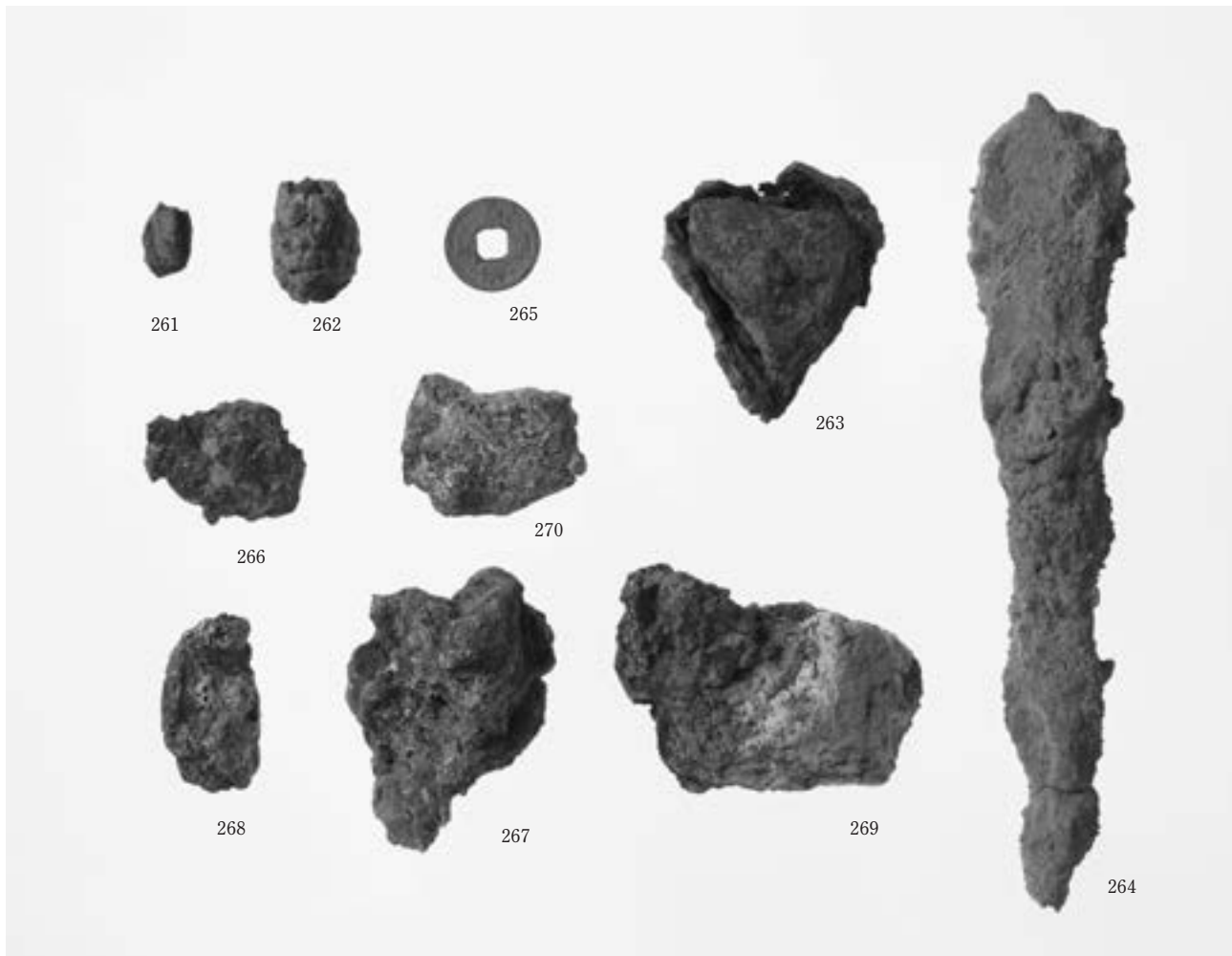
皆見川ノ上遺跡 出土土器 3



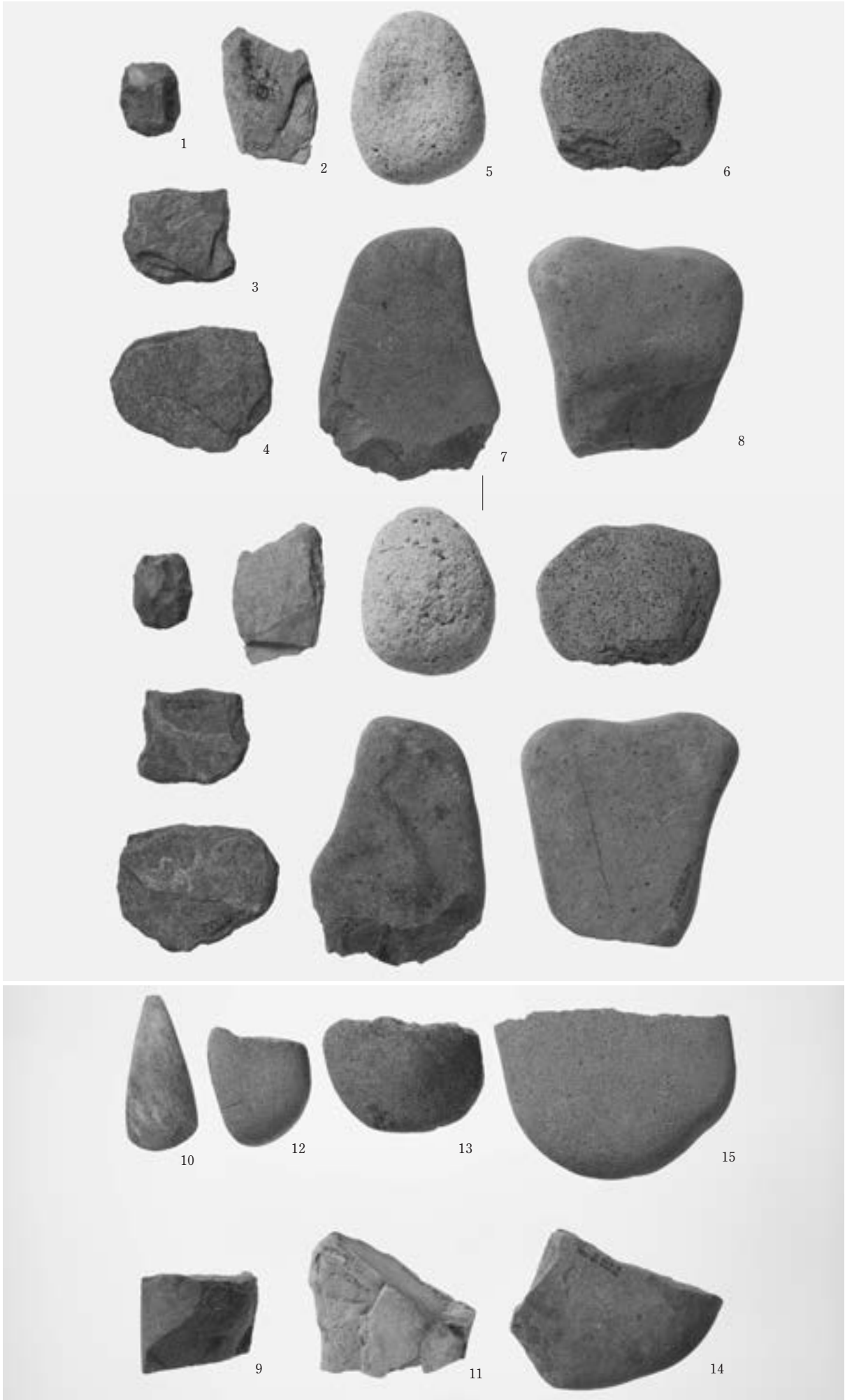
皆見川ノ上遺跡 瓦・製塩土器・緑釉陶器・土製品



皆見川ノ上遺跡 石器・石製品



皆見川ノ上遺跡 金属製品・木製品



草場角名遺跡 石器



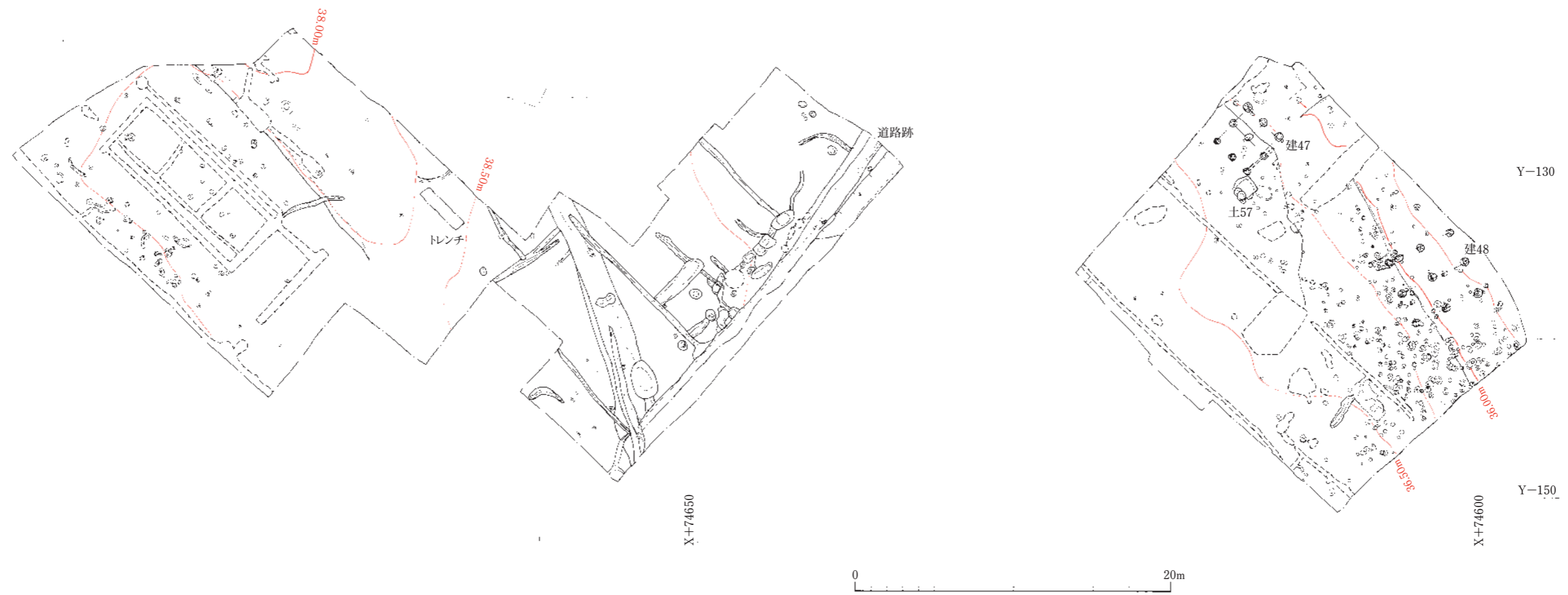
カワラケ田遺跡 2 次調査



第 38 図 カワラケ田遺跡2次調査Ⅲ-2区全体図 (1/ 100)



第 39 図 カワラケ田遺跡2次調査V区全体図 (1/ 300)



第 40 図 カワラケ田遺跡2次調査VI区全体図 (1/ 300)

Ⅳ カワラケ田遺跡2次調査（Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区）

1. 調査の概要

今回、報告するカワラケ田遺跡2次調査は、平成20年7月28～30日、平成21年1月8日、6月23日、平成22年1月26日の確認調査との結果により、

Ⅲ-1区 下原598、Ⅲ-2区 下原413、414、Ⅲ-3区 下原599-1・2

Ⅴ区 皆見955-1・4・5、956-1、957-1、958-1、

Ⅵ-1区 皆見1129-1・2、1130-1・2、1131、

Ⅵ-2区 下原407-1の一部、計約7000㎡を調査対象地とした。

まず北側のⅠ・Ⅱ区（平成23年度報告済み）と東西に走る道路を挟んで南側の地区をⅢ区とした。さらにⅢ区は南北の道路によっていくつも区切られていたので、その区画ごとに枝番号をつけ、西側の田地部分をⅢ-1区、東側の宅地跡部分をⅢ-2区、そしてⅢ-1と2区の間をⅢ-3区とした。

Ⅲ-1区は確認調査により、道路跡などの遺構が確認されたことから平成20年12月17日から調査に着手した。まず人力でトレンチを入れて確認した所、北西側は遺構の存在を確認できなかったが、北東側では遺構を検出した。さらに、南側では表土下0.5m程まで圃場整備による地山の土が埋められていたが、下部から道路跡の埋土である灰褐色土の広がりを認められた。そのため、平成21年1月7日からバックホーを搬入し、表土の掘削を開始し、灰褐色土が帯状に認められた古代の道路跡と、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡3軒、土坑4基を検出した。

調査前、宅地であったⅢ-2区はⅢ-1区の表土剥ぎ終了後に、バックホーによる掘削を行った。その結果、調査区の南側では遺構を検出しなかったが、北側はⅢ-1区で検出された道路跡の続きを確認した。

このⅢ-1区の調査で検出された古代の道路跡については、平成21年3月5日に記者発表を行った。同月7日には現地にて説明会を開始し、地元住民を中心に150名ほどの参加を得た。

さらに、平成21年9月15日には、NHK - BS2 による「謎の古代道を追え」の撮影も行われた。（同年10月12日に放映）

Ⅲ-3区ではⅢ-1・2区での調査結果から、古代の道路跡がこの部分に遺存することが判明していたので、平成22年7月1日にバックホーを入れて調査を開始した。バックホーによる表土の掘削の結果、ここも圃場整備の影響を受けてはいたが、南東側の一段高い部分で竪穴住居跡2軒、土坑1基を検出し、Ⅲ-1区と2区とを結ぶ道路跡をここでも確認できた。Ⅲ区はⅢ-3区を最後に平成22年12月27日で調査を終了した。



現地説明会の風景

椎田道路に接するV区は、椎田道路建設に伴う発掘調査により、周辺では皆見遺跡・カワラケ田遺跡の調査が行われ、古代～中世の集落跡が検出されていた。確認調査の結果を踏まえて、22年1月6日から調査を開始した。まず北側の約2/3から調査をし、掘立柱建物跡10棟、それに付随する柵列1条、竪穴住居跡2軒、土坑16基、溝6条を検出した。その後、公民館の撤去後に平成23年1月以降に残り1/3の調査を行い、ここでも掘立柱建物跡3棟、それに付随する柵2列、土坑2基を検出した。V区は平成23年2月28日は調査を終了した。

VI区はⅢ-2区のさらに東側に位置し、道路を挟んで北側の宅地跡をVI-1区、南側の田地部分をVI-2区として調査を平成21年4月9日から開始した。VI-1区は周囲より数m高い位置にあるので、圃場整備の影響は少ないと思われたが、他地区同様に削平されていた。主たる遺構はなかったが、Ⅲ-2区の延長上に位置していたことから、古代の道路跡の一部とピットを検出した。VI-2区は圃場整備の影響を受けていたが、表土、圃場整備時の盛土、旧耕作土下の橙色土（遺構面）からは掘立柱建物跡2棟、土坑1基、ピット多数を検出した。VI区は平成22年9月2日に調査地を埋め戻して終了した。

今回の調査では、各調査区ごとに若干の違いがあるが、基本的には表土（耕作土）、圃場整備時の盛土、その下から遺構面である橙色土を確認し、掘立柱建物跡13棟、竪穴住居跡7軒、土坑23基、溝6条、ピット多数と古代の道路跡を確認した。

なお、参考に挙げるが平成23年度のI・II区の報告では7世紀～8世紀の集落跡を検出し、掘立柱建物跡36棟、竪穴住居跡3軒、土坑20基、溝4条、近世墓45基を報告した。

最後に今回報告する古代の道路跡については、長崎外国語大学の木本雅康先生と筑紫野市教育委員会小鹿野亮氏に現地にて指導を得た。また古代の道路跡の土壌については、佐賀大学名誉教授林重徳先生に平成22年11月8日に現地にて指導を仰ぎ、林先生のご助言により佐賀大学低平地研究センターの末次大輔先生に土壌の科学的分析を行って頂いた。（その分析結果についてはP152に記載。）



カワラケ田遺跡2次調査地の周辺（真上から）

2. 掘立柱建物跡（図版22・23、第41～52図）

掘立柱建物跡は、Ⅲ-1区で1棟（32号）、V区で13棟（33～46号）、VI区で2棟（47・48号）の16棟を検出したⅢ・V区ともに標高35m～38mの丘陵のやや緩斜面に位置する。検出した建物跡は、2×2、2×3、2×4、2×5、3×4間の掘立柱建物跡を確認し、掘り方の大部分は円形で、一部のみ隅丸方形であった。概ね掘立柱建物跡の時期は、出土遺物から7世紀～8世紀の時期が考えられる。なお、調査中に掘立柱建物跡と誤認して付けた38・40・41・43号の掘立柱建物跡は欠番とした。カワラケ田遺跡2次調査で検出した他の建物は、1～29号I区（報告済）、50～55号はII区（報告済）、30・31号はIV区（未報告）である。

32号掘立柱建物跡（図版22、第41図）

Ⅲ-1区で唯一確認できた2×4間の建物である。調査区北側で検出したため、全ての柱穴を確認できなかった。建物方向はN-18°-Eであり、古代の道路跡の近くで検出した。柱穴間距離は南北方向で2.3～2.5m、東西方向で2.4、2.5mを測る。柱穴は円形で径0.25～0.6m、深さ0.15～0.7mを測り、一部の柱穴からは柱痕跡を確認できた。出土遺物はなかったが1・2号竪穴住居跡を切るため、掘立柱建物の時期は7世紀前半以降の可能性はある。

以下、V区で検出した掘立柱建物跡である。

33号掘立柱建物跡（図版22、第42図）

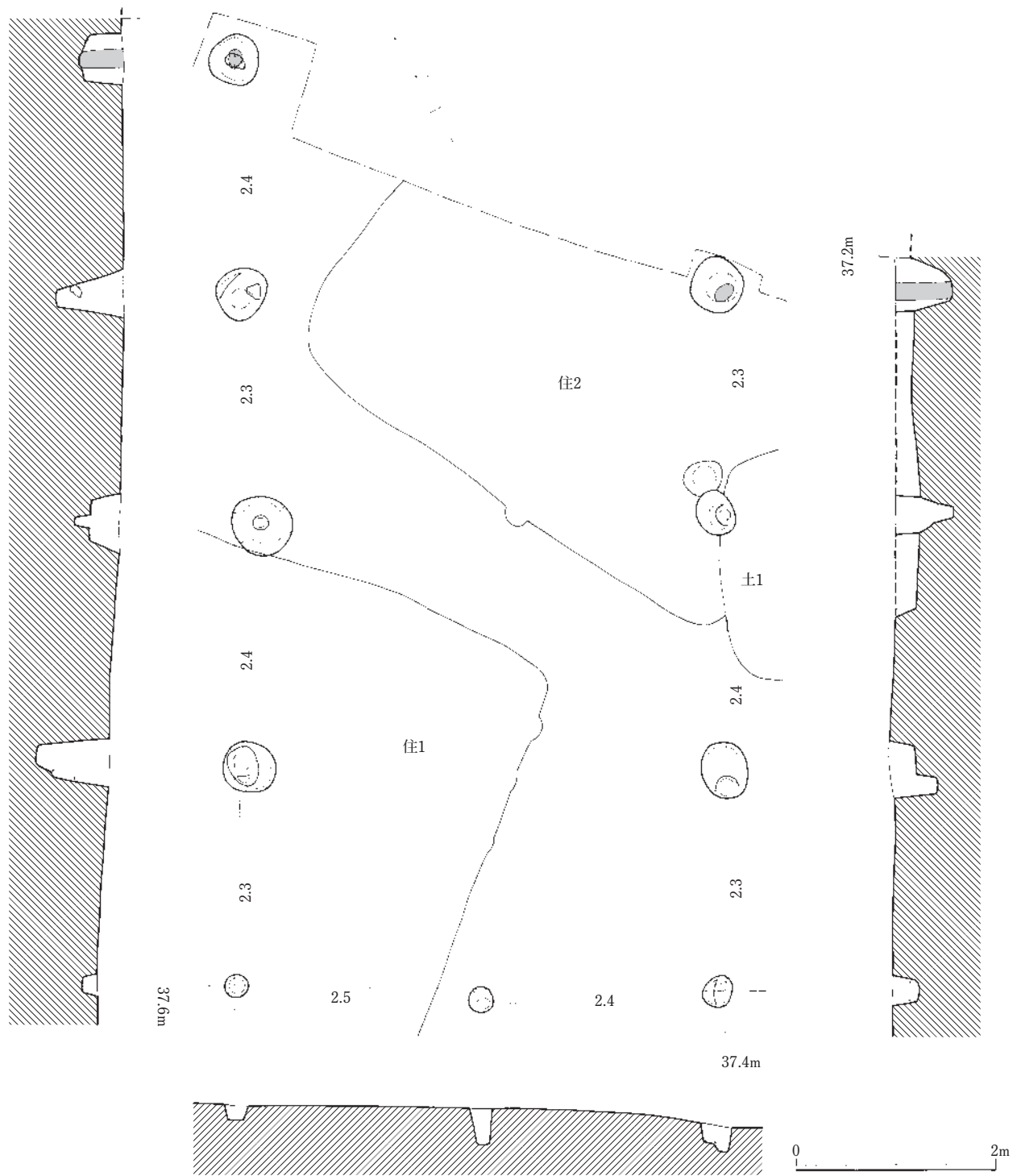
V区の調査区南側で検出した2×5間の建物である。南側の一部の柱穴の上面は16号溝で削られている。建物方向はN-13°-Eで、柱穴間距離は南北方向で1.8～2.5m、東西方向で2.7～2.8mを測る。柱穴は円形又はやや隅丸方形に近い形状のものもあり、径0.3～0.8m、深さ0.35～0.8mを測る。ほとんどの柱穴で、径約0.2mの柱痕跡を確認できた。遺物は少量であるがいくつかの柱穴から出土した。掘立柱建物の時期は、出土土器から7世紀以降と考えられる。他にも遺物が出土したが、図化できるものはなかった。

出土土器（第45図）

1は須恵器無蓋高坏の坏部片か。脚部との接合面で欠損する。復元口径で13.4cmを測る。2は土師器鉢片である。頸部付近で外側に大きく開く。調整は外面にミガキを施す。復元口径22.0cmを測る。

34号掘立柱建物跡（図版22、第43図）

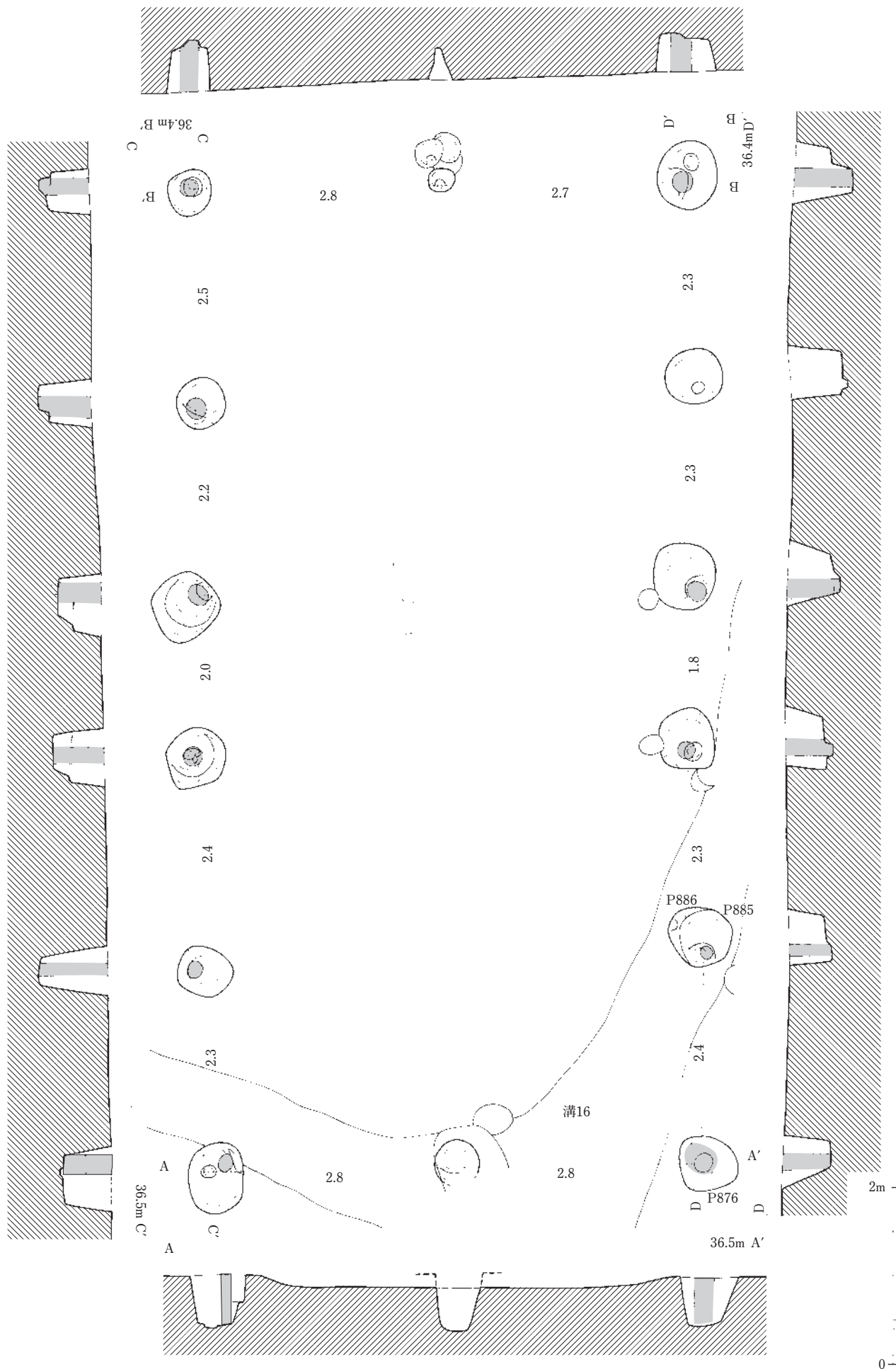
33号掘立柱建物跡の北側で検出した3×4間の建物である。建物方向はN-12°-Eで、柱穴間距離は南北方向で1.2～2.5m、東西方向で1.5～1.8mを測る。ほとんどの柱穴は円形であるが、一部の柱穴は隅丸方形で、長さ及び径0.55～0.95m、深さ0.4～0.65mを測る。全ての柱穴で径0.2m前後の柱痕跡を確認できた。掘立柱建物の時期は、出土した須恵器坏蓋や埴片から8世紀中頃以降と考えられる。



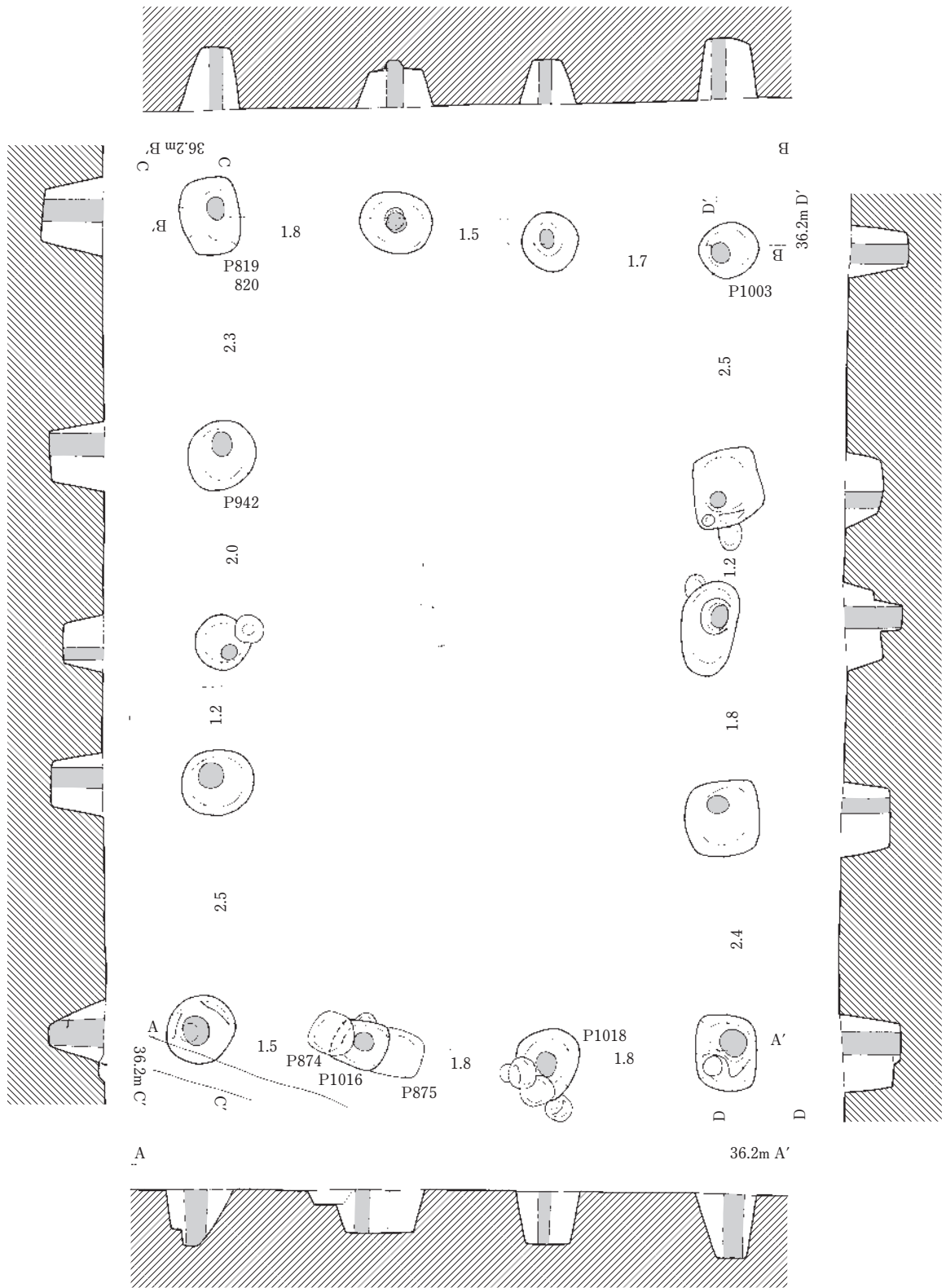
第41図 32号掘立柱建物跡実測図 (1/ 60)

34号掘立柱建物跡出土土器 (図版42、第45図)

3～6は須恵器である。3と4は口縁端部が嘴状になるが、4はやや丸みを帯びる。5は垠片で復元高台径9.0cmを測り、底部と高台との接地部分には段ができる。6は短頸壺の口縁～体部上半片で、復元口径で5.5cmと狭い。全体的に薄手に作られる。7は摩滅している土師器坏片である。8は土師器甕片である。頸部から口縁にかけて外湾しながら外側に開く。調整は外面に刷毛目、内面には刷毛目とナデを施す。



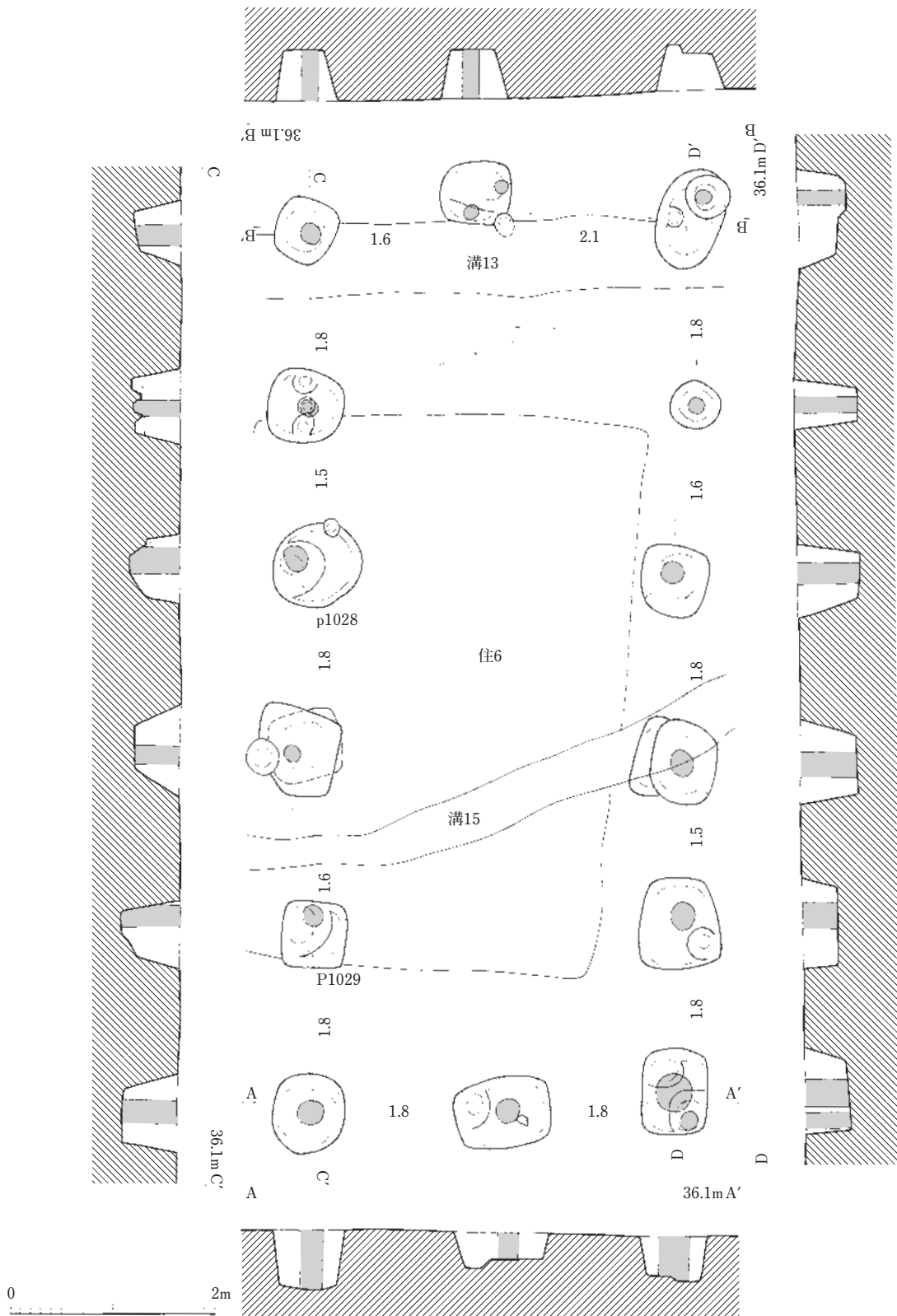
第42图 33号掘立柱建物跡実测图 (1/ 60)



第43図 34号掘立柱建物跡実測図 (1/ 60)

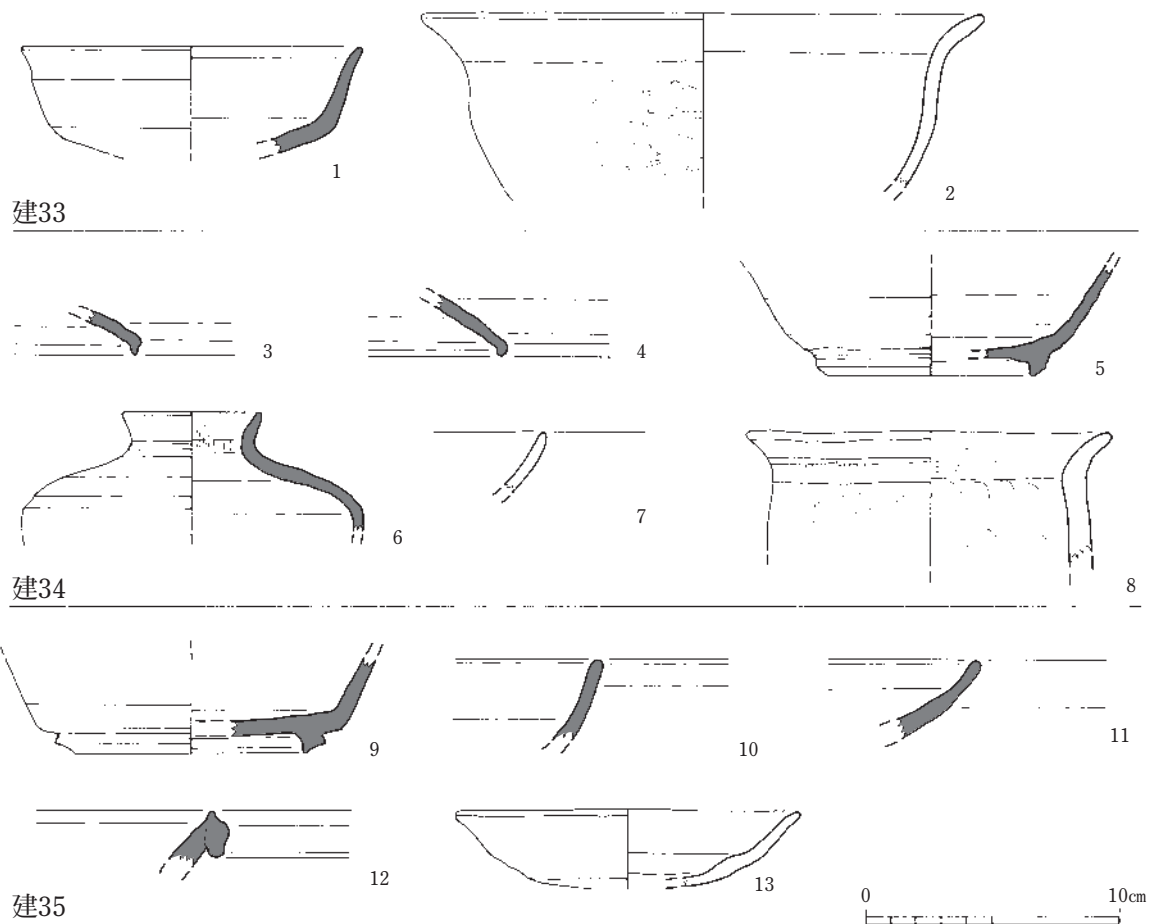
35号掘立柱建物跡 (図版22、第44図)

34号掘立柱建物跡の北側で6号竪穴住居跡を切る形で検出した2×5間の建物で、33号建物とは建物方向90°に振れて建てられている。建物方向はN-72°-Wで、柱穴間距離は南北方向で



第44図 35号掘立柱建物跡実測図 (1/ 60)

1.6～2.1m、東西方向で1.5～1.8mを測る。いくつかの円形の柱穴以外は隅丸方形で、長さ0.5～1.0m、深さ0.35～0.6mを測る。全ての柱穴で径0.15～0.35mの柱痕跡を確認できたが、切り合いのある柱穴や柱穴底面で柱痕跡が確認できることから同地点での建て替えが行われた可能



第45図 33～35号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/ 3)

性がある。掘立柱建物の時期は、出土した須恵器坏蓋や碗片から8世紀中頃以降と考えられる。

35号掘立柱建物跡出土土器 (図版42、第45図)

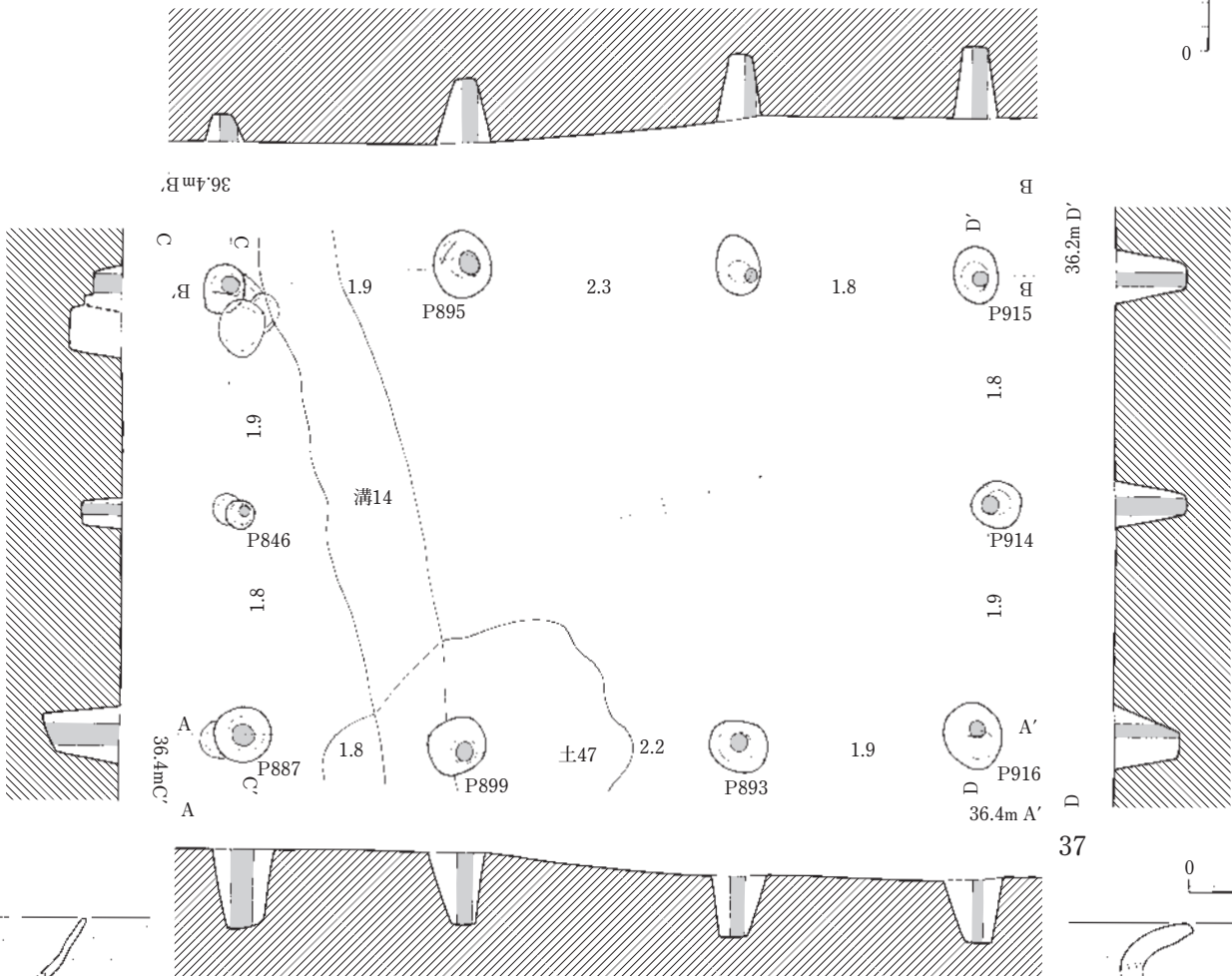
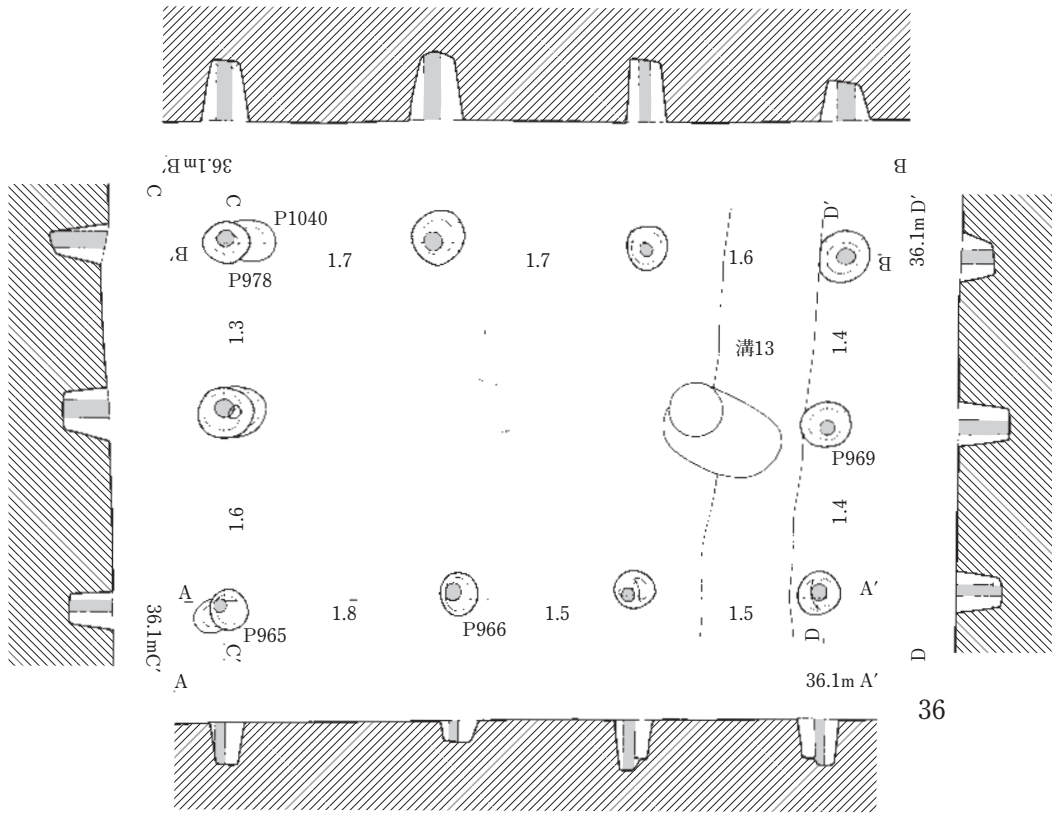
9～12は須恵器である。9と10は碗片である。9は全体的に角張った作りである。11は皿の口縁部片か。内外面に丁寧な回転横ナデを施す。12は甕の口縁部片か。13は土師器の坏片である。内面の体部中程で段が付く。調整は内外面とも摩滅していて不明である。復元口径13.6cmを測る。

36号掘立柱建物跡 (第46図)

35号掘立柱建物跡と一部が重なるように検出した2×3間の建物である。これも35号同様に他とは建物方向が異なる。建物方向はN-78°-Wで、柱穴間距離は南北方向で1.3～1.6m、東西方向で1.5～1.8mを測る。柱穴は円形で径0.3～0.45m、深さ0.15～0.55mを測る。ここでも、全ての柱穴からは径0.15m前後の柱痕跡を確認できた。土師器片や須恵器片を出土したが、図化できなかった。掘立柱建物の時期は、35号建物よりも後出すると考えられ8世紀後半～9世紀頃か。

37号掘立柱建物跡 (第46図)

調査区西側で42号掘立柱建物跡と重なるように検出した2×3間の建物である。建物方向はN-17°-Eで、柱穴間距離は南北方向1.8～2.3mで、東西方向で1.8～1.9mを測る。柱穴は円形で径0.25～0.55m、深さ0.2～0.65mを測る。ここも全ての柱穴には、径0.15m前後の柱痕跡を



第46図 36・37号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/ 60、1/ 3)

確認できた。図化できる出土遺物は少ないが、出土した土師器片からは8世紀頃か。

37号掘立柱建物跡出土土器（第46図）

14は土師器坏片である。内外面ともに段がつき、断面の厚さ数mmと薄手に作られる。15は土師器甕の口縁部片である。頸部が逆「L」字形になるタイプか。

39号掘立柱建物跡（第47図）

37号掘立柱建物跡のすぐ南東側で検出したV区で唯一の2×3間の総柱建物である。東側には柵列も伴っている。建物方向はN-24°-Eで、柱穴間距離は南北方向で2.2~2.5m、東西方向で1.8~1.9mを測る。柱穴は円形で径0.15~0.45m、深さ0.25~0.75mを測る。ここも柱穴には、全ての柱穴で径0.15m前後の柱痕跡を確認できた。図化できる出土遺物から掘立柱建物の時期は、8世紀頃の可能性がある。

39号掘立柱建物跡と付随したと考えられる1号柵列は、北側に延びていくほど1.7~2.6mと間隔が空く。39号掘立柱建物跡とほぼ同方向のN-64°-Eとなる。柱穴は円形で径0.25m前後、深さは一部掘りすぎの感は否めないが、0.3~0.7mを測る。柱痕跡も全てにあり、径0.1mを測る。

出土土器（第47図）

16は須恵器碗の口縁端部片である。17は土師器甕の口縁部片である。これも逆「L」字形になるタイプか。

42号掘立柱建物跡（第48図）

39号掘立柱建物跡のすぐ南東側で検出した2×3間の建物である。これも39号とほぼ同じ向きで建てられる。建物方向はN-23°-Eで、柱穴間距離は南北方向で1.6~2.7m、東西方向で1.8~2.1mを測る。柱穴は円形で径0.35~0.6m、深さ0.2~0.55mを測る。いくつかの柱穴には、径0.15m前後の柱痕跡を確認できた。土師器の細片が出土したが、図化できなかった。37・39号掘立柱建物跡に近接する時期か。

44号掘立柱建物跡（図版23、第49図）

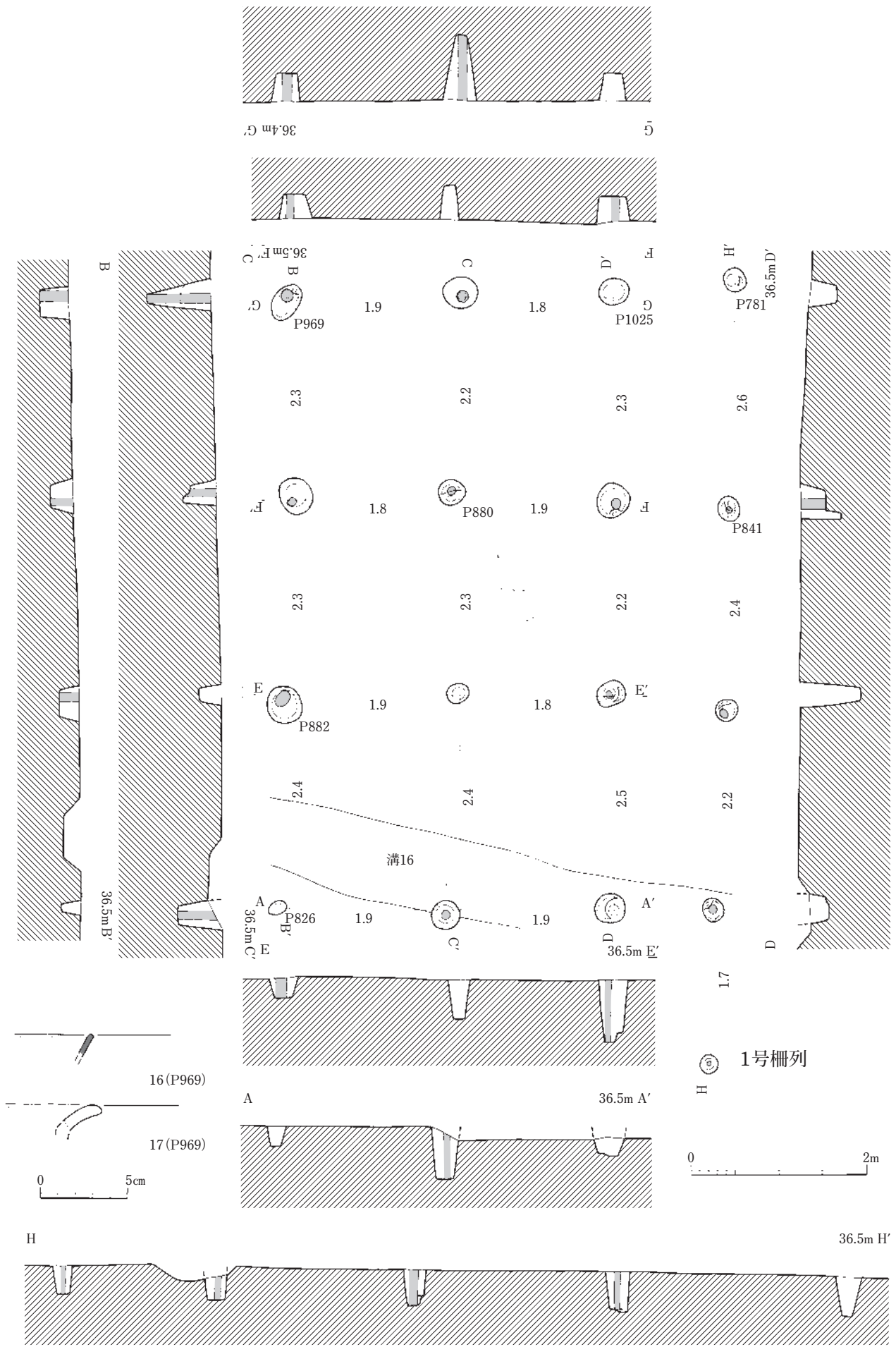
調査区南側で検出し、南側の柱穴は攪乱により消失する。周囲の建物の様子から2×3間の建物か。建物方向はN-14°-Eで、柱穴間距離は南北方向で1.6~1.8m、東西方向で1.8~1.9mを測る。柱穴は円形で径0.35~0.5m、深さ0.2~0.5mを測る。検出面では柱痕跡を確認することができなかったが、柱穴底面には柱痕跡径約0.1mを確認できた。掘立柱建物の時期は出土した土器片から8世紀頃か。

出土土器（第49図）

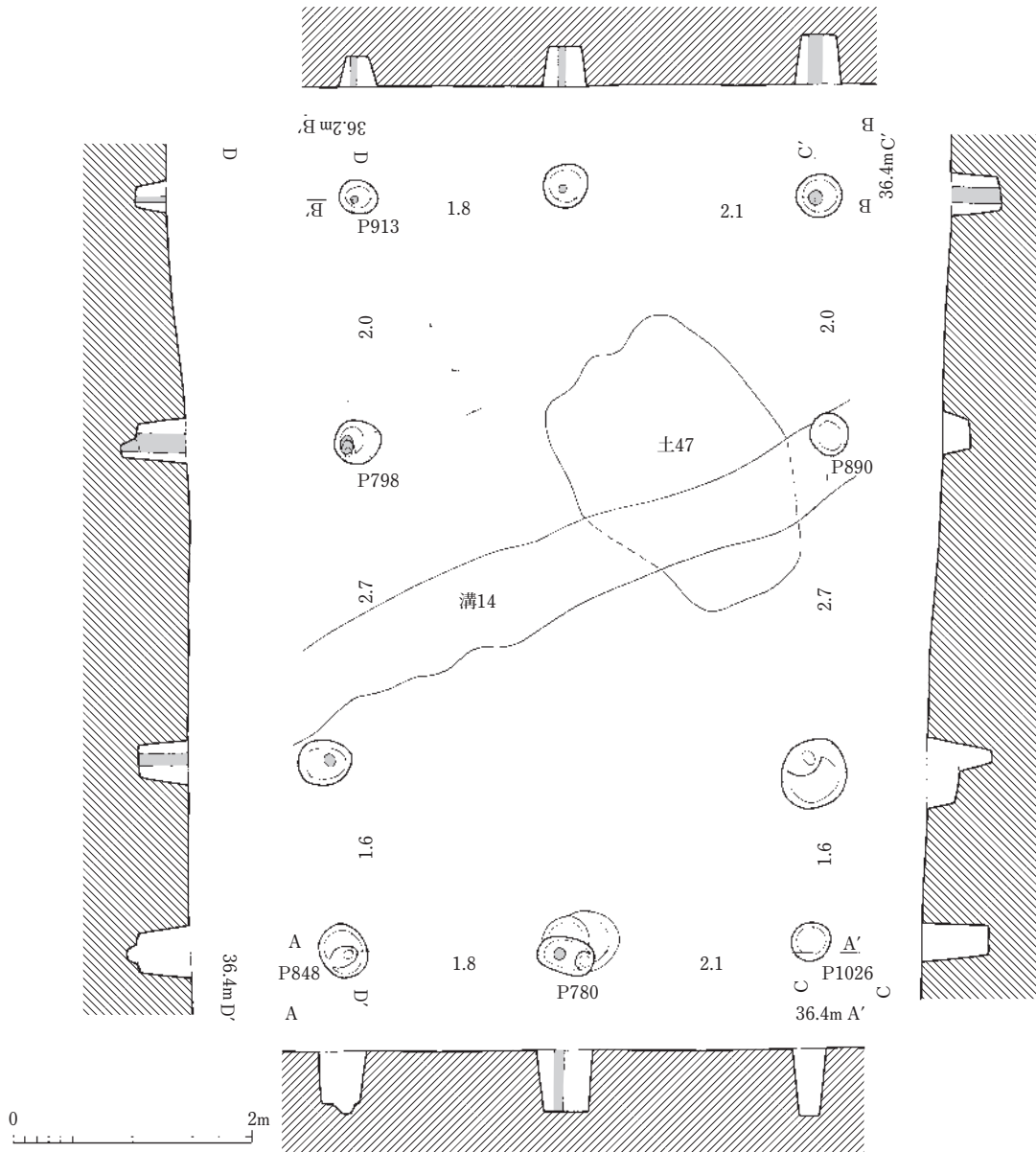
18は須恵器碗の口縁部片である。19は土師器坏片である。底部にかけて丸みを帯びる。20は土師器甕片である。頸部がやや逆「L」字形に外側に開く。

45号掘立柱建物跡（図版23、第49図）

44号掘立柱建物跡の北側で46号と重なるように検出した2×3間の建物である。南西隅の柱穴は攪乱により消失する。建物方向はN-20°-Eで、柱穴間距離は南北方向で1.3~2.1m、東西



第47図 39号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/ 60、1/ 3)



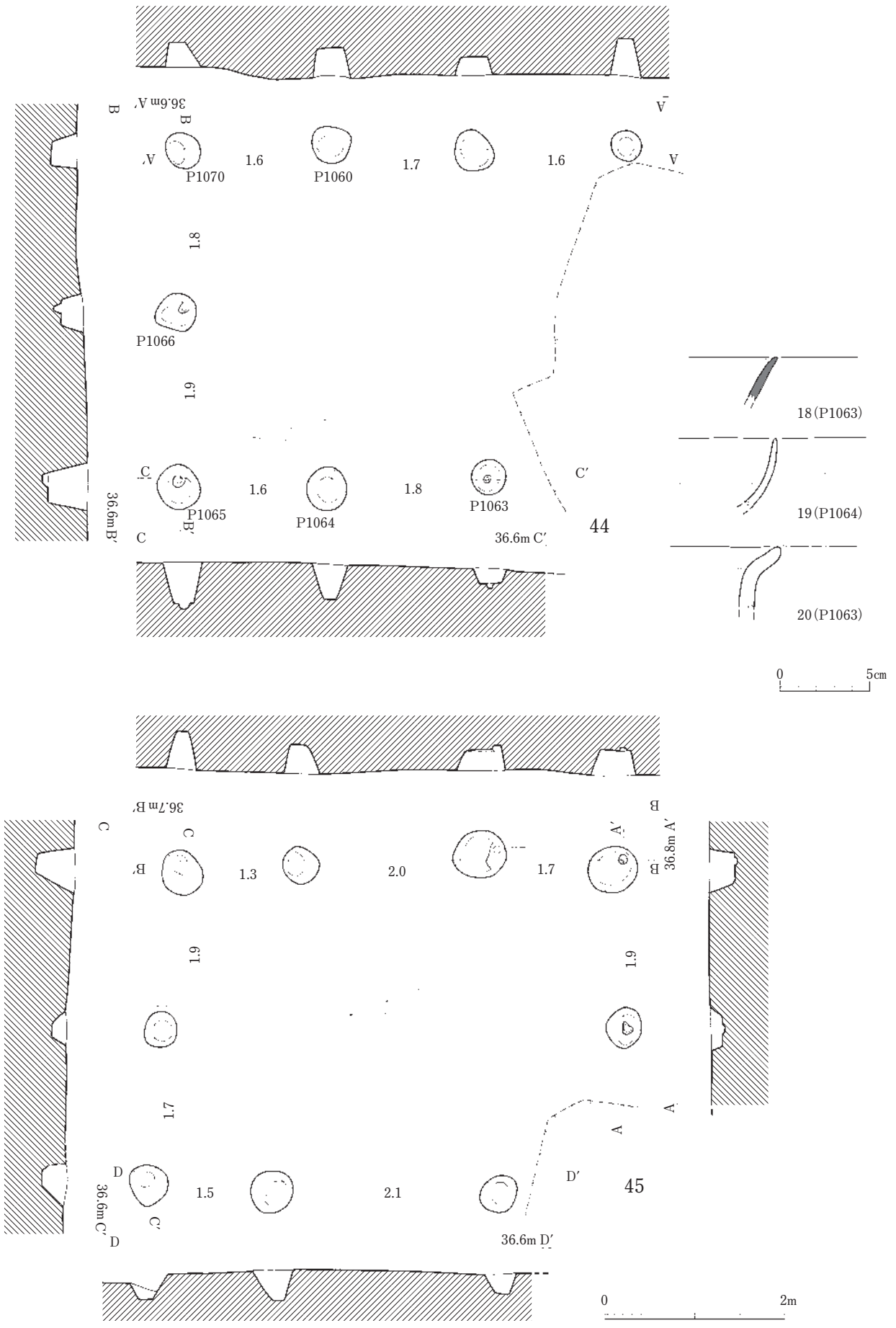
第48図 42号掘立柱建物跡実測図 (1/ 60)

方向で1.7～1.9mを測る。柱穴は円形で径0.4～0.6m、深さ0.15～0.45mを測る。柱穴底面では柱痕跡の径約0.1mを確認できた。図化できる出土遺物はなかったが、掘立柱建物の時期は周辺の建物との関係から8世紀頃か。

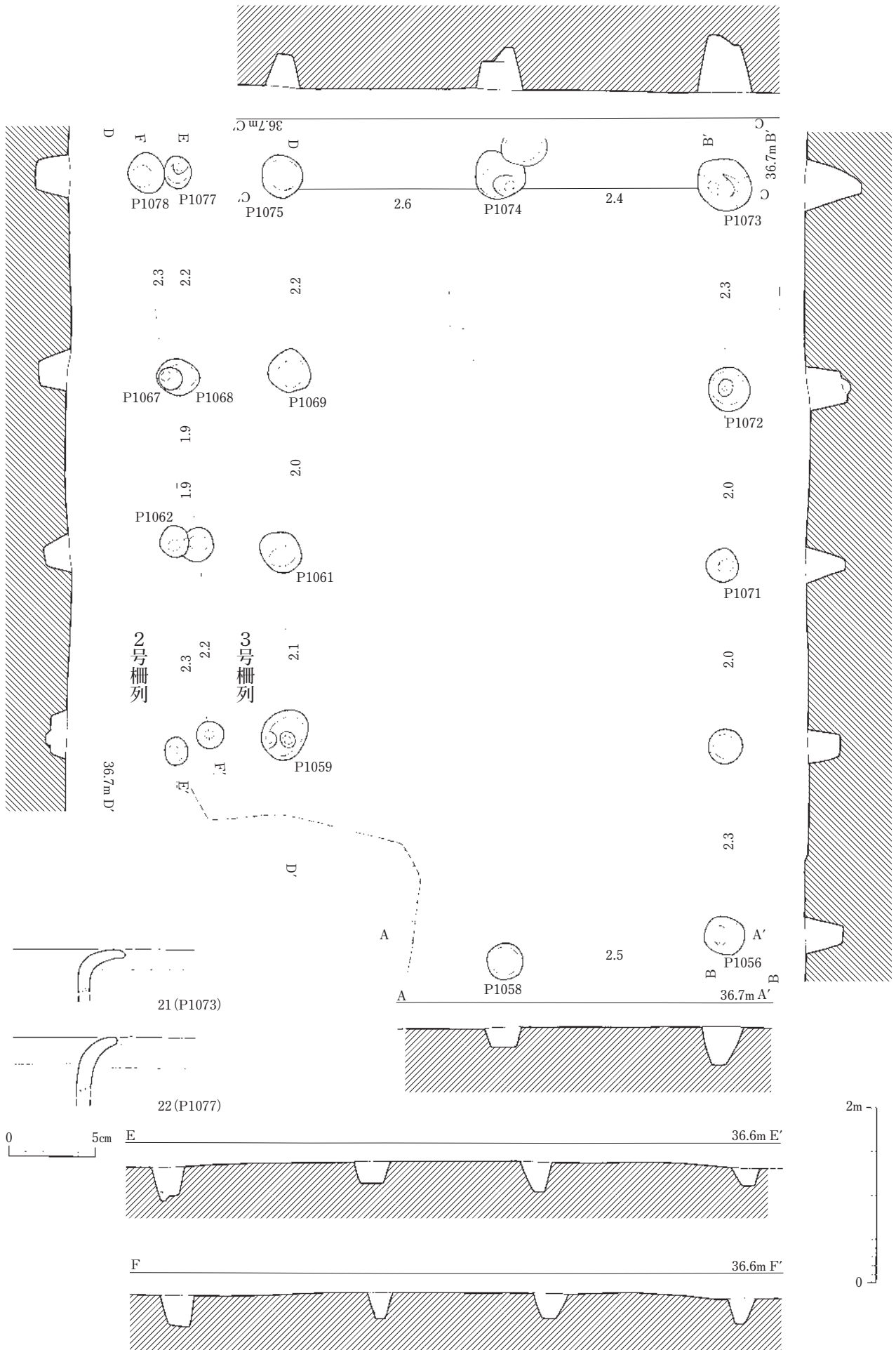
46号掘立柱建物跡 (図版23、第50図)

45号と重なるように検出した2×4間の建物で、南西隅の柱穴を攪乱で消失する。建物方向はN-20°-Eで、柱穴間距離は南北方向で2.0～2.3m、東西方向で2.4～2.6mを測る。柱穴は円形で径0.5～0.6m、深さ0.25～0.45mを測る。これも柱痕跡は上面で確認できなかったが、柱穴底面には柱痕跡径約0.15mを確認できた。掘立柱建物の時期は土師器片から8世紀頃か。

また46号掘立柱建物跡と付随すると考えられる柵列は2列ある。2・3号柵列はそれぞれN-



第49図 44・45号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60、1/3)



第50図 46号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60、1/3)

20°-EとでN-12°-Eと方向が違い一方の柵列が46号掘立柱建物跡に付随するものと考えたい。柱穴間隔は中間でやや狭まるが、1.9~2.3mを測る。柱穴は円形で径0.3~0.4m、深さは0.2~0.45mを測る。

46号掘立柱建物跡出土土器 (第50図)

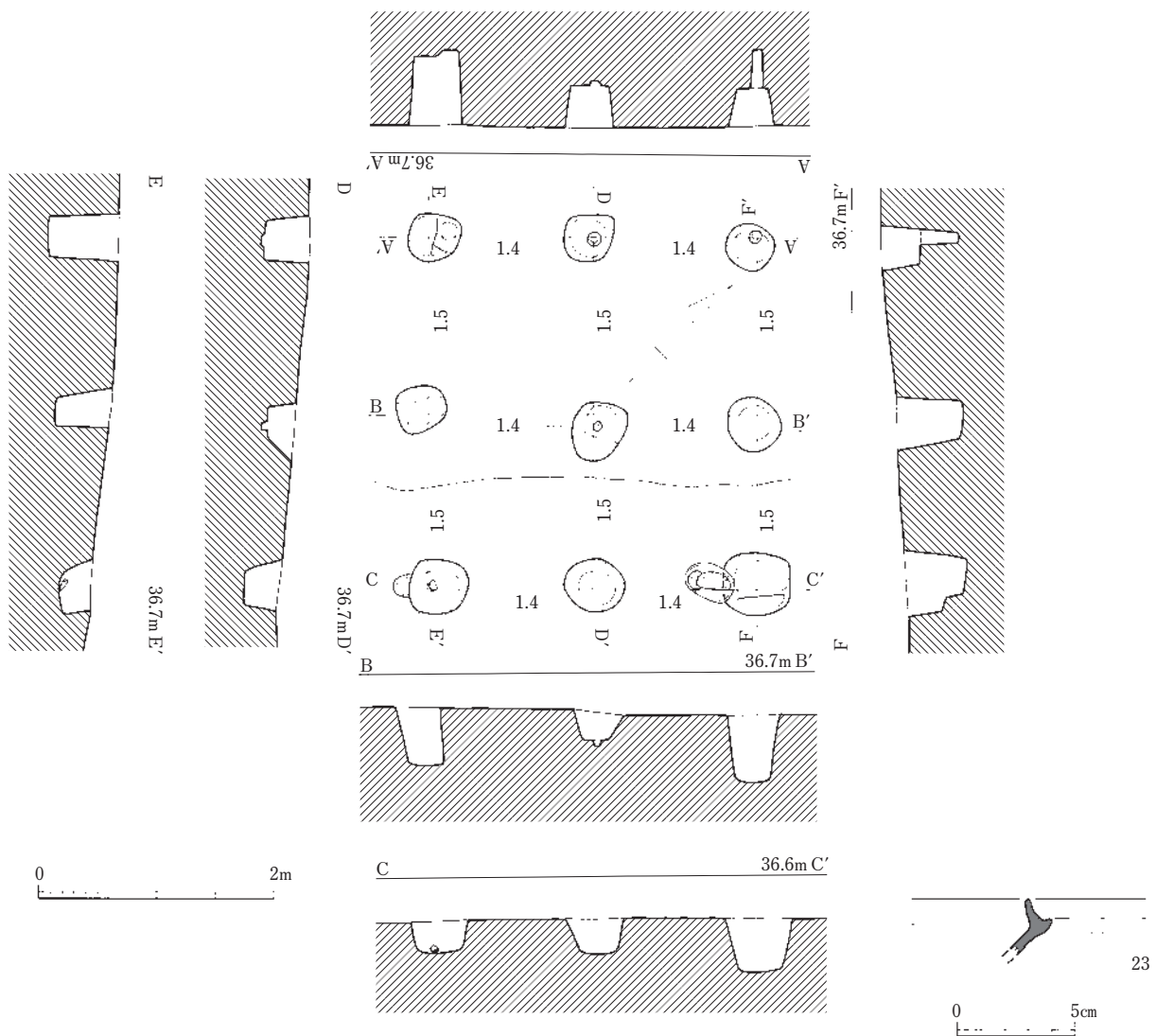
21は土師器甕の口縁部片で、逆「L」字形で外側に大きく開く。22は土師器甕又は甑の口縁部片か。口縁付近で外側に急に開く。

47号掘立柱建物跡 (図版23、第51図)

VI区で検出した2×2間の総柱建物である。建物方向はN-37°-Wで、柱穴間距離は1.4~1.5mでほぼ同じ長さを測る。柱穴は円形および隅丸方形で長さ0.4~0.5m、深さ0.25~0.55mを測る。柱穴底面には柱痕跡径約0.15m前後を確認し、いくつかの柱穴には約0.1mの礎石を底面に置いていた。図化できた須恵器坏身から検討すると、掘立柱建物の時期は7世紀前半頃か。

出土土器 (第51図)

23は須恵器坏身片である。内外面の調整は回転横ナデである。



第51図 47号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60、1/3)

48号掘立柱建物跡（図版23、第52図）

47号掘立柱建物跡の西側で検出した2×2間の総柱建物で、圃場整備により上面を削平されていたが緩斜面に位置する。建物方向はN-25°-Wで、47号掘立柱建物跡よりは北向きに建てられる。柱穴間距離は南北方向で2.2～2.4m、東西方向で2.0～2.2mを測る。柱穴は円形および隅丸方形で長さ0.4～0.5m、深さ0.3～0.7mを測る。柱痕跡は上面で確認できなかったが、柱穴底面には柱痕跡径約0.15m前後を確認できた。図化できる出土遺物はなかったが、47号掘立柱建物跡と同方向に建てられていることから同時期の可能性がある。

3. 竪穴住居跡（図版24～26、第53～61図）

竪穴住居跡はⅢ-1区で3軒（1～3号）、Ⅴ区で2軒（4・6号）、Ⅲ-3区で2軒（7・8号）の7軒を確認した。いくつかの住居跡は削平されていて、竈も全く残存していなかった。調査当初に5号竪穴住居跡としたが、調査の結果、住居跡ではなかったので欠番とした。なお、Ⅰ・Ⅱ区検出の9～11号竪穴住居跡は報告済みである。

1号竪穴住居跡（図版24、第53図）

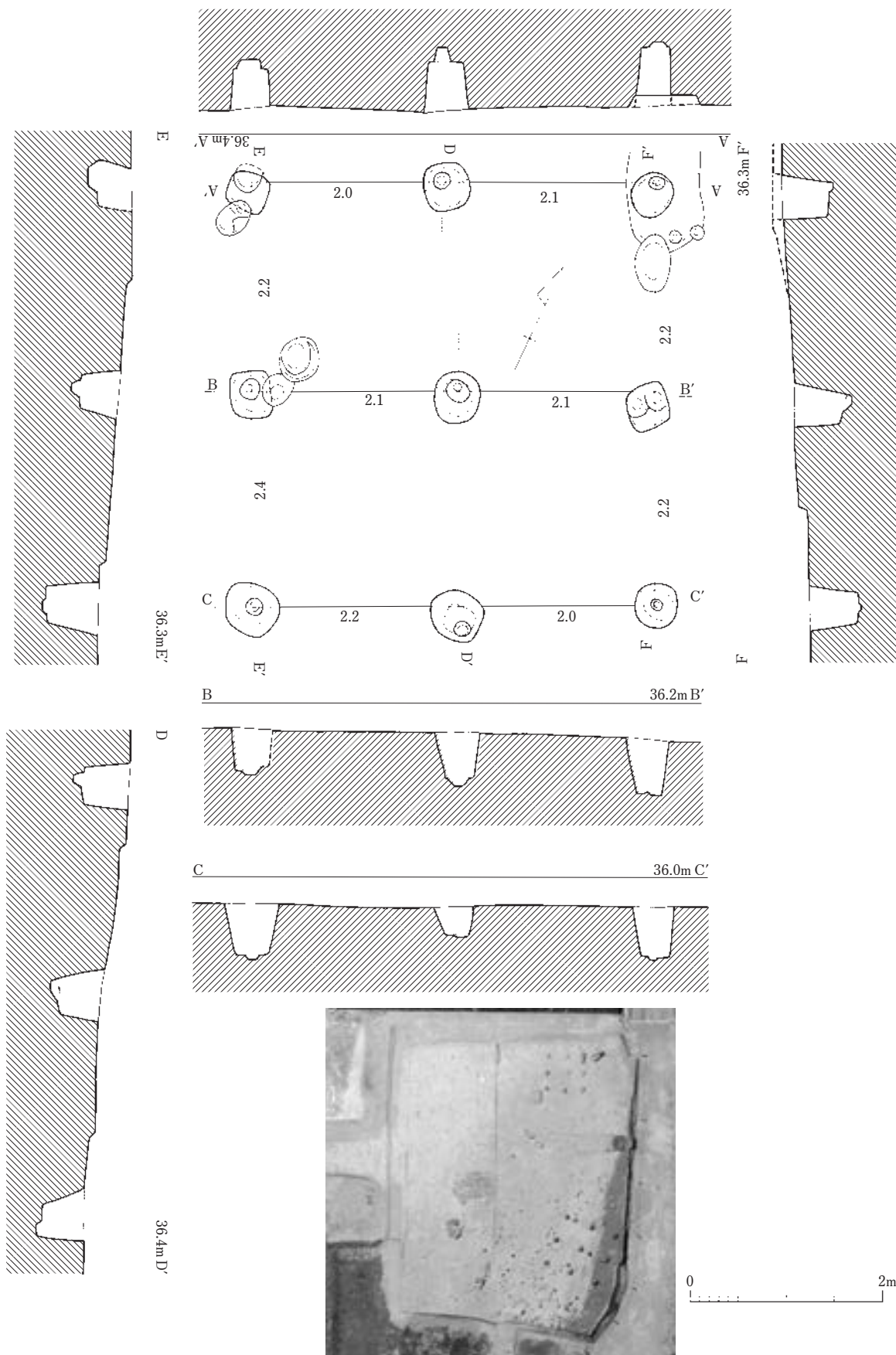
今回の調査の中では最も残りが良い竪穴住居跡で、Ⅲ-1区で検出した。形状はほぼ方形で、長さ5.8×6.5m、深さ0.3mを測る。壁溝は部分的に途切れているが住居の隅々で確認した。支柱穴も明確に判断でき、径0.5～0.8m、深さ0.4～0.65mで、柱間は3.8～4.0mを測る。

竈はⅡ区検出の11号竪穴住居跡と同様で、西壁の中央部分に作られている。またこの付近には多くの土器が出土した。竈の袖は褐色土で固く締まっていたが、右袖部分は掘りすぎてしまった。また前面には竈で使用された約0.25と0.4mの2つに割れた石と、ほぼ原位置で径約0.2mの凹みに立てられた袖石を2つ確認し、これらで竈の焚口を形成していると思われる。

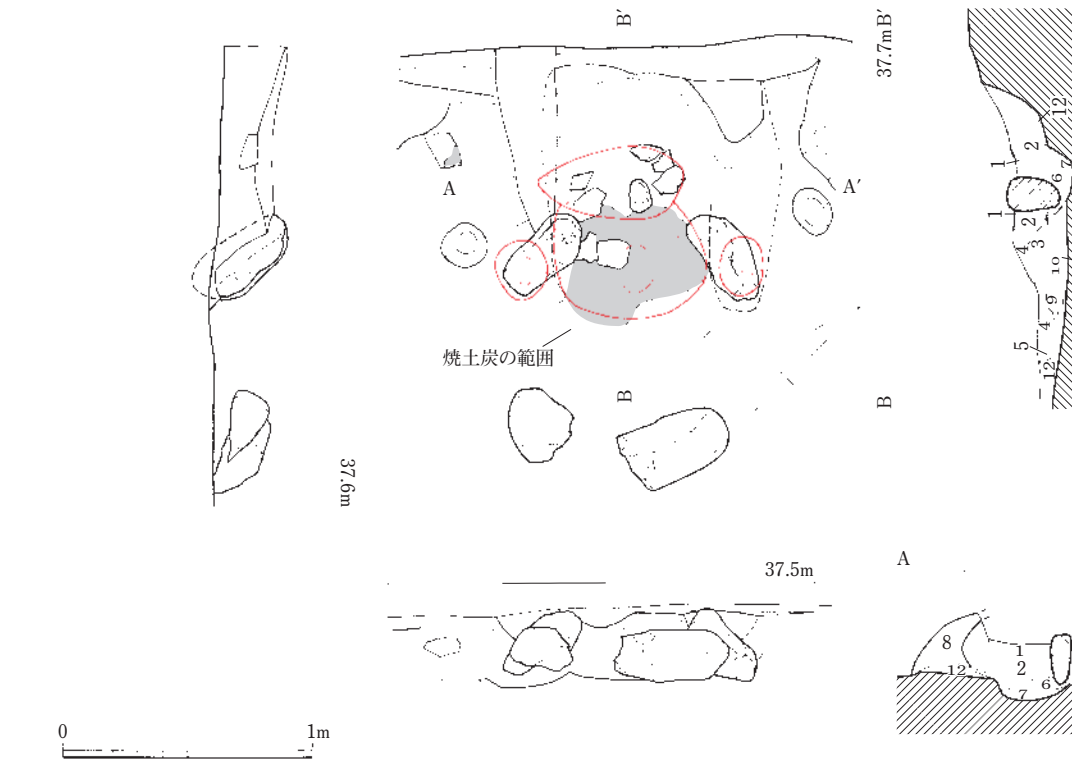
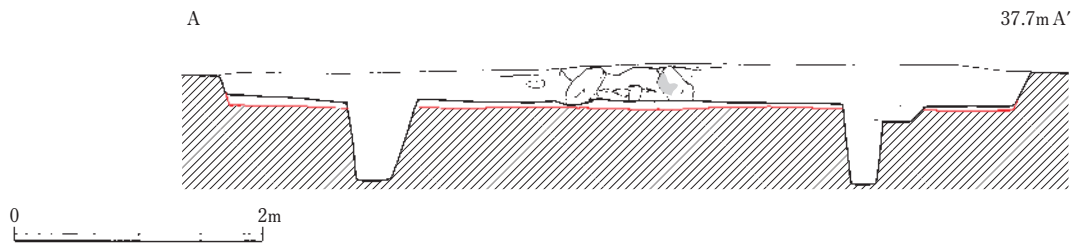
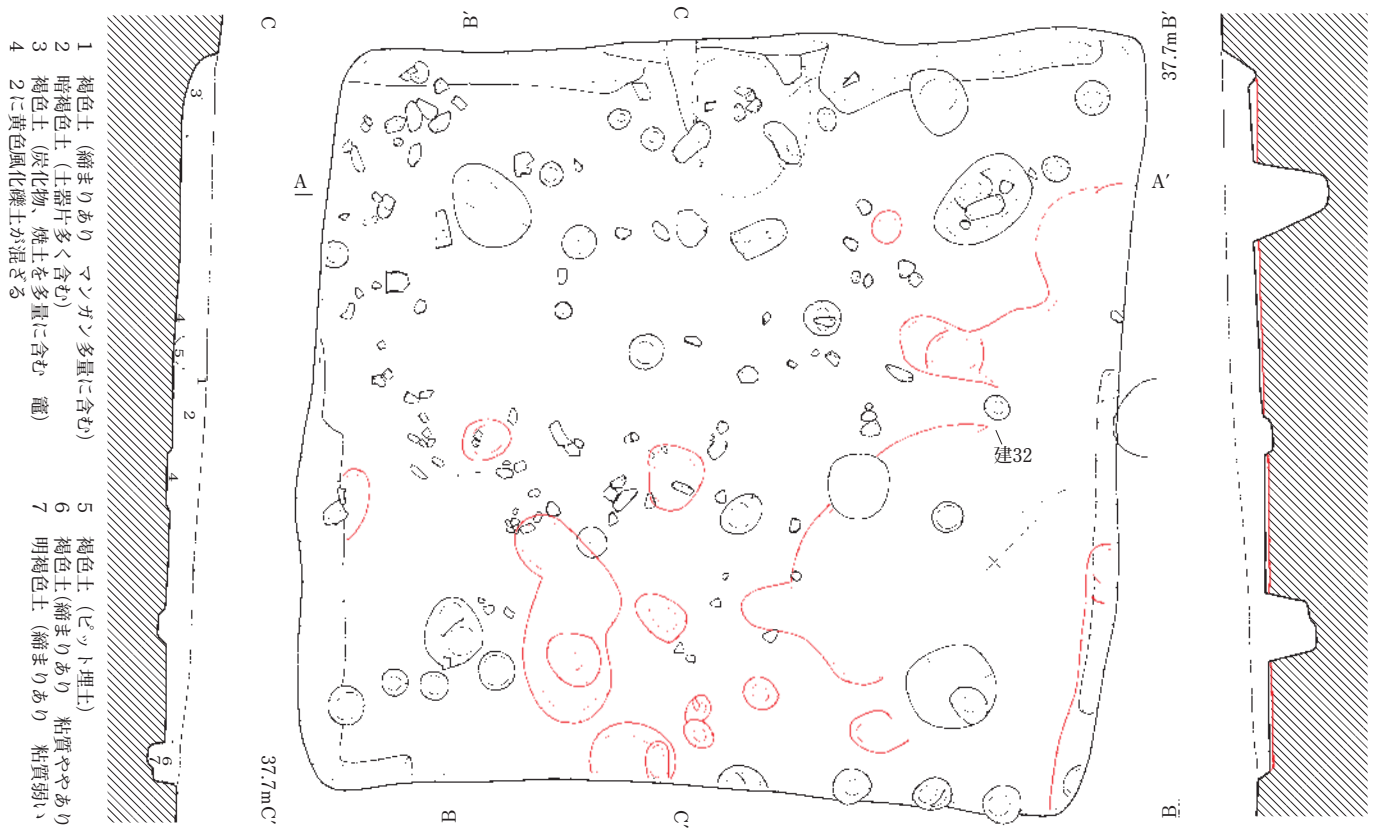
焚口部分は幅0.5m前後を測り、焼土層に混ざって土器片が出土した。煙道は確認できなかったが、竈の中央には約20cmの支脚を埋設していた。パンケースで約2箱分の出土土器から、竪穴住居の時期は6世紀末～7世紀初め頃と思われる。

出土土器（図版42、第54・55図）

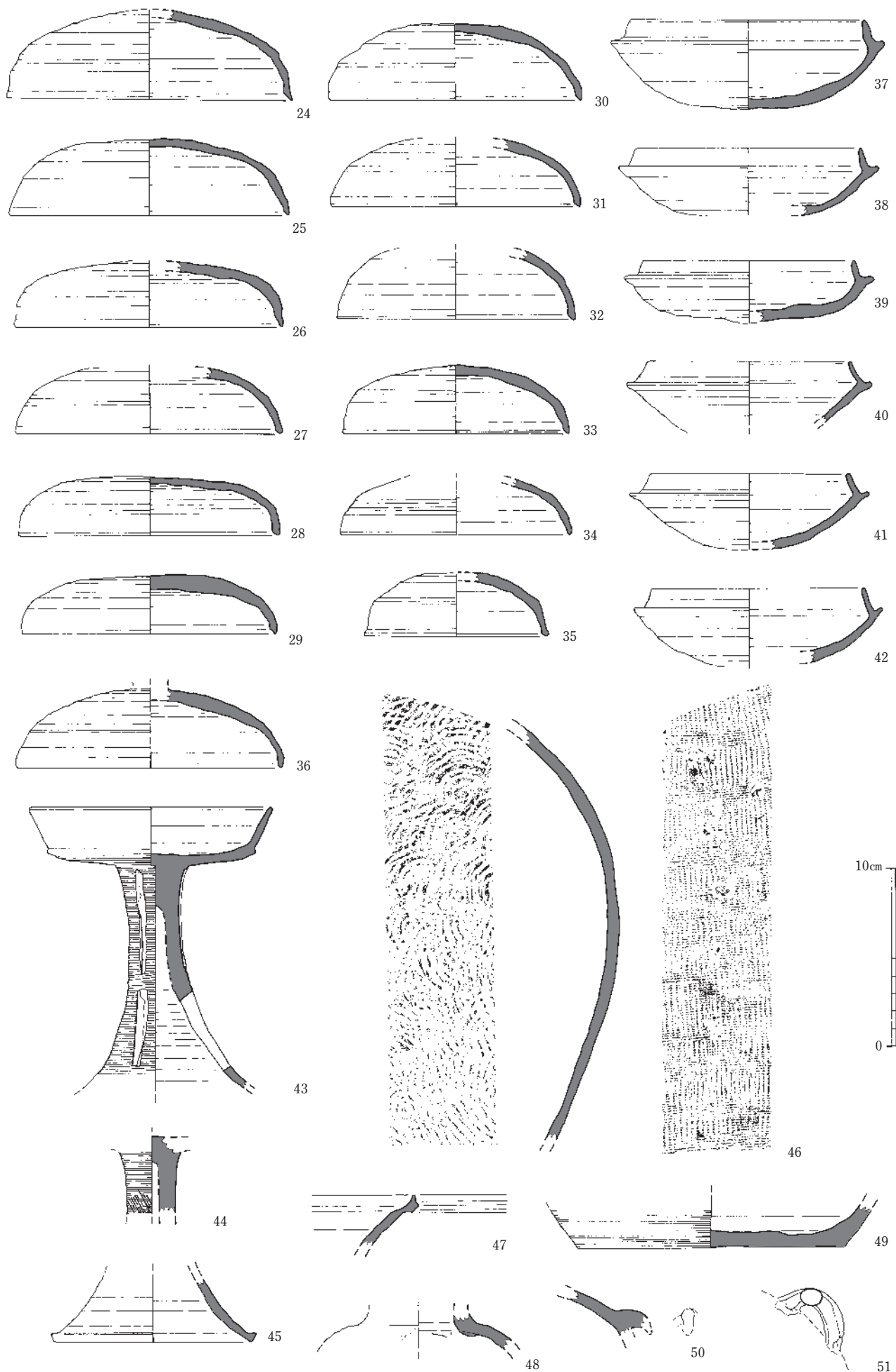
24～51は須恵器である。24～35は坏蓋である。外面体部中程と内面口縁端部には、緩やかに段を有する。口径16.0、15.6、15.0、15.0、14.6、14.3、14.2、14.0、13.4、13.0、13.0、10.4cmを測る。33は内面天井部に「一」状のヘラ記号がある。36のみ撮み部分を欠損するが、高坏の蓋である。口径15.0cmを測る。37から42は坏身である。37は焼成不良により軟質で、色調は灰白色になる。口径13.0cmを測る。38～42は復元口径12.8、11.8、11.4、11.2、11.0cmを測る。43～45は高坏片である。43は無蓋高坏である。脚部端部は欠損するが、脚部には2段の透かしを3カ所に入れる。下部は長方形の透かしであるが、上部は直線状に刻んでいるだけで、簡略されている。調整は坏部の段から脚部にかけてカキ目を施す。口径13.4cmを測る。44と45は脚部片である。46は甕の体部片である。外面にはカキ目の後に平行叩きを、内面には同心円叩きを施す。47は甕または壺の口縁部片で、端部が尖る。48は壺の肩部片である。内面の頸部との境



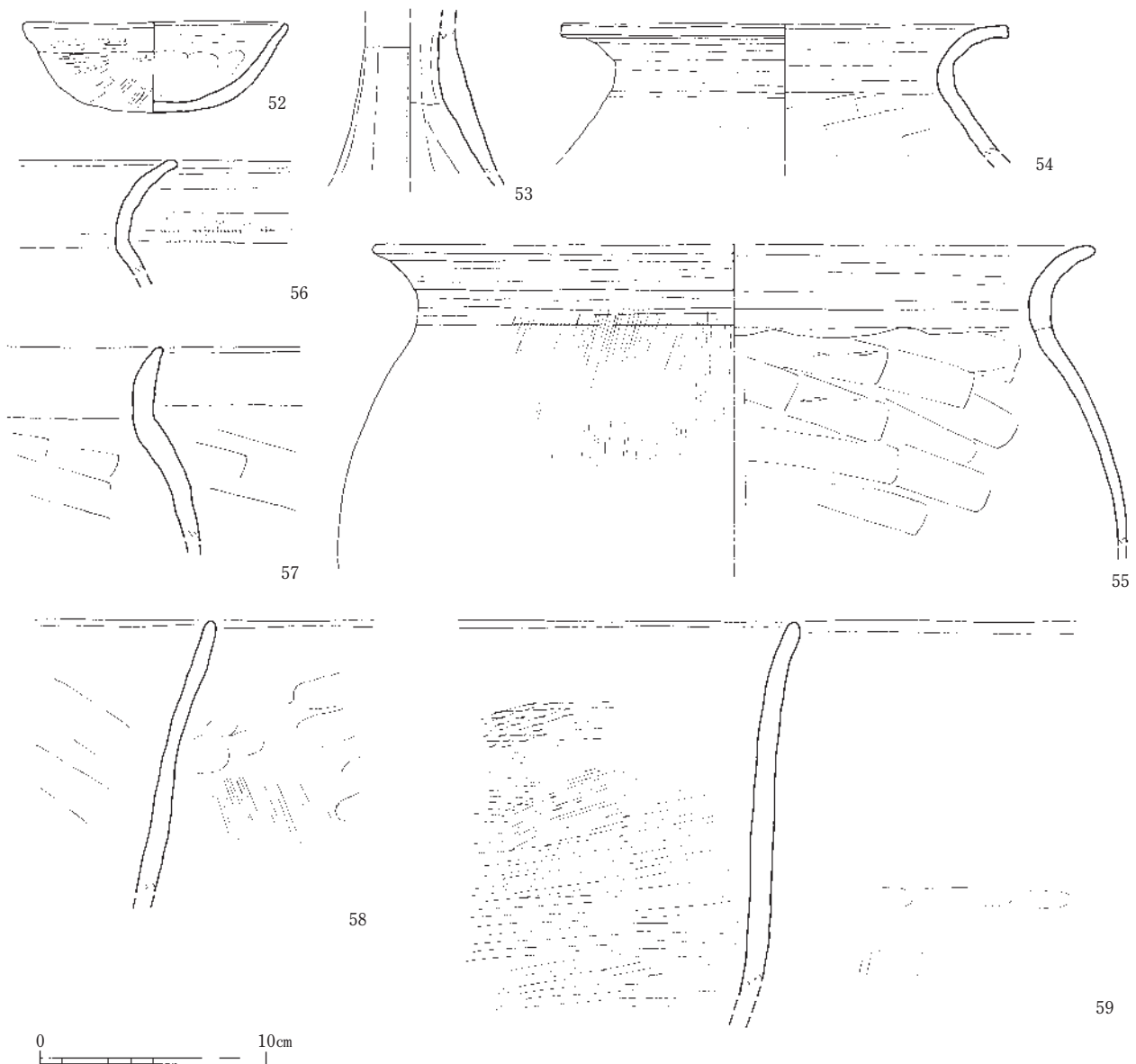
VI区南側全景写真（真上から）
 第52図 48号掘立柱建物跡実測図（1/ 60）



第53図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)



第54图 1号竖穴住居跡出土土器实测图1 (1/3)



第55図 1号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

目が肉厚になる。49は壺の底部片である。外面底部にはカキ目を施し、中央のみへら切りの痕跡がある。50と51は提瓶の肩部付近の把手片である。50は牛角状であるが、51は環状である。52～59は土師器片である。52は坏で、復元口径11.6cmを測る。内外面とも摩滅するが、外面にミガキ、内面にはナデを施す。53は高环脚部片である。内外面ともナデを施す。54～56は甕片である。口縁部は外湾しながら外側に向かって大きく開く。外面には刷毛目、内面にはケズリである。54と55は復元口径で19.6、31.6cmを測る。57は頸部から口縁に向かって真っ直ぐに立ち、端部が僅かに外側に開く。壺の可能性はある。58と59は甑の口縁から体部上半片である。口縁端部に向かって緩やかに外側に向かって開く。外面にはナデと刷毛目、内面には刷毛目やケズリを施す。

2号竪穴住居跡 (図版24・25、第56図)

1号竪穴住居跡の北側で検出した竪穴住居跡である。調査区際で検出したため約1/3しか調査できなかった。現状では5.2×3.5m、深さ0.3～0.4m、柱穴間距離は3.1mを測る。61号土坑で

南隅を壊されるが、幅約0.2m、深さ0.05mの浅い壁溝が巡っている。竈は検出できなかったが、特に西隅では甕が約1個体分出土した。竪穴住居の時期は出土遺物から7世紀初め頃と思われる。

2号竪穴住居跡出土土器（図版43、第57図）

60～71は須恵器である。60は高坏の蓋である。口縁端部は明瞭に段が付く。外面天井部には丁寧なヘラケズリを施す。復元口径14.8cmを測る。61～63は坏蓋片である。それぞれ復元口径14.8、13.8、13.6cmを測る。61は体部中程に明瞭に段がつく。62は全体的に造りは丁寧だが、やや肉厚である。63は器高3.4cmとやや低い。64～66は坏身である。64の焼成は良好で、内外面とも灰色で硬質である。65と66は口縁端部を欠損する。それぞれ復元口径11.4cm、13.8cm、14.0cmを測る。67は碗片である。高台が体部下半間に作られる。復元口径12.6cmを測る。68と69は皿である。68は薄手作られ、やや焼成不良のため軟質である。69は厚手に作られ、外面底部にはヘラ切りである。それぞれ復元口径16.0、16.8cmを測る。70は長脚の高坏片である。坏部の外面底部付近には斜線文と脚部下半には長方形の透かしが3カ所にある。71は甕で1/2残存する。調整は口縁～頸部にかけては回転横ナデであるが、体部は外面に平行叩きで、内面は同心円叩きである。復元口径26.2cmを測る。72～76は土師器である。72は高坏脚部片である。内外面とも器壁が摩滅するが、外面の調整はケズリで、内面はケズリと横ナデか。73と74は甕片である。73の方が頸部から大きく外湾しながら外側に開く。共に調整は外面に刷毛目で、内面はケズリである。それぞれ復元口径17.8、25.6cmを測る。75は甕の把手片である。76は甕で約1/2残存したが、ちょうど把手部分が欠損する。復元口径で21.0cmを測る。

3号竪穴住居跡（図版25、第56図）

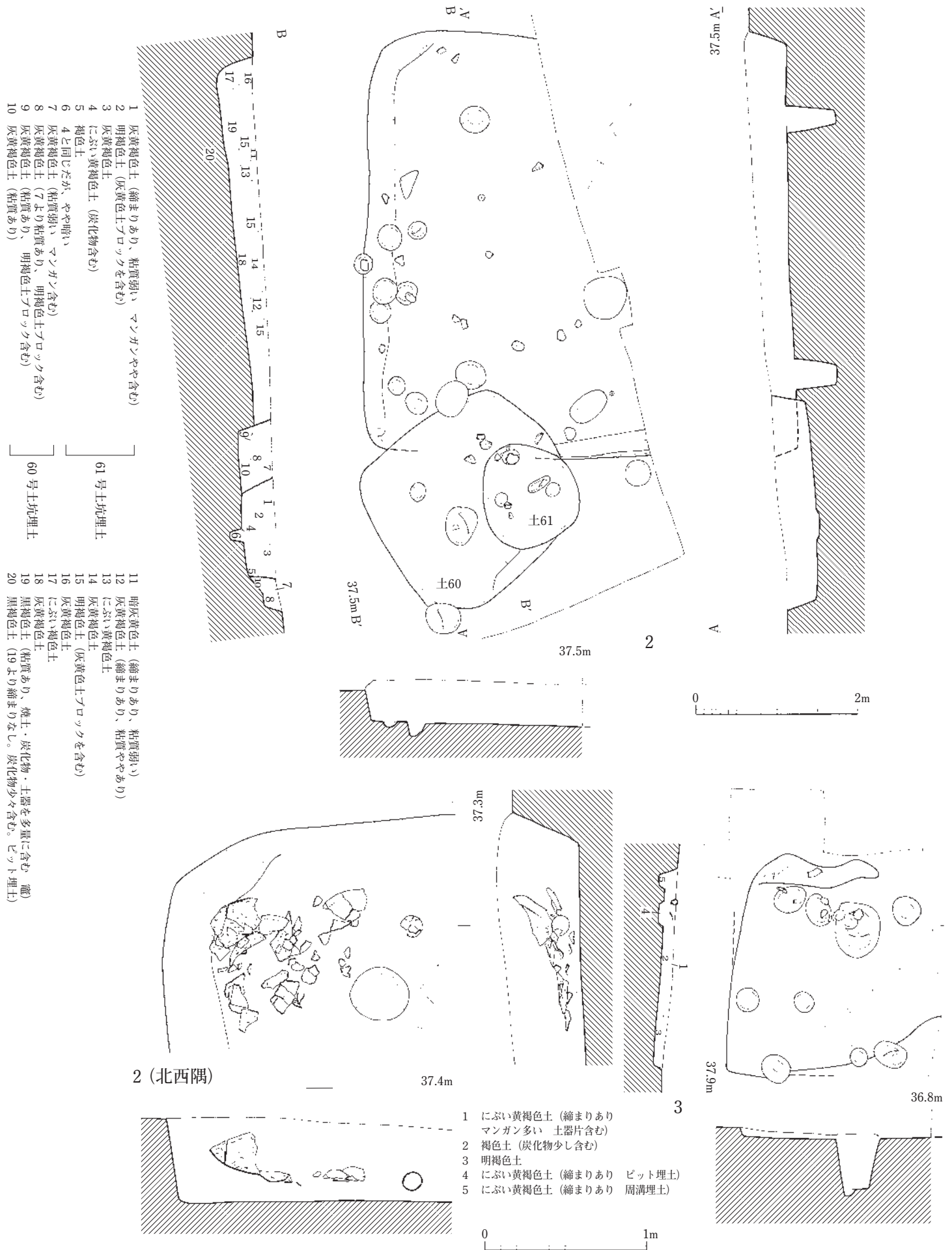
2号竪穴住居跡のすぐ東側で検出した竪穴住居跡である。これも調査区際で検出したためと削平を受けているため残りはよくない。全体の形状は不明であるが、現状では長さ2.7m、深さ0.1mを検出した。支柱穴と思われる柱穴は1つしかなく、径0.55m、深さ0.7mを測る。その周辺からは土器が多く出土した。竪穴住居の時期は出土した土器から7世紀初め頃と思われる。

出土土器（図版43、第58図）

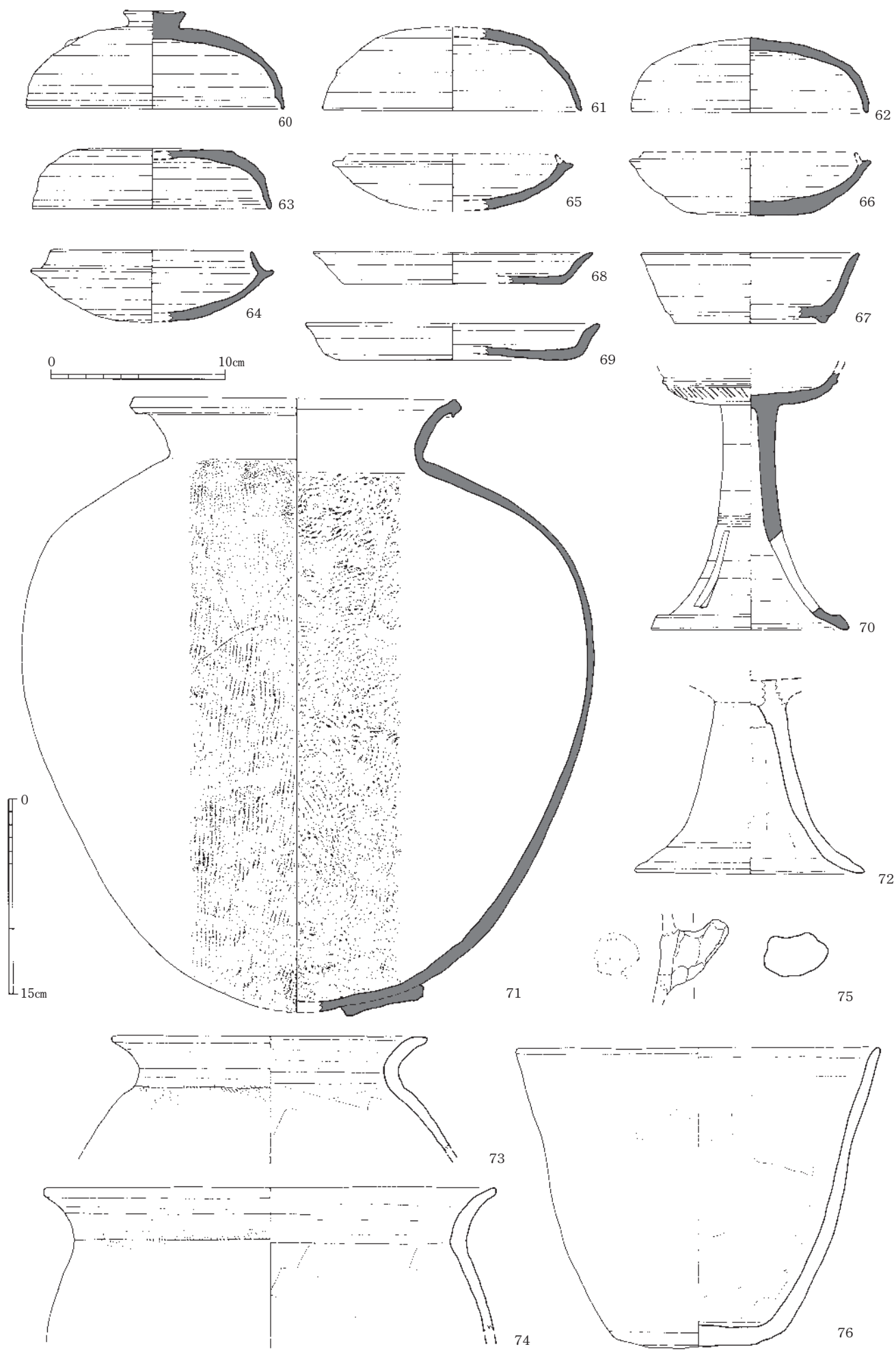
77～82は須恵器である。77は高坏の蓋である。復元口径15.8cmを測る。78と79は坏身片である。78は全体的に薄手な作りである。復元口径で14.8cmを測る。80は高坏の脚部片である。内外面とも回転横ナデである。81と82は甕片である。81は外面口縁部下に短い斜線文状のものを巡らす。82は口縁下に丁寧なカキ目を施す。83は甕の体部片である。外面肩部には刺突文がある。84は土師器碗の高台片である。高台の端部が外側に開く。

4号竪穴住居跡（図版25、第59図）

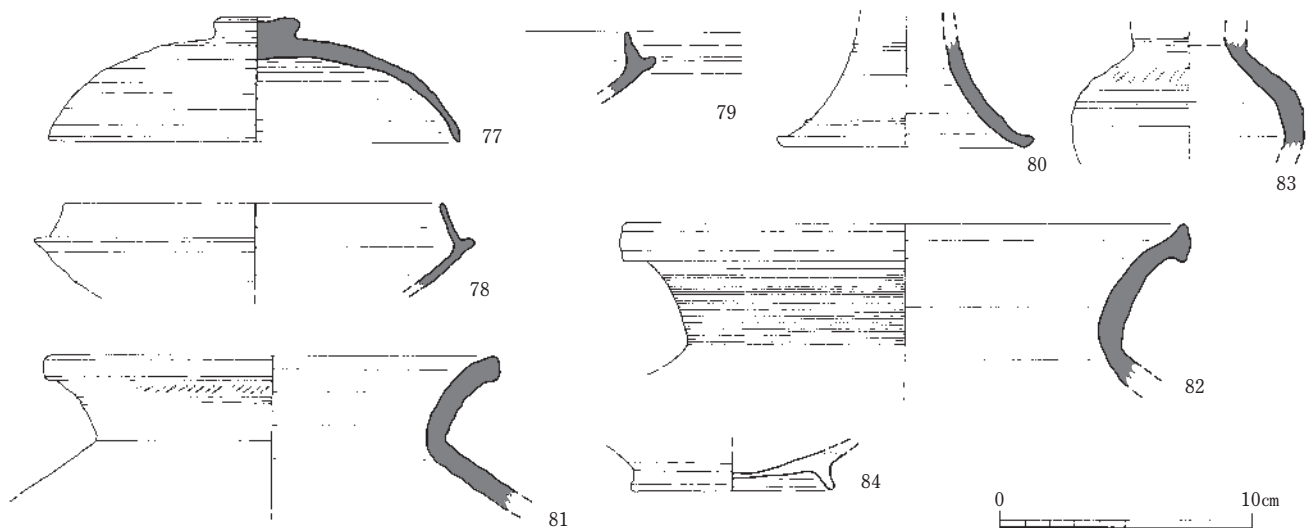
V区の北側で検出した竪穴住居跡である。ほとんど削平されていて、僅かに壁溝らしき浅い溝が残る。現状では長さ2.0m、深さ0.1m以下を測る。明確に支柱穴と思われる柱穴は判断できなかった。ただ、中央部分が長円形状に約0.6×0.35mと被熱しており、この部分が炉であった可能性がある。図化できる遺物もなく、竪穴住居の時期は不明である。



第56図 2・3号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)



第57図 2号竪穴住居跡出土土器実測図 (71は1/4、他は1/3)



第58図 3号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

6号竪穴住居跡(図版26、第59図)

35号掘立柱建物跡と15号溝に切られる形で検出した竪穴住居跡である。これも削平されていて残りは良くないが、長さ5.4×3.8m、深さ0.2m以下を測る。住居内を幅0.15m、深さ0.1m以下の浅い壁溝が巡っている。主柱穴と思われる柱穴は確認できなかった。ただ中央部分には長円形の0.5×0.3mの被熱した痕跡を確認しており、この部分が炉の可能性はある。住居内からは、今回の調査の中で、古い古墳時代前期の土師器片が出土しており、竪穴住居の時期はその時期に該当するものと思われる。

出土土器(図版44、第59図)

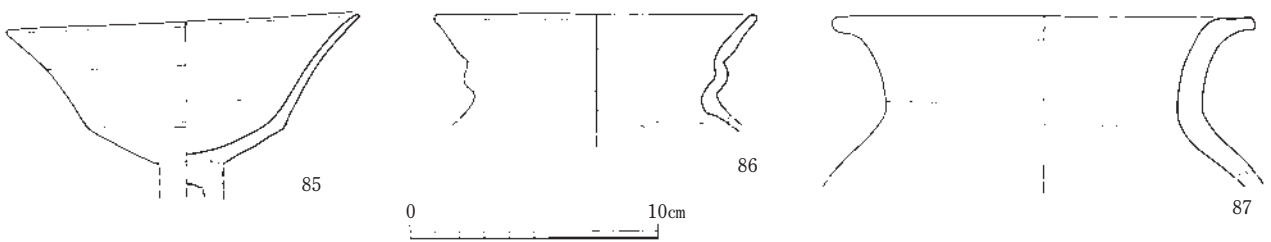
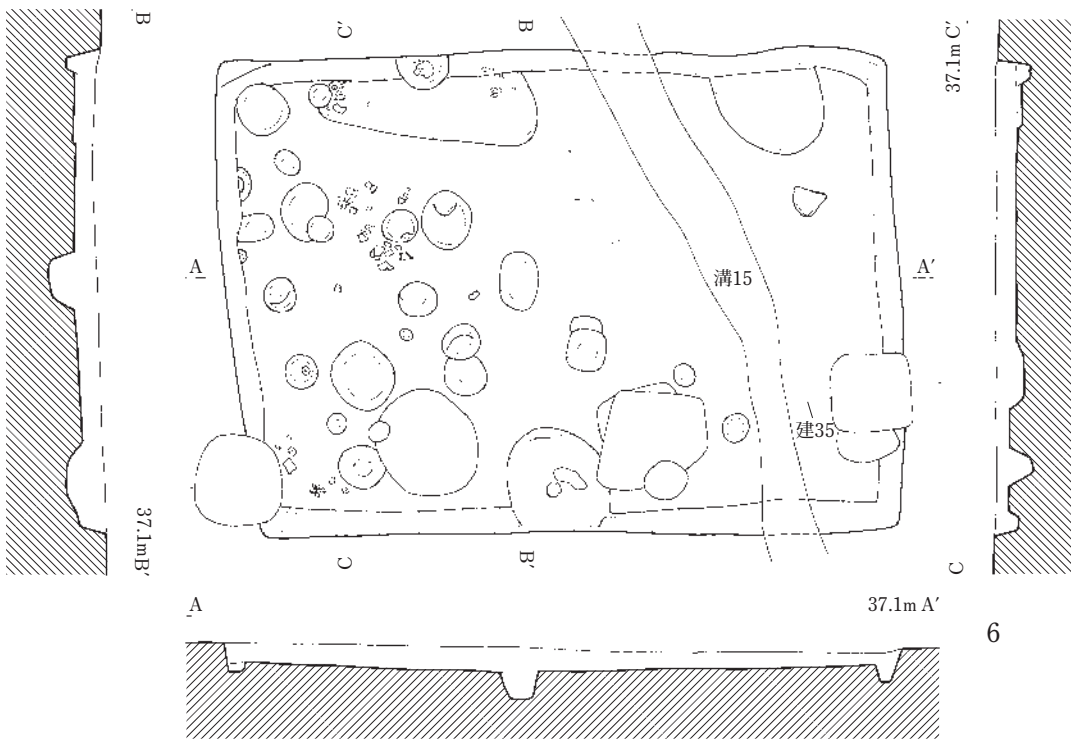
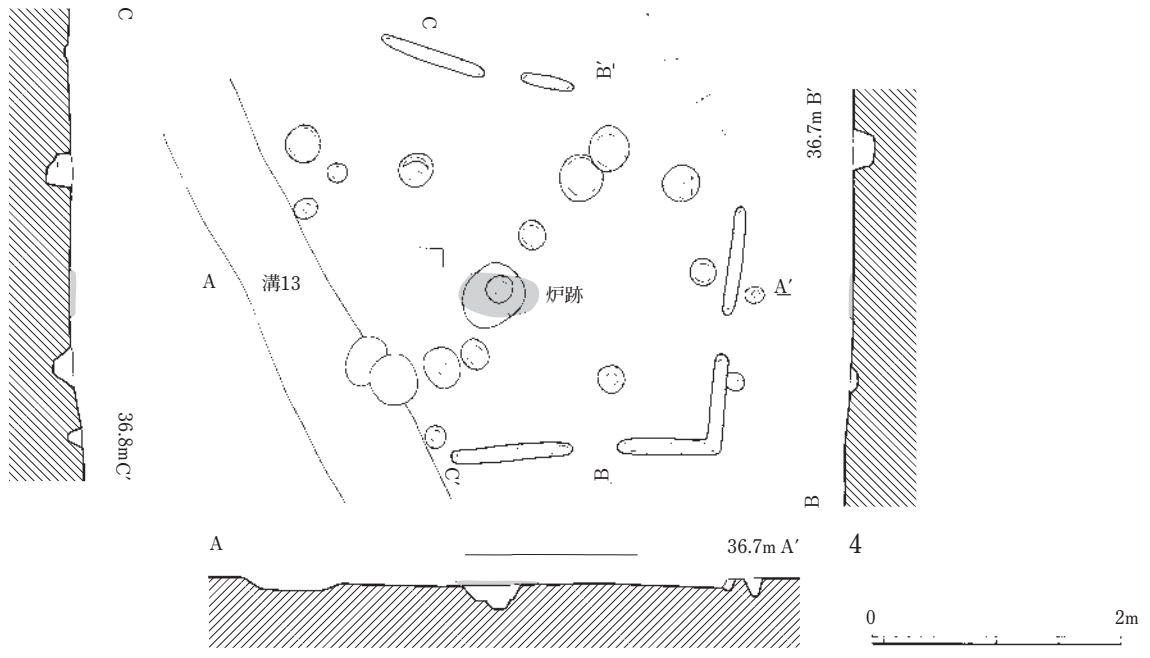
85~87はいずれも土師器である。85は土師器高坏の坏部片である。体部下半で折れ、外側に開く。口径14.2cmを測る。86は甕の口縁~頸部片である。頸部よりやや上で外に膨らんだ後、また外側に開く二重口縁壺風になる。頸部より下は欠損する。復元口径13.0cmを測る。87は甕の口縁~頸部片である。口縁端部が折れ、外側に平たく延びる。

7・8号竪穴住居跡(図版26、第60図)

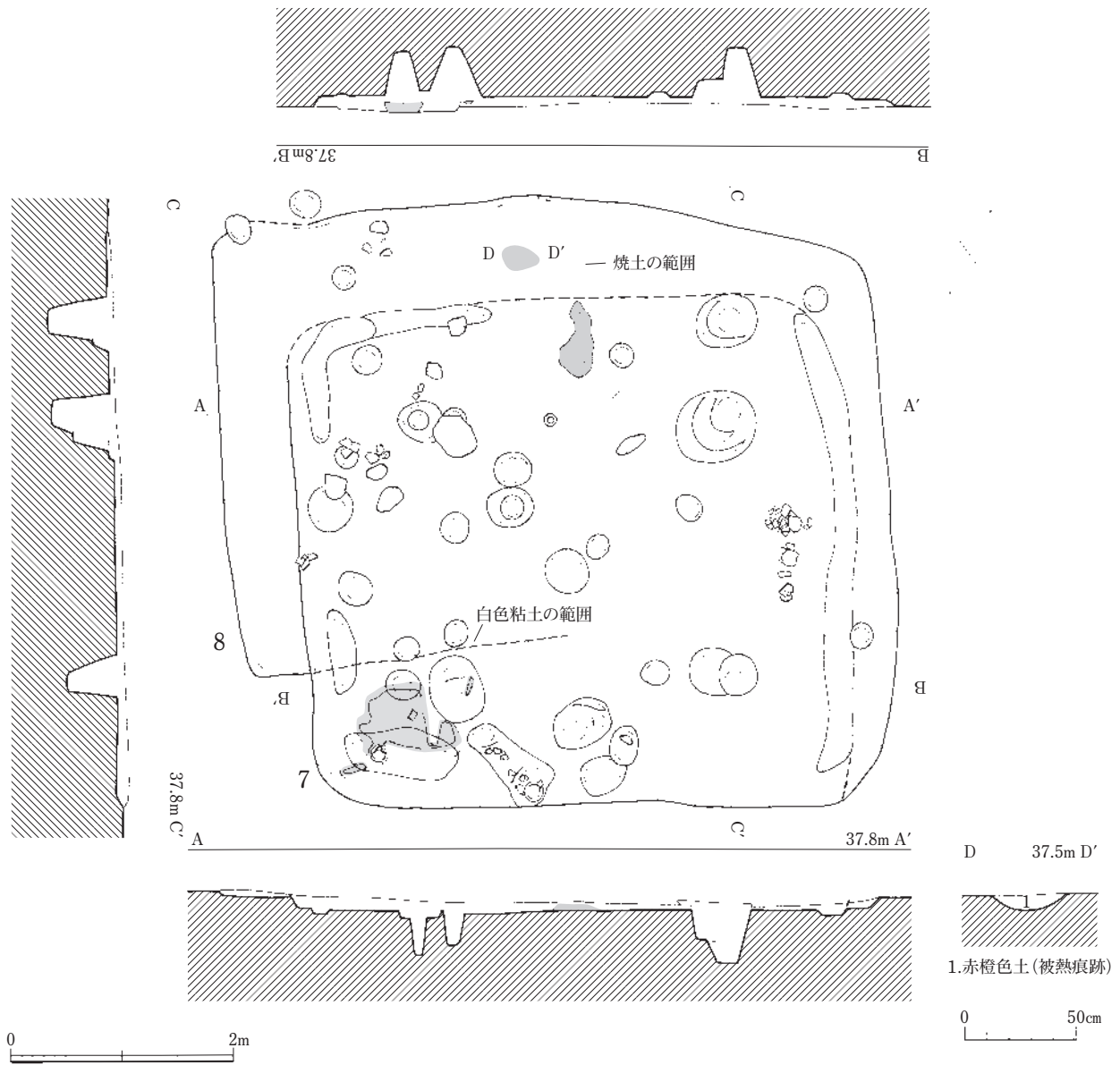
Ⅲ-3区南東側の平坦面で検出した7・8号竪穴住居跡である。削平されていて僅かに深さ0.1mしか残存していなかった。最初、3軒が重なった状態と考えたが、僅かに掘り下げた結果、7号住居が8号住居を切る形として判断した。深さ約0.1mしかないが、いずれも形状は長形状である。2つの住居の切り合いは壁溝の位置から7号竪穴住居跡は長さ5.2×4.4m、8号竪穴住居跡は長さ約6.0×4.0mと判断した。

7号竪穴住居跡は浅い壁溝が幅0.2m深さ0.1mと残る。また主柱穴は4つとも明確に判断でき、径0.35~0.6m、深さ0.5mを測る。竈は削平されていたが他の住居と同様に西壁側で、焼土塊を検出したので、恐らくこの位置に竈が設置されていたと思われる。また南隅では白色粘土の塊を長さ約0.9m、厚さ0.1mを検出したが、竈の痕跡はなかった。

8号竪穴住居跡は7号に壊されているためにほとんど不明である。竈は削平されていて残っていなかったが、7号住居と同様に西壁側中央で長円形状の被熱痕跡(径0.3m)を確認したので、この位置に竈が存在していた可能性が高い。



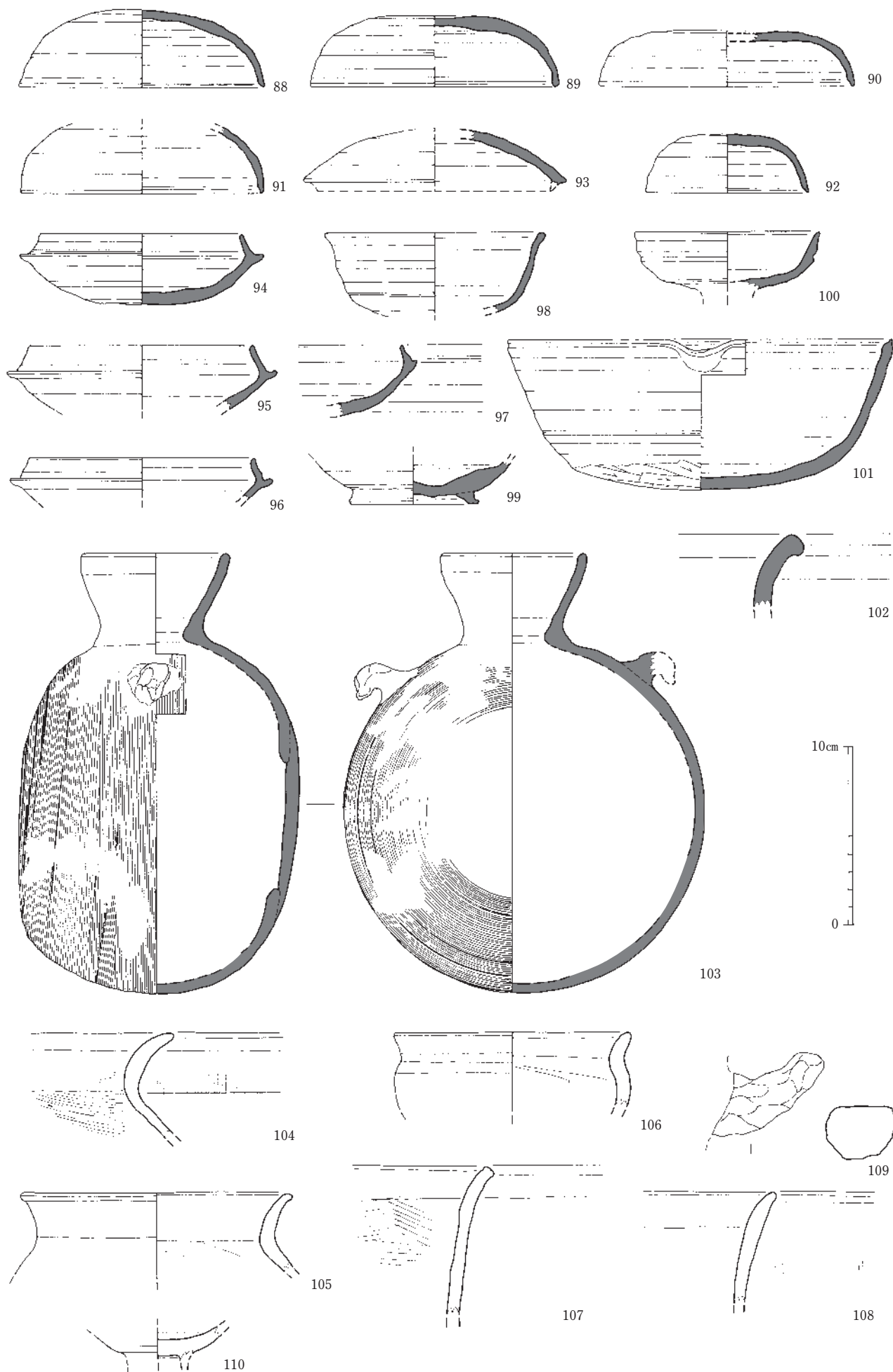
第59図 4・6号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/60、1/3)



第60図 7・8号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)

7・8号竪穴住居跡出土土器 (図版44、第61図)

88～103は須恵器である。88～93は坏蓋片である。90は器高3.1cmと低い。92は復元口径9.2cmと小さいが、外面天井部には丁寧なヘラケズリをする。93はかえりをもつ坏蓋片である。焼成不良で軟質で、色調は灰白色である。口縁端部が低いことから蓋と考えたが、身の可能性もある。88～91、93の復元口径13.8、14.0、14.2、13.6、15.0cmを測る。94～97は坏身である。94～96の復元口径11.2、12.6、12.8cmを測る。98は坏片である。体部下半に明瞭な沈線が巡る。全体的に薄手で、口縁端部が丸みを帯びる。99は埴の高台片である。外面高台は端部が外に向かって開き、底部はヘラ切りである。内面底部部分は1段低くなり、中央部分盛り上がる。100は無蓋高坏の坏部片である。外面体部下半に刺突文が巡る。焼成不良により軟質で、色調は淡灰色になる。101は片口鉢片である。口縁端部は丁寧に作られ、端部中央が尖る。内外面とも回転横ナデ調整をし、外面底部にはヘラケズリを行う。102は甕の口縁部片である。口縁端部は丸みを帯びる。103は提瓶で、ほぼ完形品である。肩部には牛角状の把手が2ヶ所につく。調整は内外面はとも回転横ナデであるが、外面にはカキ目も施す。104～109は土師器である。104と105は甕の口縁～頸部



第61图 7·8号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

片で、頸部が「く」の字形になって、口縁に向かって外側に開く。104の頸部付近の調整は内外面とも刷毛目である。105は復元口径15.2cmを測る。106は壺片か。厚手な作りで、内面にケズリの痕跡がある。内湾しながら口縁端部に向かって外側に開く。復元口径13.2cmを測る。107～109は甑片である。それぞれ刷毛目の痕跡が残る。109のみ甑の把手になる。110は白磁碗の体部下半片で、高台部分を欠損する。

4. 土坑（図版27～30、第62～67図）

Ⅲ-1区で3基（60～62号）Ⅲ-3区で1基（59号）、V区で18基（40～57号）Ⅵ区1基（58号）の23基を検出した。

40・41号土坑（第62図）

V区北側の4号竪穴住居跡の近くに位置し、40号土坑が41号土坑を切る形で検出した土坑である。40号土坑は長円形状で長さ2.0×1.0m、深さ0.3mを測る。断面逆台形状を呈し、埋土の灰褐色土からは弥生土器片を出土した。41号土坑は現状で長さ0.85m、深さ0.15mを測る。底面中央には径0.15mの円形ピットを有する。40号土坑の時期は出土遺物から弥生時代頃で、41号土坑はそれ以前か。41号土坑からは土師器の細片が出土したが、図化はできなかった。

42号土坑（図版27、第62図）

40・41号土坑の北側で検出した土坑である。形状は長円形状で、長さ0.95×0.65m、深さ0.15～0.35mを測る。東側が一段さらにピット状に深くなる。埋土はにぶい褐色や黄橙色土が堆積する。図化できる遺物もなく、時期は不明である。

43号土坑（第62図）

35号掘立柱建物跡の東側で検出した土坑で、西側をピットに切られている。やや崩れた隅丸長方形で、長さ3.0×1.8m、深さ0.85mを測る。中央部分はさらに一段深くなるが、断面は概ね逆台形状を呈する。埋土は淡茶褐色粘質土で、周辺の弥生・古墳時代の埋土とは異なる。それより以前の風倒木痕の可能性もある。出土遺物はなく時期は不明である。

44号土坑（図版27、第63図）

これも35号掘立柱建物跡の東側で検出した土坑である。形状は円形で径1.4m、深さ0.2mを測る。北側は2つのピットを切るが、南側はピットに切られる。断面は逆台形状で、埋土は上層で黒褐色粘質土が堆積し、下層は黒色ブロックが混ざる明赤褐色粘質土が堆積していた。須恵器片や土師器片が出土したが、図化できるものはほとんどなかった。土師器坏片から、8世紀末頃か。

出土土器（第64図）

111は土師器坏の底部片で、摩滅していて調整は不明である。

45号土坑（図版27、第63図）

33号掘立柱建物跡の北側で検出した土坑である。形状は隅丸方形で断面は逆台形状を呈す。長さ1.0×0.95m、深さ0.2mを測る。遺構検出時には西壁隅で焼土に混ざって、須恵器塚の高台片が出土した。埋土からは須恵器の塚片と土師器片も出土した。

出土土器（図版44、第64図）

112は須恵器塚の高台片である。1～3mmの砂粒片が多く含み、胎土は粗い。高台径10.6cmを測り、高台端部の内面が接地する。

46号土坑（図版28、第63図）

33号掘立柱建物跡の南側で検出した土坑である。形状は長円形状で径1.2～1.35m、深さ0.15mを測る。断面は浅い逆台形状である。埋土は灰褐色～暗褐色土である。埋土から須恵器片と土師器片が出土した。

出土土器（第64図）

113～115は須恵器である。113と114は坏蓋の口縁部片である。113は口縁端部が嘴状になる。114は口縁端部は丸みを帯びる。115は塚の口縁部片である。116は甑の把手片で、把手の先端部が他のと比べて丸みを帯びる。

47号土坑（図版28、第63図）

上面中央を37号掘立柱建物跡や14号溝に切られて検出した土坑である。形状は少し崩れた隅丸長形状で、長さ1.75～2.4m、深さ0.3mを測る。土坑の時期は建物や溝に切られており、それ以前か。そのため、出土遺物の多くはそれらに伴う可能性がある。

出土土器（図版44、第64図）

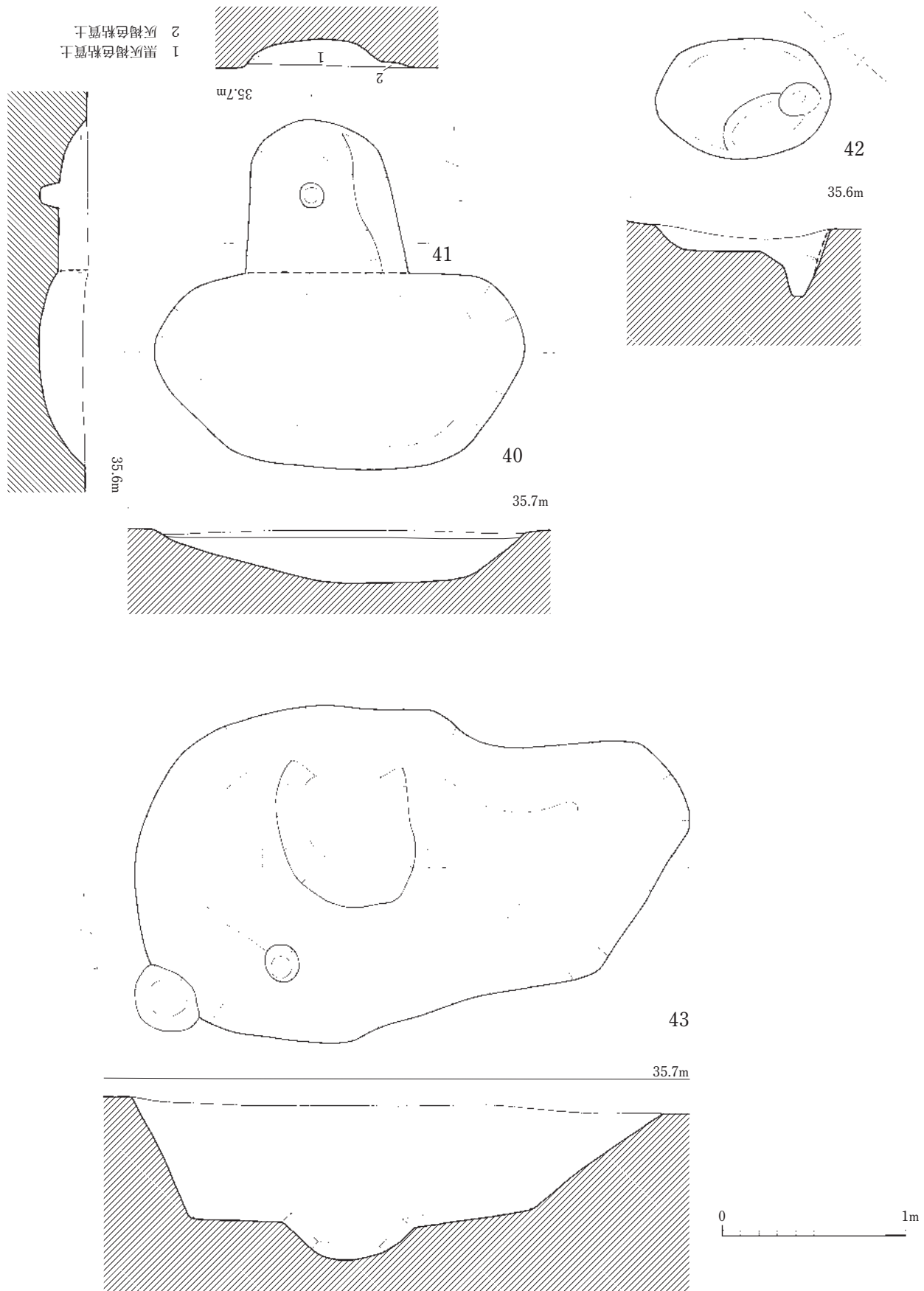
117は須恵器坏蓋の撮み片である。撮みの中央部分が突き出る。118は須恵器壺の頸部～体部片である。頸部付近の形状から、口縁までは短いか。外面には丁寧にカキ目を施す。119～121は土師器である。119は坏片で、摩滅していて器壁は剥がれ落ちる。120は逆「L」字形の甕の口縁部片である。121は甑の把手片で、これも他のと比べて小さいサイズである。

48号土坑（第63図）

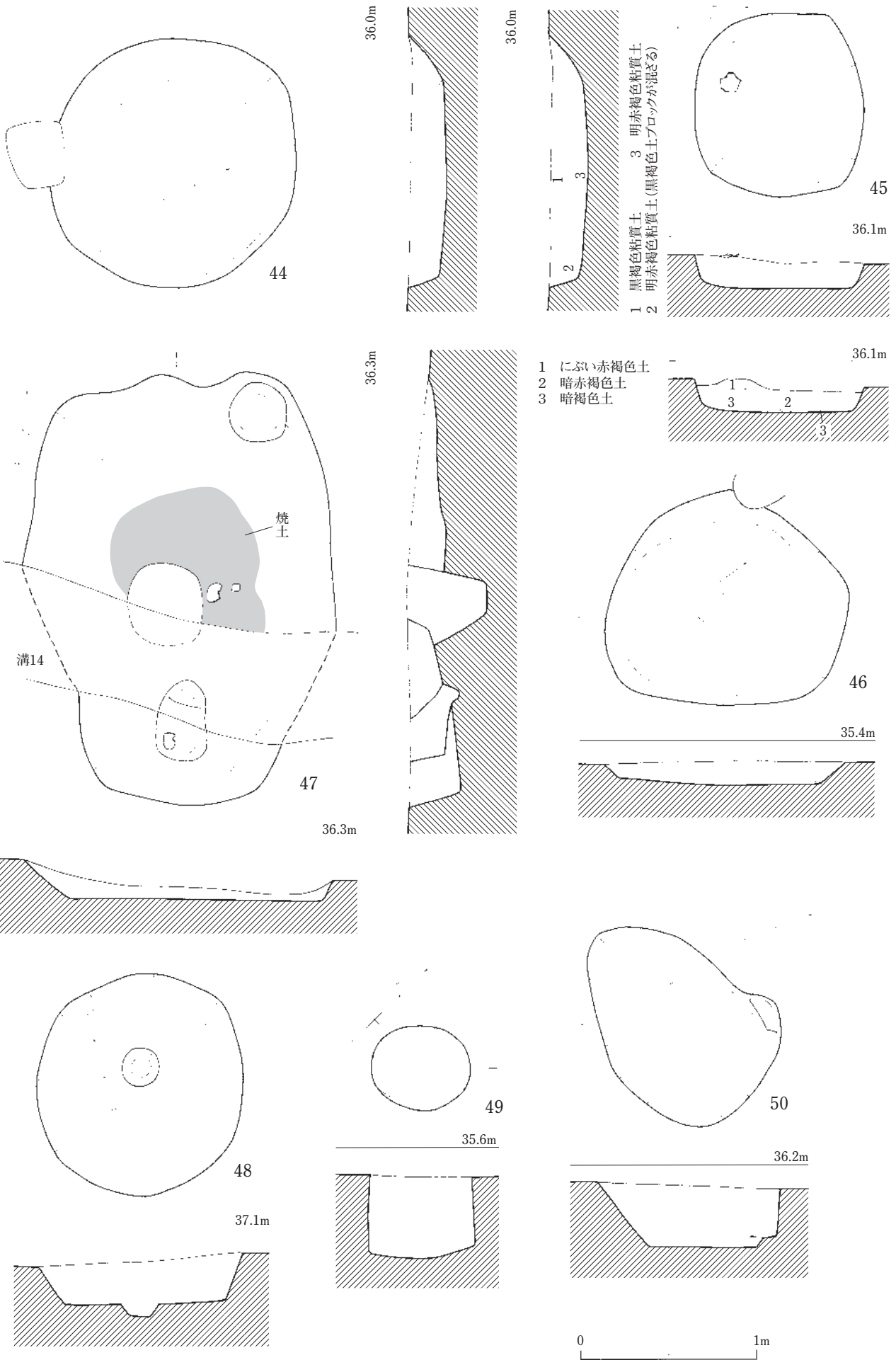
40・41号土坑の東側で検出した土坑である。形状は円形で径1.2m、深さ0.3を測る。底面は平坦で、中央部分には径0.2mの円形ピットがあることや周囲の調査結果から考えると、貯蔵穴の可能性はある。

49号土坑（図版28、第63図）

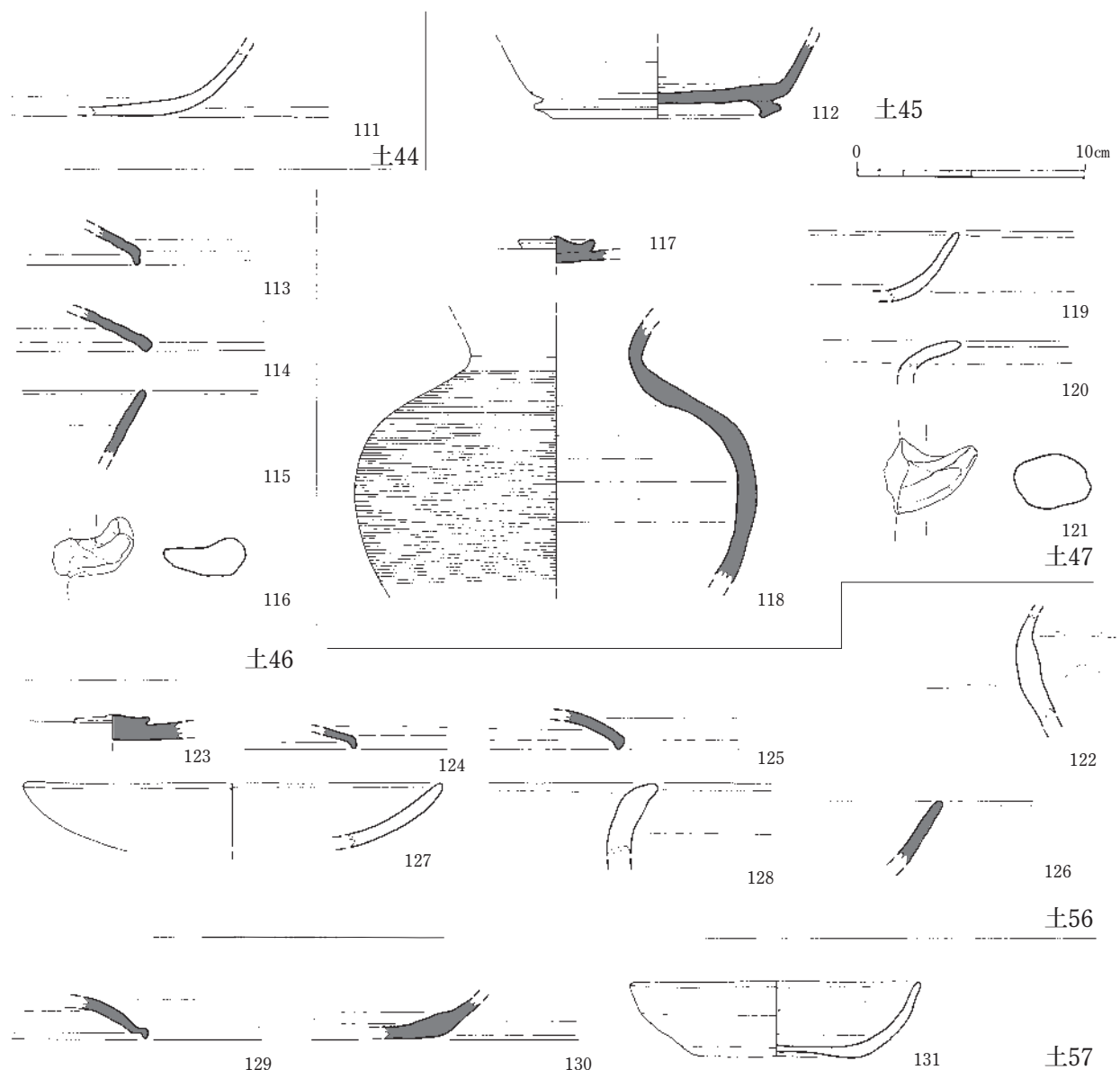
48号土坑の北東側で検出した土坑である。調査途中でP756から番号変更をし、49号土坑と変更した。形状は長円形状で、長さ0.45～0.55m、深さ0.45mを測る。底面は僅かに抉れ、上面より広がる。



第62図 土坑実測図1 (1/30)



第63図 土坑実測図2 (1/30)



第64図 土坑出土土器実測図1 (1/3)

50号土坑 (第63図)

39号掘立柱建物跡の東側で検出した土坑で、上面は2つのピットに切られていた。形状は不整形で、長さ1.0m、深さ0.35mを測る。南側に僅かに段がつくが、底面は平坦である。上層から、土師器片が出土したが、図化できなかった。

51・52号土坑 (第65図)

35号掘立柱建物跡の北側で検出した土坑である。調査時に、土坑が切り合うような状態であったので、北側の一段下がった部分を51号土坑とし、上面の南側部分をを52号土坑とした。掘り下げた結果、1つの長円形状で、長さ1.6~1.8m、深さ0.25mを測る。51号土坑は中央部分が一段、径0.2~0.3mのピット状に掘り込まれていた。51号土坑からは土師器の細片が出土したが、図化できなかった。

53号土坑（第65図）

43号土坑の東側で検出した土坑である。形状は長円形で1.2～1.3m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形状で、底面は平坦である。出土遺物はなく不明である。

54号土坑（図版29、第65図）

調査区の南側で検出した土坑で、長軸1.0、短軸0.6m、深さ0.6mを測る。形状は隅丸長方形で、埋土は淡茶褐色粘質土である。底面は平坦で、中央部分には径0.2m、深さ0.4mのピット状の掘り込みを1つ検出した。このピット状の掘り込みがあることや埋土から石鏃が1点出土したことから落とし穴ではないかと判断した。詳細な時期は不明だが、石鏃の出土から縄文時代の落とし穴か。

55号土坑（図版29、第65図）

33号掘立柱建物跡の東側で検出した土坑である。上面はピットに切られているが、長軸2.3、短軸1.8mを測る。また深さが0.15m以下と浅い。形状は長方形で、断面は逆台形状を呈する。土師器小片がビニール1袋分出土した。

出土土器（第64図）

122は土師器甕又は甑の頸部片か。口縁端部が欠損するが、頸部は内湾する。

56号土坑（図は29、第65図）

51・52号土坑の東側で接した土坑で、他のピットが土坑内を掘り込んでいた。形状は長方形で長軸1.8m、短軸1.3m、深さ0.05mとかなり浅い。中央部分には径0.3mの焼土が広がっていたので、調査当初は住居の可能性も考えた。住居の上面を飛ばされた可能性もあるが、ここでは土坑として判断した。

出土土器（第64図）

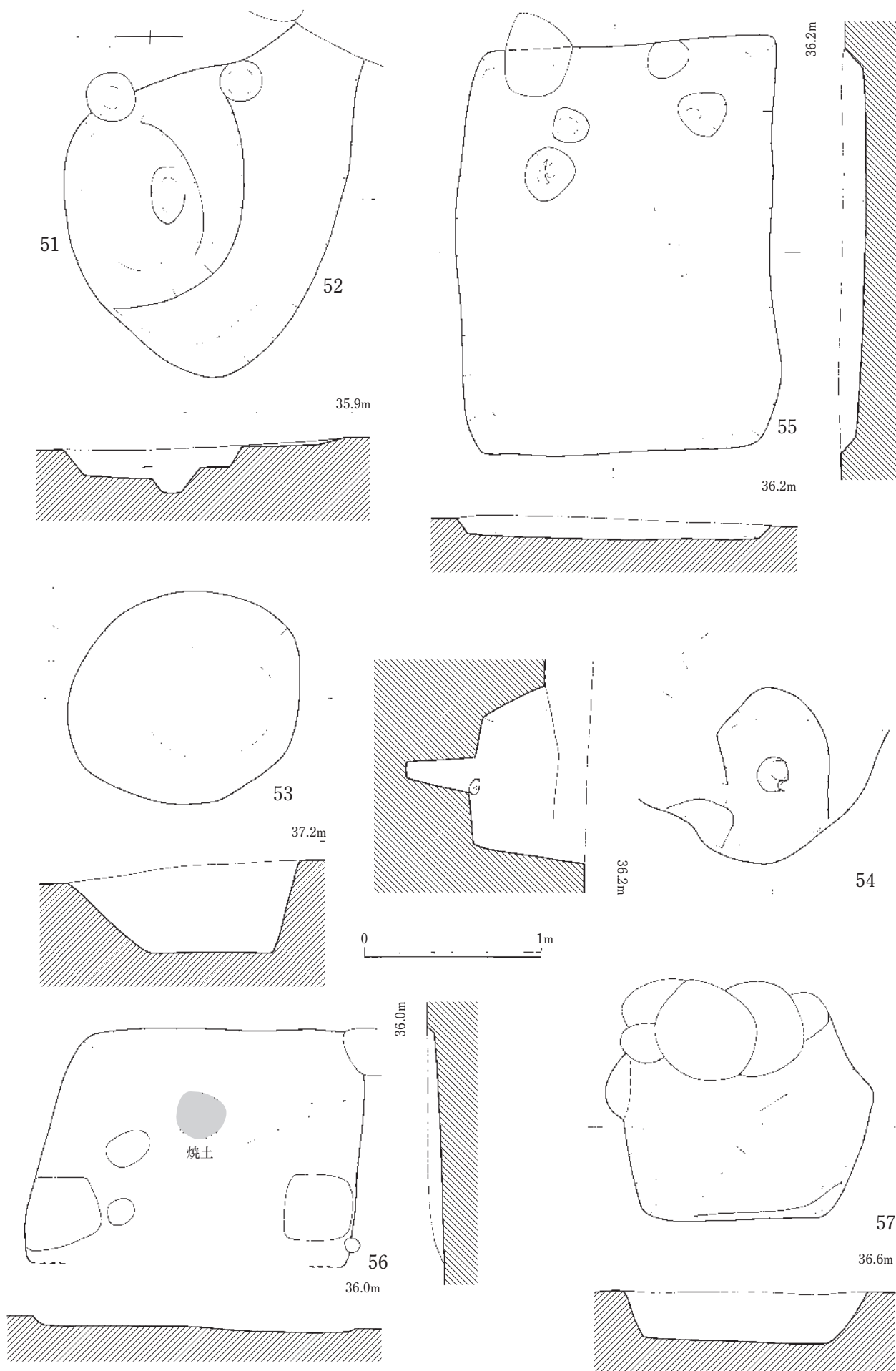
123～126は須恵器片である。123～125は坏蓋片である。123も撮みの中央部分が突き出る。坏蓋の口縁端部は124は嘴状で角張り、125は丸々んでいる。126は須恵器碗片である。127は土師器坏の口縁部片か。復元口径18.4cmを測る。128は土師器甕又は甑の口縁部片か。口縁端部は厚手である。

57号土坑（図版30、第65図）

唯一、Ⅵ区で検出した土坑である。上面の北西側をピットに切られるが、長軸1.5m、短軸1.3mを測る。断面は逆台形状を呈し、底面付近には、土師器坏や長さ0.15mの板石がある。上面から0.3m程しか掘り下げることができなかつたので、井戸の可能性は低いか。また土坑墓とも考えたが、明確に判断できる材料を検出することができなかつた。なお、土坑の時期については、出土した土師器坏から考えると8世紀後半頃と思われる。

出土土器（図版44、第64図）

129は須恵器坏蓋の口縁部片か。口縁は嘴状で、130は須恵器坏の底部片か。131は土師器坏である。約1/2残存し、口径12.7cmを測る。体部下半は丸々が、口縁に向かって直線になる。内面に僅かだが、ミガキの痕跡がある。



第65图 土坑实测图3 (1/30)

以下、Ⅲ-1・3区検出の土坑である。

58号土坑（第66図）

Ⅲ-1区で検出した土坑である。調査時には52～54号不明遺構（SX52～54）として番号を付けたが、今回の報告では58号土坑として番号の変更を行った。隅丸長方形の土坑が2つ連なるような形状であるが、一つの土坑として取り扱った。長軸1.3m、短軸0.2～0.5mを測る。深さ0.1m以下と浅く、そのため土坑内及び周辺から土器片が出土した。土坑の時期は出土した須恵器碗の高台片から8世紀頃か。

出土土器（図版45、第67図）

132～137は須恵器である。132は須恵器坏蓋の口縁部片である。端部は欠損する。蓋としたが身の可能性もある。133～135は須恵器坏身の口縁部片である。134は口縁部が長く立つ。136は須恵器碗の高台片である。137は須恵器甕の口縁～頸部片である。調整は内外面とも回転横ナデであるが、外面には頸部よりやや上で、カキ目を施す。138は土師器甕の口縁～体部上半片である。摩滅して調整は不鮮明だが、内面には接合痕が見える。

59号土坑（図版30、第66図）

Ⅲ-3区で検出した土坑で、7・8号竪穴住居跡のすぐ西側に位置する。長さ5m、深さ0.3mを測り、西側の谷に向かってなだらかに下がっていく。幅も2～3.1mと広がっていく。底面の中央部分は、0.1～0.2mと一段掘り下げられた。埋土は3層に分けられ、褐色土に地山である橙色土のブロック片が混ざっている。長さ5mや谷部へ向かうということから、溝の可能性もある。土坑の時期は出土土器から7・8号竪穴住居とほぼ同じの6世紀後半頃か。

出土土器（図版45、第67図）

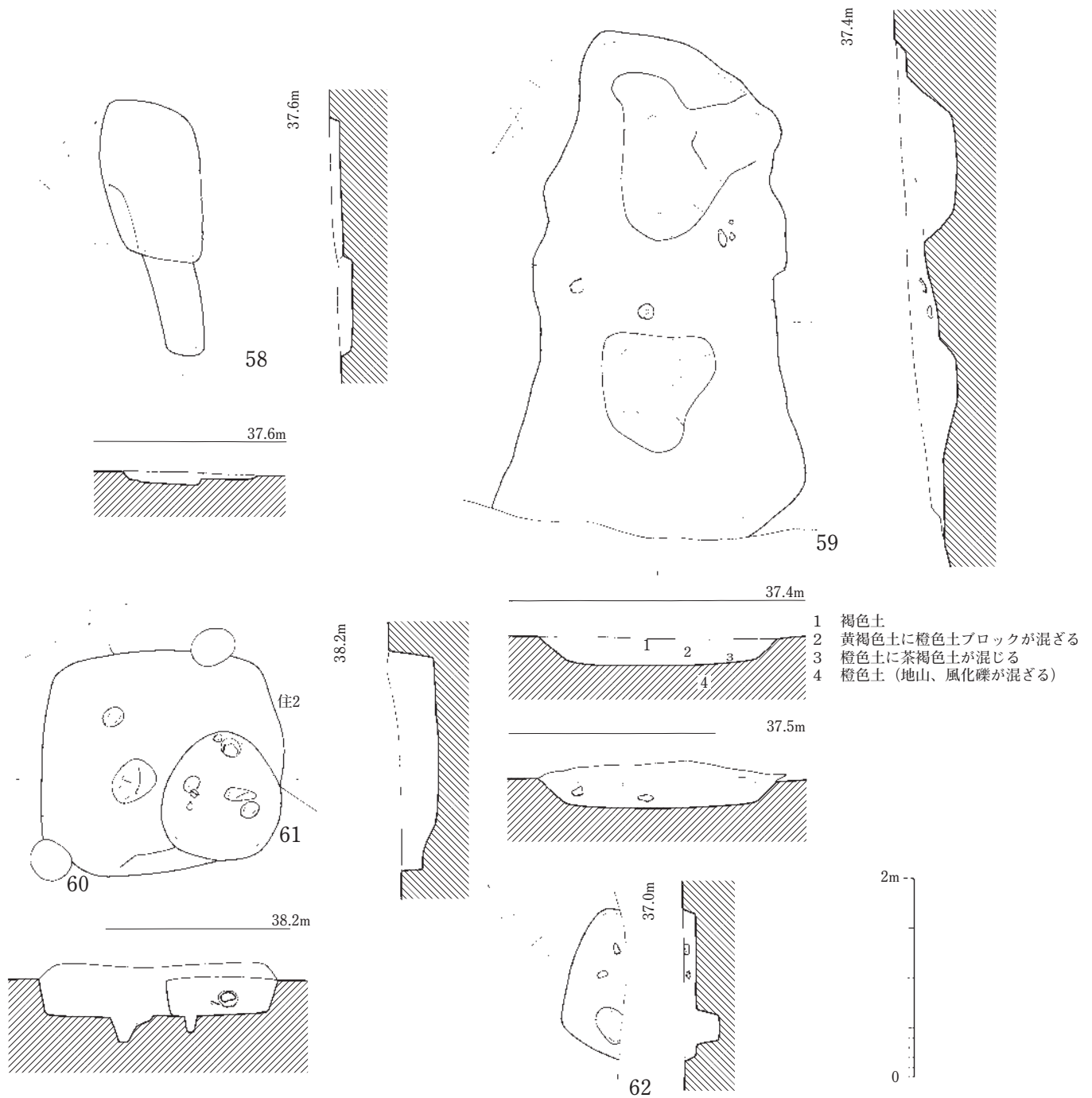
139は須恵器高坏の坏蓋である。やや焼成が不良なのか、色調は赤灰褐色を呈する。復元口径14.2cmを測る。140は有蓋高坏の坏部片である。坏部と脚部との接合部分で脚部のみを欠損する。復元口径で13.6cmを測る。139の口径がやや大きいことから、140とのセットの可能性はある。

60号土坑（第66図）

2号竪穴住居跡の南東隅を切る形で検出した土坑である。遺構検出時には円形の土坑が方形の土坑を切った形で検出したので、方形部分を60号、円形部分を61号とした。60号土坑の形状はほぼ方形で長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.25mを測る。底面は平坦で、中央には長円形のピット径約0.2mがあり、さらに深さ0.15m分掘り下げられた。土坑の時期は2号住居跡を切ることや須恵器碗が出土していることから8世紀中頃か。

出土土器（図版45、第67図）

141と142は須恵器碗である。形状ほとんど似ているが、器高5.1、4.1cmと1cmの差がある。高台径は142の方がやや広い。それぞれの口径は10.6、10.2cmを測る。143は須恵器皿片である。口縁～底部まで均一の厚さで作られる。外面底部はヘラ切りで、内外面とも回転横ナデである。復元口径16.2cmを測る。



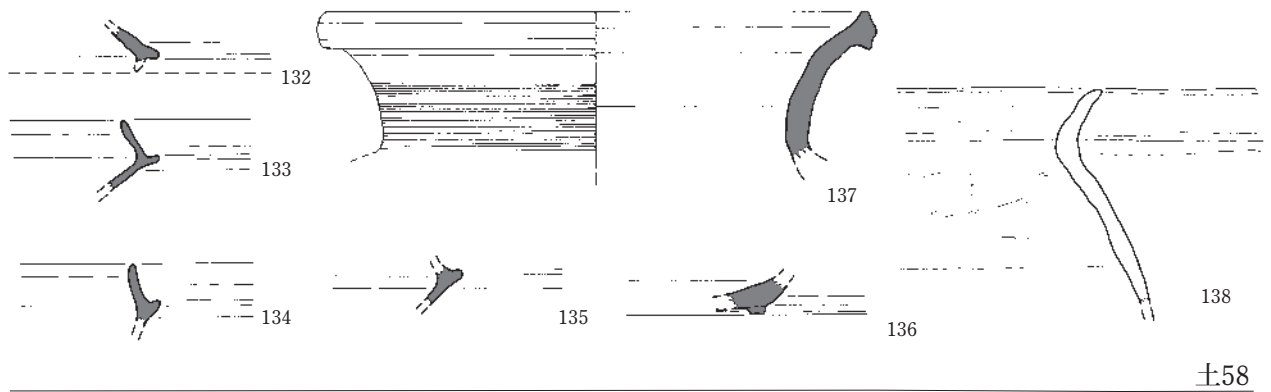
第66図 土坑実測図4 (1/60)

61号土坑 (図版30、第66図)

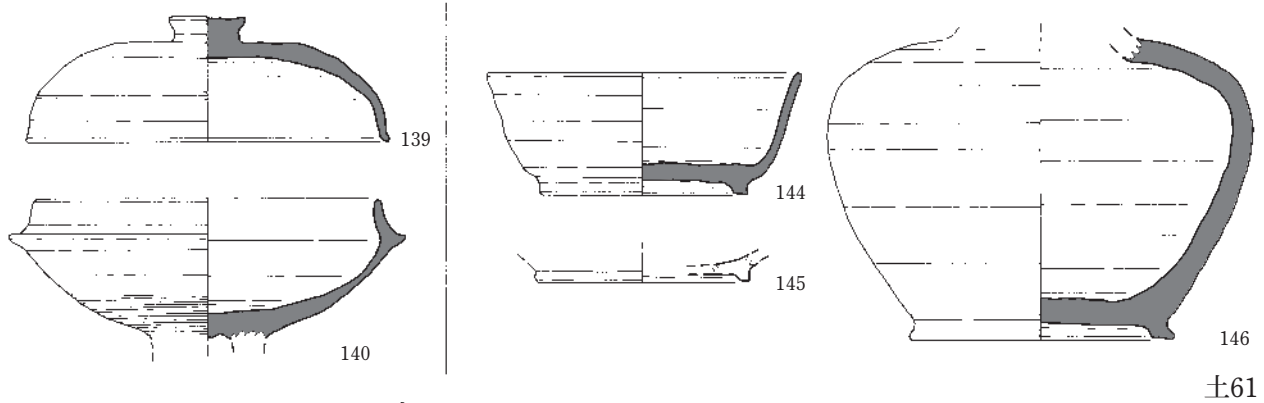
60号土坑の東隅を切る形で検出した土坑である。形状は長円形状で、径0.6~0.65m、深さ0.2mを測る。北西壁側では、壺片が底面よりやや上で出土した。60号土坑と同時期の須恵器片が出土したが、60と61号と分けた。同一の土坑の可能性はある。

出土土器 (図版45、第67図)

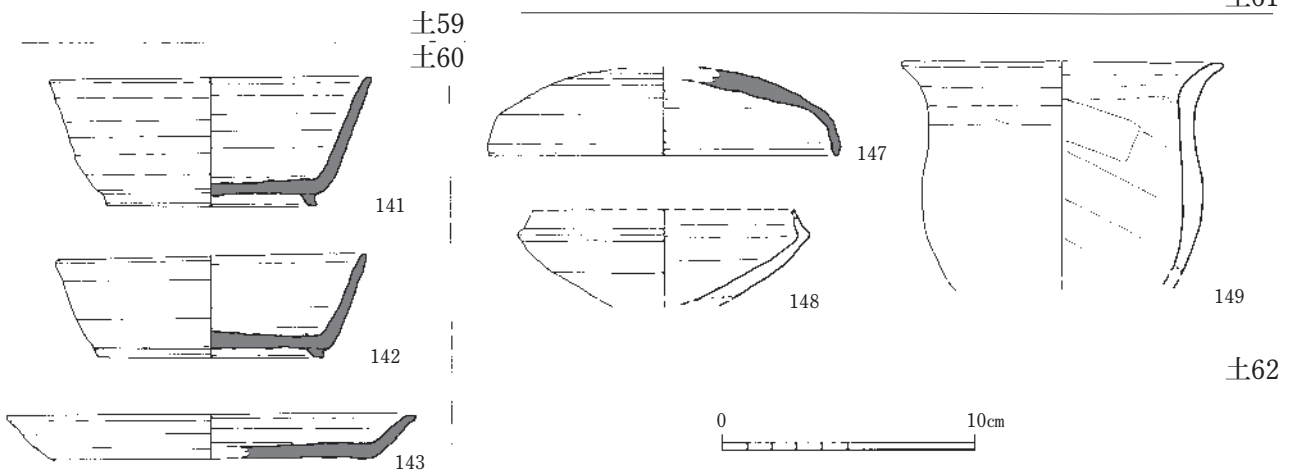
144と145は須恵器碗である。144は高台の断面は四角形である。調整は外面底部はヘラ切りで、他は内外面とも回転横ナデである。復元口径12.4cmを測る。145も高台片であるが、焼成不良で灰白色を呈す。復元高台径で8.4cmを測る。146は肩部より上を欠損した壺片である。高台部分は僅かに窪み、外側に伸びる低い高台がつく。外面肩部から下にかけて丁寧なヘラケズリを施す。



土58



土61



土62

第67図 土坑出土土器実測図2 (1/3)

62号土坑 (第66図)

Ⅲ-1区の東側で検出した土坑である。調査区際で検出したため、半分以上は未検出である。残像する形状から、おそらく隅丸方形又は長形状か。現状で長さ0.7m、深さ0.05mを測る。南西側でピット状の径0.15m、深0.1mの掘り込みがある。土坑内からは須恵器片・土師器片が出土し、それから時期を検討すると7世紀頃前半か。

出土土器 (第67図)

147は須恵器坏蓋片である。調整は外面天井部をヘラケズリ、それ以外は回転横ナデ調整である。復元口径14.0cmを測る。148は土師器坏片で、口縁端部と底部を欠損する。復元口径10.4cmを測る。149は土師器甕片で、頸部から「く」の字形に曲がる。調整は外面摩滅するが、内面には斜め方向のケズリを施す。復元口径12.8cmを測る。

5. 溝（第68図）

Ⅲ区およびⅥ区で検出した溝は近代の溝であるため、ここでは報告していない。13～19号溝はⅤ区検出であるが、削平を受けているので、全ての溝が深さ0.1～0.2mを浅い。

13号溝（第68図）

調査区北側の6号竪穴住居跡の西側で検出した溝である。北北東に伸びる溝で、断面はレンズ状で長さ26.5m、幅0.7～1.0m、深さ0.15mを測る。図化できる遺物は少なく、詳細な時期は不明である。36号掘立柱建物跡のピットを切ることからそれよりは新しい時期か。

出土土器（第68図）

150は土師器甕などの口縁部片か。口縁端部で外側へ開く。

14号溝（第68図）

47号土坑を切る形で検出した溝である。調査区西側で検出したため、溝の全容は不明だが、ほぼ東西方向に一直線に伸びる。2つの溝が連なるような形状で、長さ7m以上、幅0.6m、深さ0.2mを測る。47号土坑を切ることは确实だが、37号掘立柱建物跡との切り合い関係は不明である。出土した白磁片がこの溝の埋没時期を示し、37号掘立柱建物跡よりは新しい時期と考えられる。8世紀後半頃の須恵器片及び12～13世紀の白磁碗片が出土した。

出土土器（図版45、第68図）

151は須恵器坏蓋片で、口縁端部は嘴状である。天井部は肉厚で、口縁に向かって薄くなる。外面天井部はヘラケズリで、他は内外面とも回転横ナデである。復元口径16.0cmを測る。152は壺の高台片である。底部の厚みに比べて高台は薄く、低い。153は白磁碗片である。

15号溝（第68図）

調査区の中央やや西よりの13号溝と並ぶように検出した溝である。溝はほぼ真北に伸びるが、途中で北北東側に曲がり、北側の一部が途切れる。長さ約30m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。溝の時期は、6号住居や35号建物を切ること、また糸切りの土師器坏片から11世紀以降の時期が考えられる。

出土土器（第68図）

154は須恵器坏蓋片である。口縁端部は嘴状になる。155は須恵器碗の高台片である。高台は断面方形で内側の端部のみ接地する。156は外面底部糸切りである。復元口径13.8cmを測る。157は土師器坏の底部片である。調整は摩滅していて不明である。158は土師質鉢の口縁部片である。端部は欠損する。

16号溝（第68図）

33号掘立柱建物跡の柱穴を切る形で検出した「L」字に折れ曲がる溝である。これも調査区西側で検出したため、全容は不明だが長さ約22m、幅0.5～2m、深さ0.15mを測る。浅い溝だが、コーナー部分は約2mと他よりは格段に広がる。土坑の時期は出土した土師質鉢片から中世頃か。

16号溝出土土器（第68図）

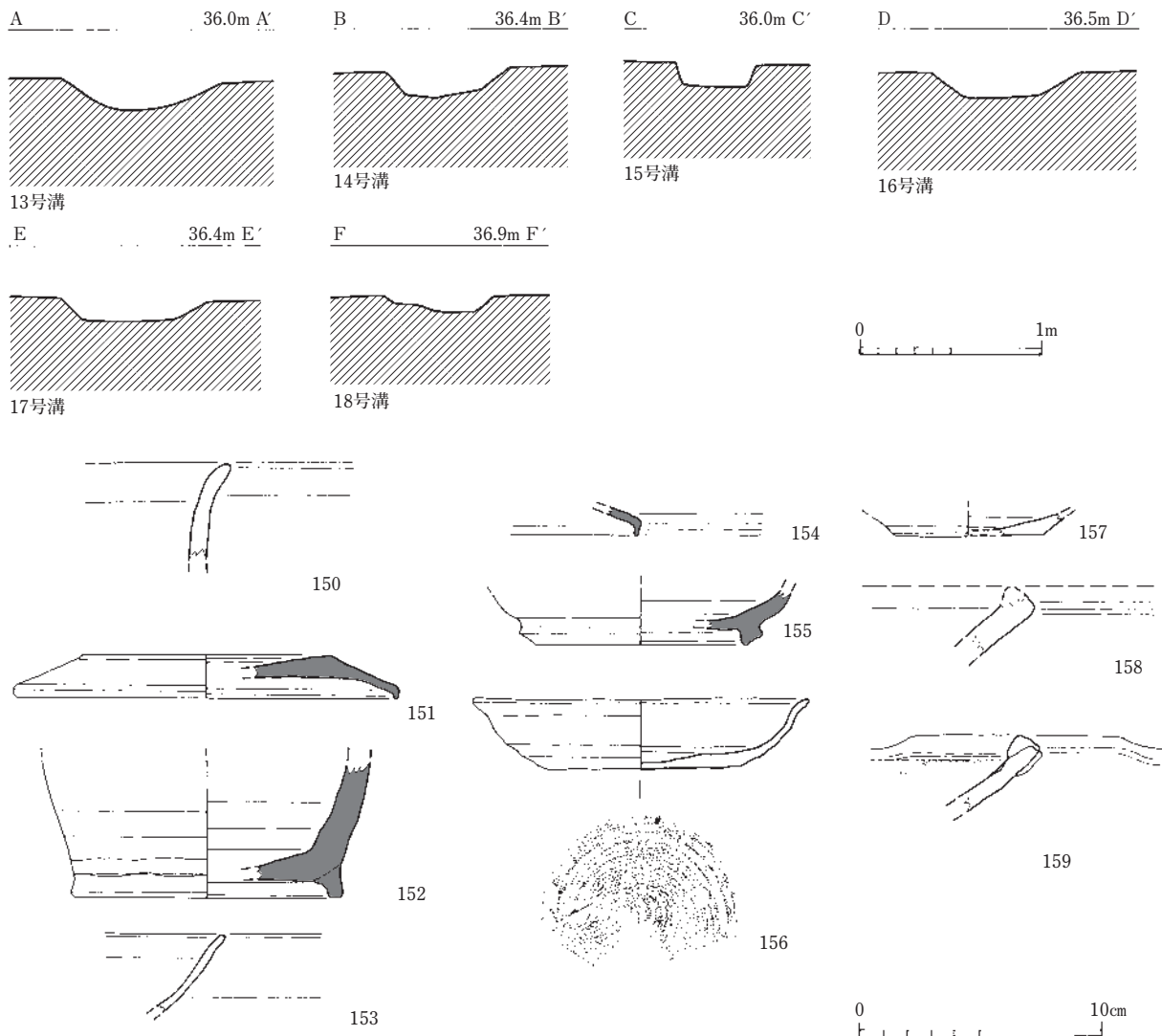
159は土師質鉢の口縁部片である。端部は厚く四角形状に内面が厚くなる。内面に摺り目がある。

17号溝（第68図）

16号溝のすぐ東側で検出した溝である。断面は逆台形状を呈し、長さ2.6m、幅0.8m、深さ0.15mと浅い溝である。須恵器片や土師器片が出土したが、図化できなかった。時期は古墳時代後期以降か。

18号溝（第68図）

調査区東側で検出した溝で、本来一つの溝が削平されたため、途切れ途切れになって3つに分かれている。一番北側の溝の断面は西側に段を有するが、台形状である。長さ約15m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。土師器の細片が出土したが、時期は不明である。



第68図 溝および出土土器実測図（1/ 40、1/ 3）

6. 道路跡（図版31～40、第69～89図）

今回の調査では、古代の道路跡は、Ⅲ-1区、Ⅲ-2区、Ⅲ-3区、Ⅵ区の4地区で検出した。現道によってそれぞれの調査区は途切れているが、長さ約130mを検出したことになる。道路跡についてはそれぞれの区ごとに説明する。

Ⅲ-1区検出の道路跡（図版31～33、第69～76図、付図1）

Ⅲ-1区で検出した道路跡は、今回調査した中では、西側に位置し、ここは調査前、田地であった。1962年の圃場整備前の空中写真（表目次裏）によると東西に延びる道路であった。周辺の圃場整備により地形は改変されており、現在の状況からは遺構の有無が不明だったので、確認調査を行った。その結果、調査区の北側では竪穴住居跡を、南側では道路跡を確認した。調査区内は表土及び盛土部分をバックホーで掘削し、灰褐色土の道路跡を検出した。この灰褐色土（4層）の以下は人力による掘削作業を行い、波板状遺構なども確認した。Ⅲ-1区では道路跡を長さ約40m、幅は調査区際で約1/3切られているが9.6～12mを測る。

道路跡については、土層を南壁、道路跡に設定したトレンチ、東壁、ベルトの4ヶ所設定し、道路内部の堆積状況を確認した。

道路跡に堆積した層位は表土および盛土下の灰褐色土である。この灰褐色土からは、中世までの土器や青銅鏡片が出土した。この層より下層が道路跡に関連した層になる。4層を外すと5層と6層の黒色土が堆積していた。それらを外すと拳大の礫類が多数検出した。波板状遺構はこの面で検出し、8・8'層の褐色砂質土が堆積していた。

東壁は道路跡と谷との関係を探るため拡張し、16・17層の約0.3m以下の道路跡を幅12m分を確認した。しかし谷であるために本来の道路幅を正確に表しているかどうかは不明である。

なお、道路跡北側で道路跡と並行して延びる溝は、埋土および土層から圃場整備前に掘られた攪乱であり、他の地区同様に道路跡とは関係ないと思われる。

波板状遺構（図版31～33、第72～75図）

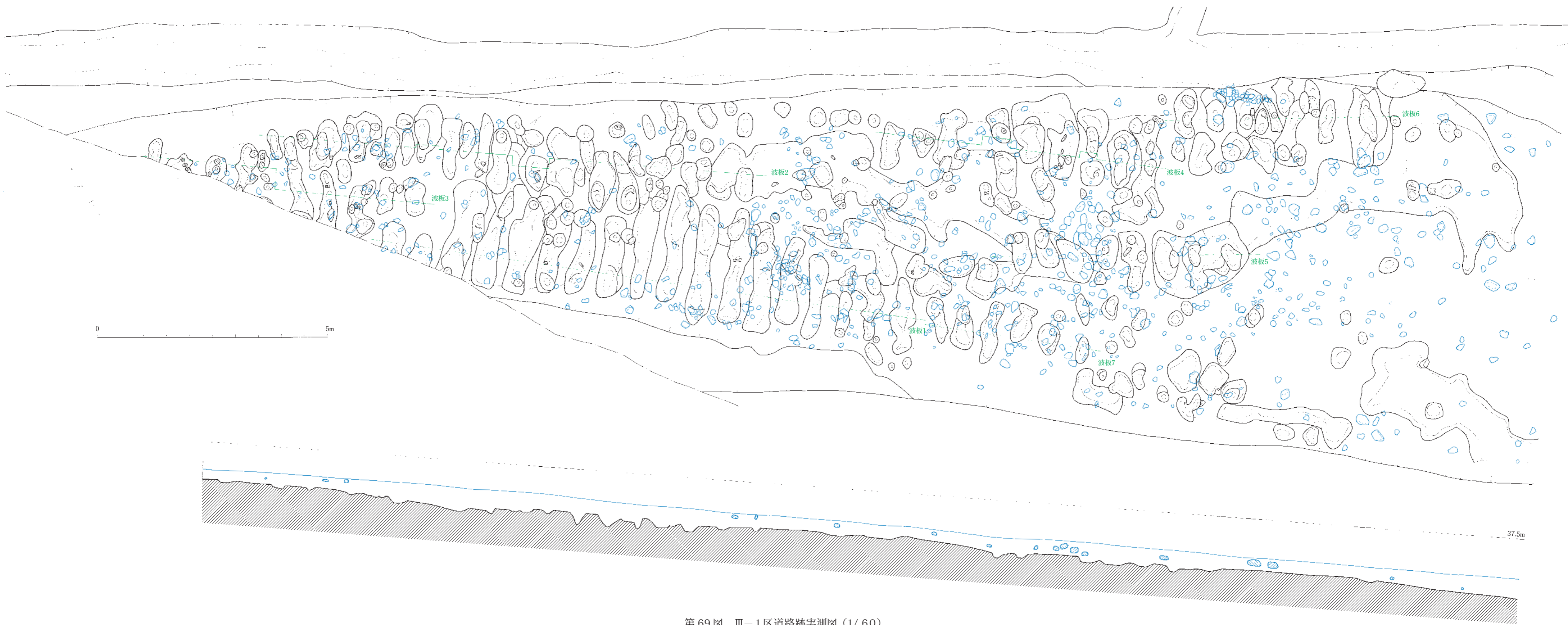
Ⅲ-1区ではかなり明瞭な波板状遺構を検出した。複雑で多数の痕跡を検出したため、調査時では番号を付けてはいないが、報告時にそれぞれに波板状遺構1～7と番号をつけた。いずれの波板状遺構は埋土は砂質土で、固くしまっているわけでない。なおⅢ-1区の波板状遺構からは遺物は出土しなかった。

波板状遺構1（第72図）

道路跡の南側で検出した波板状遺構で、西側は調査区際までを延びる。長さ11.8mの範囲には、長軸0.6～2.6m、短軸0.2～0.8mを測る。中間部分が深くなり、深さ0.1～0.3mを測る。0.1～0.4m間隔で細長い長円形状の痕跡が、18個確認した。なお、西側の波板3と東側の波板7とは、一連の痕跡の可能性がある。

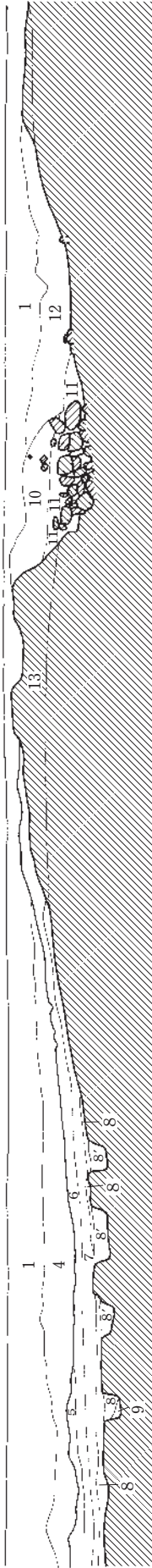
波板状遺構2（第73図）

波板1の北側に位置する遺構で、東側の谷に向かにつれて痕跡は消失する。長さ10.6mの範囲には、長軸0.5～1.4m、短軸0.2～0.5m、深さ0.1～0.3mを測る。長円形～不整形の痕跡が0.1m以下とほぼ隙なく20個以上並んでいる。

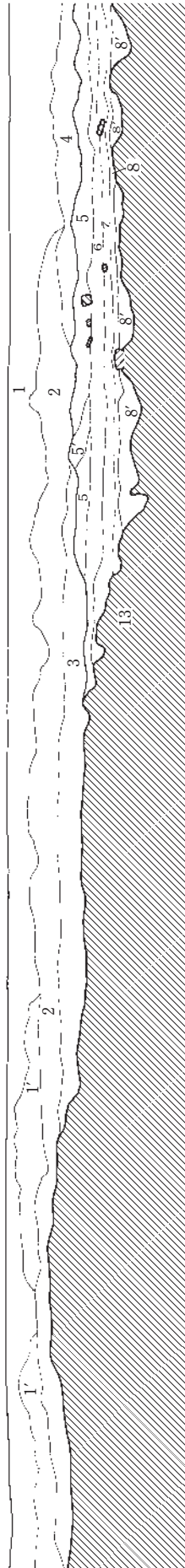


第 69 图 III-1 区道路迹实测图 (1/60)

38.0m A

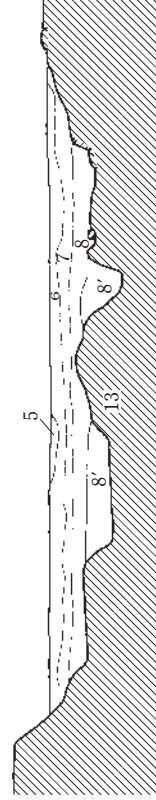


38.0m



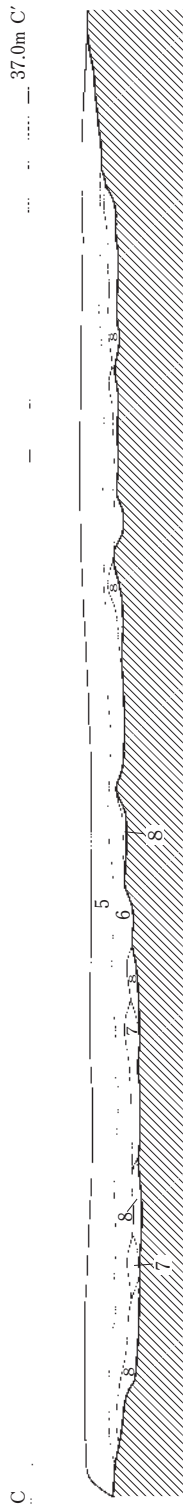
- 1 汚れた橙色土 (圃場整備時の盛土)
- 1' 1とほぼ同じ
- 2 茶褐色土 (圃場整備前の水田土)
- 2' 2とほぼ同じ
- 4 灰褐色土
- 5 黒色土に多量の橙色土が混ざる (凸凹状になる)
- 5' 5より橙色土が多い
- 6 黒色土
- 7 褐色粘砂土 (橙色土ブロックが少し混ざる)
- 8 褐色粘質土に橙色土が混ざる
- 8' 8よりマンガンを含む
- 9 灰褐色粘砂土
- 10 灰褐色粘質土
- 11 10より20～30cmの礫石を多く含む
- 12 灰色粘質土 (鉄分を多く含む) 近現代の溝埋土
- 13 橙色土 (地山)

37.4m B'

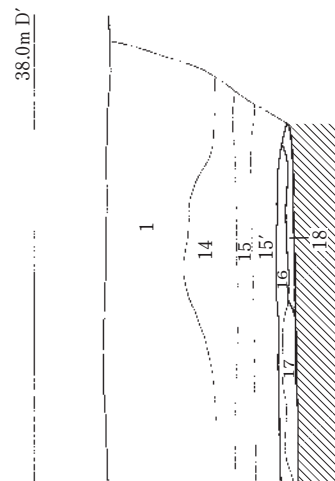


0 3m

第70図 Ⅲ-1区土層図1 (1/50)



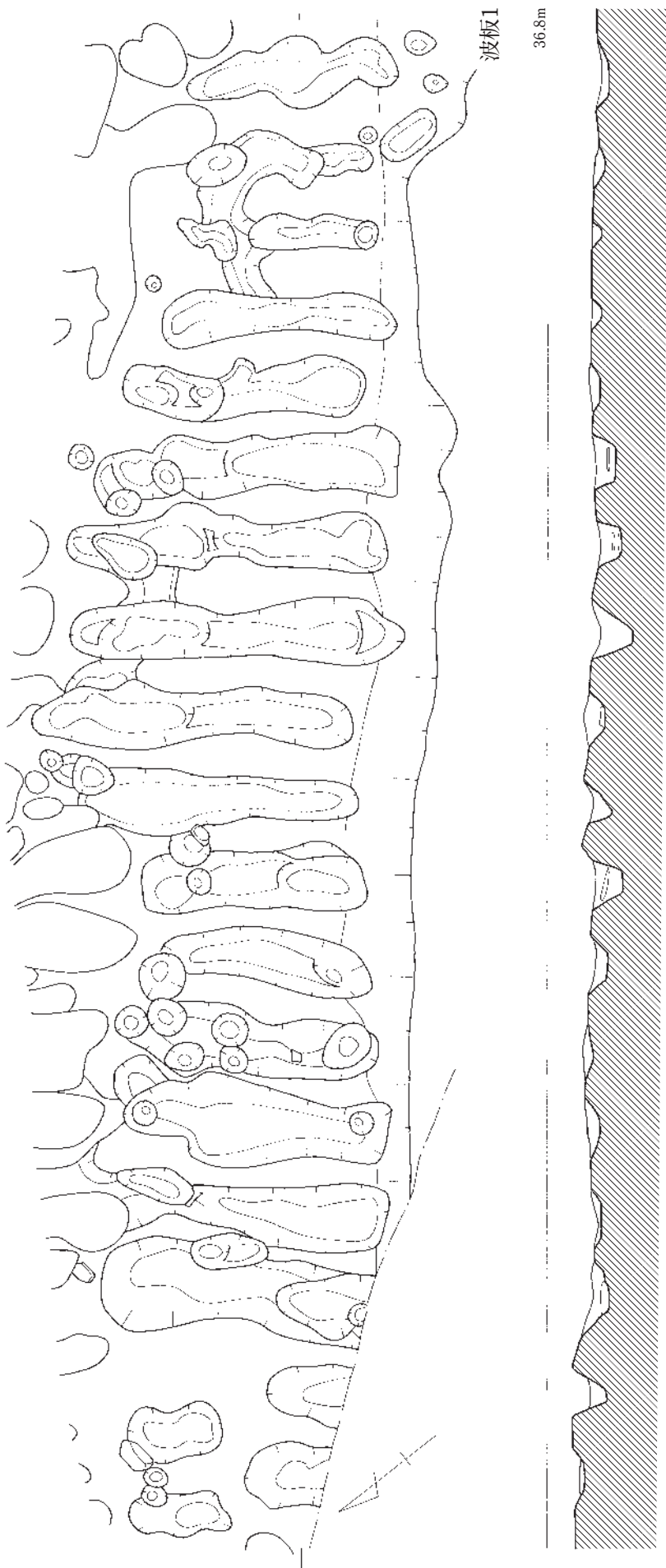
- 1 汚れた橙色土 (圃場整備時の盛土)
- 5 黒色土に多量の橙色土が混ざる (凸凹状になる)
- 6 黒色土
- 7 褐色粘砂土 (褐色土ブロックが少し混ざる)
- 8 褐色砂質土に褐色土が混ざる
- 14 青灰色粘質土
- 15 黄灰色粘質土
- 15' 15層とほぼ同じ
- 16 黒灰色粘質土と灰色粘質土が混ざる
- 17 黒灰色粘質土
- 18 緑灰色粘砂土 (地山、グライ化する)
- 19 灰茶色粘質土に橙色土ブロックが混ざる
- 20 灰黄色粘砂土
- 21 灰褐色粘砂土 (礫石が混ざる)
- 22 灰褐色粘砂土 (粘性が強い)



東壁土層



第71図 Ⅲ-1区土層図2 (1/50)



波板状遺構3 (第74図)

道路跡の西側際で検出した波板状遺構である。調査区際なため、長さ6.2m分しか検出できなかった。東側の波板状遺構1に繋がる。長円形や不整形の痕跡が0.1~0.3mの間隔を空けて10個並んでいる。長軸0.3~1.7m、短軸0.2~0.5m、深さは0.2mを測る。東側の谷から西側の丘陵頂部に向かって緩やかに傾斜する。

波板状遺構4 (第74図)

波板2の東側で検出し、谷近くの遺構である。長さ6.1mの範囲に不整形や長円形の痕跡が0.3mの間隔を空けて9つ並んでいる。それぞれの痕跡は長軸0.7~2.3m、短軸0.2~0.6mを測る。深さは0.2m前後を測り、特に痕跡の中間部分がやや深くなる。

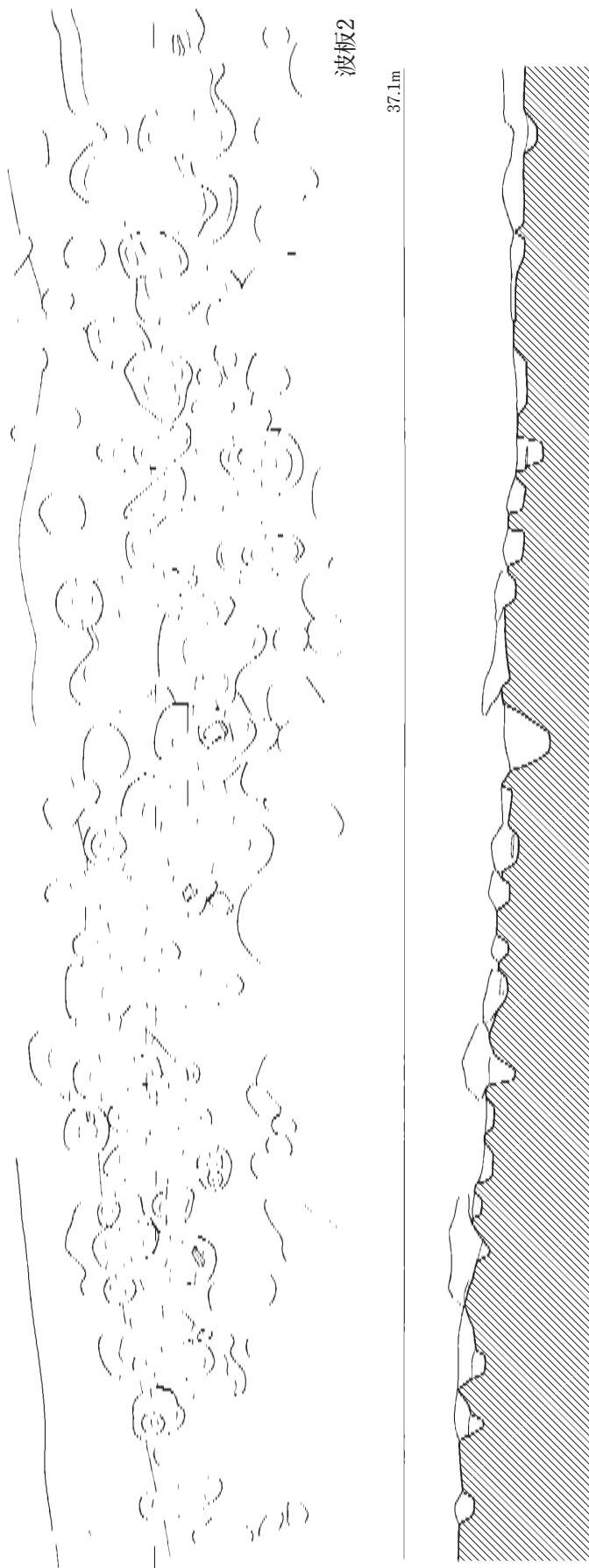
波板状遺構5 (第75図)

波板4の南側の位置で検出した遺構である。長さ5.1mの範囲には長円形や不整形の痕跡がある。長軸2.1m、短軸1.5mを測る東側の不整形の痕跡内には、さらに長軸0.5~1m、短軸0.2~0.5mの長円形の痕跡に分かれる。西側には、長軸0.8~1.3m、短軸0.3~0.6m長円形の痕跡が0.1mの間隔を空けて5つ並ぶ。

波板状遺構6 (第75図)

波板4の東側の位置で検出した遺構である。長さ5mの範囲には、長軸0.4~1.7m、短軸0.3~0.9mの長円形や不整形の痕跡がある。これらの痕跡は東側から西側へ緩やかに上がっていくと、北と南に分か

第72図 III-1区波板状遺構実測図1 (1/50)



波板2

37.1m

2m

0

れる。深さは0.2m以下を測る。それぞれの痕跡は0.2～0.3mの間隔を空けて並ぶ。

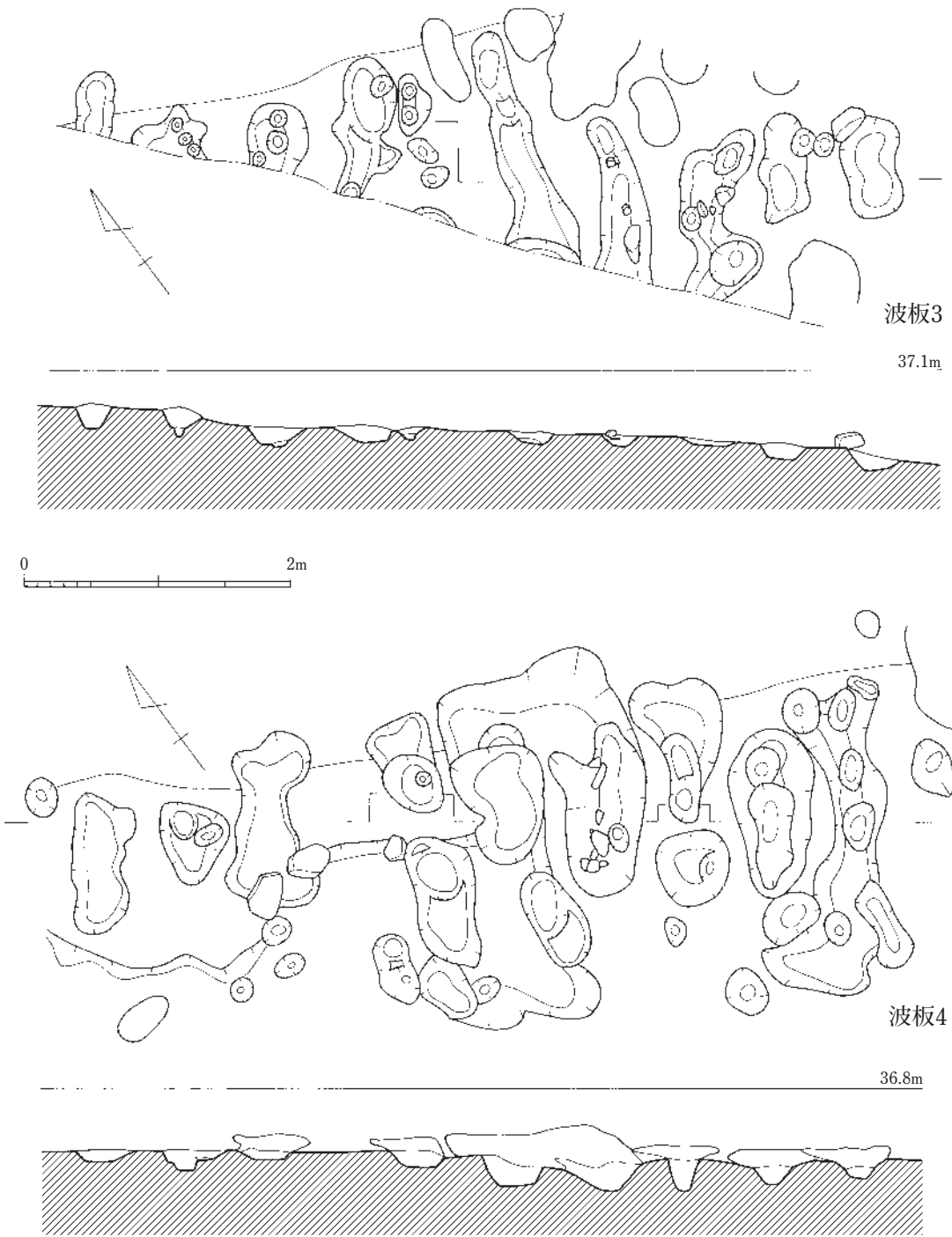
波板状遺構7（第75図）

波板1の東側で検出した遺構である。長さ4.2mの範囲には、径0.25mの円形や長軸0.6～1.3m、短軸0.25～0.5mの不整形の痕跡がある。深さは0.15m以下と浅く、東側の谷に向かって緩やかに下がっている。痕跡も谷むかって小さくなっている。0.1～0.3mの間隔を空けて7つ並ぶ。

Ⅲ-1区道路跡出土土器（第76図）

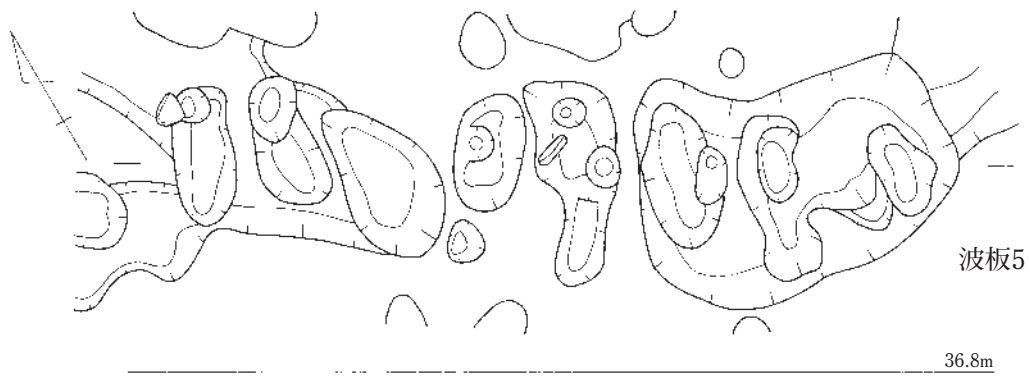
160～186は4層出土である。160～179は須恵器である。160～168は坏蓋片である。160～162はこの中でも古いタイプか。163～165はかえりを持つタイプの坏蓋である。166と167は口縁端部が嘴状である。168は坏蓋の撮み部分である。169は坏身片である。170～173は埴片である。170と171は高台端部が僅かに外側に開くが、172と173は断面三角形となる。それぞれ復元口径で9.6、9.6、9.8、10.0cmを測る。174は高坏脚部片である。175は皿または甗の口縁部片か。176も甗の口縁～頸部片か。外側に向かって大きく開く。177～179は甗の口縁部片である。調整は内外面とも回転横ナデであるが、179のみ外面に波状文がある。180と181は土師器の坏片である。外面底部は糸切りがある。182は白磁碗片である。口縁端部は玉縁状になる。183～186は土師質鉢の口縁部片である。184のみ内面に刷毛目がある。187～194は5層出土である。187～192は須恵器である。187と188は坏蓋の口縁部片である。188は

第73図 Ⅲ-1区波板状遺構実測図2（1/50）

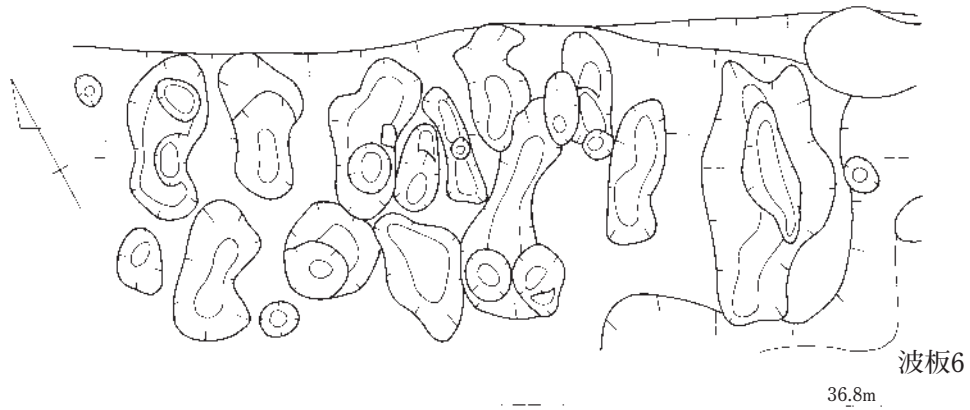
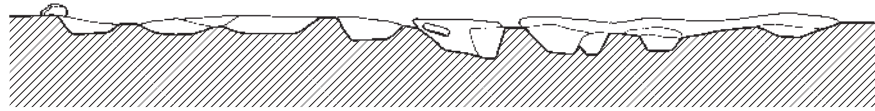


第74図 Ⅲ-1区波板状遺構実測図3 (1/50)

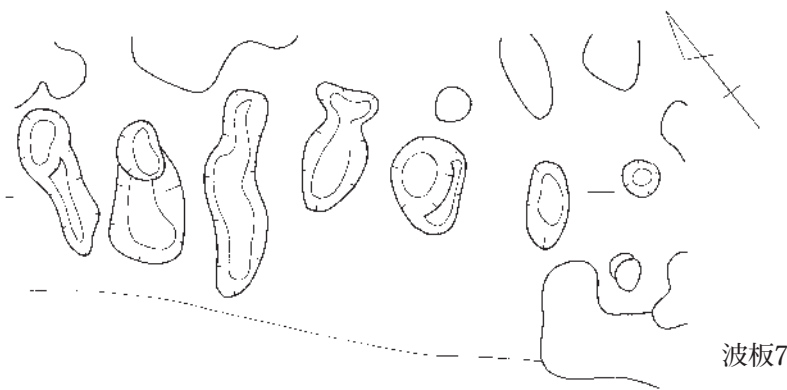
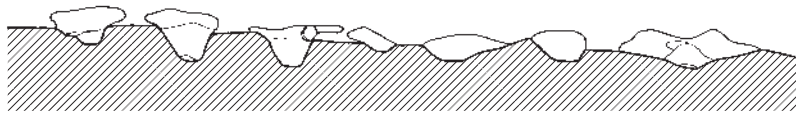
かえりをもつが、口縁端部は欠損する。189は坏身片である。190は埴の高台片である。191は高坏の坏部と脚部との接合部分である。192は提瓶の口縁部片か。僅かに内湾しながら口縁端部に向かって立つ。193は土師器埴の高台片である。194は土師器甕の口縁部片である。195～197は6層出土である。195は坏蓋の撮み部分である。196は埴の高台片である。197は甕の頸部片である。調整は内外面とも回転横ナデであるが、内面下部に同心円の叩きである。198は土師質鉢の口縁部



36.8m



36.8m

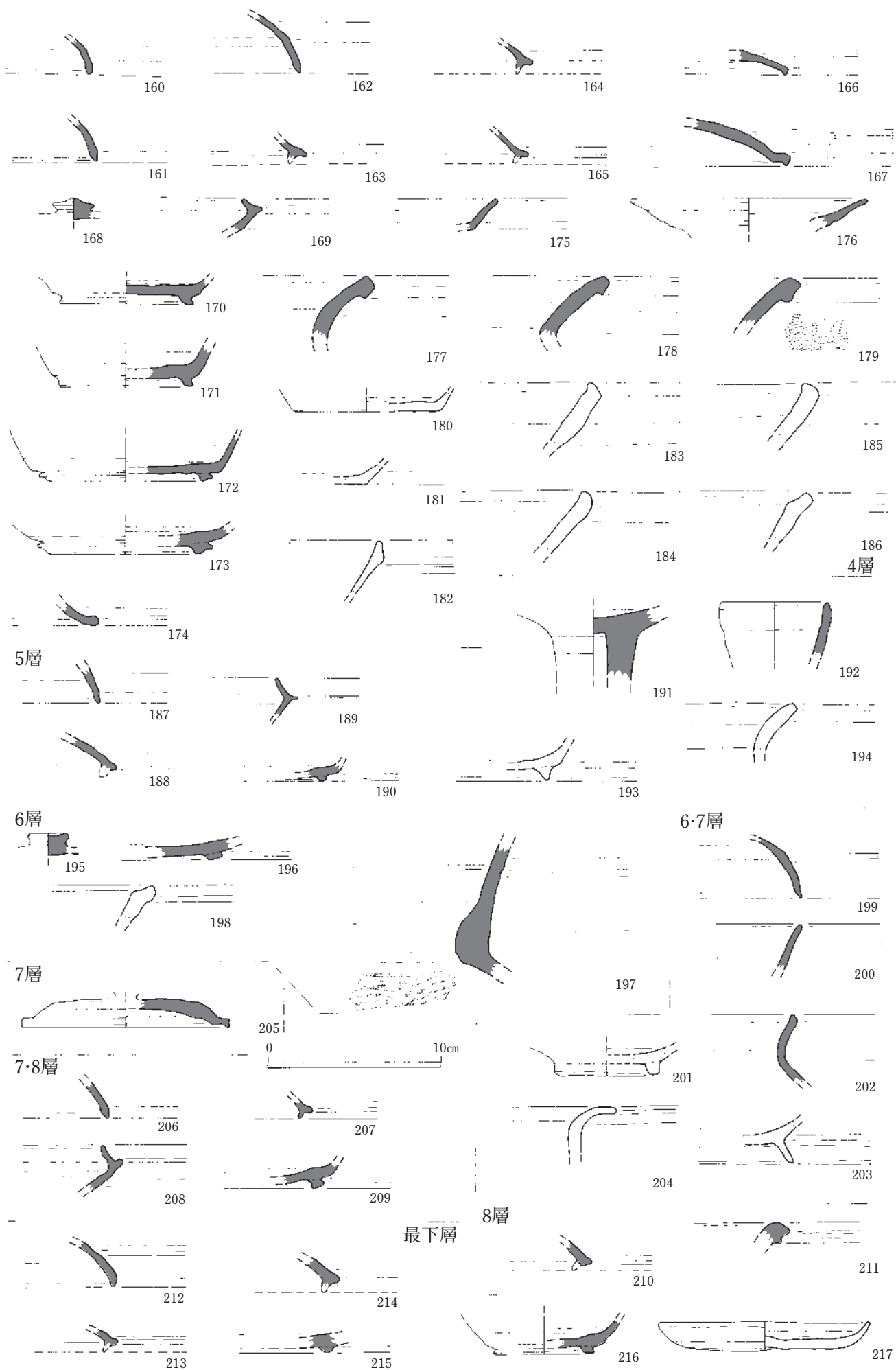


波板7

36.8m



第75图 Ⅲ-1区波板状遺構実測図4 (1/50)



第76图 III-1区道路跡出土土器実測图 (1/3)

片である。199～204は6・7層出土である。199は須恵器坏蓋片である。200は須恵器壺の口縁部片である。201は壺の高台片で、断面四角形で低い高台である。202は甕又は壺の口縁～頸部片である。203は黒色土器の壺片か。高台は細長く、外側に向かって開く。204は甕の口縁～頸部片である。205は7層出土の須恵器坏蓋片である。口縁端部が嘴状になる。206～209は7・8層出土の須恵器である。206と207は坏蓋片である。207は坏身の可能性がある。208は坏身片である。209は壺片である。210と211は8層出土の須恵器である。210は口縁端部を欠損する坏蓋片である。211は甕又は壺の口縁端部片である。212～217は最下層出土である。212～216は須恵器である。212～214は坏蓋片である。215と216は壺片である。216は高台径で5.8cmを測る。217は土師器坏である。外面底部はヘラ切りである。復元口径12.2cmを測る。

Ⅲ-2区検出の道路跡（図版34・35、第77～79図）

Ⅲ-2区は調査前、Ⅵ-1区同様に宅地跡であった。そのため、調査区の大部分は削平されていた。バックホーによる表土剥ぎをした結果、調査区中程は消失していたが、調査区の東西両側で道路跡である黒色土の痕跡を確認した。西側の道路跡の上面で長さ11m、幅6.6m、底面で1.6m、深さ0.4mを測る。東側の道路跡は、削平の影響を受けているが、上面で長さ10m、幅3.6m、底面で幅2.2m、深さ0.2～0.5mを測る。いずれも断面形は中央部分が一番低くなるレンズ状及び逆台形状である。

Ⅲ-2区の土層は基本的にⅢ-1区の土層とほぼ同じである。3層の灰褐色土より下層が道路跡の土層になる。4層以下は約0.1m以下の幅で堆積していたが、特に西側が一段低くなり、その部分には5～9層が堆積していた。主に4層と5層の黒色土間が波を打ったような堆積であった。6層が黒色土、7～9層が褐色粘砂土となる。なお、7層及び14・15層（褐色砂質土）が波板状遺構の埋土である。ここもⅢ-1区同様に地山は橙色土（11層）である。

波板状遺構（図版34・35、第77～79図）

Ⅲ-2区道路跡で検出した波板状遺構は東側で波板状遺構1～3の3ヶ所、西側で波板状遺構4～10の7ヶ所をいずれも道路跡の底面で確認した。

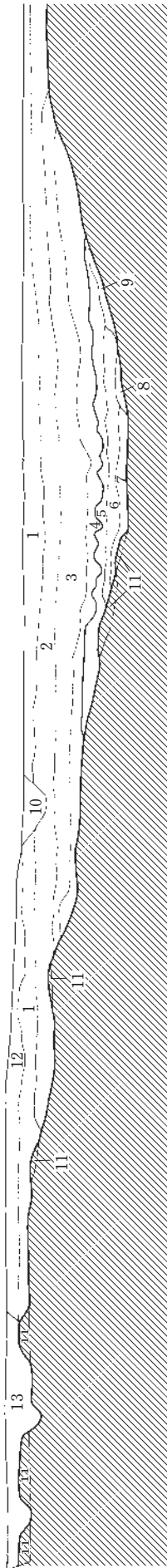
波板状遺構1（第78図）

道路跡の東側で検出した遺構で、東側で波板状遺構2の上面を切っている。長さ6.2mの範囲内に長軸0.5～2.2m、短軸0.15～0.4mの長円形状の痕跡を確認した。0.2～0.4m間隔を空けて10個並んでいた。深さは0.3m以下と比較的に浅い。埋土は褐色砂質土である。東側から2つ目の痕跡から土師器壺の高台片が出土した。

波板状遺構2（第78図）

波板状遺構1に上面を切られる遺構で、Ⅲ-2区で検出した中では一番深く明瞭な痕跡であった。溝状痕跡の中には、さらにピット状の痕跡が深く掘り込まれたような形で、何個も連なった状態を確認した。溝状痕跡は調査区際で検出したため長さ5m分、幅0.6～0.9m、深さ0.2以下を測る。溝状痕跡内にある円形のピット状痕跡は径約0.5m、深さ0.3m以下を測り、上面で須恵器壺の高台片、底面付近で須恵器高坏片や約10cmの石が出土した。埋土は褐色粘砂土である。

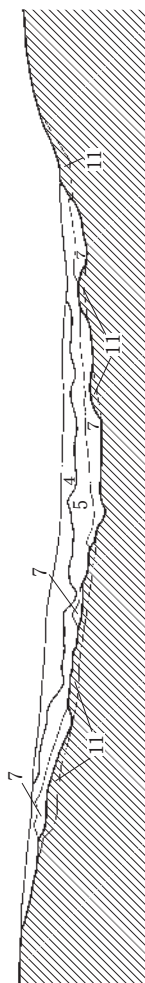
38.2m



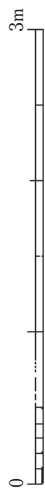
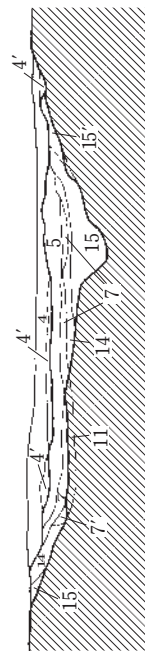
- 9 8とほぼ同じ
- 10 攪乱
- 11 橙色土 (地山)
- 12 表土
- 13 攪乱
- 14 7と橙色土が混ざる
- 15 褐色砂質土 (マンガン含む)
- 15' 15に橙色土が混ざる

- 1 褐色土
- 2 暗灰色土
- 3 灰褐色土
- 4 黒色土に橙色土ブロック (1cm) を混ざる
- 4' 4とほぼ同じ
- 5 黒色土に橙色土が多く混ざる
- 6 黒色土
- 7 褐色粘砂土
- 7' 7とほぼ同じ
- 8 7より多くの橙色土ブロックを含む

38.0m



38.2m



第77図 Ⅲ-2区土層図 (1/50)

波板状遺構3（第78図）

波板状遺構1・2の南側で検出した遺構である。長さ0.3～0.6mの長円や円形のピット2つが0.3m間隔を空け並んでいた。深さは約0.2m以下で浅い。

波板状遺構4（第78図）

西側の道路跡で検出した遺構である。一部攪乱を受けていたが、長さ2.8mの範囲に、0.3～0.4mの間隔を空けて円形や長円形状の痕跡が5つ並んでいた。一番大きい痕跡は波板状遺構5と切り合うが、長軸で0.15～1.5m、短軸0.15～0.5m、深さ0.1mとかなり浅い。

波板状遺構5（第79図）

波板状遺構4と一部切り合う遺構で、長さ約2mの範囲に不整形のピットが連なる痕跡を確認した。幅0.4～0.7m、深さ0.2m以下と浅く、間隔は0.1m以下とほぼ接するような状態である。

波板状遺構6・7・9・10（第79図）

西側の道路跡内で検出した遺構である。いずれもピット状の痕跡が0.3～0.5mの間隔を空けて、並ぶような形である。深さは0.2mとどれも浅い。波板状遺構10のみピット状が集まった所に番号を付けた。

波板状遺構8（第79図）

波板状遺構4・5のさらに西側の道路跡内で検出した遺構である。長さ4.5mの範囲内に0.2～0.4mの間隔を空けて、円形～長円形状の痕跡を7つ並んでいた。長軸0.4～1.4m、短軸0.2～0.4mを測り、深さは0.2m以下と浅い。西側に下るほど痕跡は小さくなる。

出土土器（第79図）

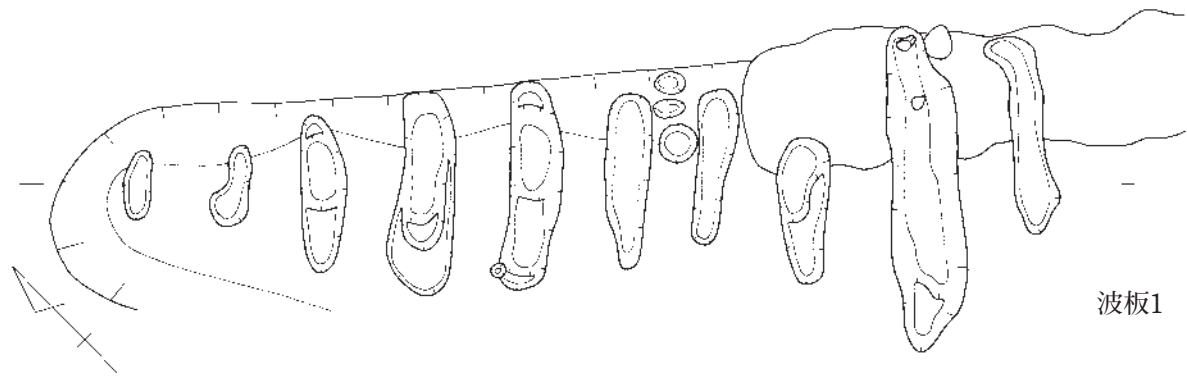
218～220は4層出土である。218は須恵器坏蓋の口縁部片である。口縁端部が嘴状になる。219は須恵器碗の高台片である。220は土師器碗の高台片か。221と222は4・5層出土である。221は須恵器坏蓋の口縁部片で、端部を欠損する。222は須恵器壺の高台片である。高台の接合部分が厚い。223は5層下出土の須恵器坏蓋の口縁部片である。

224～226は波板状遺構出土である。224は波板状遺構1出土での土師器碗の高台片である。225は波板状遺構2出土の須恵器高坏の坏部と脚部の接合部分片である。226は波板状遺構2上面出土の須恵器碗の高台片である。

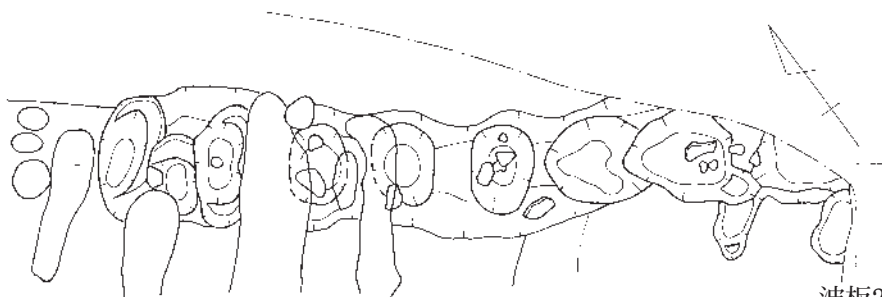
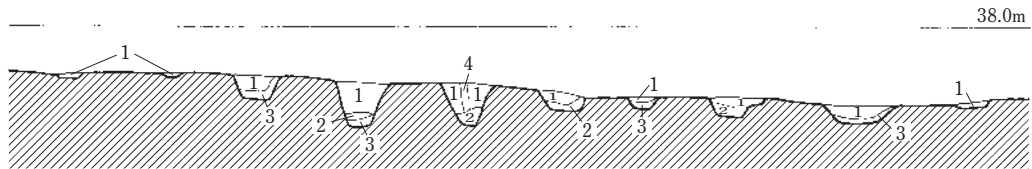
Ⅲ-3区検出の道路跡（図版 36～39、第80～88図）

Ⅲ-1区とⅢ-2区との間に位置する。調査前宅地と水田であったため、特に宅地部分は盛土されており、旧地形は残っていなかった。圃場整備前の写真などによれば、ここもちょうど谷であり、そこに道路が造られていた状況であった。まず盛土部分をバックホーで掘り下げ、その後、東壁19層から下を人力による掘り下げを行った。東から西に傾斜しているため、西側の谷部では深くまで盛土されていた。道路跡は長さ約55m分検出し、道路跡の上面検出では東側の最大幅で9.5m、西側の谷部では狭まっているため、6.5mを測る。深さは東側の残りのいい部分で0.7m、西側では0.3mとなる。道路跡の断面形は、逆台形状であるが、東壁側では南側に約2m幅のテラスがあり、そこからさらに0.4m掘り下がって地山に達する。

基本的に土層はここもⅢ-1・2区と同じである。Ⅲ-3区では、道路跡の土層を調査区の東壁側と西壁側、道路跡の東から1～3ベルト、中央ベルトで土層を作成した。

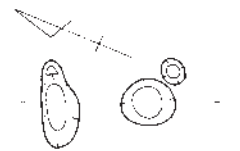
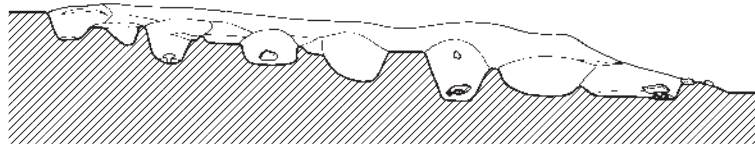


波板1



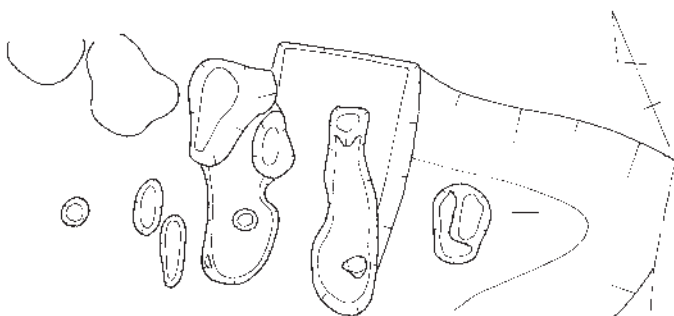
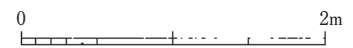
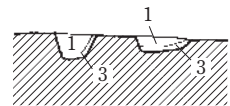
波板2

38.0m



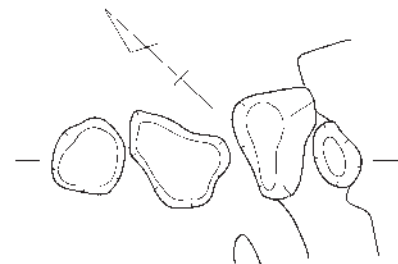
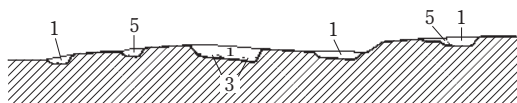
波板3

38.0m



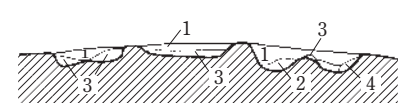
波板4

38.0m



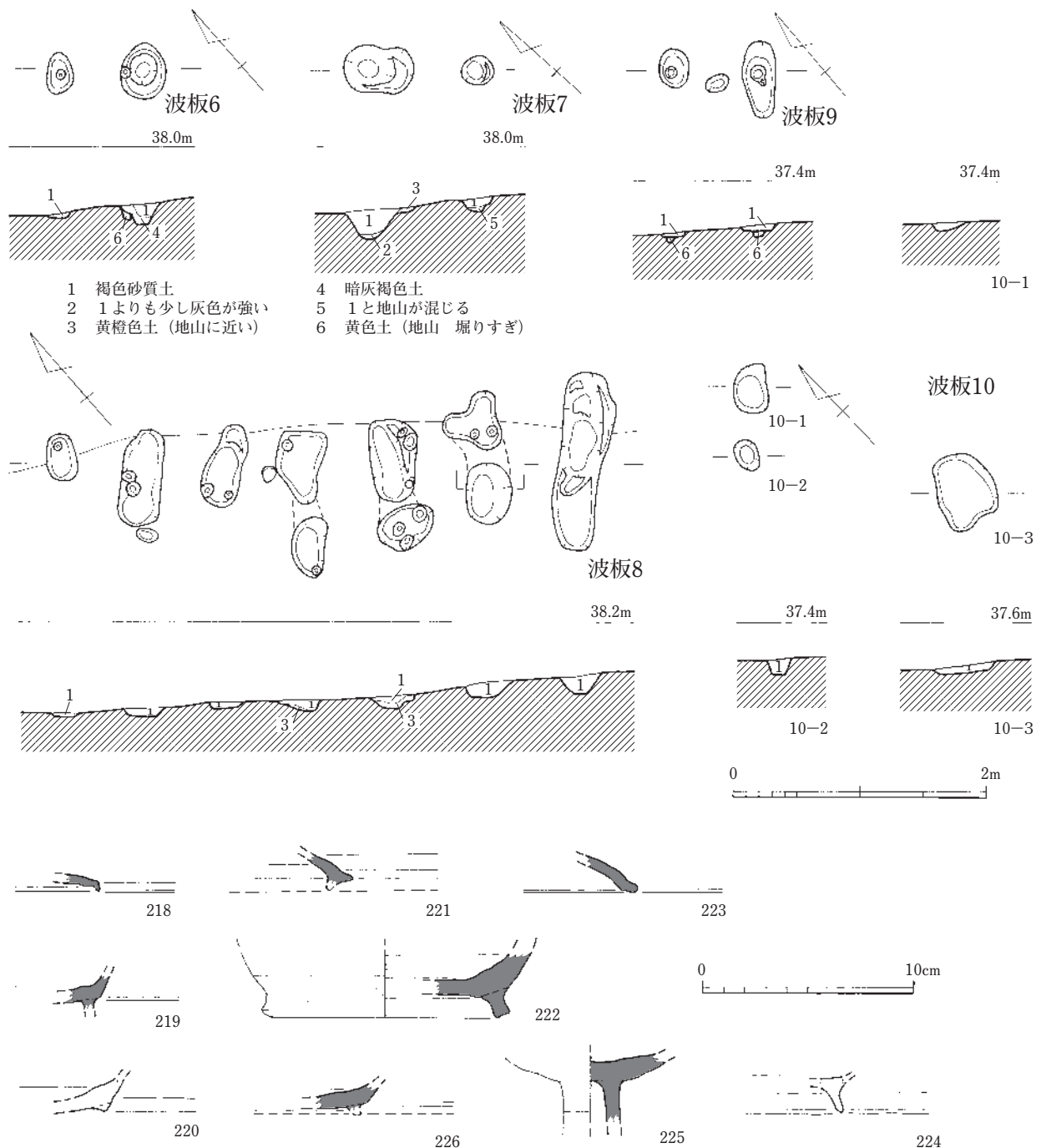
波板5

38.0m



- 1 褐色砂質土
- 2 1よりも少し灰色が強い
- 3 黄橙色土 (地山に近い)
- 4 暗灰褐色土
- 5 1と地山が混じる

第78図 III-2区波板状遺構実測図1 (1/50)



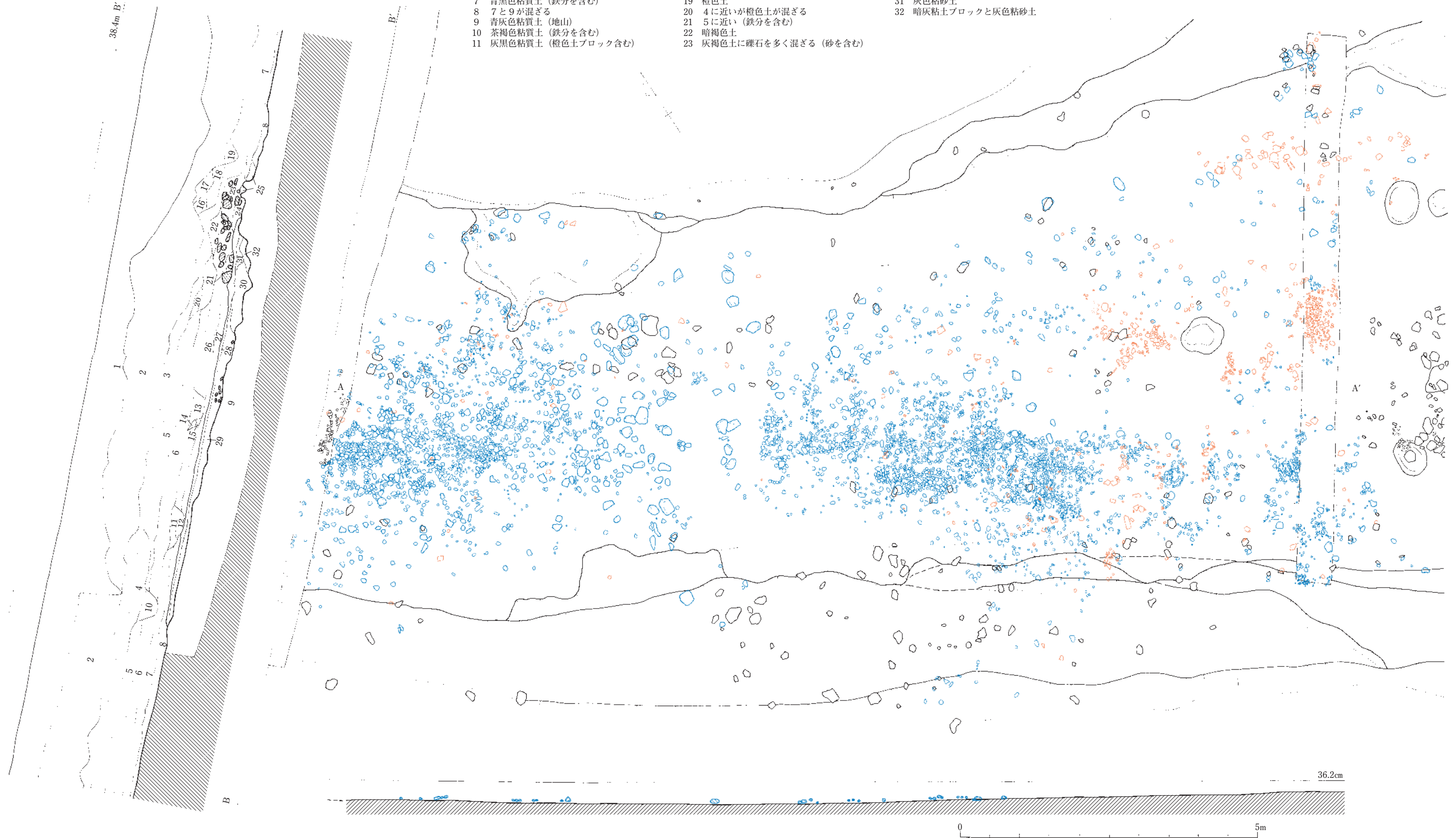
第79図 III-2区波板状遺構および出土土器実測図 (1/50、1/3)

東壁土層は上から表土である耕作土、その下に旧耕作土がある。その下には道路跡に堆積した19層と20層の暗灰褐色土がある。20層以下の深さ約0.4m以下には21~29層が堆積する。なお29層の暗褐色土は波板状遺構の埋土である。

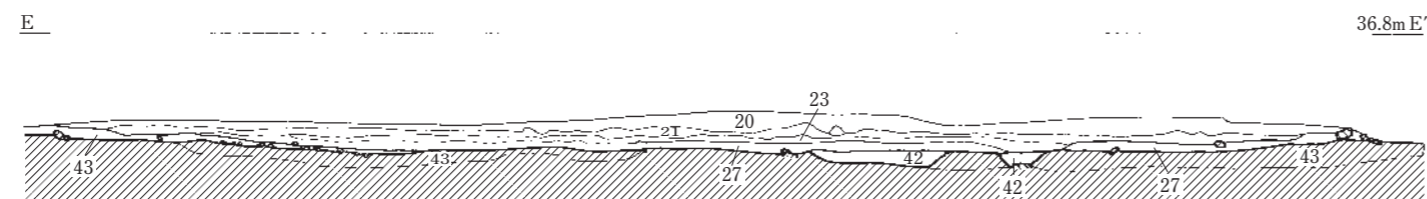
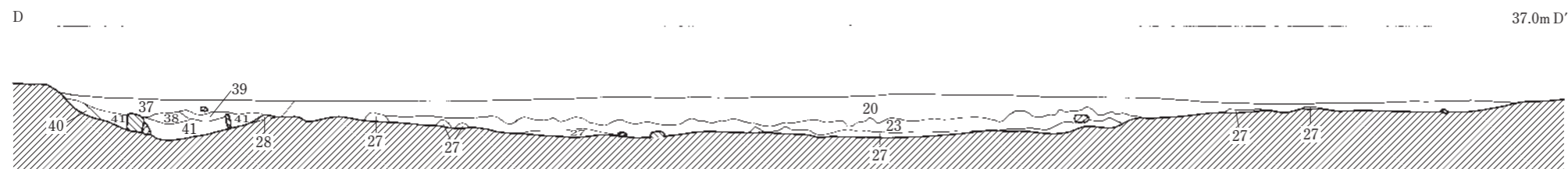
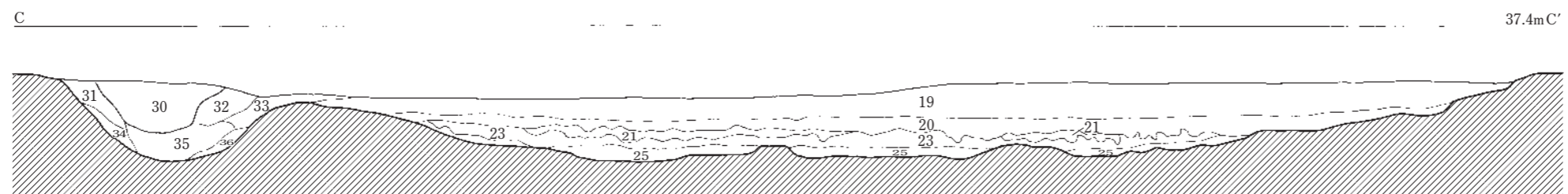
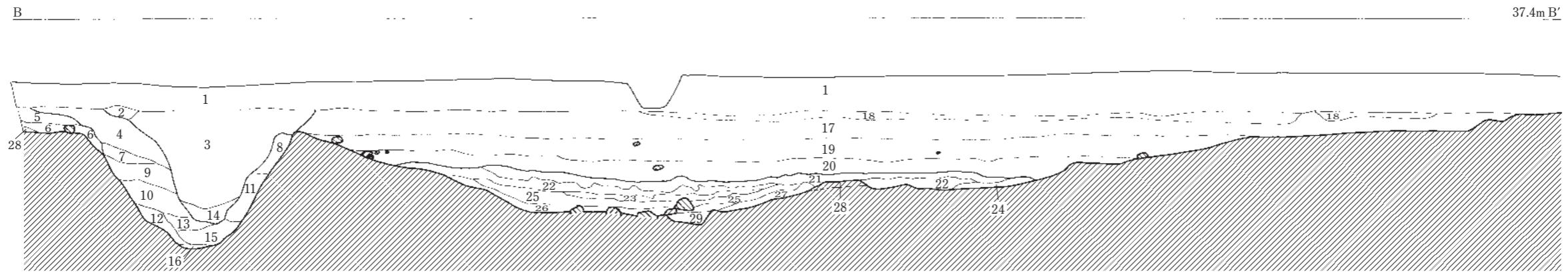
中央ベルトは、道路跡の中央部分に平行する形で設定した土層である。長さ51m、高さ0.15~0.7mを測る。東壁側の19層以下の土層を上から中央ベルト土層の1~7層とした。それぞれの土層は、1層は東壁19層、2層は東壁20層、3層は東壁21層、4層は東壁22層、5層は東壁23層、6層は東壁25層、7層は東壁27層となる。1層は東から14mで、4層は東から6.3mで、6層は東から23.1mで消失する。それより以西は2、3、5~7層が堆積する。途中3層は一旦消失するが、2

- | | | |
|----------------------|------------------------|-----------------------|
| Ⅲ-3区 西壁上層 | 12 灰白色粘質土 | 24 18に近いが30cm礫石を多く混ざる |
| 1 表土に2が混ざる | 13 11に似る(橙色土、粗砂を含む) | 25 灰褐色粘砂土 |
| 2 灰色土に橙色土が混ざる | 14 灰黒色粘質土 | 26 青灰色粘質土(13に近い) |
| 3 灰色土(圃場整備前の水田) | 15 灰褐色粘質土 | 27 灰色粘砂土(14に近い) |
| 4 黄褐色土 | 16 黄褐色土 | 28 暗黒色粘砂土(鉄分を含む) |
| 5 暗黄褐色土 | 17 灰褐色土 | 29 黄褐色粘砂土(10cm前後の河原石) |
| 6 黄灰色粘質土(鉄分を含む) | 18 17に赤褐色土ブロックが混ざる | 30 黄灰色粘砂土 |
| 7 青黒色粘質土(鉄分を含む) | 19 橙色土 | 31 灰色粘砂土 |
| 8 7と9が混ざる | 20 4に近いが橙色土が混ざる | 32 暗灰粘土ブロックと灰色粘砂土 |
| 9 青灰色粘質土(地山) | 21 5に近い(鉄分を含む) | |
| 10 茶褐色粘質土(鉄分を含む) | 22 暗褐色土 | |
| 11 灰黒色粘質土(橙色土ブロック含む) | 23 灰褐色土に礫石を多く混ざる(砂を含む) | |

※黒・青は石
赤は土器



第80図 Ⅲ-3区道路跡実測図(1/60)



- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 表土 (茶色土 耕作土) | 23 黒色土 (粘質あり) |
| 2 表土とバラスが混ざる | 24 黒灰色砂質土 |
| 3 暗茶色土と橙色土が混ざる | 25 黒茶色土 |
| 4 黄灰色土 | 26 25に橙色土ブロックが混ざる |
| 5 灰褐色土 | 27 24に近い。28より風化礫を多く混ざる |
| 6 橙色土 (圃場整備時の盛土) に5が混ざる | 28 橙色土 (風化礫が混ざる) |
| 7 汚れた橙色土 | 29 暗褐色土 (波板状遺構 埋土) |
| 8 茶色土 | 30 赤褐色土 (7と同じ) |
| 9 黄灰色土に橙色土が混ざる | 31 灰茶色土 |
| 10 7と同じ | 32 灰褐色土 (1の細かいブロックが混ざる) |
| 11 褐色粘質土に橙色土が混ざる | 33 32より鉄分が多い |
| 12 9に似る | 34 灰茶色土に1 (ブロック1cm) が混ざる |
| 13 褐灰色粘質土 | 35 青灰色粘土 |
| 14 13に似る | 36 32、33に赤褐色土ブロック10cm以下が混ざる |
| 15 11よりも橙色土が多い | 37 灰褐色土 |
| 16 褐灰色粘質土 | 38 灰褐色土に橙色土が混ざる |
| 17 黄褐色土 (耕作土) | 39 橙色土 |
| 18 黄褐色土と灰褐色土が混ざる (耕作土) | 40 37に近い灰褐色土 |
| 19 暗灰褐色土 | 41 緑灰色土 |
| 20 19よりも橙色土ブロック (1cm以下) が多く混ざる | 42 灰色砂質土 (鉄分が沈着) 波板状遺構 |
| 21 20に黒色土ブロックが混ざる | 43 黄色砂質土 (地山) |
| 22 21よりも多く黒色土ブロックが多く混ざる | |

第 81 図 III-3区土層図 (1/ 50)

層が0.25m幅で堆積する。ここでもⅢ-1・2区で見られたような波を打つような状態を確認した。

ベルト1は東壁から10m西側で設定したベルトである。幅は約10m、深さ0.6mを測る。断面形状は逆台形状で、最下層に波板状の痕跡がある。土層は上層に19・20層の灰褐色土が堆積し、道路跡部分には21・23・25層が堆積する。また北側には幅2.3m、深さ0.7mの攪乱の溝がある。

ベルト2はベルト1のさらに13m西に位置する。北側を攪乱の溝に切られるが、幅9m、深さ0.3mを測る。上層に20層、下層の道路跡に23・27層が堆積していた。

ベルト3は西壁から16mの位置に設定した溝である。北側は攪乱溝で切られている。幅約7m、深さ0.3mを測る。上層は20層、下層に21・23・27層が堆積する。

なお、Ⅲ-1区、Ⅵ-1区でも見られた溝が、道路跡北側で検出された。長さ約35m、幅2～2.8m、深さ0.3～1.5mを測る。上面検出や土層観察からも古代の道路跡を切る形であり、また埋土やガラス瓶や近世陶器片などの出土遺物から考えても古代の道路跡との直接的な関係はない。周囲の状況を踏まえると近世以降の水田に関わる溝の可能性があり、近代に再度掘り直されたと思われる。

波板状遺構（図版38、第82・83図）

Ⅲ-3区では、波板状遺構を6カ所検出した。他の地区と同様に、道路跡底面で検出し、埋土もほぼ同じであることから波板状遺構として取り上げ番号を付けた。

波板状遺構1（第82図）

調査区東側際に円形及び不整形のピットが連なる状態で検出した遺構である。長さ6.9mの範囲に0.05～0.3mの間隔を空けて、長軸0.3～0.7m、短軸0.2～0.7m、深さは0.2mを測る。

波板状遺構2（第82図）

波板状遺構1より西側で検出した遺構である。長さ7.5mの範囲に、長軸1.0～2.6m、短軸0.2～1.0の長円形状の痕跡ある。0.1～0.4mの間隔を空けて、11個が連なっている。これも深さ0.2m以下と浅い。須恵器の甕の頸部片が出土した。

波板状遺構3・4（第82図）

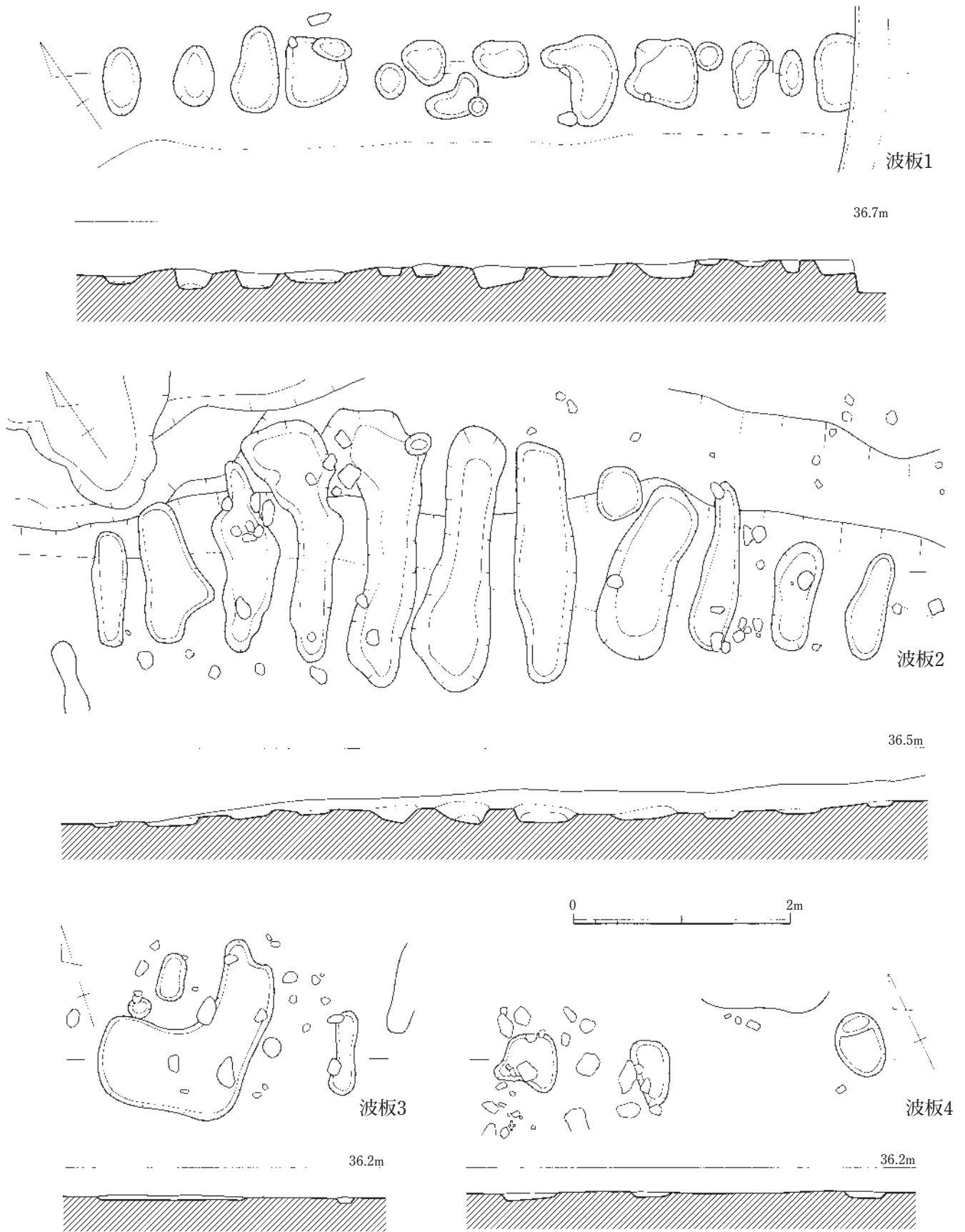
波板状遺構2の西側で検出した遺構である。波板状遺構3は長さ0.7～1.5mの長円形や不整形の痕跡を2つ確認し、波板状遺構4は径0.5mのピット状の痕跡を検出した。いずれも0.1m以下とかなり浅い。連続した状態で検出しなかったため、個々の遺構として扱った。

波板状遺構5（第83図）

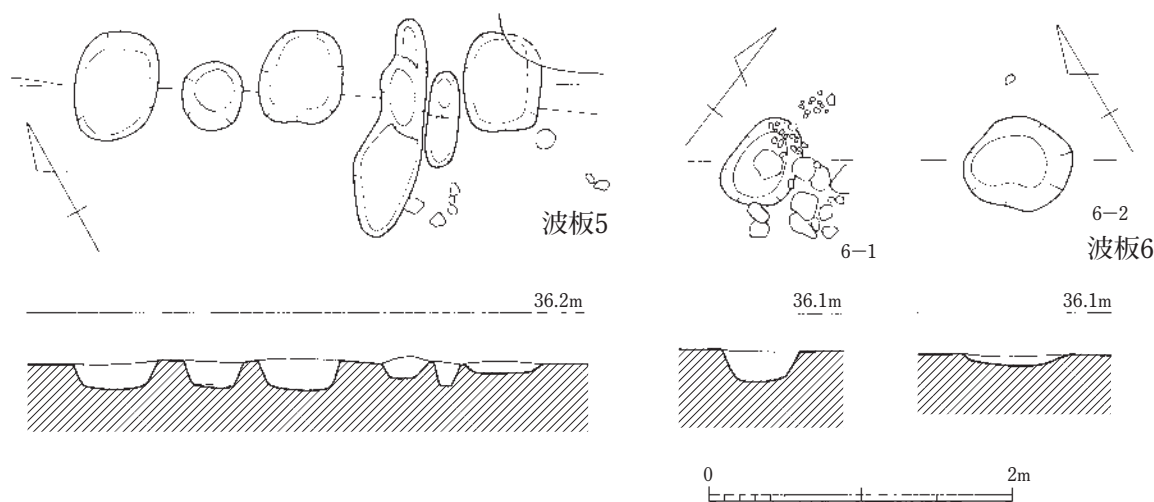
波板3・4の北側で検出した遺構である。長さ3.1mの範囲に、径0.4mの円形や長軸0.6～1.5m、短軸0.1～0.5mの隅丸方形や不整形形状の痕跡が、0.2m以下の間隔を空けて6つ並ぶ。いずれも深さ0.2mを測る。

波板状遺構6（第83図）

Ⅲ-3区で検出した波板状遺構の中で、一番低い谷側に位置する。他の波板状遺構とは異なり、それぞれ単独で検出したピット状の痕跡である。形状はほぼ長円形で径0.6m、深さ0.2m以下を測る。



第82図 III-3区波板状遺構実測図1 (1/ 50)



第83図 III-3区波板状遺構実測図2 (1/50)

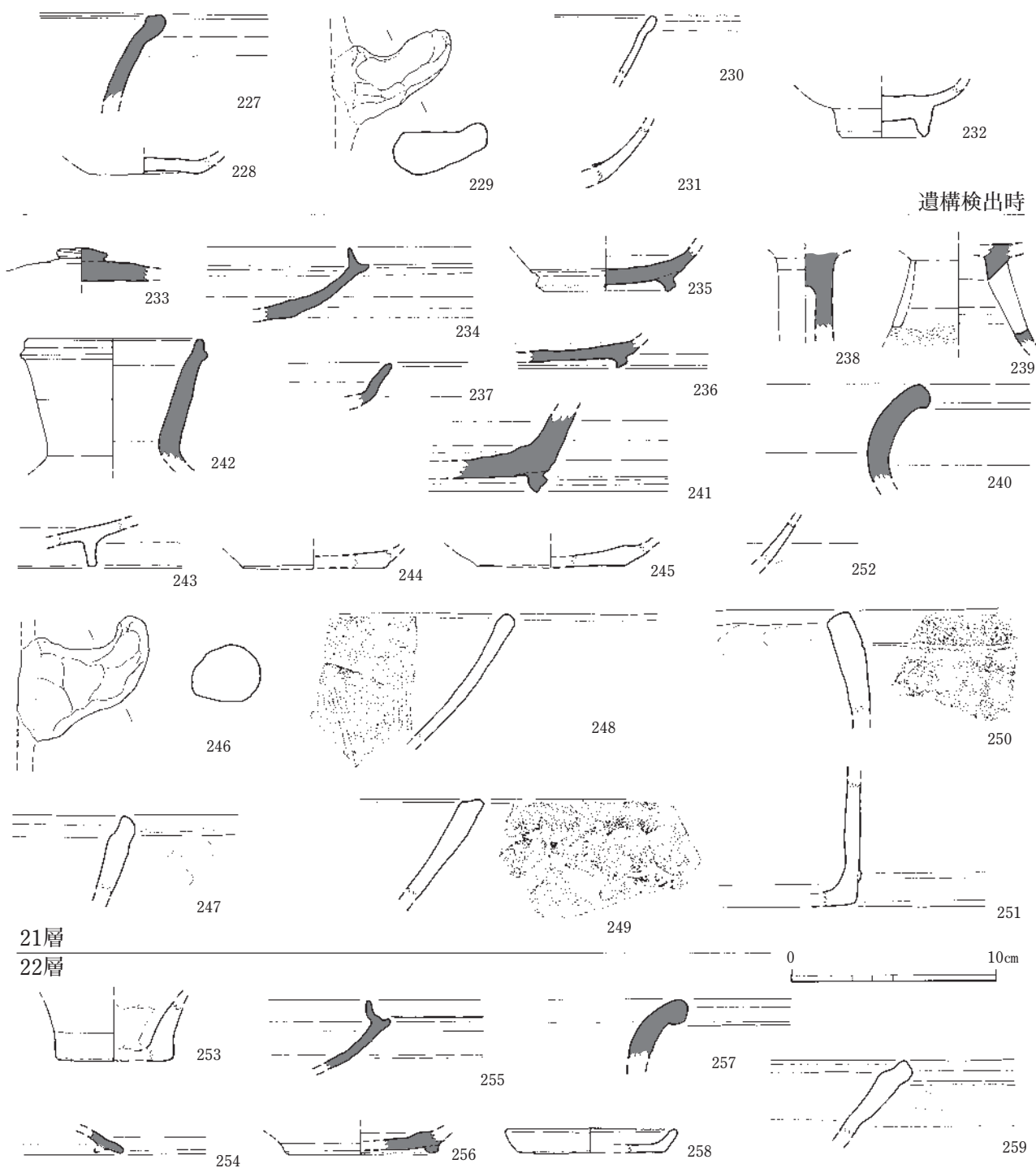
III-3区出土土器 (第84図)

227～259は道路跡出土土器である。227～232は道路跡の遺構検出時出土土器である。227は須恵器壺の口縁部片である。口縁端部は丸まり、外側に開く。228は土師器坏片で、外面底部は糸切りである。229は土師器甑の把手片である。230～232は青磁碗片である。232のみ高台片である。233～252は21層出土である。233～242は須恵器である。233は坏蓋の撮み片である。234は坏身片である。235と236は埴の高台片である。237は皿片である。238と239は高坏脚部片である。239は外面に長方形の透かしが2ヶ所と波状文がある。240は甕の口縁部片である。241は壺の高台片か。埴の高台に比べて底部が厚手である。242は提瓶の口縁部片か。口縁下に段がつく。243は土師器埴の高台片か。244と245は土師器皿の底部片である。外面の調整は摩滅していて不鮮明だが、244は糸切りである。246は土師器甑の把手片である。247は土師質鉢の口縁部片である。248と249は瓦質鉢片である。248は薄手な作りで、内面には櫛目がある。249の外面にはヘラ状工具による痕跡がある。250と251は瓦質の火鉢片か。250は口縁部片で外面にスタンプの文が付く。内面は板状工具によるナデか。251は色調や胎土から250の底部片の可能性もある。252は白磁碗の体部片である。253～259は22層出土である。253は弥生土器の底部片である。内面調整は指押さえである。254～257は須恵器である。254の端部は欠損するがかえりのある坏蓋片である。255は坏身片である。256は埴の高台片である。257は甕の口縁部片である。258は土師器皿片である。外面底部は糸切りである。復元口径8.4cmを測る。259は土師質鉢片である。口縁端部は指押さえにより段がつく。

中央ベルト土層出土土器 (85図)

260は19層出土である。須恵器高坏の脚部片で、外面の中程には段が付く。復元脚部径11.4cmを測る。261は土師質鉢片である。口縁端部に向かって厚みを増す。調整は内外面とも横方向の刷毛目である。復元口径30.0cmを測る。

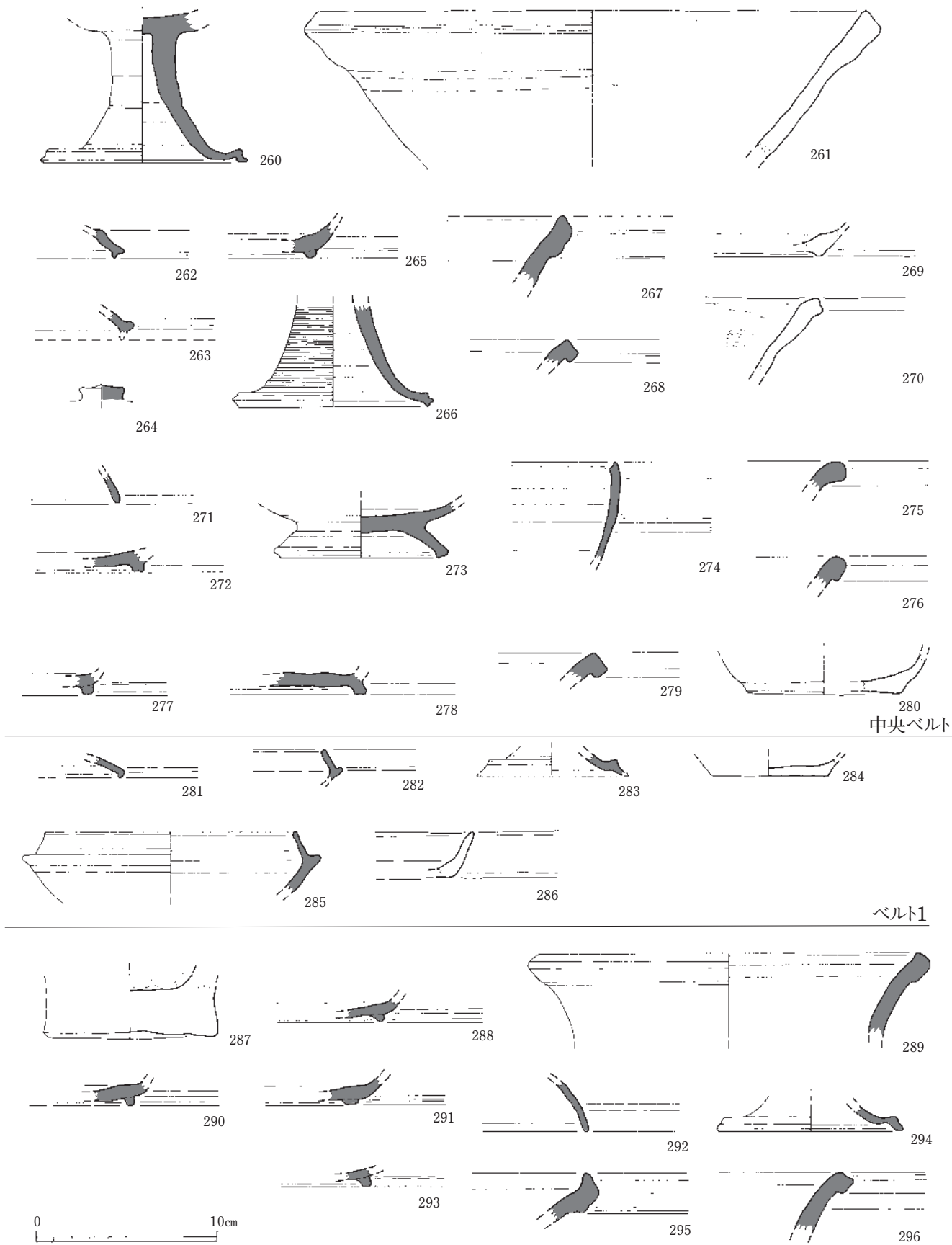
262～270は21層出土である。262～268は須恵器である。262と263はかえりのある坏蓋の口縁端部片である。264は坏蓋の撮み片である。265は埴片である。266は高坏の脚部片で、調整は内外面とも回転横ナデであるが、外面のみカキ目を施す。復元脚部径10.4cmを測る。267と268は甕の口縁部片である。268は外面口縁下に僅かに波状文がある。269は土師器埴の底部片



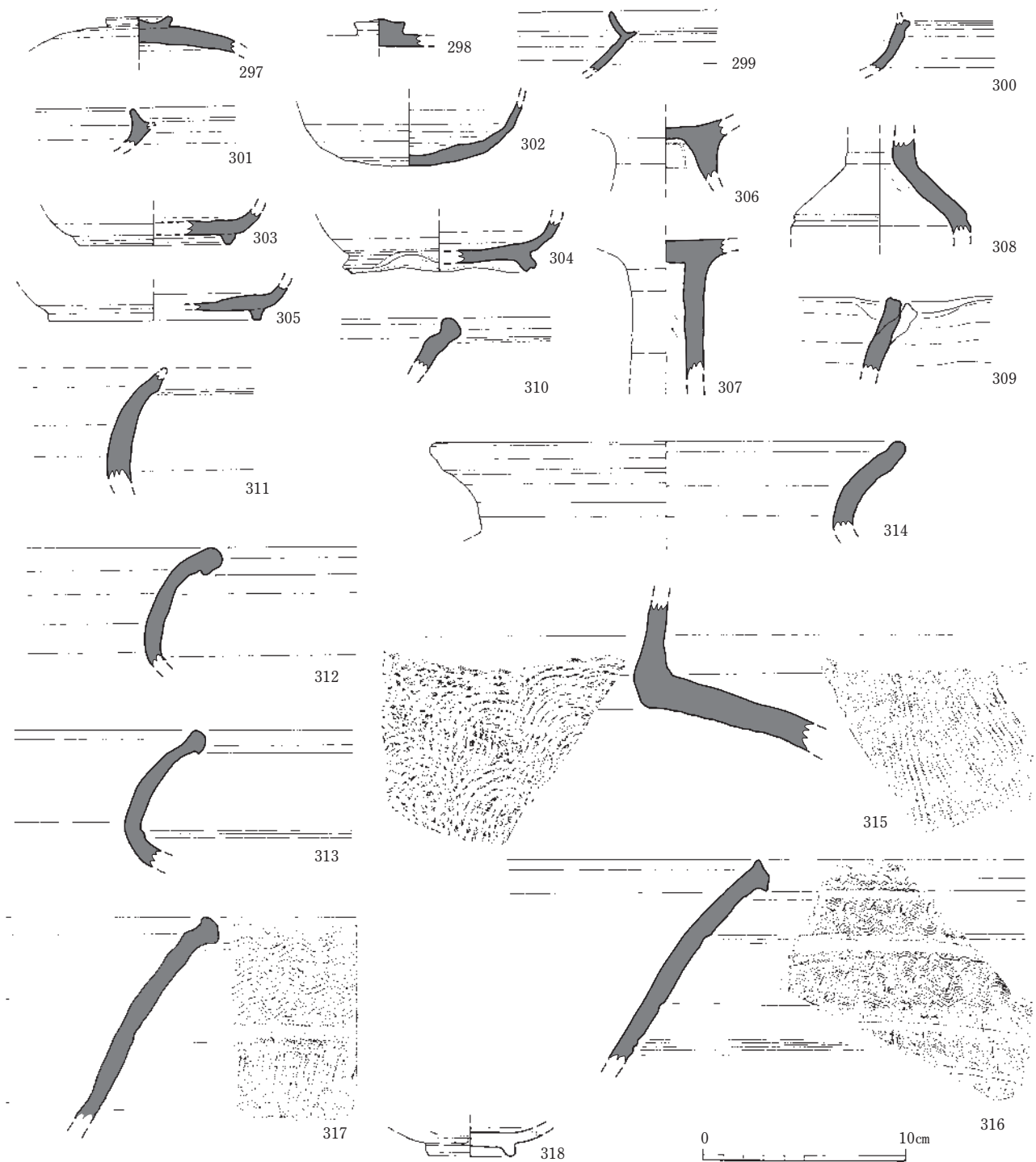
第84図 III-3区道路跡出土土器実測図1 (1/3)

か。高台が僅かにある。270は土師質鉢の口縁部片か。調整は外面はナデ、内面は刷毛目である。271～276は23層出土の須恵器である。271は坏蓋の口縁端部片か。272は壺の高台片である。273も壺または壺などの高台片か。高台部分は外側に大きく開く。274は大型の坏片である。体部中程に2条の段が付く。275と276は甕の口縁端部片である。

277～280は23・25層出土である。277と278は須恵器壺の高台片である。279は須恵器甕の口縁部片である。280は土師器坏の底部片である。外面底部はヘラ切りである。



第85図 III-3区道路跡出土土器実測図2 (1/3)

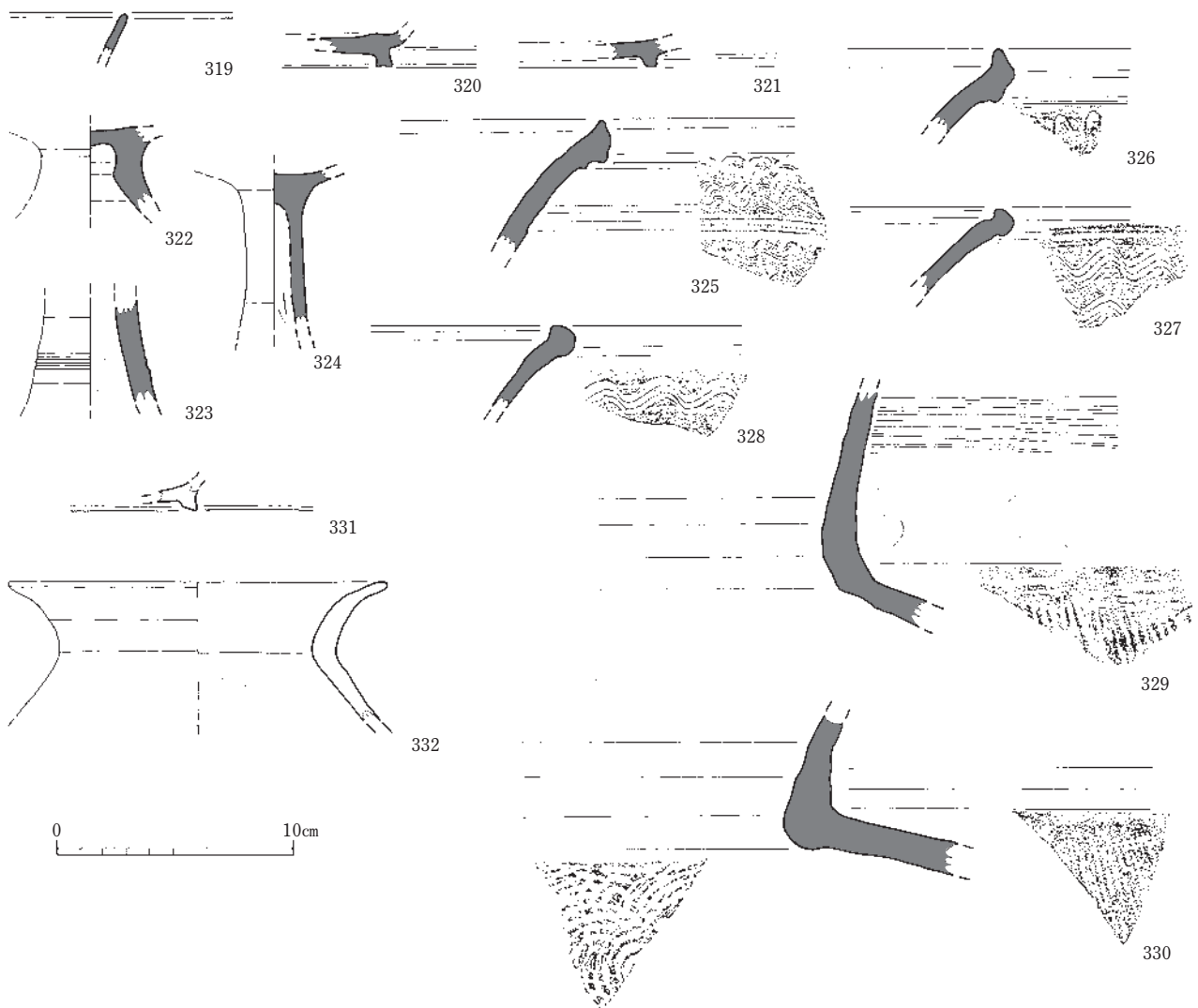


第86図 III-3区道路跡出土土器実測図3 (1/3)

ベルト1出土土器 (第85図)

281~284はベルト1の19層出土である。281は須恵器坏蓋の口縁部片である。端部は嘴状である。282は須恵器坏身片である。283は須恵器の高坏脚部片か。284は19・20層出土の土師器坏の底部片である。外面底部は糸切りで板状圧痕もある。

285と286は21層出土である。285は須恵器坏身片である。内外面とも調整は回転横ナデである。復元口径13.8cmを測る。286は土師器坏片である。外面底部はヘラ切りである。



第87図 III-3区道路跡出土土器実測図4 (1/3)

ベルト2出土土器 (第85図)

287~296はベルト2出土である。287は弥生土器の底部片である。摩滅するが、内面には指押さえの痕跡がある。288と289は20層出土である。288は須恵器塚の高台片である。289は須恵器甕の口縁部片である。

290と291は須恵器塚の高台片である。23層出土である。

292~296は27層出土の須恵器である。292は坏蓋片である。293は塚の高台片である。294は高坏脚部片である。復元脚部径10.4cmを測る。295と296は甕の口縁部片である。295は外面口縁の下に波状文がある。

道路跡出土土器 (第86・87図)

297~316は道路跡出土土器である。297~317は須恵器である。297と298は坏蓋の撮み片である。299~302は坏身片である。300は口縁端部は欠損する。303~305は塚の高台片である。306と307は高坏の脚部片である。308は臙片である。頸部が細く絞られている。309は片口鉢の口縁部片である。310~317は甕片である。314は口縁部中程で外側に開く。復元口径23.0cmを測る。315は頸~肩部片で、外面は平行叩き、内面は同心円叩きである。316は外面に

波状文を4段巡らす。317は外面に波状文と斜線連続文を巡らす。318は青磁碗の高台片である。

319～332は谷下層出土である。319～330は須恵器である。319は壙の口縁部片である。320と321は壙の高台片である。322～324は高坏片である。322のみ短脚で、323と324は長脚である。325～330は甕片である。外面は口縁部下に波状文やカキ目、頸部下には格子目叩きを施す。331は土師器壙の高台片である。332は土師器甕片である。頸部から口縁端部に向かう中程で大きく外側に開く。復元口径16.0cmを測る。

西壁土層（第88図）

道路跡部分で幅6.5m、深さ0.2m以下分を確認した。ここでは上から1と2層は表土や盛土である。その下3層は圃場整備前の水田土で、16～20層はこの水田に関わる畦畔などである。さらにその下には7層と26層の近世の水田土がある。この26層は道路跡の上に堆積していた層である。その下に27～29層の灰～暗黒色粘砂土が道路跡になる。なお、確認のために0.7m掘り下げたが、谷部を通る道路跡を保護するような造りは見られなかった。またこの部分には灰褐色や青灰色粘砂土の地山の層が堆積していた。遺物の出土もなく、詳細な時期は不明だが、かなり古い時代の谷の堆積層だと思われる。

出土土器（第88図）

333～338は8層出土である。333～337は須恵器である。333と334は坏身片である。333は復元口径11.8cmを測り、やや径が小さい。335は甕の口縁部片で、口縁端部は丸みを帯び外側に開く。復元口径20.4cmを測る。336は壺の頸部片か。外面に絞りの痕跡がある。337は壺の高台片で、内外面ともに稜線が明瞭に残る。338の口縁端部は玉縁状になる白磁碗片である。復元口径7.6cmを測る。339は26層出土の須恵器坏身片である。340～342は28層出土である。340はかえりのある坏蓋片である。341と342は甕の口縁部片である。341は外面に波状文がある。343と344は29層出土である。343は坏蓋片である。344は青磁碗の高台片である。復元高台径4.4cmを測る。

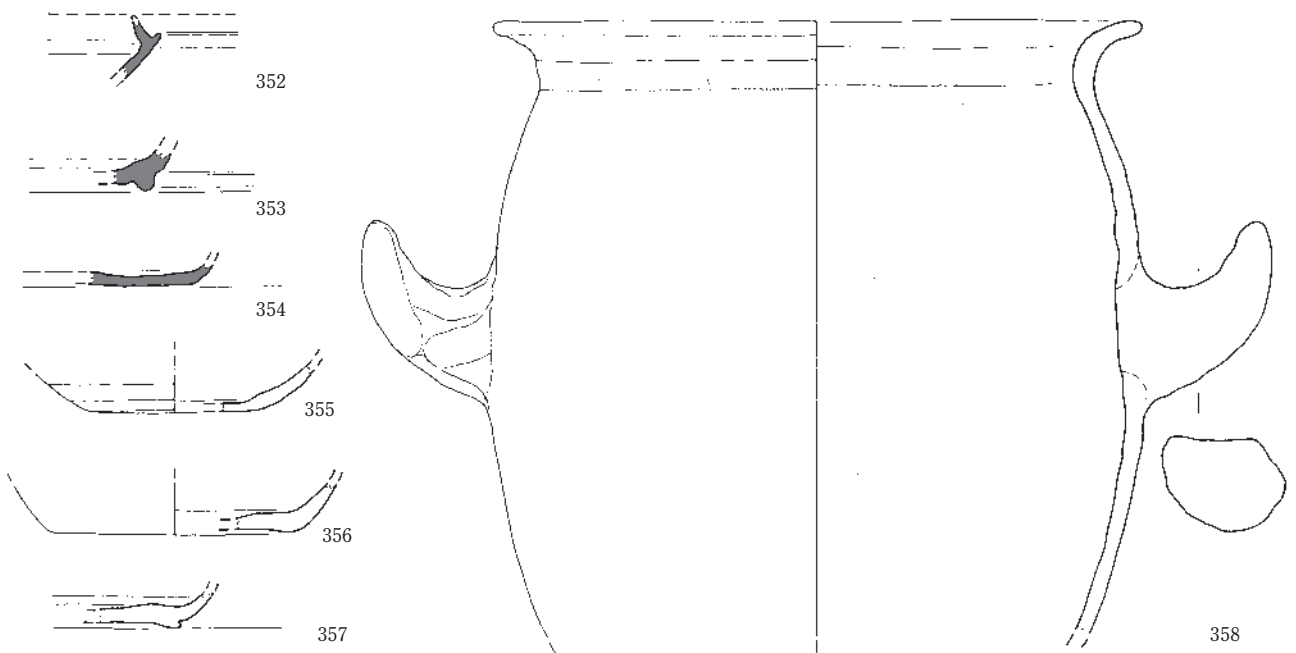
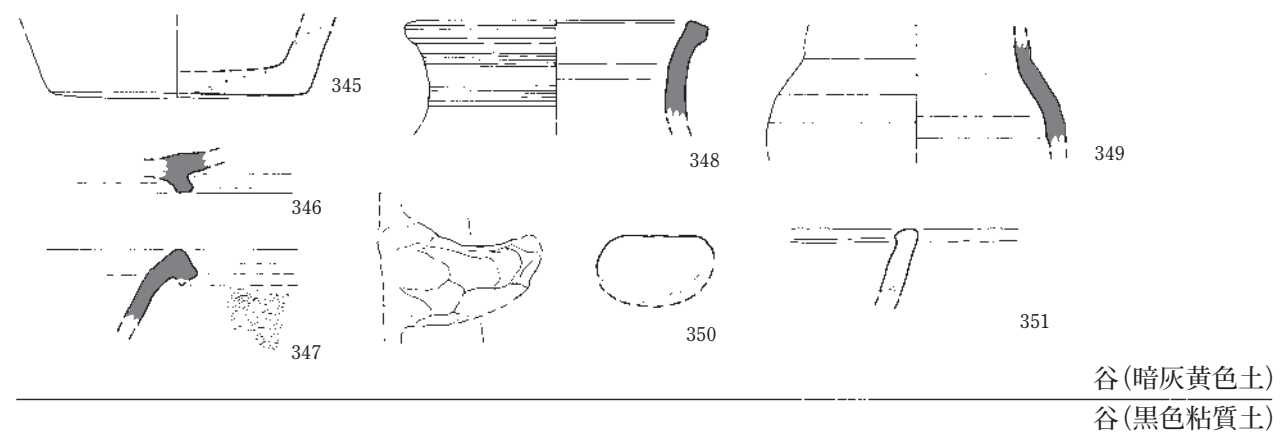
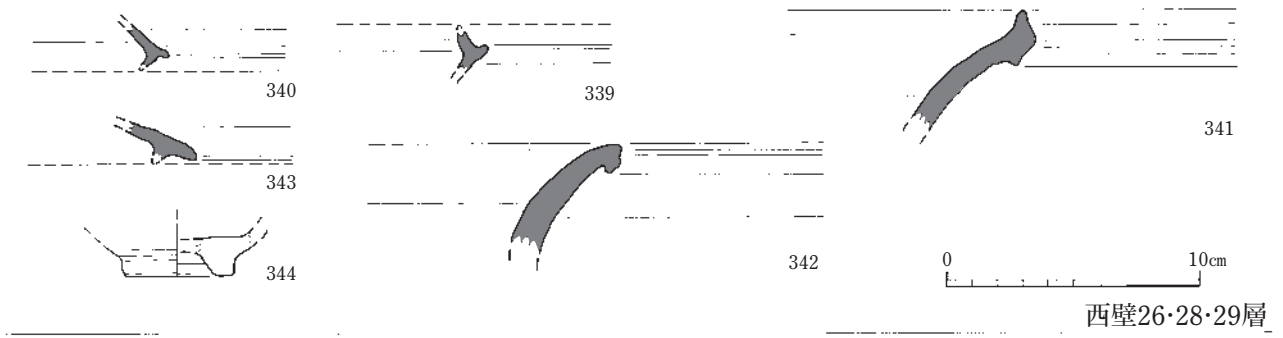
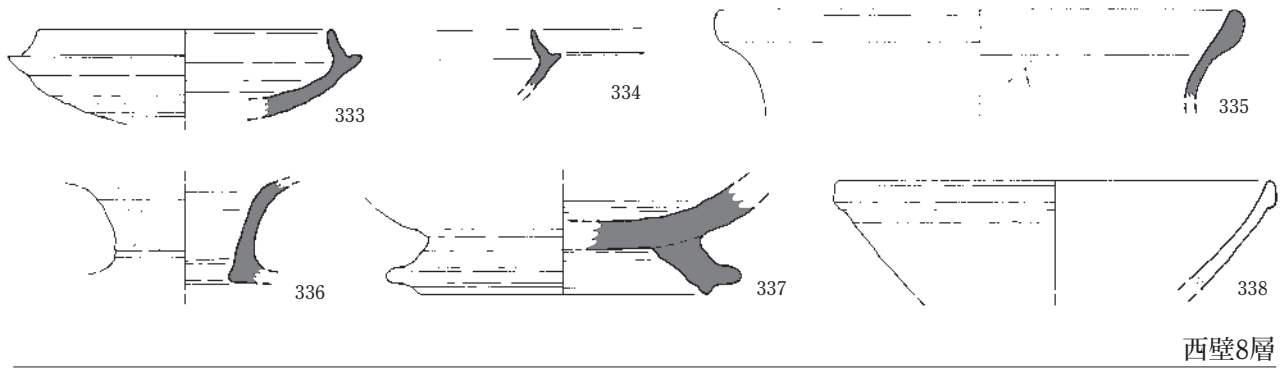
谷

Ⅲ-3区では古代の道路跡が横切る谷部について一部掘削した。主な谷部の堆積層は暗灰黄色粘質土と黒灰粘質土の2層である。その下は青灰色粘質土の地山となる。谷部は古代の道路跡を挟んで両側を可能なかぎり掘削したが、遺構は全く検出されなかった。しかし遺物は弥生土器、須恵器、土師器などが出土した。出土土器は、古墳時代後期頃を中心とした須恵器片が多い。

出土土器（図版45、第88図）

345～351は暗灰黄色粘質土出土である。345は弥生土器の底部片で、底部は平底である。内面は剥落して、残りは悪い。346～349は須恵器である。346は須恵器壙の高台片である。347は甕の口縁部片である。外面には僅かに波状文がある。348は壺の口縁部片で、外面にカキ目がある。349は壺の頸部～体部片である。頸部付近ではやや径が小さくなる。350は土師器甌の把手片である。351は土師質鉢の口縁部片か。摩滅していて調整不明である。

352～358は黒色粘質土出土である。352～354は須恵器である。352は坏身片である。353は壙の高台片である。354は皿の底部片である。外面底部へへら切りである。355～357は



第88図 III-3区西壁土層および谷出土土器実側図 (1/3)

土師器坏の底部片である。355と356の外面底部はヘラ切りである。357のみ外面底部は糸切りである。358は底部を欠損する土師器甗片で、1/3残存する。内外面ともに縦や斜めの刷毛目調整を施す。復元口径25.0cm、残存高で24.3cmを測る。

Ⅵ区（図版41、第89図）

Ⅵ-1区では東隅にある宅地跡の塀から幅3.6mの範囲を0.8m掘り下げると、その下からⅢ-2区から続く古代の道路跡を長さ10m、最大幅で1.7m分を検出した。丘陵部分を切り通し状に掘削しているため、西側から東側に向かって約0.4m下がっている。東端の土層観察によると、1.6mの高さの中に12層の層位を確認した。1～4層は宅地造成による盛土であった。5、6層はガラスや陶器片などの近現代ゴミを含む盛土下に掘られてい溝の埋土である。これは、埋土や溝の方向からⅢ区の道路跡の北側で検出された溝に続くと思われる。1～6層については明らかに近現代層の攪乱であった。これらの層を掘り下げるとちょうど半分の高さで幅10cmの7層の黒灰色土を検出した。さらにこの層の下からはⅢ区で検出した灰褐色土を確認した。この7・8層が自然堆積層か。この灰褐色土から地山までにはさらに3層が堆積していた。その最下層では約20cm礫の混ざる茶褐色土になり、これを掘り下げると地山である黄橙色土に到達した。

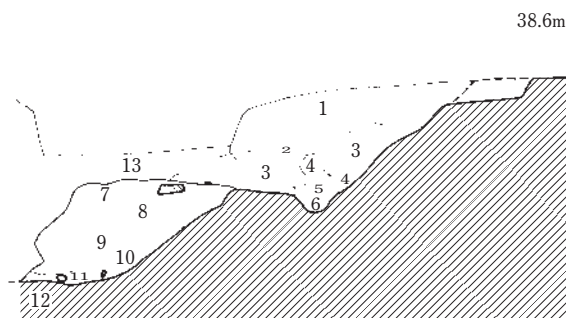
この溝の埋土からは近現代のゴミが堆積していたので、古代の道路跡とは無関係であると思われる。よって、本来切り通し状であったものが、溝を掘削するために北側へ幅を広げられたと思われる。なお、Ⅵ区の道路跡の遺物は出土しなかった。

7. その他の遺構（第90・91図）

359～384はⅢ区遺構検出時の出土土器である。359は弥生土器甕などの底部片か。360～377は須恵器である。360～365は坏蓋片で、362と363はかえりをもつタイプである。364は撮み片である。366～368は坏身片である。367のみⅢ-1区出土である。369は坏身の底部片か。370と371は埴の高台片か。372は大きいタイプの坏片か。373は無蓋高坏の坏部片である。坏部の外面底部には刺突文を巡らす。374は高坏の脚部片か。外面にはヘラ状工具による痕跡がある。375は壘の口縁部片か。376～378は甕の口縁部片か。379～381は土師器である。379は坏である。外面底部はヘラ切りである。口径11.0cmを測る。380は甕の口縁部片で逆「L」字形となる。381は甗の把手片である。382と383は土師質鉢の口縁部片である。384は青磁碗片である。

385～398はⅤ区のピット出土である。385は弥生土器甕の底部片である。外面底部は凸形になる。386～392は須恵器である。386はかえりのある坏蓋の口縁部片である。387は埴の口縁部片で、388と389は埴の高台片である。390と391は壺の口縁部片と肩部片である。390は二重口縁状になり、復元口径で10.6cmを測る。390と391はやや頸部付近の径が大きい感がするが、胎土や色調などから同一の可能性もある。392は甕の口縁部片である。393～398は土師器である。393～395は坏片か。395は底部は欠損するが、全体的に丸みをもつ。復元口径14.6cmを測る。396と397埴の高台片である。397は口縁と高台の端部が共に外側に開く。復元口径13.8cmを測る。398のみ時期が少し古い高坏の坏部片である。

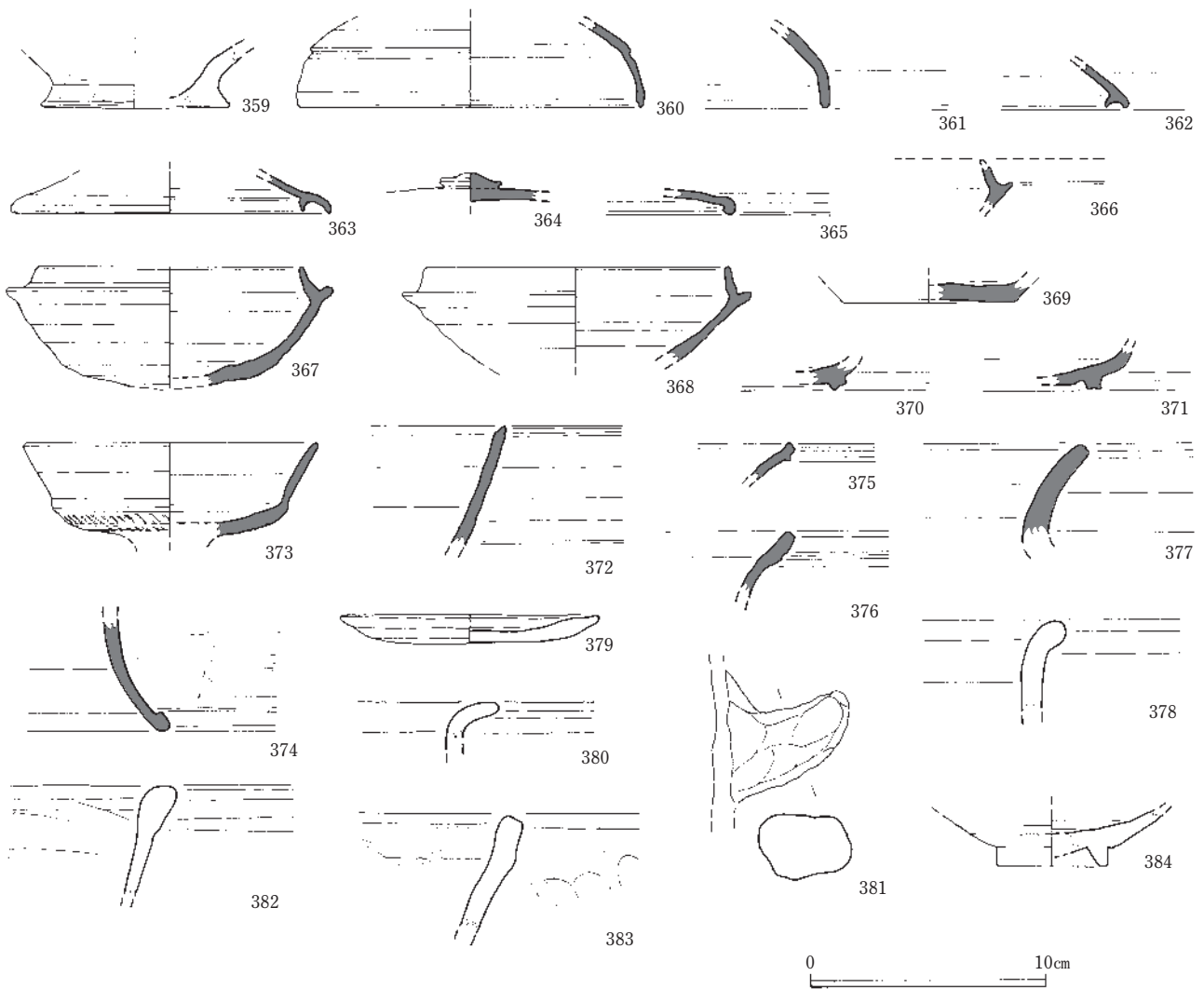
399～409はⅤ区のおもな出土土器である。399は弥生土器甕の底部片で、平底である。400



- 1 盛土 (橙色土と灰色土が混ざる)
- 2 黒茶色土
- 3 黄灰色土
- 4 橙色土 (地山に似る)
- 5 灰黒色土
- 6 赤茶色土
- 7 黒灰色土
- 8 灰褐色土
- 9 黄褐色土
- 10 茶褐色土
- 11 10 とほぼ同じ (礫石を多く含む)
- 12 黄橙色土 (地山)
- 13 1 と同じ
- 14 7 とほぼ同じ
- 15 黄褐色土
- 16 12 に橙色土が混ざる
- 17 12 とほぼ同じ
- 18 16 よりも橙色土の量が多い



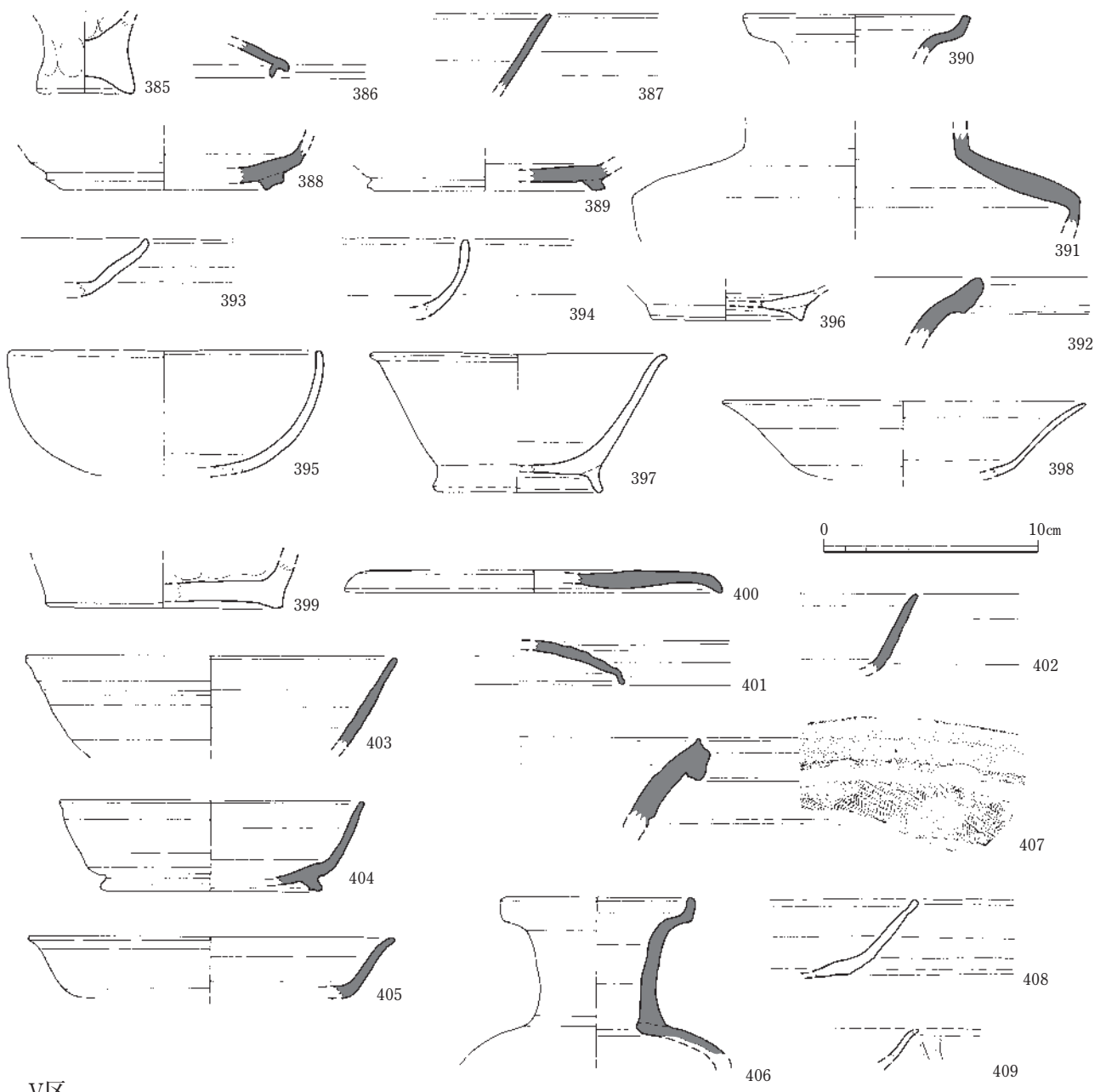
第89図 VI区道路跡実測図 (1/ 60)



第90図 III-3区その他出土土器実測図(1/3)

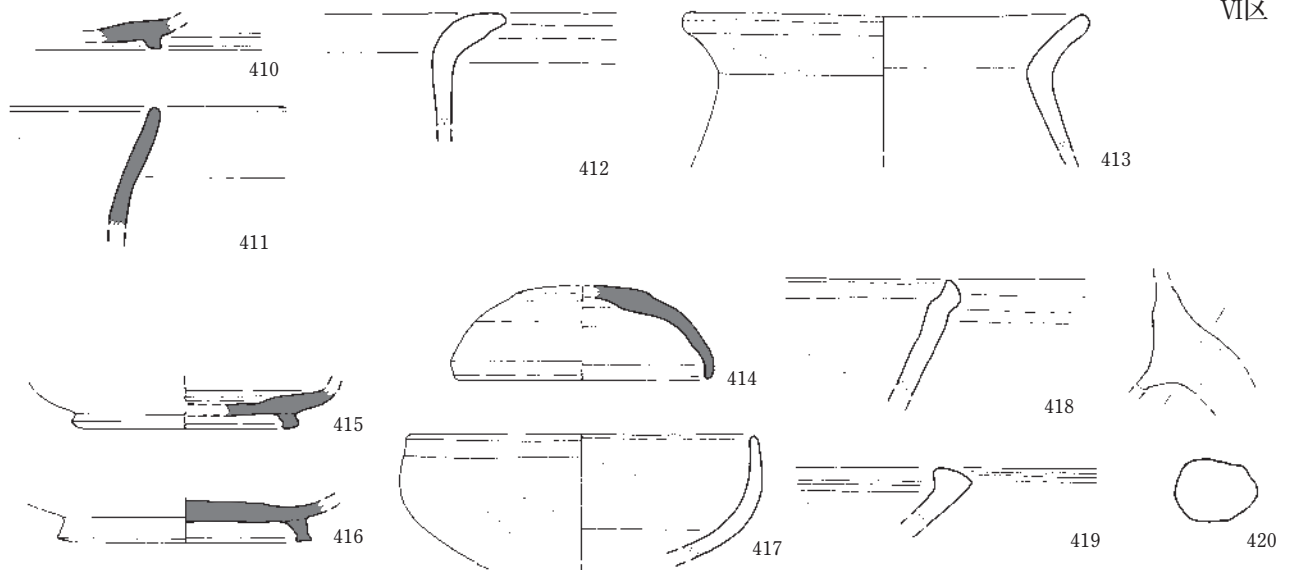
～407は須恵器である。400と401は口縁端部が嘴状に環蓋片である。400は器高1cmと低い。復元口径17.6cmを測る。402～404は碗片で、403と404は復元口径17.2、14.1cmを測る。405は皿片である。復元口径17.0cmを測る。406は壺の口縁～肩部片である。復元口径9.0cmを測る。407は甕の口縁部片で、外面に明瞭な波状文がつく。408は土師器坏片である。内面口縁に段がつく。409は青磁皿片で、外面に鎬連弁文状の文様が僅かにある。

410～420はVI区出土である。410～413はピット出土である。410は須恵器碗の高台片である。411は須恵器平瓶などの口縁片か。口縁端部に向かって外に開く。412と413は土師器甕片で、412は逆「L」字で、413は「く」字形で、復元口径16.0cmを測る。414～420はVI区のその他出土土器である。414は小さいサイズの須恵器環蓋片である。復元口径で10.4cmを測る。415と416は須恵器碗の高台片である。416の方が少し大きく、やや高い高台をもつ。417は土師器坏片である。体部中程が厚みを増す。外面に僅かにミガキの痕跡がある。418と419は土師質鉢の口縁部片である。共に内面の調整は横方向の刷毛目である。420は土師質鍋の脚片で、調整は外面にナデで整形し、内面は僅かに刷毛目が残る。



V区

VI区



第91図 V・VI区その他出土土器実測図 (1/3)

8. 特殊品 (図版45～48、第92～97図)

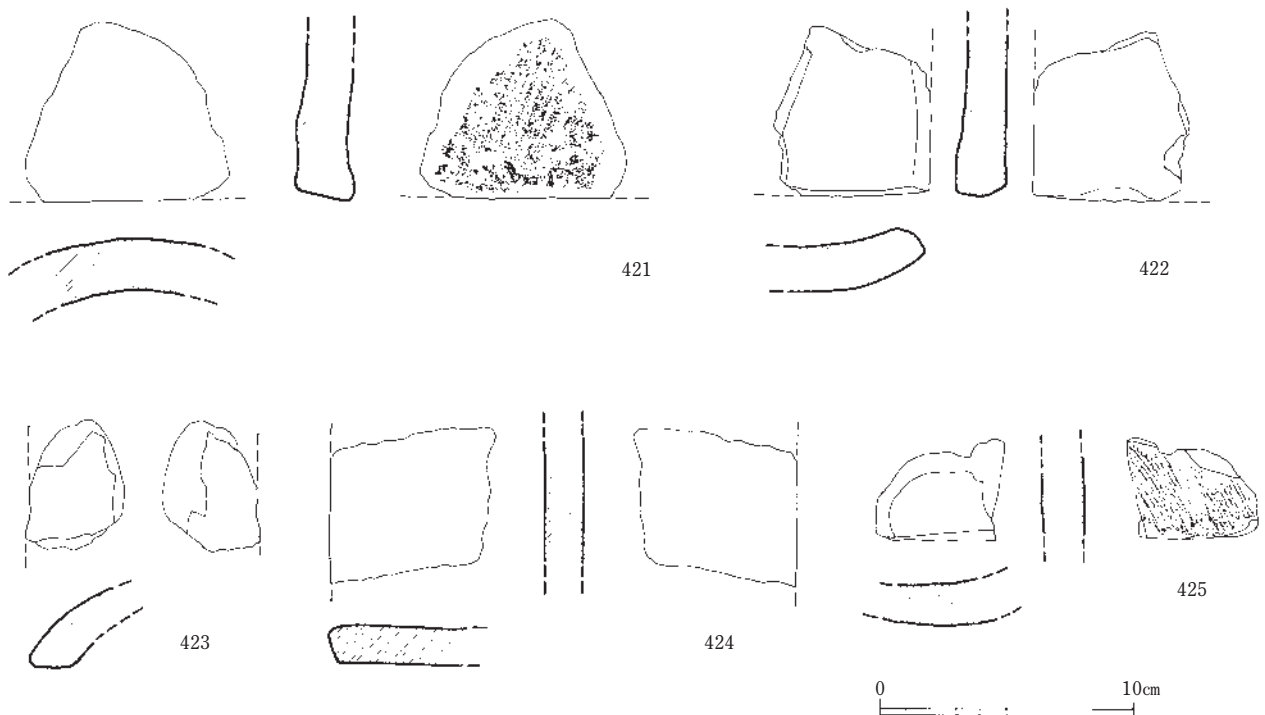
瓦 (図版45・46、第92・93図)

421～425はⅢ-3区出土の瓦である。421と422は道路跡出土の丸瓦片と平瓦片である。421は丸瓦の先端部片で内面に板ナデ状の痕跡がある。422は摩滅するが、凸面には布目状の痕跡が僅かに見える。423と424は攪乱溝出土の丸瓦片と平瓦片である。423は焼成良好で灰色を呈す丸瓦の端部である。凸面はナデ整形がされる。424は凸面に布目の痕跡が見える。425は遺構検出土の平瓦片である。凹面には刷毛目状の痕跡があり、形状から丸瓦の可能性もある。

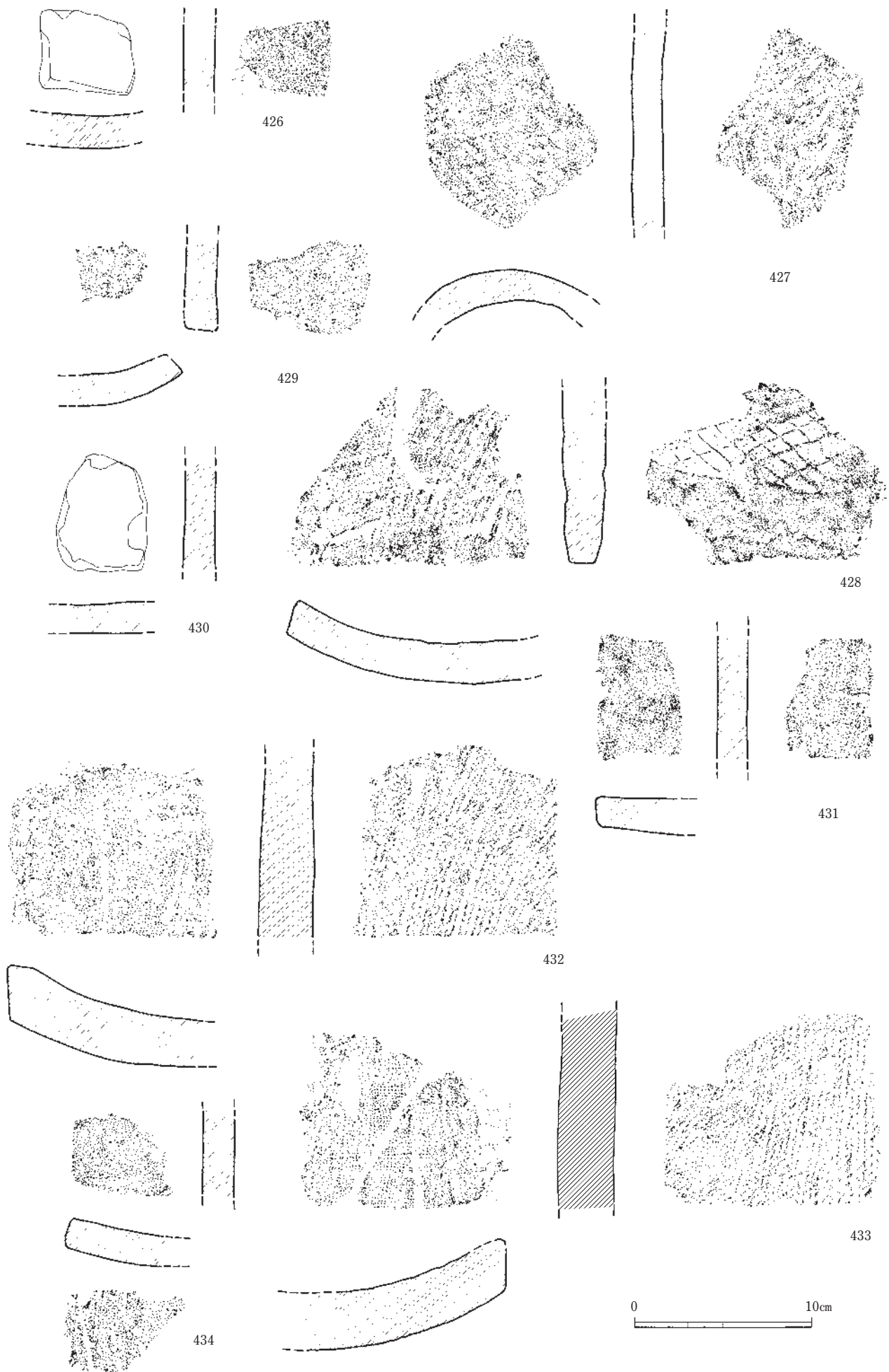
426～434はV区出土の瓦である。426は14号溝出土の平瓦片である。427～431は15号溝出土である。427は丸瓦片で、凸面には格子目の叩きの痕跡がある。428～431は平瓦片である。428も凹面に格子目の痕跡がある。429～431は摩滅していて調整は不明である。432はP1014出土の平瓦片である。433と434は平瓦片である。432と433の調整は外面は縄目、内面は布目である。434は凹面に僅かに布目の痕跡が見える。

土製品 (図版46、第94図)

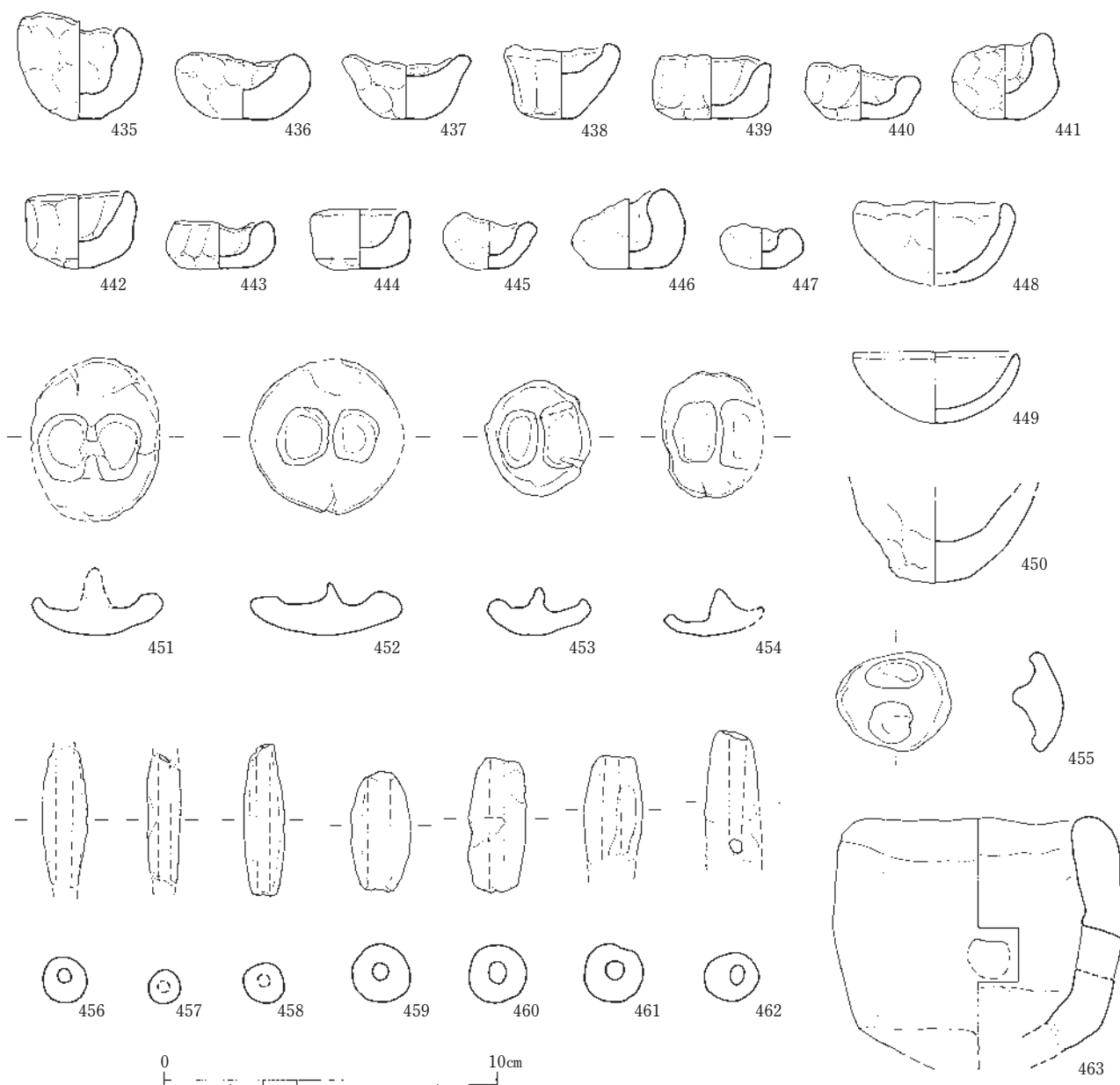
435～450は手づくね土器である。それぞれ独特の形状で、内外面には指頭圧痕が残る。435～438はⅢ-1区1号竪穴住居跡出土である。435はやや口縁がゆがむが、器高で3.2cmを測る。436～438は厚手な作りで底部が一番厚く、口縁端部に向かって外側に開く。439～445は7・8号竪穴住居跡出土で、形状はいずれも底部から口縁に向かってほぼ垂直に立ち上がる。446は59号土坑出土である。446は441の形状に似る。447はⅢ-3区南壁出土である。今回出土した中で最小のものである。448～450はV区6号竪穴住居跡出土である。448と449の径は4.6、5.0cmを測る。450は口縁端部を欠損する。451～455は土製模造品である。中央部分を摘み挙げている。452は径4.6cmを測る正円形であるが、これ以外はやや長円形状を呈し、長軸3.4～4.9cm、短軸3.0～3.9cm、厚み1.5cmを測る。451はⅢ-1区1号竪穴住居跡出土、452～454は7・8号竪穴住



第92図 Ⅲ区出土瓦実測図 (1/3)



第93图 V区出土瓦类测图 (1/3)



第94図 土製品実測図(1/2)

居跡出土、455は59号土坑出土である。456～462は土錘である。456～458は道路跡出土で、細長いタイプである。端部を欠損するが、いずれも長さ4cmを越えている。459～462はV区出土である。459と460はほぼ完形品である。461と462は下部を欠損する。463は調査区内で唯一出土した蛸壺である。1/3残存し、復元口径8.2cmを測る。体部中程に円形の穿孔がある。

石器・石製品(図版47・48、第95・96図)

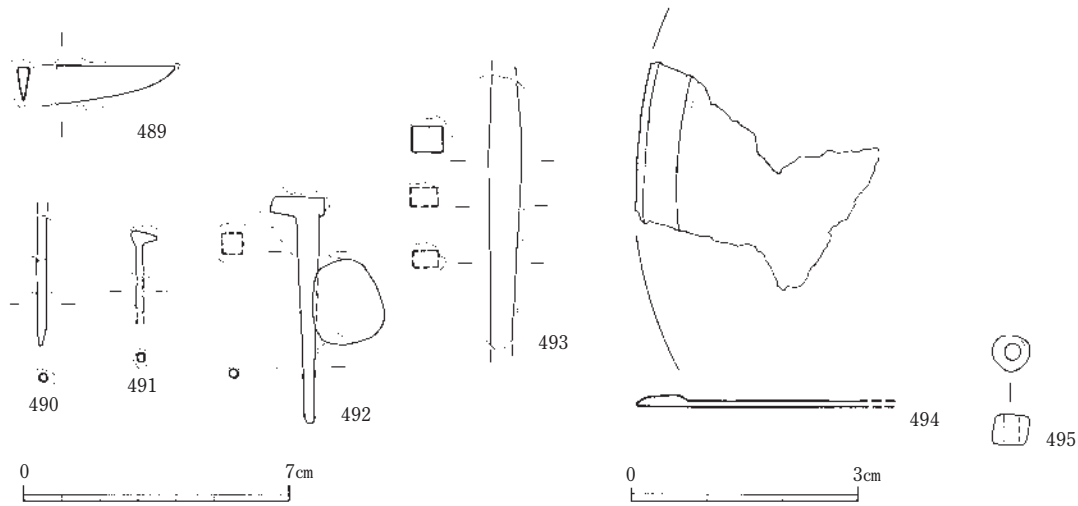
464はV区13号溝出土で赤色の珪質岩製の石鏃である。長さ2.3cm、重さ1.1gを測る。465は黒色安山岩製の石鏃の先端部である。残存する長さで2.1cm、重さ0.4gである。466はV区P812出土の石錐である。黄茶褐色の珪質岩製で、剥離により錐の先端を作るが、使用により折損している。長さ3.6cm、幅2.6cm、厚さ2.3cm、重さ19.5gである。467はV区13号溝出土のスク



第95図 石器実測図 (464～468は2/3、469～471は1/2、472～474は1/4)



第96図 石製品実測図 (486は1/3、487・488は1/4、他は1/2)



第97図 金属製品・ガラス玉実測図（489～493は1/2、494・495は1/1）

レイパーである。少し節理があるが、黒灰色のチャートの剥片を素材とし、一辺に刃を付けている。長さ3cm、幅3.7cm、重さ2.2cm、重さ20gを測る。468はⅢ-3区道路跡中央ベルト5層出土のスクレイパーである。黒色安山岩製で、下部に刃部を作り出している。469と470はV区P771出土の敲石である。469は安山岩製の自然礫の一端を敲き石として使用する。長さ8.1cm、幅4.4cm、厚さ4.2cm、重さ227.7gを測る。470は緑色結晶片岩製で、棒状礫の一端を敲石とする。残存する長さで7.6cm、幅4.5cm、厚さ2.2cm、重さ213.4gを測る。471はV区31号不明遺構出土の磨製石斧の刃部である。灰褐色安山岩製で、刃部には刃こぼれの跡が残り、研ぎ直されている。残存する長さで7.1cm、幅7.7cm、厚さ2.9cm、重さ125.7gを測る。472～474は凝灰岩質安山岩製の台石である。472はV区遺構検出面出土で、上下両面を台石として使用する。長さ8.5cm、幅9.6cm、厚さ5.4cm、重624.3gを測る。473は上面を使用するが、表面には軽く被熱した痕跡がある。長さ21.6cm、幅26.6cm、厚さ6.7cm、重さ6022.6gを測る。V区6号竪穴住居跡出土である。474はV区14号溝出土で、上面を主に使用する。長さ20.8cm、幅27.8cm、厚さ8.1cm、重さ6kg以上を測る。

475～479は滑石製紡錘車である。478のみほとんど残存していないが、径は3.8～4.6cm、厚さは1.1～2.0cmを測る。480～485は細粒砂岩製の砥石である。486は滑石製石鍋の底部片である。外面は煤で黒色を呈すが、ケズリの痕跡が見える。487は凝灰岩製の空風輪である。空輪は円形状をなし、宝珠形をとらない。風輪は基部が平坦をなし、頂部も水平をなさない。全体的に不定方向のノミ痕跡がある。488は約1/3以下しか残存していない凝灰岩製の茶臼片である。挽き木孔は隅丸長方形をなす。

金属製品・ガラス玉（図版48、第97図）

489～493は鉄釘である。489はⅥ区57号土坑出土の刀子片である。残存する長さで3.1cm、重さ4.2gを測る。490はV区15号溝出土である。長さ3.4cm、重さ1.7gを測る。491と492はⅥ区P6出土の釘である。それぞれ残存する長さで6.0、2.2cm、重さ16.6、1.3gを測る。493もⅥ区P8出土の釘である。端部を欠損しているが、残存する長さで7.2cm、重さ14.2gを測る。494はⅢ-1区道路跡出土の青銅鏡片である。表面は無文である。鏡の端部の断面は三角形で、径6.5cmに復元できる。重さ2.5gを測る。495は平成23年度報告分のⅠ区P551出土である。淡青緑色のガラス小玉で、径0.5cm、口径0.2cm、厚さ0.4cm、重さ0.1gを測る。

表6 カワラケ田遺跡2次調査出土石器・石製品

挿図	番号	図版番号	区	出土遺構	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
96	464	47	V	13号溝	石鏃	2.3	2.0	0.4	1.1	珪質岩
96	465	47	V	28号不明遺構	石鏃	2.1	4.0	1.1	0.4	安山岩
96	466	47	V	P 8 1 2	石錐	3.6	2.6	2.3	19.5	珪質岩
96	467	47	V	13号溝	スクレイパー	3.0	3.7	2.2	20.0	チャート
96	468	47	Ⅲ-3	道路跡中央ベルト5層	スクレイパー	4.3	5.0	1.1	29.2	安山岩
96	469	47	V	P 7 7 1	敲石	8.1	4.4	4.2	227.7	安山岩
96	470	47	V	P 7 7 1	敲石	7.6	4.5	2.2	213.4	緑色結晶片岩
96	471	47	V	3 1号不明遺構	磨製石斧	7.1	7.7	2.9	125.7	安山岩
96	472	47	V	遺構検出面	台石	8.5	9.6	5.4	624.3	凝灰質安山岩
96	473	47	V	6号竪穴住居跡	台石	21.6	26.6	6.7	6,022.6	凝灰質安山岩
96	474	47	V	1 4号溝	台石	20.8	27.8	8.1	—	凝灰質安山岩
97	475	47	Ⅲ-1	1号竪穴住居跡	紡錘車	4.4	—	2.0	52.3	滑石
97	476	47	Ⅲ-1	2号竪穴住居跡	紡錘車	4.5	—	1.1	34.0	滑石
97	477	47	Ⅲ-1	2号竪穴住居跡	紡錘車	3.8	—	1.5	35.9	滑石
97	478	47	Ⅲ-1	2号竪穴住居跡	紡錘車片	—	—	—	—	滑石
97	479	47	Ⅲ-1	3号竪穴住居跡	紡錘車	3.8	—	1.9	53.2	滑石
97	480	47	Ⅲ-1	1号竪穴住居跡	砥石	9.2	5.0	4.3	248.1	細粒砂岩
97	481	47	Ⅲ-1	1号竪穴住居跡	砥石	4.2	2.4	2.3	21.7	細粒砂岩
97	482	47	Ⅲ-3	遺構検出面	砥石	5.1	5.0	4.6	140.7	細粒砂岩
97	483	47	V	13号溝	砥石	8.0	7.4	5.5	292.3	細粒砂岩
97	484	47	V	15号溝	砥石	7.0	5.4	2.8	159.4	細粒砂岩
97	485	47	Ⅵ	号土坑	砥石	3.9	5.4	2.7	44.1	細粒砂岩
97	486	48	Ⅲ-3	官道跡	石鍋片	—	—	—	—	滑石
97	487	48	Ⅲ-3	官道跡	空風輪	22.0	—	16.0	—	凝灰質安山岩
97	488	48	Ⅲ-3	官道跡	茶白片	19.0	—	13.0	—	凝灰質安山岩

9. まとめ

今回報告したⅢ・Ⅴ・Ⅵ区では、Ⅰ・Ⅱ区と同様に圃場整備により大きく旧地形が改変されていた。そのため、少数の遺構のみを検出した状況であったが、縄文・弥生・古墳・奈良時代および中世の各時代の遺構・遺物を確認した。以下、各時代について説明する。

縄文時代の遺構はⅤ区で検出した54号土坑のみである。54号土坑は方形状で、底面にはピット状の掘り込みがあるので、落とし穴だと思われる。他の遺構は検出しなかったが、Ⅴ区では台石などの遺物を出土した。

弥生時代の遺構も少なく、Ⅴ区では埋土から土器片が出土した40号土坑と貯蔵穴だと思われる48号土坑のみである。その他には、遺構検出で甕・壺の底部片が出土した。

古墳時代の前期の遺構では、二重口縁壺片が出土した6号竪穴住居跡である。また遺物は出土しなかったが、中央に炉のある4号竪穴住居跡もこの時期の可能性はある。

中期の遺構や遺物は全く出土しなかったが、後期は比較的多く出土した。

後期については、各調査区で検出された竪穴住居跡の出土土器を検討すると6世紀末～7世紀前半頃である。Ⅲ-1区検出の1～3号竪穴住居跡、Ⅲ-3区では2軒の切り合う7・8号竪穴住居跡と住居近くで検出した62号土坑である。またⅥ区検出の47・48号掘立柱建物跡は出土遺物こそ

少ないが、47号掘立柱建物跡では7世紀中頃の須恵器坏身片が出土しているので、この時期の可能性はある。

奈良時代では32・33～37・39・42・44～46号掘立柱建物跡と44～47・56・57・60・61号土坑と道路跡である。

Ⅲ—1区では、2号竪穴住居跡を切る32号掘立柱建物跡と60・61号土坑は出土土器からこの時期である。V区の掘立柱建物跡については建物方向や掘り方などから検討すると3時期の変遷が考えられる。

1つは33・34・35号掘立柱建物跡である。逆L字状に建物配置されており、同時期の可能性はある。また周辺の溝からは僅かではあるが、縄目の平瓦片が出土しており、一部の建物は瓦葺きだった可能性がある。37・44号掘立柱建物跡は上記の建物群とは、掘り方の大きさなどがやや小さく異なるがほぼ同方向に建てられる。2つ目としては36・39・46号掘立柱建物跡、3つ目に42・45号掘立柱建物跡が挙げられる。これらの建物群の遺物が少なく詳細の検討はできなかった。

その他V区検出の土坑では、44～47・56号土坑で出土土器からこの時期が考えられる。またVI区検出の57号土坑は出土した土師器坏からこの時期である。

中世では、主にV区検出の13～16号溝が挙げられる。これらの溝は奈良時代の33～35号掘立柱建物跡の遺構を切ることや、14・15号溝出土の白磁片、土師質鉢片から12～15世紀頃までの時期が考えられる。その他には目立った遺構は検出されなかった。

○古代の道路跡について

今回の調査された道路跡は英彦山山系から八手状に豊前海へ延びる丘陵を横切る形で検出した。道路跡は現道によって部分的に途切れてはいるが、長さ約130mの道路跡を検出し、幅約9～10mを測る。Ⅲ—1区の東側とⅢ—3区の西側にかけての間は谷に位置し、谷では道路自体が浸食を受けて幅6.5～12mと定まっていない。

道路構築方法については、山村信榮による（側溝 カット 切通し 盛土）4種類の工法の中の、切通し工法および一部、盛土工法が行われたと考えられる。

切通し工法が行われた丘陵部分は、1970年代の圃場整備や宅地造成により旧地形の丘陵部分はカットされていた。1962年圃場整備前の空中写真（表目次裏）や調査地周辺で現在も残存する道路痕跡（築城基地内）から検討すると丘陵部分のⅢ—1～3区間については切通し工法だと判断できる。

また切通し工法以外にもここでは、Ⅲ—3区西側の谷部分で脆弱な地盤を補強するために、地山面には河原石とさらに土器（須恵器甕片）などを敷き詰めた状態を確認できた。これは、京築地域の道路跡では初めての検出である。

これら切通し工法や河原石や土器を敷き詰めた路盤補強を行い、路面部分には黒色土で舗装したのではないかと考えられる。黒色土層の上面が波立っているのは、歩行による痕跡なのかもしれないが、黒色土の上面で遺構検出作業を行ったが、歩行痕跡などは検出できなかった。

さらに道路跡では、波板状遺構を検出した。すべての波板状遺構は最下層の地山面で検出し、内部に砂質土が堆積していた。この砂質土は別段、固く締まっているわけではなかった。検出した楕円形状の痕跡がいくつも連なる状態を確認したが、波板状遺構の性格までは判断できなかった。

以上が、今回検出した道路跡についてだが、出土遺物や道路跡で検出した波板状遺構、黒色土の検討から2つの考えを報告したい。

1 築造当初の路面は切通し工法により、丘陵部分をカットした地山部分とする。検出された波板状遺構は築造当初の歩行痕跡やそれらに伴った補修痕跡と考えられる。地山面の出土遺物から、築造当初の時期は7世紀後半頃である。その後、8世紀中頃以降、国分寺などの建設に伴って周辺の道路を再整備するため築造当初の地山面の路面に黒色土で舗装を施して、道路を再構築したのではないかと考えられる。

2 検出された波板状遺構を道路の下部の路盤補強の基礎工事だとすれば、その上にさらに黒色土で路面の舗装を施した。この黒色土の上面が築造当初の路面だと考えれば、出土遺物から道路築造時期は8世紀中頃以降と考えられる。

現段階での道路築造時期は7世紀後半又は8世紀中頃以降の2時期あるのではないかと考え、路面に灰褐色土（白磁片や土師質鍋片を含む）が堆積した中世およびアスファルトで保護された現代まで地域の主要道路として使用され続けたのではないかとと思われる。

この道路跡については他にも検討しなければならない課題があるので、今後も周辺の調査の結果を踏まえて、さらに研究を進めたい。

○八ッ重遺跡1次調査について

カワラケ田遺跡2次調査地から東に約100mの地点で、椎田道路建設に伴い調査された遺跡である。調査地は遺構の検出状況により、4ヶ所に区切られて調査されていた。目立った遺構は検出されなかったが、東区東側からは小谷が検出された。この小谷は、丘陵を横切る形で掘り込まれ、長さ約40m、幅約9mを測る。また、東区西側では特に報告されていないが、この小谷から続く直線上で低い段落ちと溝状遺構？が検出されていた。（第98・99図参照）

報告のみでは古代の道路跡と断定はすることはできないが、以下の点は注目される。

- ・カワラケ田遺跡2次調査で検出された道路跡と東側の築城基地内にある現在も残る切通し状の道路痕跡とを結ぶ一直線上に位置する。（第98図参照）
- ・検出された小谷内の土層は明灰色粘質土、上層では暗褐色土層など、カワラケ田遺跡2次調査の土層と類似の埋土である。
- ・調査担当者の報告では、「平安時代以前に小谷を埋め尽くすような土木工事が行われたと推測する」と記述されていた。

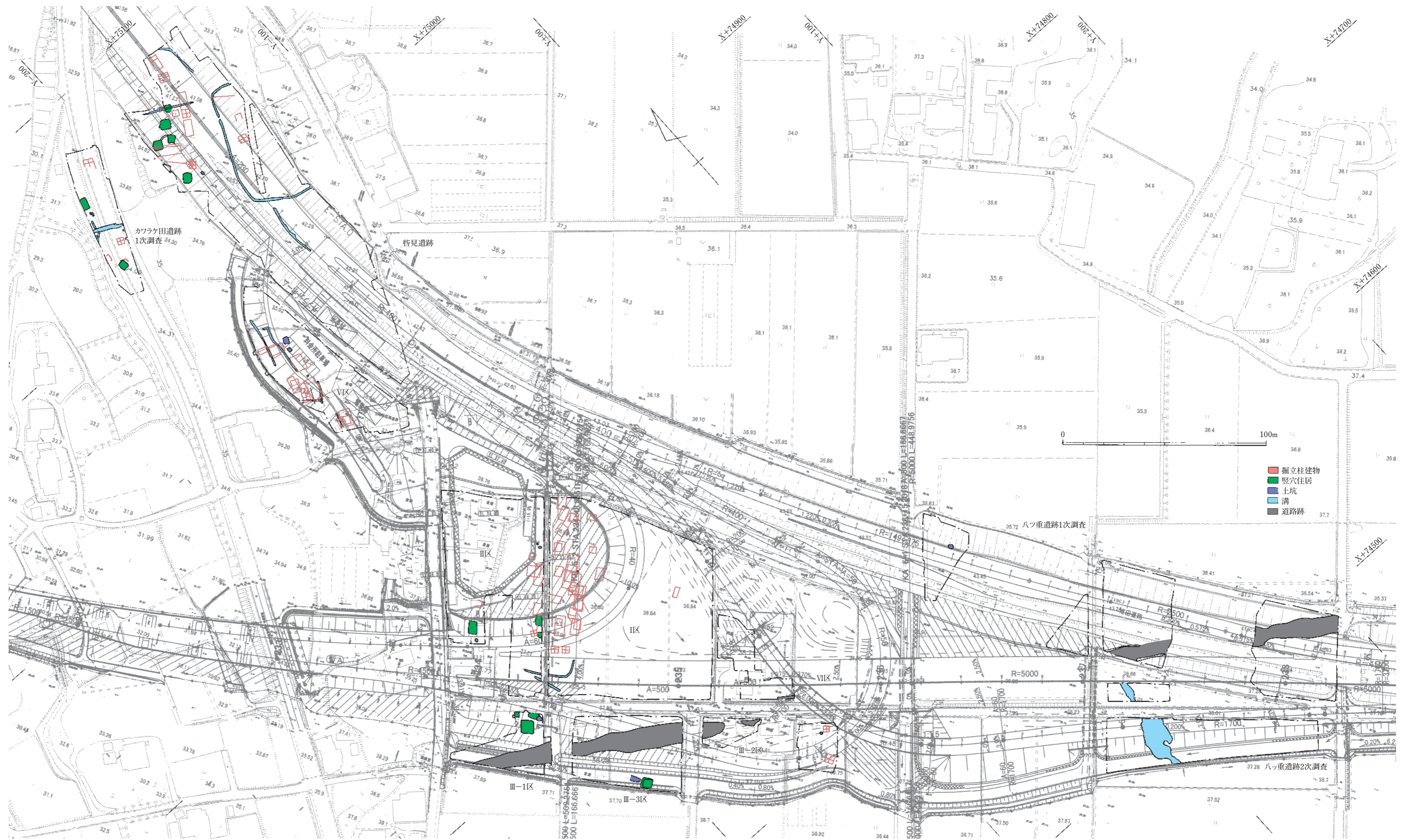
などの点を踏まえると、この小谷も古代の道路跡と判断できると思われる。しかし報告書のみの検討のため詳細について不明である。今後も、周辺の調査で明らかにしたい。

（参考文献）

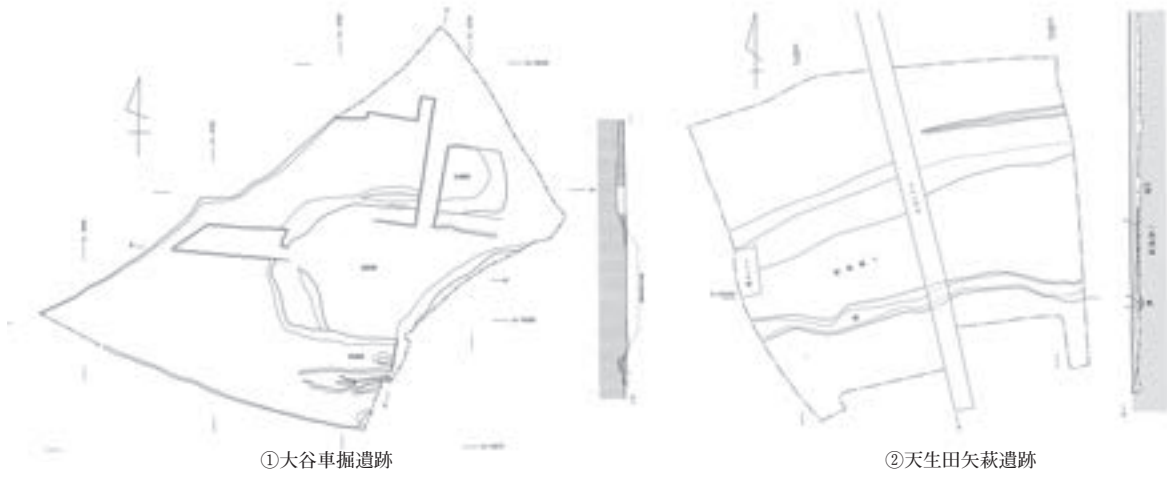
木下良1996『古代を考える 古代道路』吉川弘文館

山村信榮1993「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』第68号

（※その他の参考文献はP8に記載）



第 98 図 カワラケ田遺跡 2 次調査地周辺の古代道路 (1/1500)



①大谷車掘遺跡

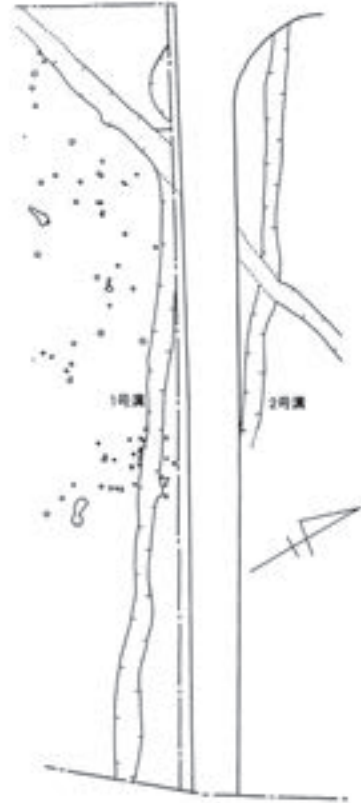
②天生田矢萩遺跡



③天生田大池遺跡



④皆見樋ノ口遺跡



⑦越路二月田遺跡



⑥ハッ重遺跡



⑧坂本正毛田遺跡

第99図 京築地域の古代道路 (①②⑥～⑧は1/600、③④は1/300)

※『九州歴史資料館研究館集38』から転載

10. カラワケ田遺跡の古代道路土壌の理化学的分析

佐賀大学低平地沿岸海域研究センター 末次 大輔

1. 調査目的

福岡県京都郡みやこ町の東九州自動車道建設現場において、古代道路遺構（カラワケ田遺跡群）の発掘調査が行われている。本調査は当該遺構の土木工学的視点からその特徴を明らかにすることを目的として、道路遺構の試料の土質試験を実施するものである。

2. 調査ならびに試験の概要

2.1 試料採取

カラワケ田遺跡（旧表記：下原七反田遺跡）III-3 区の全景を写真1に、試料採取地点を第100 図に示す。本試験で対象とした地盤は 2 層構成であった。表層部は暗灰色の粘性土（道路舗装面と推定されている層。以後、試料 1 と呼ぶ。）であり、その下層部は砂礫分を含む黄褐色の粘性土（地山と推定されている層。以後、試料 2 と呼ぶ。）である。今回の調査では、各試料採取地点において、ステンレス製のシンウォールチューブサンプラーを用いて不攪乱状態で試料を採取した。今回の試料採取で使用したシンウォールチューブは、主として表層部の土試料を採取することを目的としているので、30cmに切断したものをを用いている。同時に、試料 1 ならびに試料 2 の乱した試料も採取した。試料採取の状況を写真 2 に示す。

2.2 試験概要

今回の調査では、上記 2 層の土の物理的性質、化学的性質ならびに力学的性質について、室内土質試験ならびに土壌環境分析を行った。まず、不攪乱試料を用いて湿潤密度と乾燥密度を求めた。湿潤密度は、シンウォールチューブから不攪乱試料を取り出して両端面を整形して体積と重量を測定して求めた。乾燥密度は試料採取時の含水比と先に求めた湿潤密度より算出した。

次に、不攪乱試料の表面から深部に向かって 15mmの厚さ毎に試料をスライスカットして、蛍光 X 線分析と交換性陽イオンの溶出試験に供し、主要化学組成と溶出物質を調べた。蛍光 X 線分析ならびに溶出試験は、土試料に石灰ならびににがり成分であるカルシウムとマグネシウムが含まれているかどうかを調べることを主たる目的として行った。

乱した両試料（試料 1、試料 2）を用いて、土粒子の密度試験、粒度試験、液性限界試験、塑性限界試験、強熱減量試験、および突き固めによる締固め試験を行い、両試料の基本的な地盤工学的特性を調べた。また、発掘時における両試料の状態と地盤工学的な特性から、古代道路の建設方法や舗装の特性について考察した。本調査で実施した試験の一覧を表 -1 に示す。

3. 試験結果と考察

3.1 発掘時における原位置の道路の状態

試料 1 ならびに試料 2 のシンウォールチューブで採取した。試料 2 は砂ならびに礫を含んでいるために、写真 3 に示すように不攪乱状態で採取することができなかった。よって、試料 1 のみ計測した。

不攪乱試料を採取すると同時に、試料の含水比を求めるためにその直近で試料をしている。測定結果を表7に示す。試料採取地点毎に含水比が異なり、空間的なばらつきがみられた。試料1では、最大で38.0%、最小で25.5%であった。試料2では、最大で50.5%、最小で32.6%であった。写真3に示すように、シンウォールチューブから取り出した不攪乱試料は、試料1に試料2の細粒分が混入している状態であったので、試料1と試料2を明確に分けることが困難であった。ここでは、シンウォールから抜いた状態で、試料1と試料2を分けずに両端面を整形して寸法を測定し、湿潤密度を求めた。このようにして得られた各地点の乾燥密度 ρ_d と、観察時の状態の概略を表-2に示す。乾燥密度 ρ_d もばらつきが認められ、最大で1.72g/cm³、最小で1.42g/cm³であった。

3.2 古代道路材料の地盤工学的性質

試料1、試料2の各種物性試験ならびに粒度分析の結果をそれぞれ表9と第101図に示す。試料1は細粒分が主体で19.7%の砂分を含んでおり、日本統一土質分類によると高液性限界の砂質粘土(CHS)に分類される。その下層の地山とされる試料2は、礫分を9.4%、砂分を39.4%含んでいる高液性限界の礫混じり砂質粘土(CHS-G)に分類される。試料1ならびに試料2の塑性限界は、それぞれ24.2%、35.4%であった。試料1、試料2の自然含水比はそれぞれ30.8%および38.8%であり、両試料ともに塑性限界より高い含水状態であった。

A-3地点とM-1地点から採取した不攪乱試料の蛍光X線分析と交換性陽イオンの溶出試験の結果をそれぞれ表-4、表-5に示す。同表では、地表面から15mm毎に深度45mmまでスライスカットして測定した結果と、同様に深度75mmから150mmまでの結果を示している。A-3地点では、深度45mmまでのSiあるいはAlの含有量と、深度75mm以深でのそれらの値が異なっている。これは、表層から深度45mmまでは試料1、深度75mm以深では試料2の結果を示していると考えられる。両試料ともSiとAlを主成分とする土である。また、化学的な固化に寄与するCaやMgの含有量は少なかった。Ca、Mg、Naの交換性陽イオンの溶出はほとんど無く、Mgについては検出限界以下であった。これらの結果より、人為的に石灰等の固化材が添加・混合された土ではないと推察される。M-1地点の試料についても同様にいえる。これらより、この舗装と想定されている試料1の層において、舗装面として高い支持力や強度を得るために、化学的な手法を用いた可能性は極めて小さく、締固めのみでそれらを得ようとしていたことが推察される。

試料1と試料2の締固め試験の結果を第102図に示す。試料1の最適含水比は33.3%、最大乾燥密度は1.362g/cm³であった。試料2の最適含水比は37.4%、最大乾燥密度は1.219g/cm³であった。同じ締固めエネルギーのときに得られる最大乾燥密度は、試料1の方が大きかった。同図にはA-2地点における乱さない状態で測定した結果をプロットしている。A-3地点のプロットはほぼゼロ空隙曲線上にあり、限りなく飽和に近い状態であった。さらに、乾燥密度は、標準締固めエネルギーで得られる締固め曲線よりもかなり上方にプロットされており、現代で定義されている標準締固めエネルギーよりも極めて高いエネルギーで締め固められていたと推察された。なお、A-2地点等で乱さない試料で乾燥密度を測定しているが、シンウォールチューブ内には試料1、2の双方が含まれおり、両試料を含んだ状態で乾燥密度が算出されていることに留意する。

3.3 表層舗装材料（試料1）の締固め特性と発掘時の状態について

表8に示されるように、不攪乱試料で求めた乾燥密度は、第101図で示した標準締固め試験で得られる最大乾燥密度より大きかった。そこで、より大きなエネルギーで試料1を締め固めた。そのときに得られる締め固め曲線を第103図に示す。ここで、締固めエネルギーをランマーの重量、落下高さ、層数、1層当たりの締固め回数の積を試料の体積で除して定義すると、第103図に示される最も上方に位置する曲線は約 2500kJ/m^3 、下方の曲線は約 550kJ/m^3 のエネルギーで締め固められたことになる。大きなエネルギーで締め固めたときの最大乾燥密度は 1.52 g/cm^3 、最適含水比は 25.5% となった。また、乱した試料を採取した時点での自然含水比 30.3% 付近では乾燥密度は 1.45 g/cm^3 となっており、原位置（不攪乱試料から求めた）の乾燥密度に近い値となった。試料1のゼロ空隙曲線と原位置の乾燥密度より、建設当時は、少なくとも自然含水比よりも低い含水比の状態に締め固められたと推察される。

路床や路体の道路土工の締固め管理では標準締固めエネルギー（約 550kJ/m^3 ）が用いられるが、道路路盤では十分な支持力が要求されるために、路盤の締固めにはより大きな締固めエネルギー（約 2500kJ/m^3 ）が用いられる。第103図に示すように、当時の締固めエネルギーは、現代における路盤の締固めエネルギーと同等かあるいはそれ以上であったと推察される。

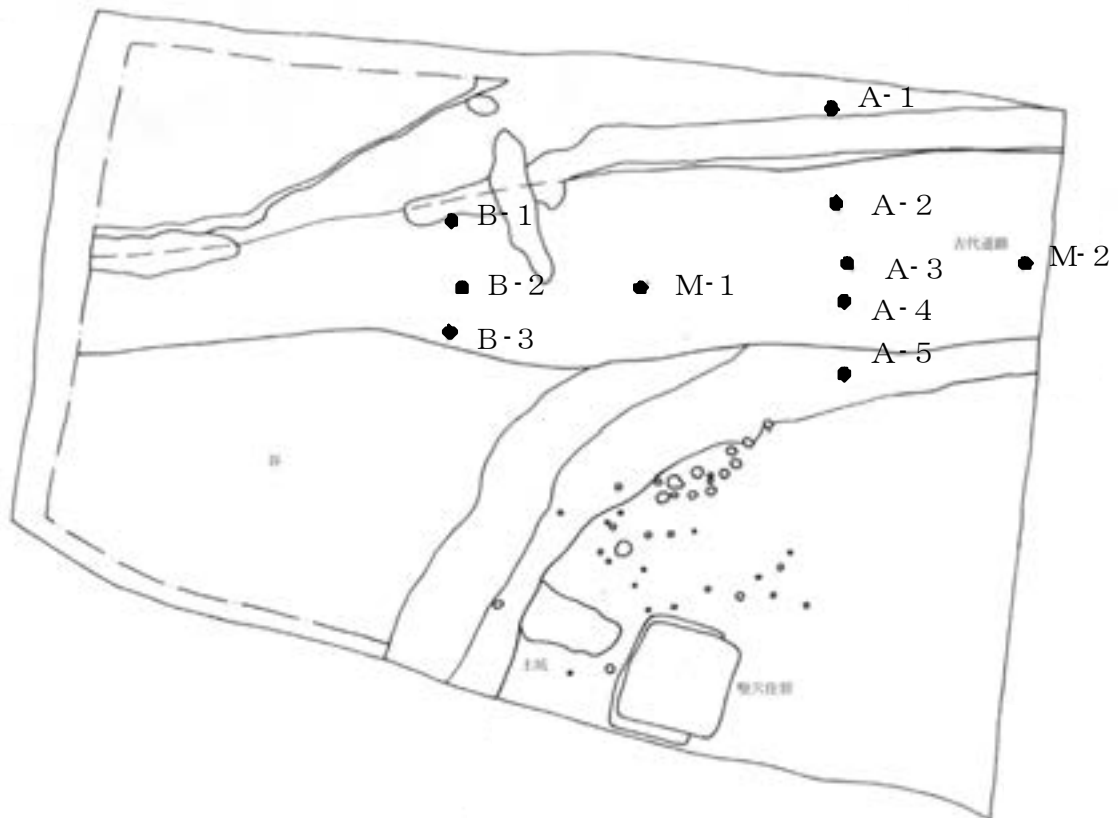
試料1で構成される層が道路舗装の表層面であったと仮定すると、想定する交通荷重に対して十分な支持力を発揮させることはもちろんであるが、粘性土の舗装であることに起因した降雨時の繰返し作用する交通荷重による泥寧化や、水分蒸発に起因する乾燥収縮クラックの発生による支持力の低下等を抑制するために、このような高い密度にする必要もあったのではないかと想像される。

参考文献

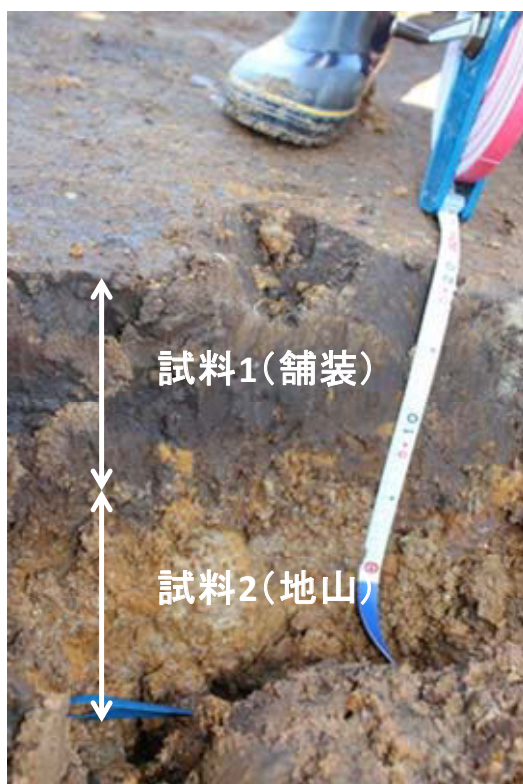
- 1) 土壤環境分析法編集委員会編：土壤環境分析法，pp.215-219，博友社，1997.
- 2) 地盤工学会：地盤調査の方法と解説，pp.274-279,2004.
- 3) 地盤工学会：地盤材料試験の方法と解説，2009.



写真1 調査地点の全景



第100図 調査ポイントの概略図



(a) 掘削時の様子

上部に試料1, 下部に試料2を確認できる。



(b) 不攪乱状態の試料1の採取状況



(c) 不攪乱状態の試料2の採取状況

砂礫分を多く含んでおり不攪乱試料は採取できなかった。

写真2 試料採取時の状況

表7 実施試験の一覧

	実施内容	備考
不攪乱試料	1) 試料採取：(地点) A-2, A-3, M-1, M-2, B-2 2) 湿潤密度試験, 含水比試験 3) 蛍光 X 線分析, 交換性陽イオン溶出試験	3) は A-3 と M-1 地点で実施
攪乱試料	1) 土粒子の密度試験, 粒度試験, 強熱減量試験 2) 液性限界試験, 塑性限界試験 3) 締固め試験, 一軸圧縮試験	
原位置試験	動的コーン貫入試験	※平成 22 年度に実施済み

表 8 各調査地点の不攪乱試料の状態

地点	含水比※ (%)	湿潤密度 (g/cm ³)	乾燥密度 (g/cm ³)	備 考
A-2	27.05	2.00	1.57	表層から7 cm程度まで粘土、それ以下は砂混じり粘土、深度が増すにつれ砂の含有量が増える。
A-3	32.25	1.94	1.46	表層から7 cm程度まで粘土、それ以下は砂混じり粘土、深度が増すにつれ砂の含有量が増える。
M-1	27.49	2.01	1.61	表層から6 cm程まで粘土、それ以下は砂が見られる。
M-2	37.95	1.96	1.42	表層から8 cm程まで粘土、それ以下は砂混じり粘土。
B-2	25.51	2.17	1.72	表層から5 cm程まで粘土、それ以下は砂混じり粘土、深度が増すにつれ砂の含有量が増える。

※不攪乱試料を採取した直近の土試料の含水比



A-2 地点



M-2 地点



B-2 地点

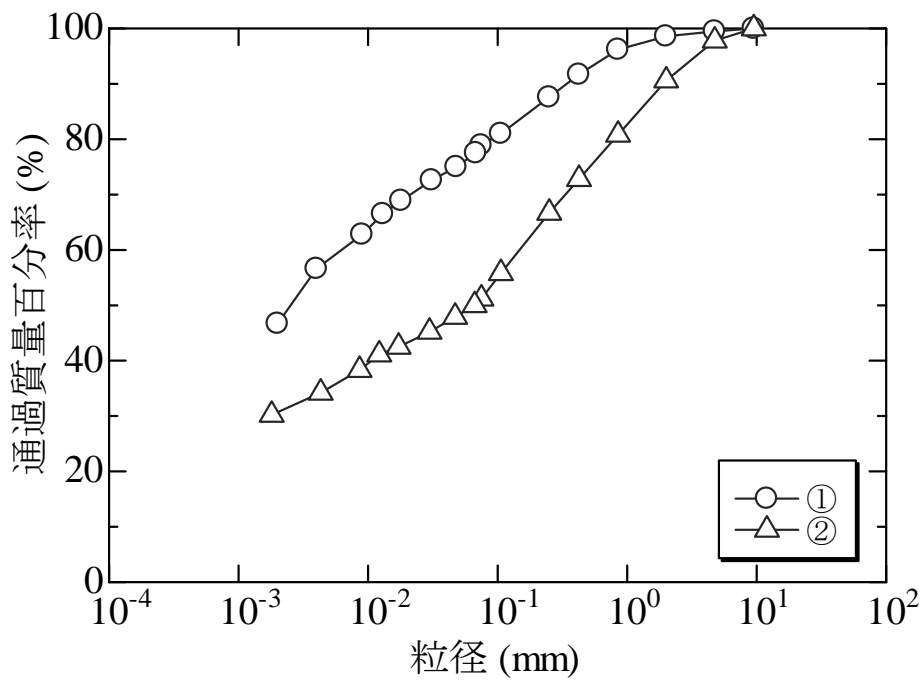


A-3 地点で採取した試料 2 の状態。砂、礫分が多く不攪乱状態での採取が困難であった。

写真3 不攪乱試料の状態

表9 試料1と試料2の物性一覧

試料番号	試料1 (①)	試料2 (②)
土粒子の密度 ρ_s (g/cm ³)	2.659	2.733
自然含水比 w_n (%)	30.8	38.8
液性限界 w_L (%)	72.1	82.2
塑性限界 w_P (%)	24.2	35.4
塑性指数 IP (%)	47.9	46.8
最大乾燥密度 ρ_{dmax} (g/cm ³)	1.362	1.219
最適含水比 w_{opt} (%)	33.3	37.4
強熱減量 (%)	11.0	11.0
地盤材料の分類名	砂質粘土 (高液性限界)	礫まじり砂質粘土 (高液性限界)



第101図 試料1と試料2の粒径加積曲線

表10 A-3地点の蛍光X線分析結果ならびに交換性陽イオン溶出試験結果
(蛍光X線分析結果)

深度 (mm)	Si	Al	Fe	K	Ti	Ca	Mg	etc
	wt (%)							
0-15	52.9	20.6	18.2	3.3	2.4	1.1	0.9	0.6
15-30	51.8	22.5	17.3	2.9	2.2	1.0	0.9	1.4
30-45	55.6	22.0	13.6	3.0	2.3	1.2	0.9	1.4
75-90	48.6	26.3	19.4	1.7	1.9	1.0	0.6	0.5
135-150	3.98	28.3	26.9	1.1	0.5	0.8	0.4	2.2

(溶出試験結果)

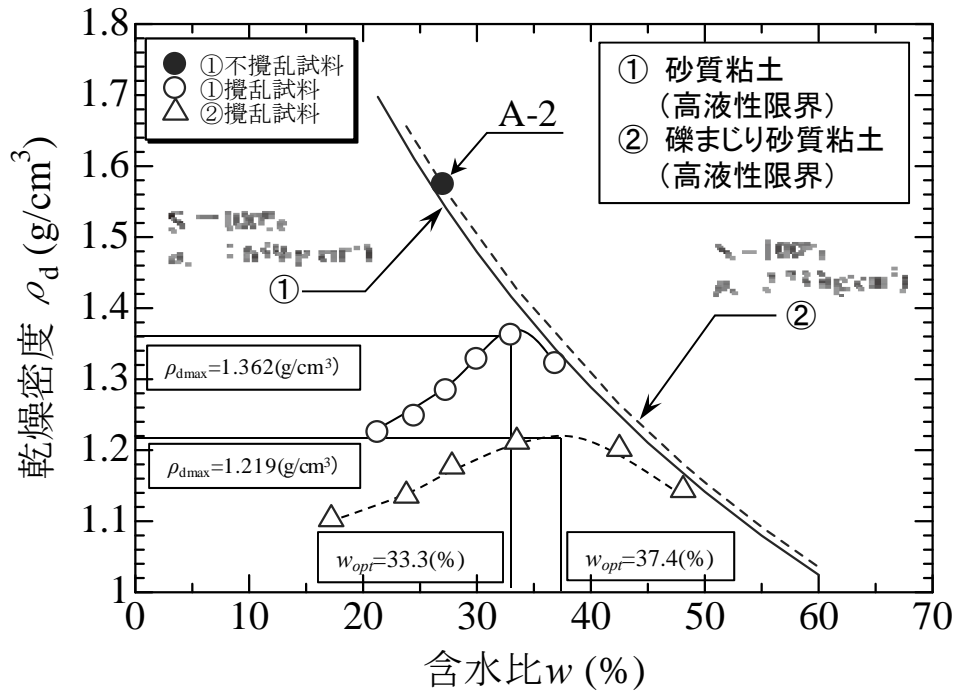
深度 (mm)	Ca	Mg	Na
	(mg /L)		
0-15	2	N.D.	0.1
15-30	2	N.D.	N.D.
30-45	2	N.D.	N.D.
75-90	2	N.D.	N.D.
135-150	2	N.D.	0.1

表11 M-1地点の蛍光X線分析結果ならびに交換性陽イオン溶出試験結果
(蛍光X線分析結果)

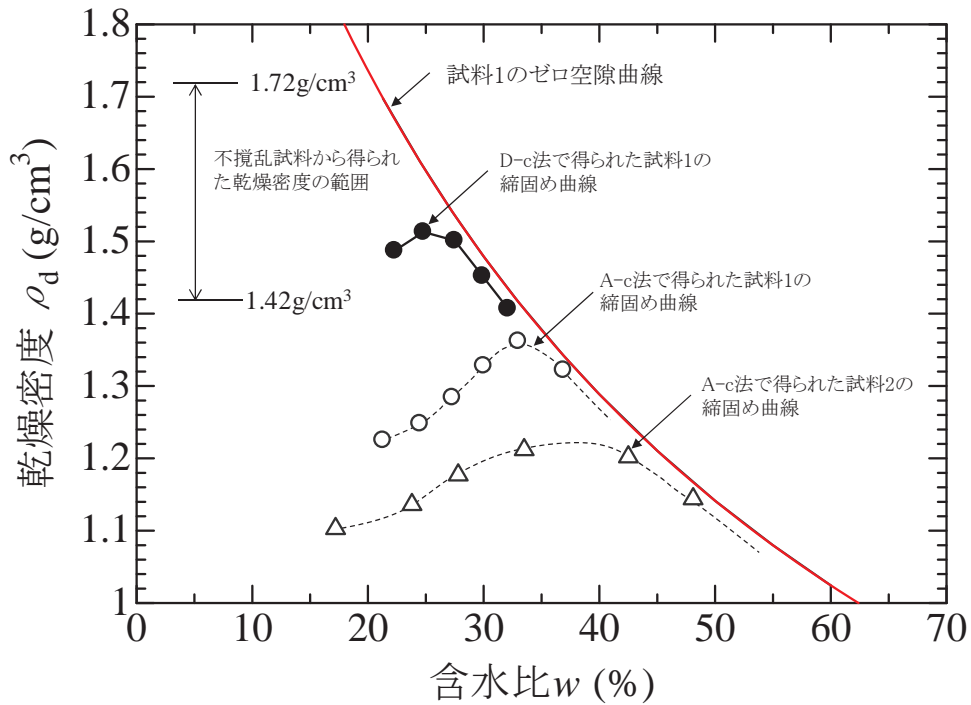
深度 (mm)	Si	Al	Fe	K	Ti	Ca	Mg	etc
	wt (%)							
0-15	57.7	18.8	14.8	3.7	2.3	1.0	0.9	0.8
15-30	59.7	18.7	11.9	4.4	2.7	1.2	0.9	0.5
30-45	55.5	18.5	16.2	3.8	2.4	0.8	0.9	1.9
75-90	49.6	23.3	19.3	3.1	2.3	1.2	0.7	0.5
135-150	45.7	22.7	24.8	2.3	2.4	0.8	0.6	0.7

(溶出試験結果)

深度 (mm)	Ca	Mg	Na
	(mg /L)		
0-15	2	N.D.	0.1
15-30	2	N.D.	N.D.
30-45	2	N.D.	N.D.
75-90	2	N.D.	N.D.
135-150	2	N.D.	N.D.



第102図 各試料の締固め曲線と不攪乱試料（A-2地点）の乾燥密度



第103図 試料1の締固め曲線と不攪乱試料の乾燥密度との比較



1. カワラケ田遺跡2次調査地遠景（東から）



2. Ⅲ-1区全景（真上から）



1. Ⅲ-2区全景
(真上から)



2. Ⅲ-3区全景
(真上から)

1. V区北側全景
(真上から)



2. V区南側全景
(真上から)



3. VI区全景(真上から)





1. 32号掘立柱建物跡
(南から)



2. 33～35号掘立柱建物跡
(真上から)



3. 33号掘立柱建物跡
(東から)



1. 44～46号掘立柱建物跡（北から）



2. 47号掘立柱建物跡（東から）



3. 48号掘立柱建物跡（東から）



1. 1号竪穴住居跡
(南から)



2. 1号竪穴住居跡竈
(南から)



3. 2号竪穴住居跡
(南から)



1. 2号竪穴住居跡
土器出土状況（東から）



2. 3号竪穴住居跡
土器出土状況（東から）



3. 4号竪穴住居跡
（北東から）



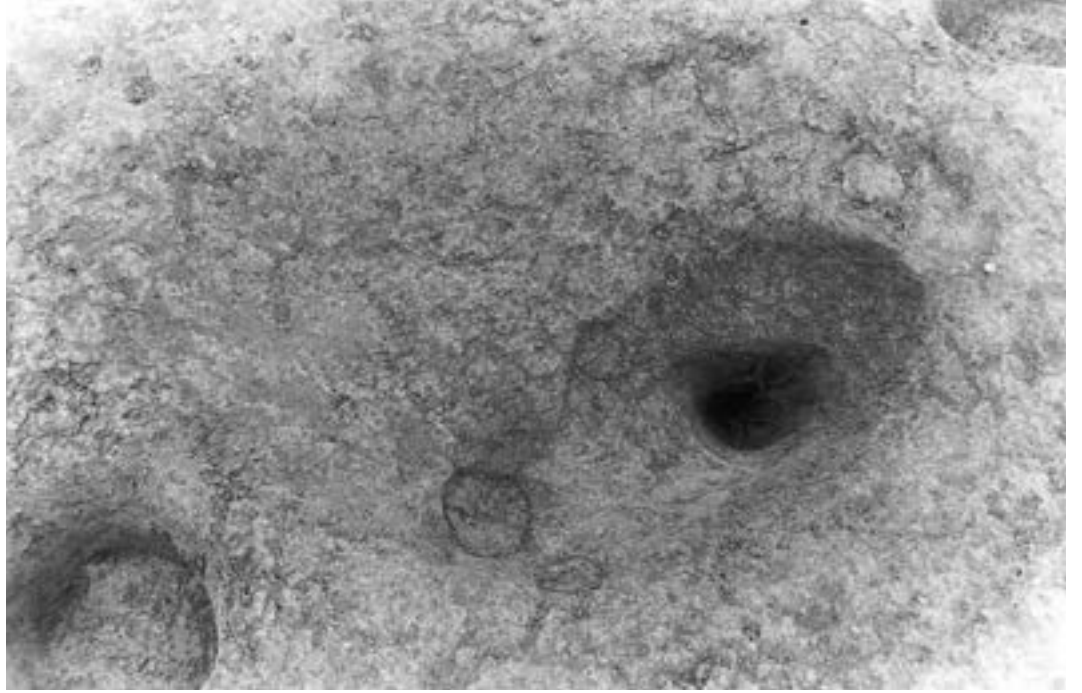
1. 6号豎穴住居跡
(南から)



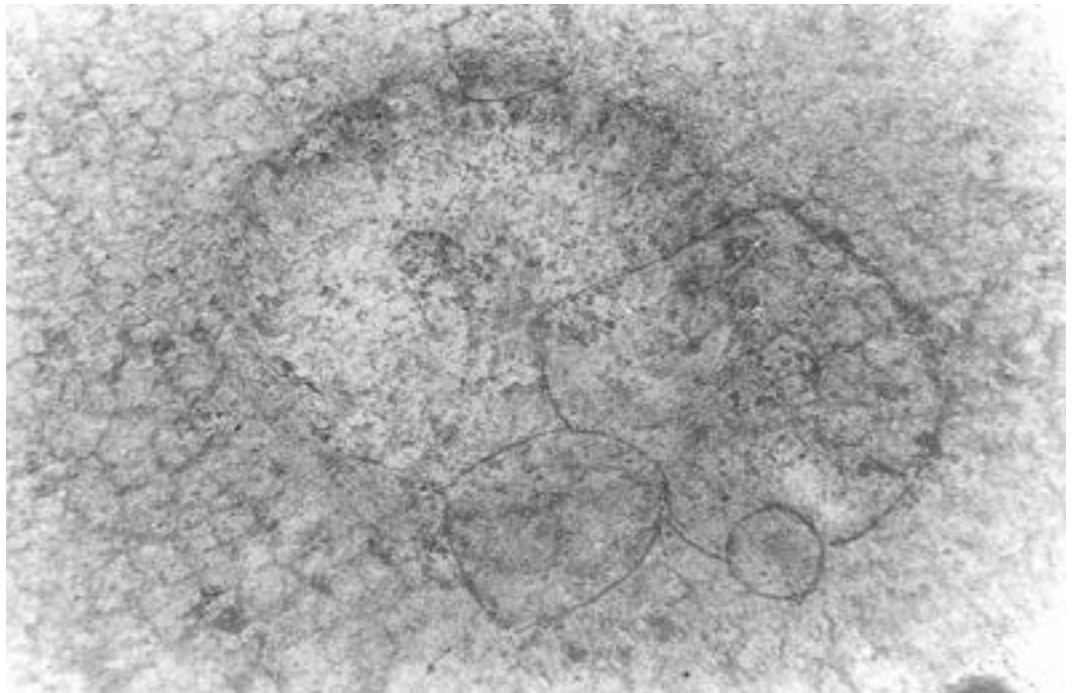
2. 6号豎穴住居跡
土器出土状況 (東から)



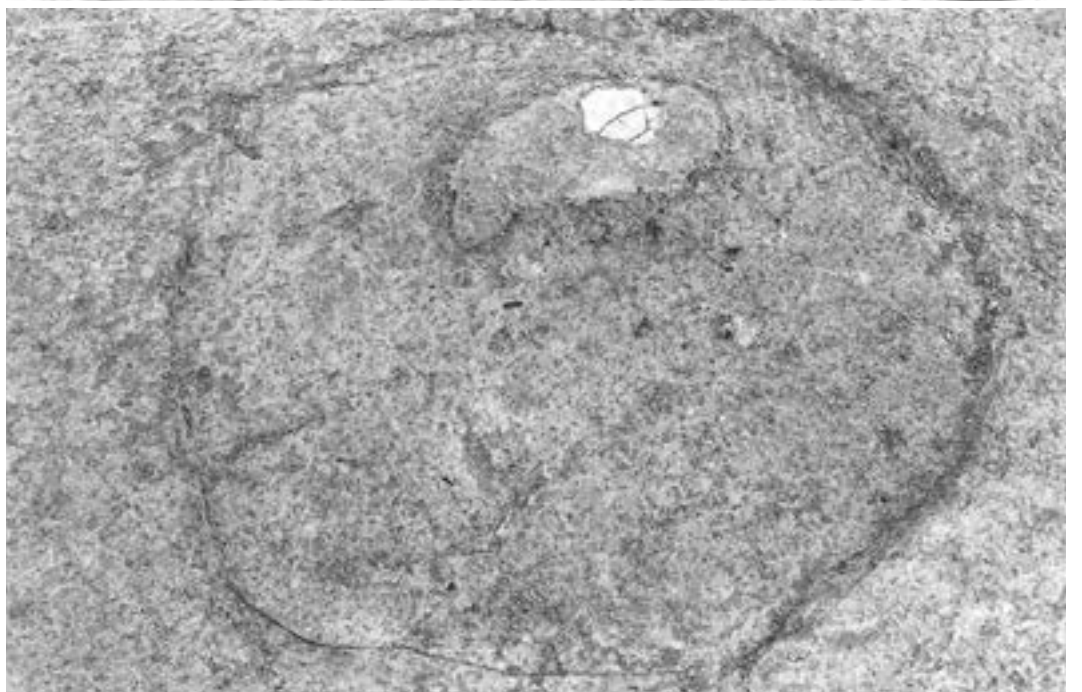
3. 7・8号豎穴住居跡
(東から)



1. 4 2 号土坑 (南西から)



2. 4 4 号土坑 (北から)



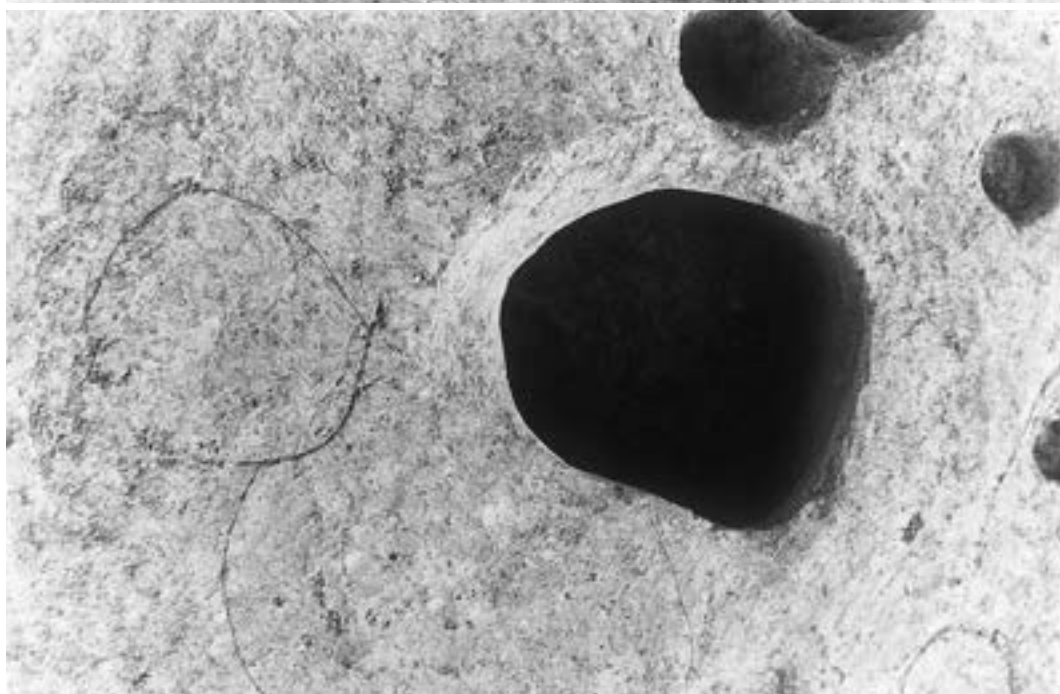
3. 4 5 号土坑 (北東から)



1. 46号土坑（東から）



2. 47号土坑（西から）



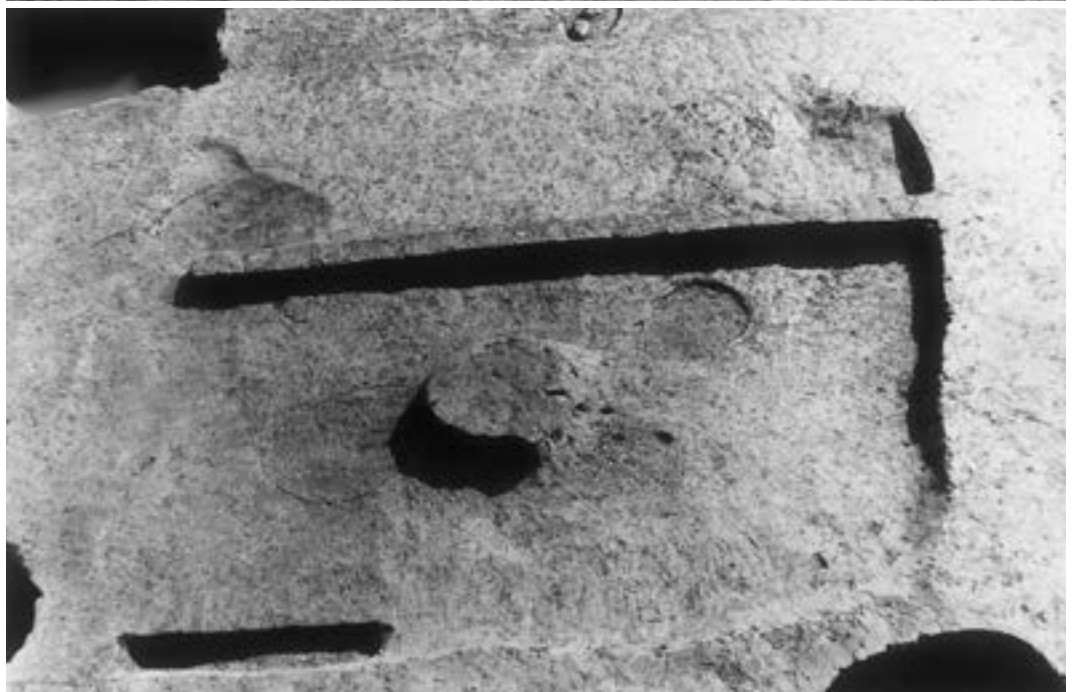
3. 49号土坑（北から）



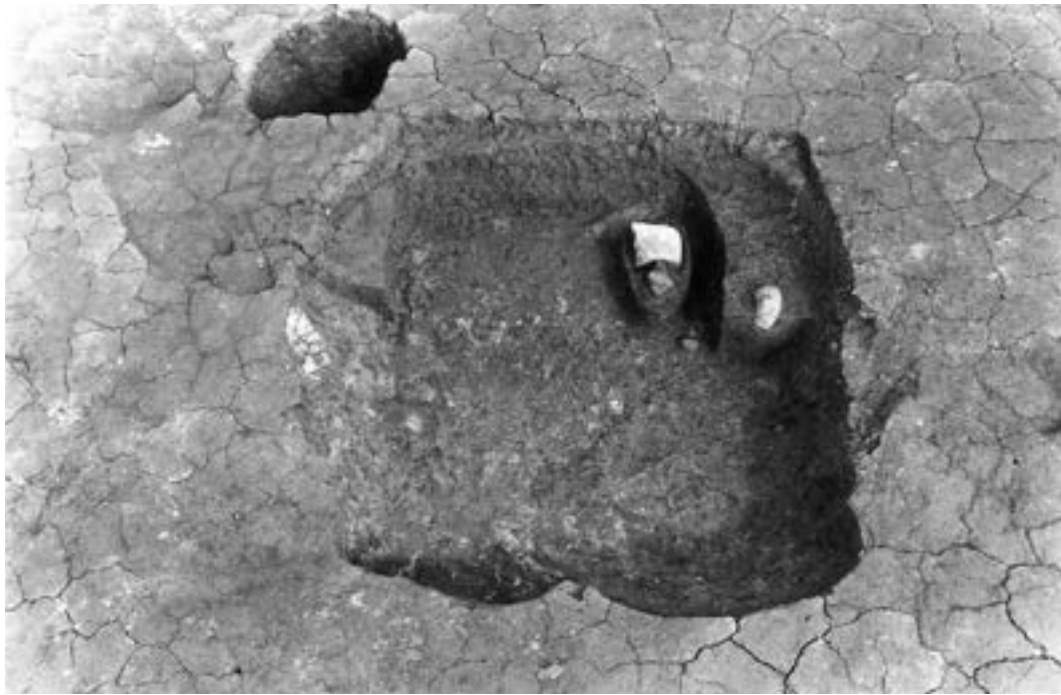
1. 54号土坑（南西から）



2. 55号土坑（東から）



3. 56号土坑（西から）



1. 57号土坑（南東から）



2. 59号土坑（西から）



3. 61号土坑（東から）



1. Ⅲ-1区道路跡
黒色土検出(南東から)



2. Ⅲ-1区道路跡
黒色土掘削後(南東から)



3. Ⅲ-1区波板状遺構
検出(南東から)



1. Ⅲ-1区波板状遺構
検出（南東から）



2. Ⅲ-1区波板状遺構
検出（南東から）



3. Ⅲ-1区波板状遺構
検出（北から）



1. 道路跡完掘
(南東から)



2. 波板状遺構完掘
(北から)



3. Ⅲ-1区東拡張全景
(西から)



1. Ⅲ-2区西側道路跡
黒色土検出（東から）



2. 西側道路跡波板状遺構
検出（東から）



3. 東側道路跡波板状遺構
検出（西から）



1. Ⅲ-2区道路跡完掘 (東から)



2. 波板状遺構土器出土状況 (南から)



3. Ⅲ-2区東側道路跡
ベルト土層 (東から)



1. Ⅲ-3区道路跡検出
(東から)



2. Ⅲ-3区道路跡黒色土
検出(西から)



3. Ⅲ-3区道路跡完掘
(西から)



1. Ⅲ-3区道路跡黒色土
検出（西から）



2. Ⅲ-3区道路跡礫検出
（南から）



3. Ⅲ-3区道路跡土器・
礫検出（南から）



1. 波板状遺構検出（東から）



2. 波板状遺構完掘（東から）



3. 波板状遺構検出（東から）



4. 波板状遺構完掘（東から）

1. Ⅲ-3区道路跡
土器出土状況(東から)



2. Ⅲ-3区東壁土層
(西から)



3. Ⅲ-3区道路跡
中央ベルト土層(南から)





1. Ⅲ-3区道路跡
中央ベルト土層(西から)



2. Ⅲ-3区西壁土層
(東から)



3. Ⅲ-3区南壁土層
(西から)



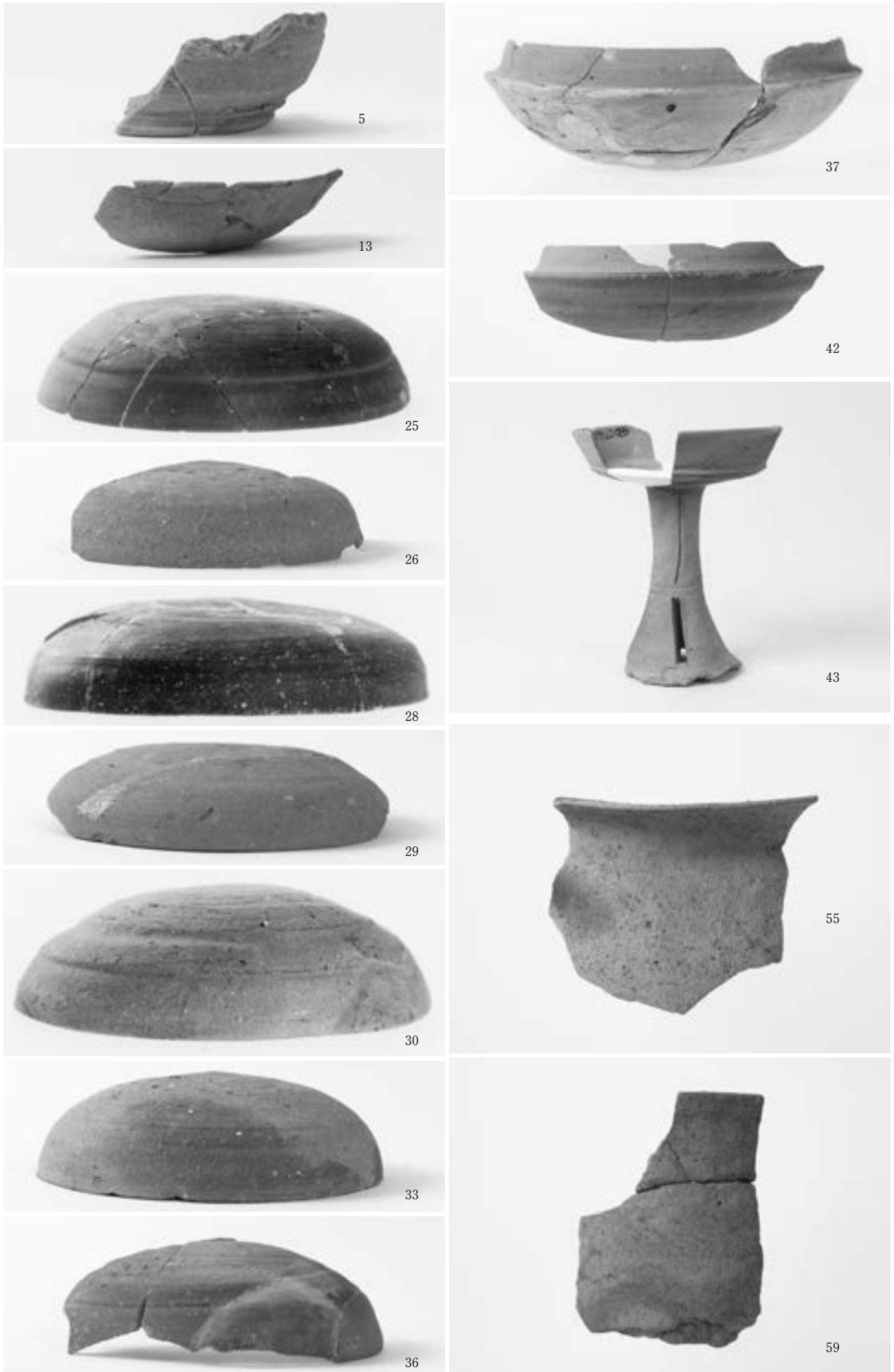
1. VI区道路跡（西から）



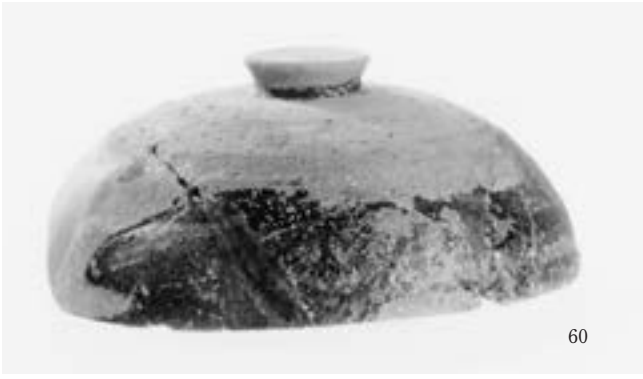
2. VI区道路跡（東から）



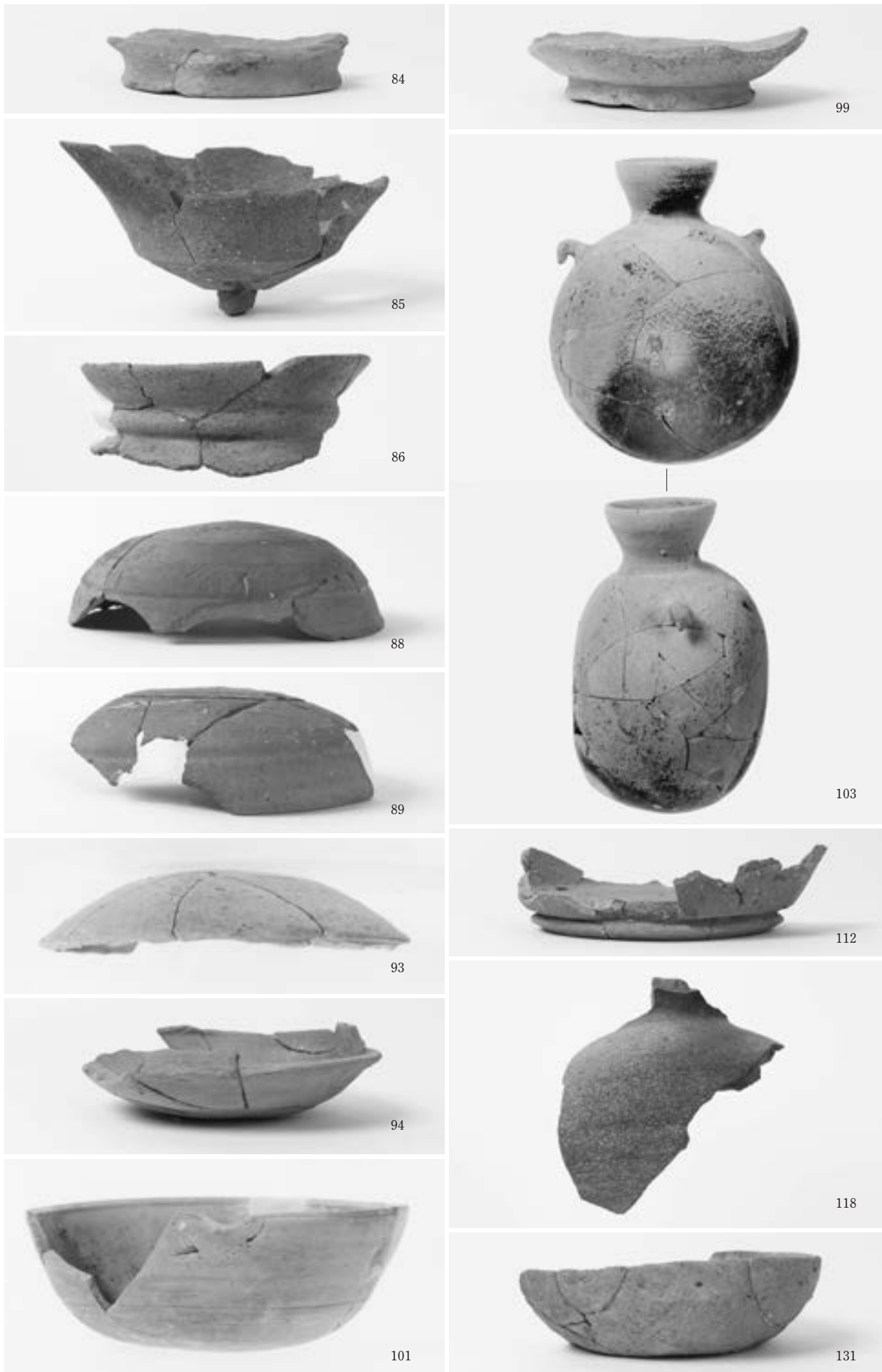
3. VI区道路跡土層（東から）



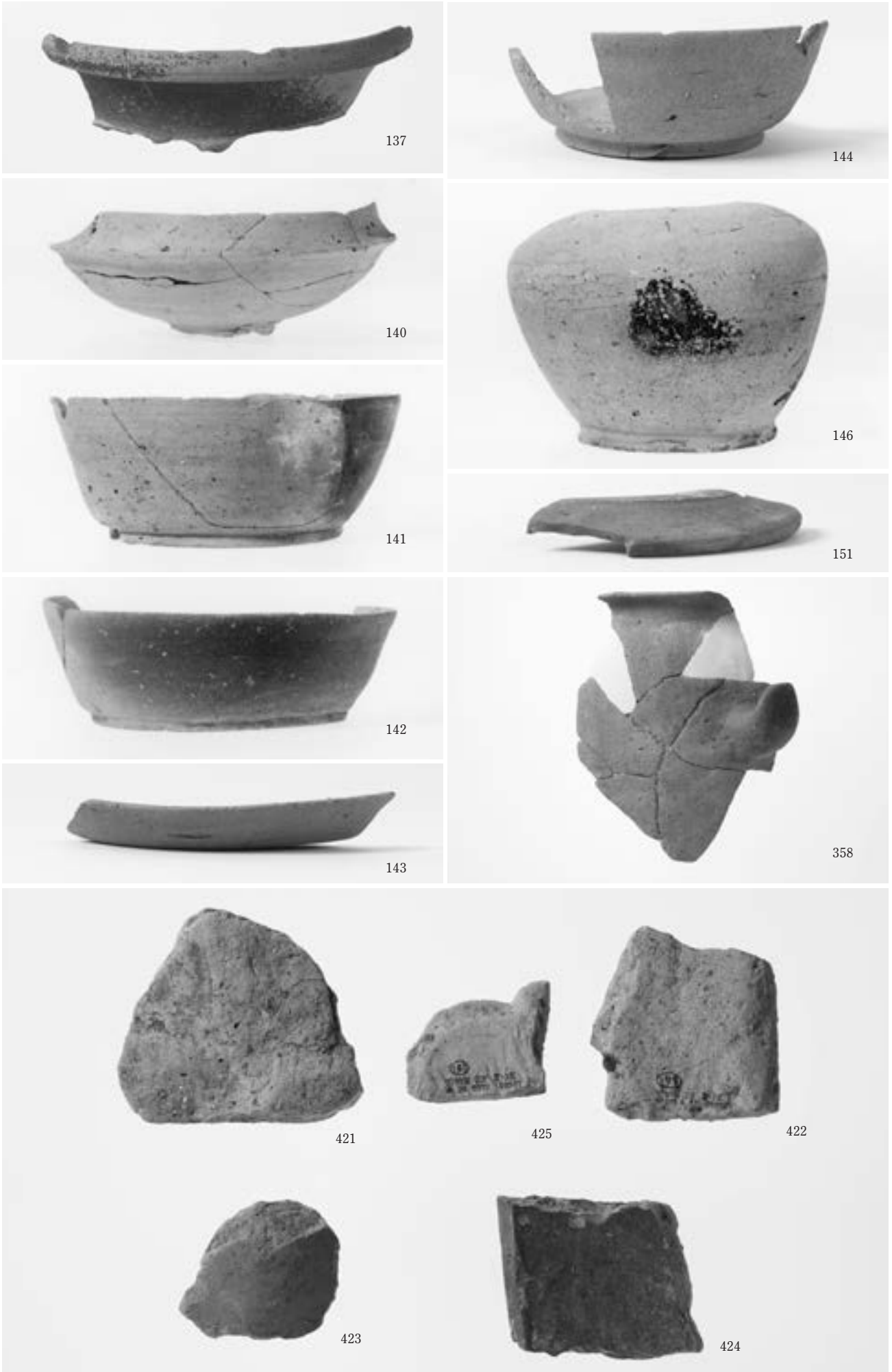
カワラケ田遺跡 2次調査 出土土器 1



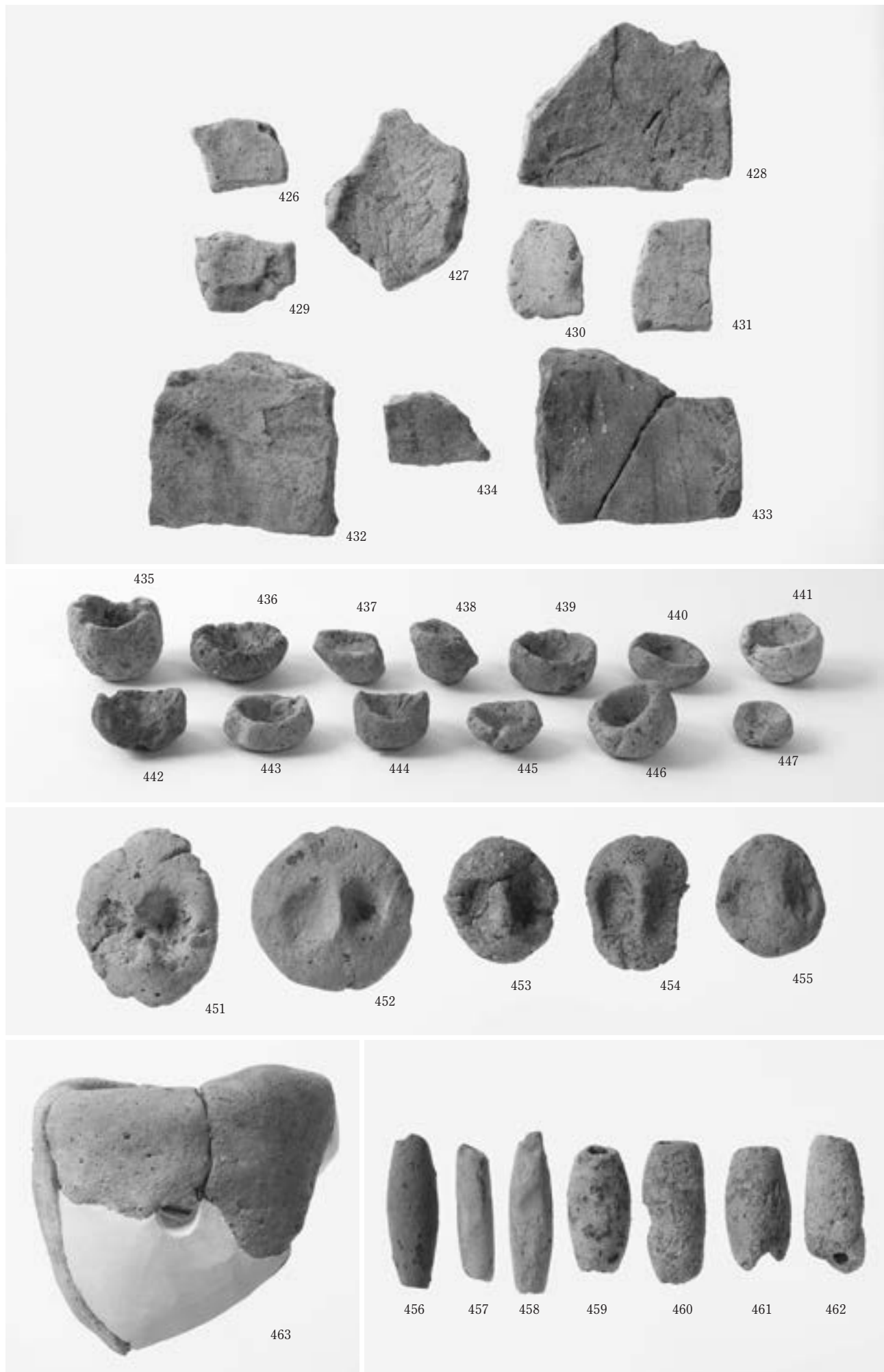
カワラケ田遺跡 2次調査 出土土器 2



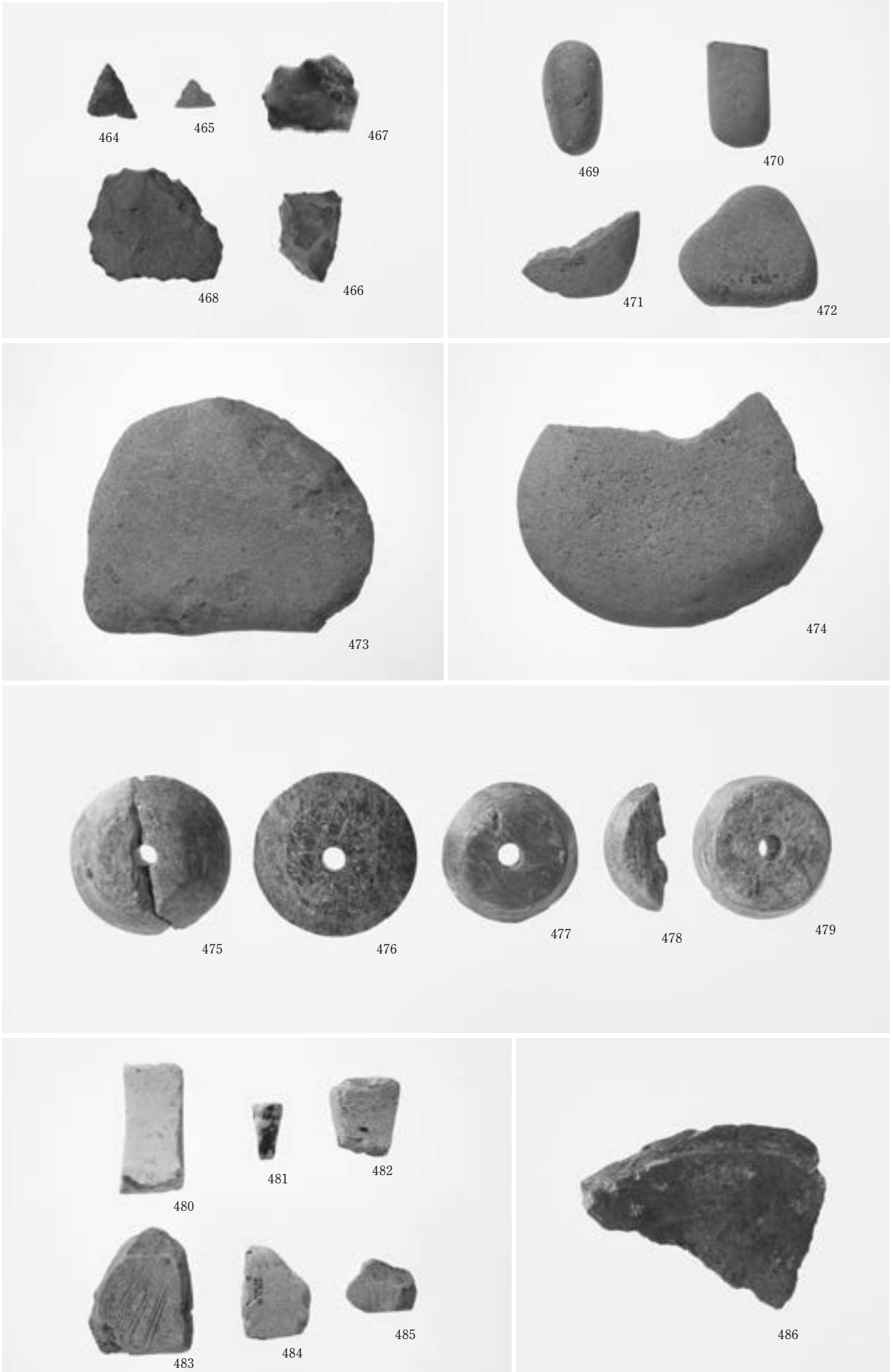
カワラケ田遺跡 2次調査 出土土器 3



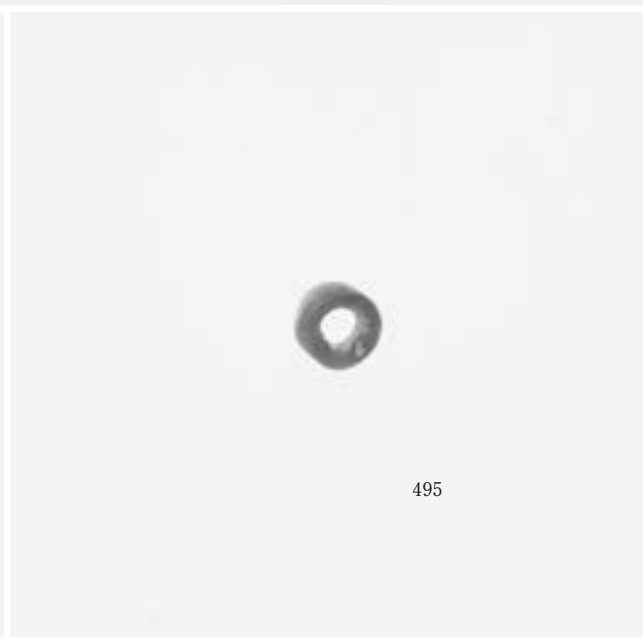
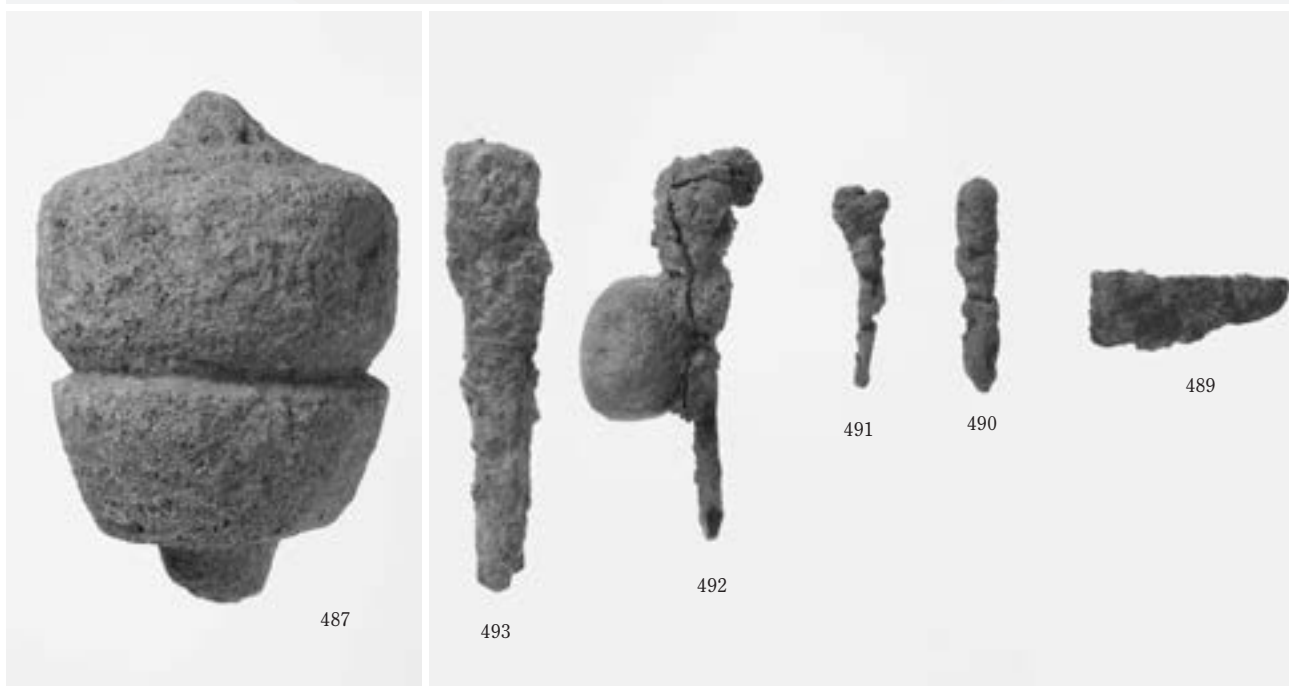
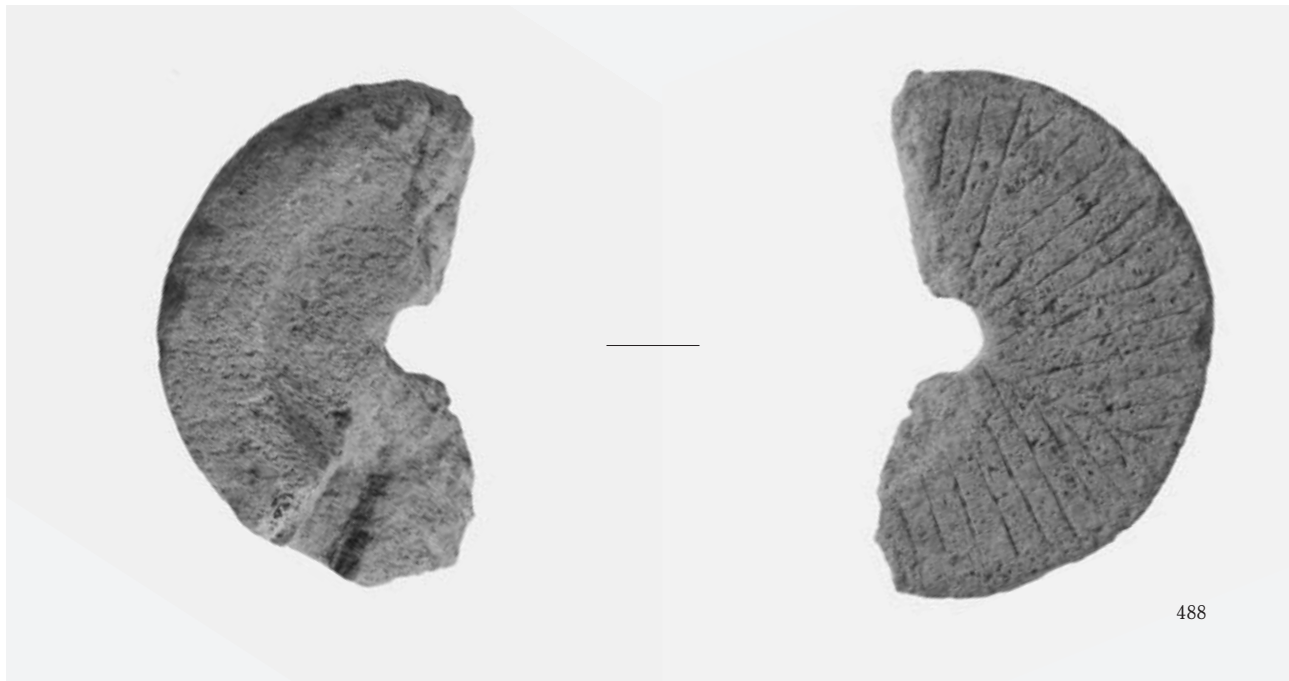
カワラケ田遺跡2次調査 出土土器4・瓦



カワラケ田遺跡2次調査 瓦・土製品・石器



カワラケ田遺跡2次調査 石器・石製品



八ツ重遺跡 2 次調査

八ッ重遺跡2次調査

1. 調査の概要

八ッ重遺跡は祓川の東側、標高35m前後の中位段丘上に位置する。付近は英彦山山系から北東方向に八手状に伸びた丘陵とそれらに挟まれる谷底平野からなり、西側には祓川によって形成された扇状地が広がる。椎田バイパスと今回の東九州自動車道など周辺の調査から、古代の官道が付近を通っていたと考えられる。

調査段階では予算の関係や未試掘の箇所があり、遺跡の広がりやを明確に区分できなかつたため下原七反田遺跡Ⅱ区としていた。報告にあたり、八ッ重遺跡2次調査と改称している。調査は現道を挟んで北側の下原377-1(約270㎡)と南側の下原369(約2200)㎡を行った。

調査はまず南側に着手し、平成20年11月5日にバックホーによる表土掘削を開始した。反転する必要があるため、先に西側部分を掘削し、12月12日にはほぼ掘削が終了した。遺構面の清掃を行った後、16日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。図面作成を行い、22日からは再びバックホーを搬入し反転を開始した。25日には人力掘削を再開し、翌21年1月29日には調査がほぼ終了した。その後、カワラケ田遺跡2次調査のⅢ区の調査に入ったため、そちらの調査進捗にあわせて29日に2回目の空中写真撮影を行った。2月3日からバックホーによる埋め戻しを開始し、6日に終了した。

北側は、平成21年4月7日にバックホーを搬入し、表土の掘削を開始した。その後作業員による人力掘削を開始し、遺構密度が薄かったこともあり、5月19日に終了した。

調査区内の堆積土は地山が橙色土を呈しており、遺構の埋土が概ね黒褐色土である。

遺構は椎田バイパス建設に伴う調査と同様、削平が著しくさほど多くない。出土遺物は主として弥生時代～中世に属しており、土坑、溝などが検出されている。このうち2・3号溝は道路状遺構の可能性がある。

2. 土坑(図版50、第105図)

1号土坑(図版50、第105図)

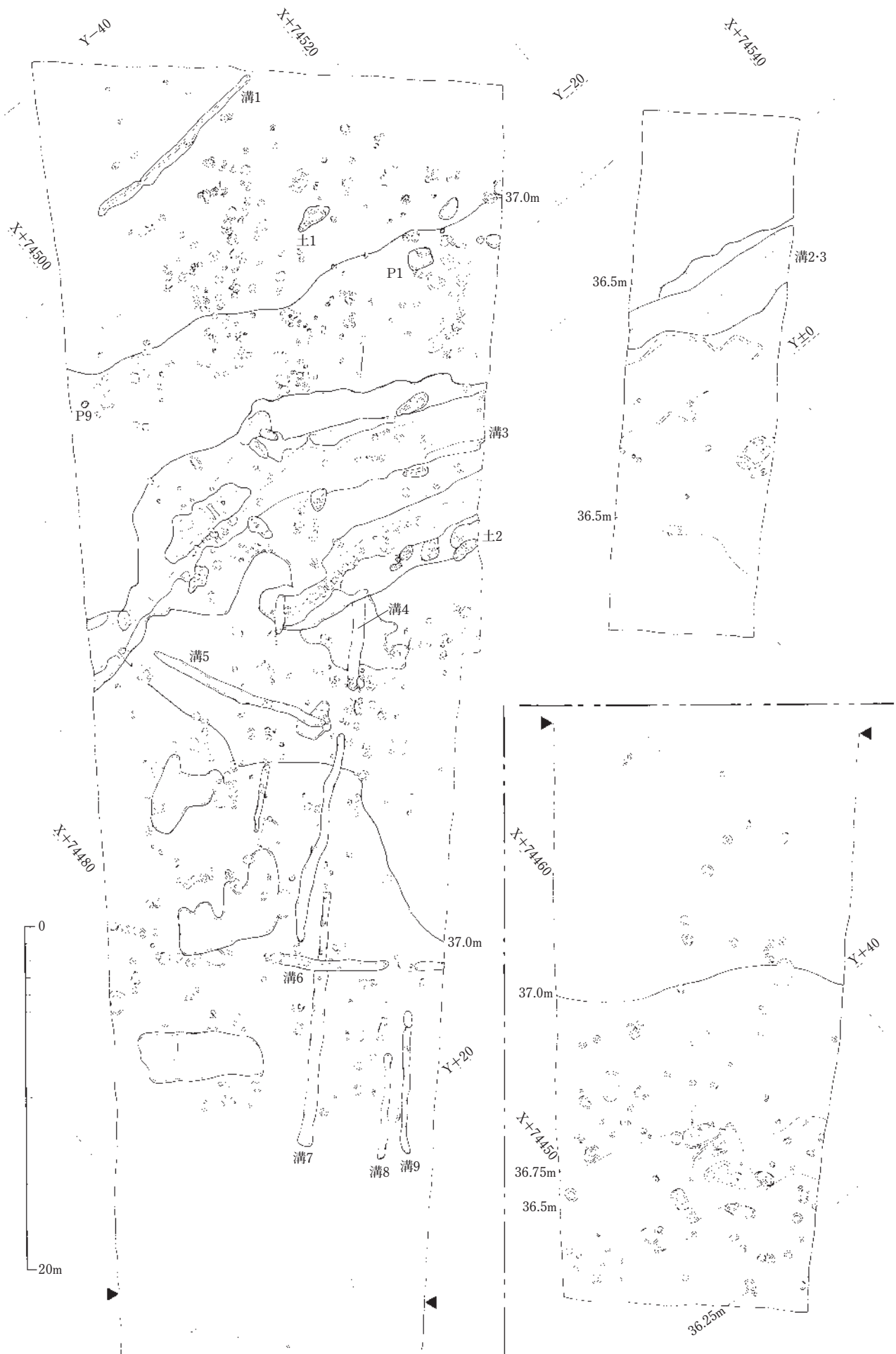
調査区の北西側に位置しており、南北に長い不定形をなす。南北2.15m×東西1.0m、深さ0.6mの規模である。南側は3段、西側は2段、北側は1段のテラスがある。埋土は上層から下層にかけてほぼ水平に堆積する。打製石鏃1点が出土した。

出土遺物(図版52、第108図)

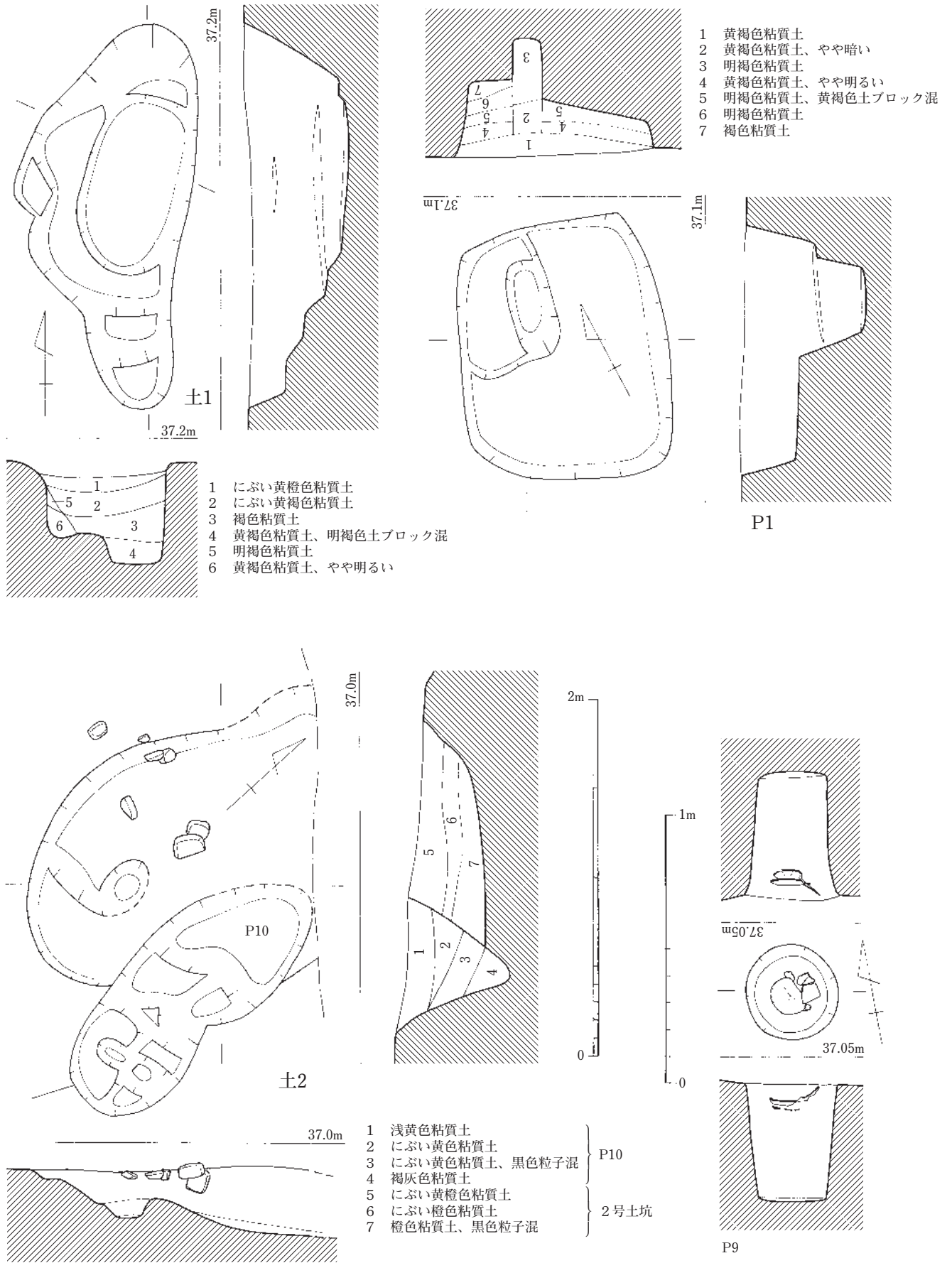
1は打製石鏃である。凹基式で挟りは0.4cmを測る。両面とも側面に細かな剥離を行うことで鋸歯状をなす。先端がわずかに欠損する。黒曜石製である。

2号土坑(第105図)

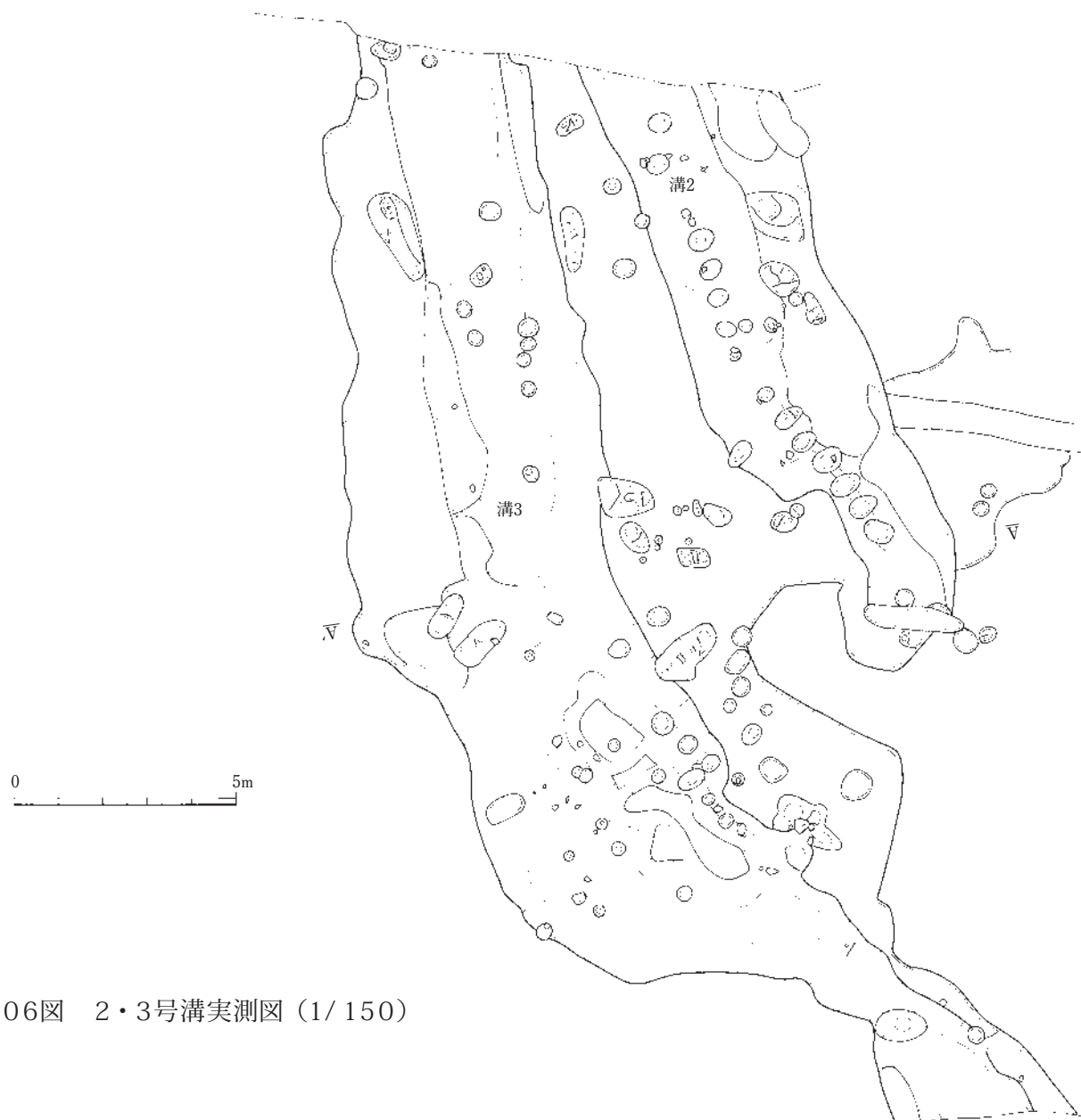
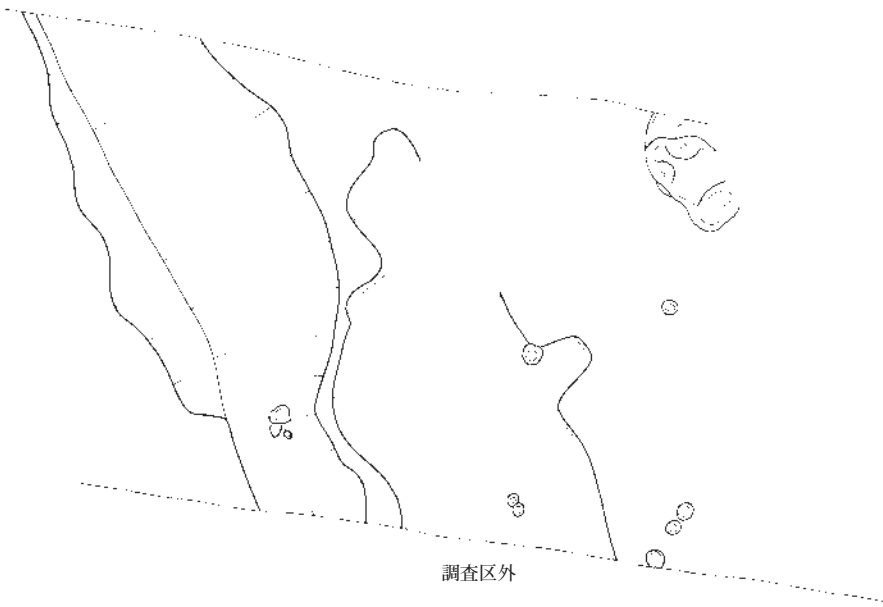
調査区の北西側、調査区境に位置する。P10に切られる。南北1.6+αm、東西1.4m、深さ0.4



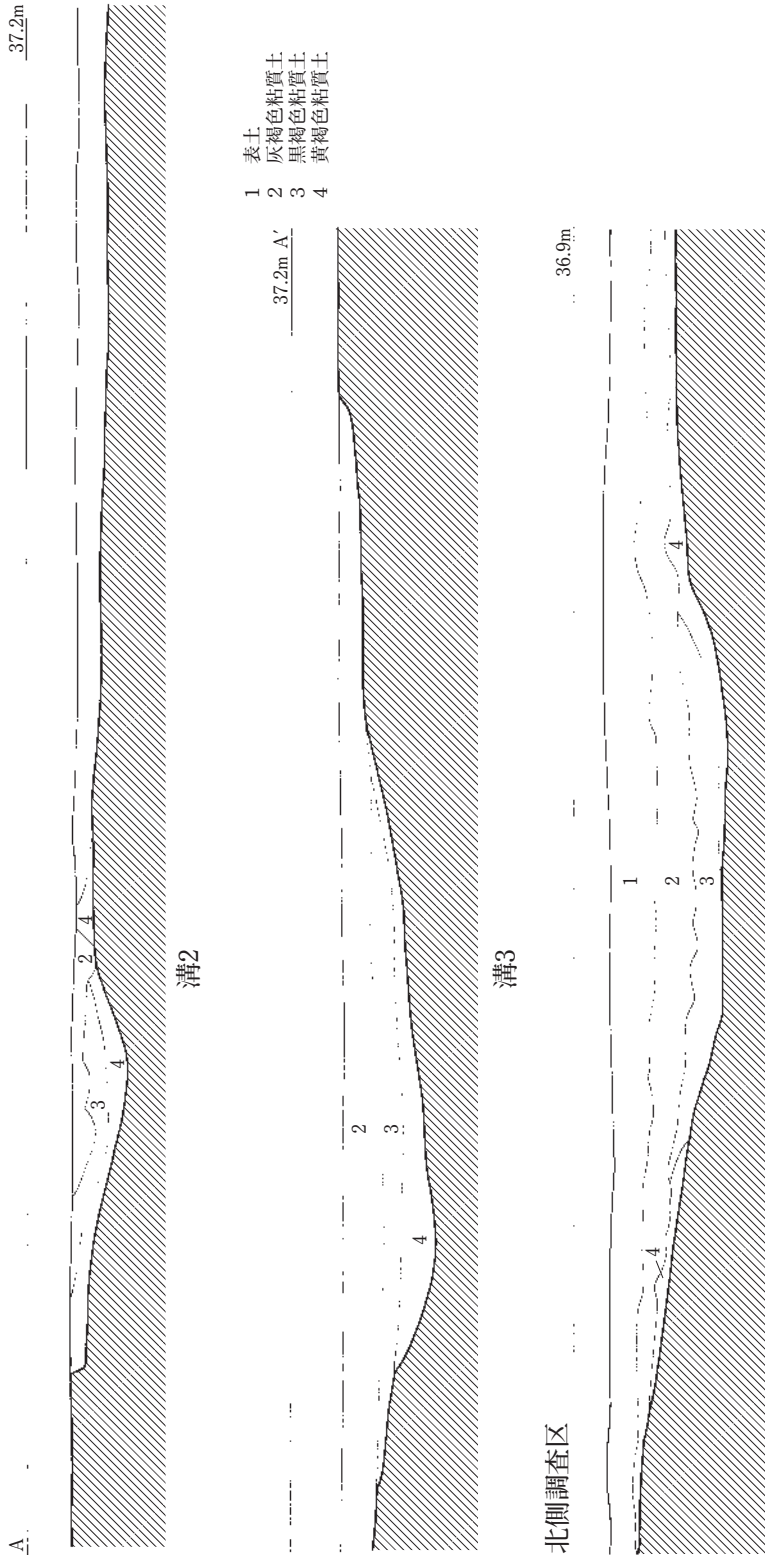
第104図 八ッ重遺跡2次調査遺構配置図 (1/ 300)



第105図 1・2号土坑、P1・9実測図 (1/30、1/20)



第106図 2・3号溝実測図 (1/150)



第107図 2・3号溝、小谷土層実測図 (1/40)

約70°をもって接するものと考えられる。埋土は溝両方にまたがる上層が灰褐色粘質土、溝部分上層が黒褐色粘質土、南側調査区にのみ認められる溝下層が黄褐色粘質土である。2・3号溝ともに溝の底部に深さ0.1m程度のピットや0.2m大の小礫が配されている部分が認められた。

出土遺物 (図版52、第108図)

2～6は灰褐色土層出土、7～9は黒褐色土層出土、10・11は黄褐色土層出土、12～15は層位

mの規模である。中央および西寄りに小礫が見られるが、全て浮いており、2号溝に伴うものである可能性もある。図化に耐える資料はなく時期等は不明である。

3. 溝 (図版50・51、第104・106・107図)

1号溝 (第103図)

調査区北端に位置し、南北方向に流れる。長さ12m、幅0.6m、深さ0.1mである。ほぼ直線的に伸びる。図化に耐える資料はなく、土師器の小片が出土する。時期は不明である。

2・3号溝 (図版50、第106・107図)

調査区北よりに位置しており、調査区の東端から西端まで伸びており、中央～南側では特に2本の溝間に2m前後の平場が存在している。2・3号溝ともに、埋土や構造の類似性などからここで一緒に報告する。

2号溝は長さ33m、幅3.5m、深さ0.2mで、3号溝は長さ50m、幅4.5～6.0m、深さ0.35mである。ともに8mの現道下未掘部分を含む。両方の溝を合わせた幅は最大12mを測る。八ッ重遺跡1次調査東区東側で検出された小谷とは

不明である。2は須恵器短頸壺の肩部か。内外面ともに回転ナデを施す。3・4は須恵器高坏である。脚部の上部のみが遺存しており、ナデを施す。3は外面に2条の凹線、内面にシボリの痕跡が見られる。5は弥生土器甕の底部である。磨滅のため調整は不明である。6は白磁碗である。口唇部が突出し、全面に施釉される。7は弥生土器甕の底部である。平底を呈し、外面は被熱により黒色を呈する。8・9は鉢か。8は内面に刷毛を施し、外面は磨滅のために不明である。9は割れ口断面で内部が灰色、外部が白色を呈する。小片のため不明だが、瓦質土器の鉢か。10は須恵器の長頸壺か。胴部中央付近が遺存していないものの、同一個体と考えられる。高台が内傾しており、内側が接地する。内外面ともに回転ナデを施す。11は瓦質土器の鉢か。内外面ともに磨滅のため調整は不明瞭だが、内面に一部2条の条痕が見られる。すり鉢の可能性もある。12は平瓦である。下面および一側面に端部が残る。端部をケズリによって成形し、外面に横ナデ、内面に布目一部ケズリを施す。13は磨製石斧である。刃部付近のみが遺存する。側面に研磨を施すことでわずかに平坦面を作り出す。層灰岩製である。14は打製石鏃である。凹基式で挟りは0.2cmを測る。先端をわずかに欠損し、裏面には主要剥離面が残る。

出土遺物は弥生時代、8世紀、中世（12世紀頃）と多くの時期のものが攪拌された状態で出土した。時期は不明確であるが、8世紀頃に機能していたものが、中世頃まで谷として開口しており、遺物が流れ込んだものか。

4号溝（第104図）

調査区中央に位置し、2号溝の肩部から南東方向に伸びる。長さ5.5m、幅0.5m、深さ0.05mでところどころ切れるが、さらに15mほど直線に伸びていた可能性もある。図化に耐えうる資料はなく、土師器の小片が出土している。時期は不明である。

5号溝（第104図）

調査区中央西よりに位置しており、東西方向から約30°南北に傾く。長さ11m、幅0.65～0.75m、深さ0.1mである。4号溝とほぼ直交する。図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土している。時期は不明である。

6号溝（第104図）

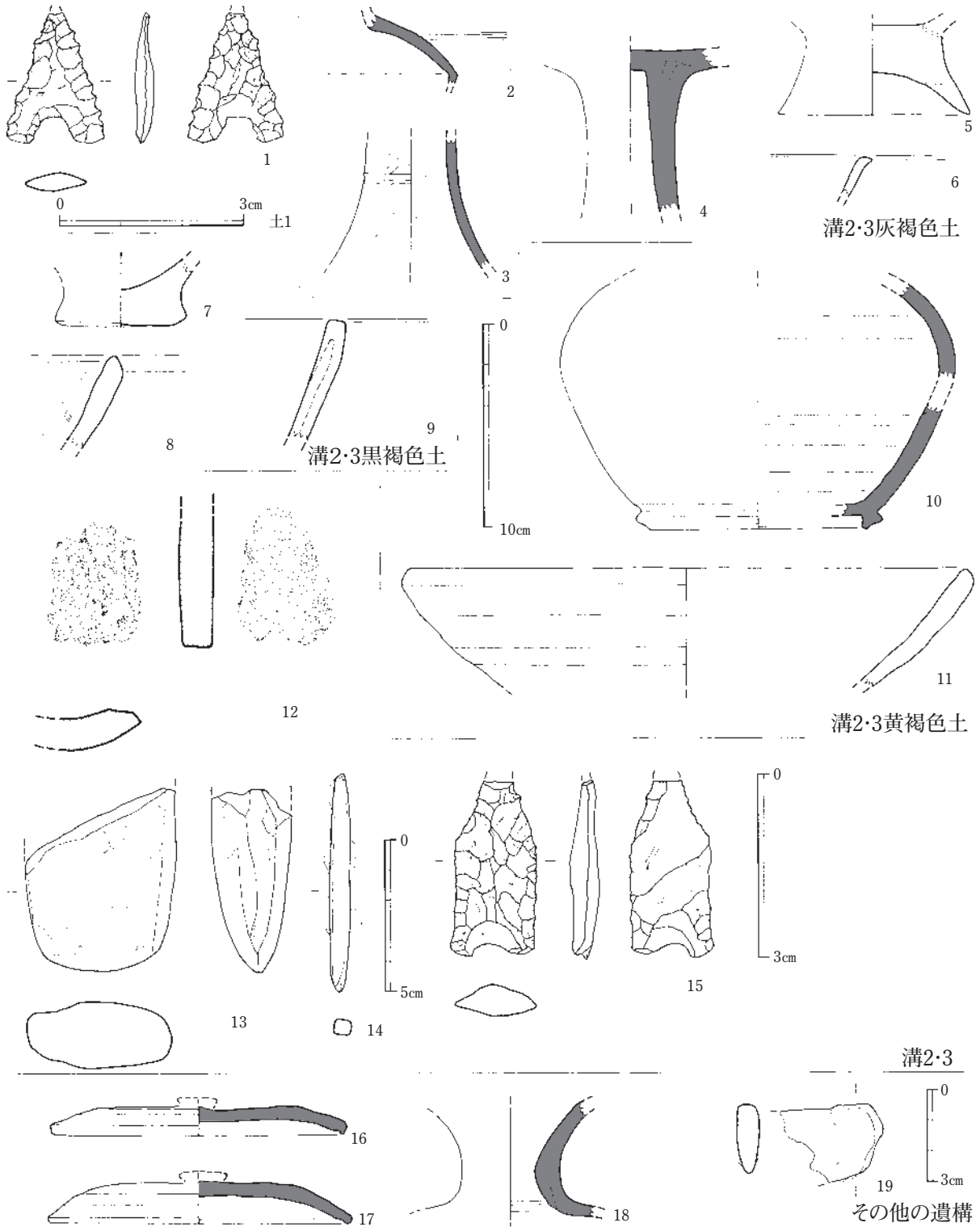
調査区中央北よりに位置しており、北東－南西方向に伸びる。長さ6.5m、幅0.5～0.7m、深さ0.15mである。7号溝を切り直交する。1.5mほど間隔を置いた北西側にも溝が認められ、さらに伸びていた可能性もある。図化に耐えうる資料はなく、須恵器の小片が出土している。時期は不明である。

7号溝（図版51、第104図）

調査区中央北よりに位置しており、北西－南東方向に伸びる。長さ14.5m、幅0.4～0.75m、深さ0.15mである。6号溝に切られ直交する。図化に耐えうる資料はなく、陶磁器の小片が出土している。時期は不明である。

8号溝 (図版51、第104図)

調査区中央に位置しており、北西-南東方向に伸びる。長さ6.5m、幅0.3~0.4m、深さ0.05mである。9号溝と0.8m間隔、7号溝とは約4m間隔で並行する。遺物は出土していない。



第108図 出土遺物実測図 (1・15は1/1、13・14・19は1/2、他は1/3)

9号溝（図版51、第104図）

調査区中央に位置しており、北西—南東方向に延びる。長さ7.5m、幅0.3～0.4m、深さ0.15mである。8号溝と0.8m間隔で並行する。遺物は出土していない。

ピット出土土器（図版52、第108図）

16・17は須恵器の蓋である。口縁部がわずかに突出する。剥落しているもののボタン状の摘みが付くものと考えられる。天井部外面には回転ヘラケズリ後ナデ、天井部内面には不定方向ナデ、他は回転ナデを施す。焼成はやや不良で、重ね焼きの痕跡が認められる。16はP1出土。17はP9出土。18は須恵器壺の頸部か。内径2.3cmを測り、内外面ともに回転ナデを施す。P23出土。19は不明鉄片である。基部付近と考えられる端部のみが遺存しており、下部がやや細くなる。鉄鎌などになるか。

4. まとめ

検出した遺構

本遺跡では削平が著しく、住居跡等の遺構は発見されておらず、溝や土坑が検出されているのみである。このことから集落景観等の復元は難しく、集落としての呈をなしていたかどうか不明である。また1次調査においても同様に削平が激しい。試掘調査では東西両側に谷が入っていることがわかっており、丘陵上には本遺跡のみが位置していたものと想定される。出土した遺物は弥生時代のほか、8世紀代の土器が散見される。付近北側には官道が通っていたことが推定されており、関連性が示唆される。

2・3号溝について

先に述べたように2・3号溝は1次調査東区東側で検出された小谷とは約70°をもって接すると考えられ、この小谷は位置と規模から官道である可能性がある。このことから本調査区で検出された2・3号溝が道路である可能性について考えたい。

2号溝および3号溝の南側床面では深さ10cm程度のピットや20cm大の小礫が連続して配されており、芯々距離は約60cmである。これらは、道路状遺構でよく認められる波板状痕跡と類似しており、先に述べたように道路である可能性が指摘できる。しかしながら、埋土中に硬化した様子は認められず、周辺の調査状況等を勘案すると路面等は削平されて残っていないものと考えられる。

現段階では、本書所収のカワラケ田遺跡の報告で、八ッ重遺跡1次調査東区東側で検出された小谷が官道であることが示唆されていること、その官道と接して伸びていること、波板状痕跡様の遺構が見られることから道路の可能性のあることを指摘しておくのみに留めたい。また、これらの溝は2号溝が幅3.5m、3号溝が4.5～6mであることから、もし道路であれば、官道である可能性は低く、官道に直交した脇道なようなものになると言える。



1. ハツ重遺跡2次調査
全景（西から）



2. 2・3号溝（小谷）
完掘状況（真上から）



1. 1号土坑土層 (南から)



2. 2・3号溝 (小谷)
完掘 (南から)



3. 2・3号溝 (小谷)
配石状況 (南から)

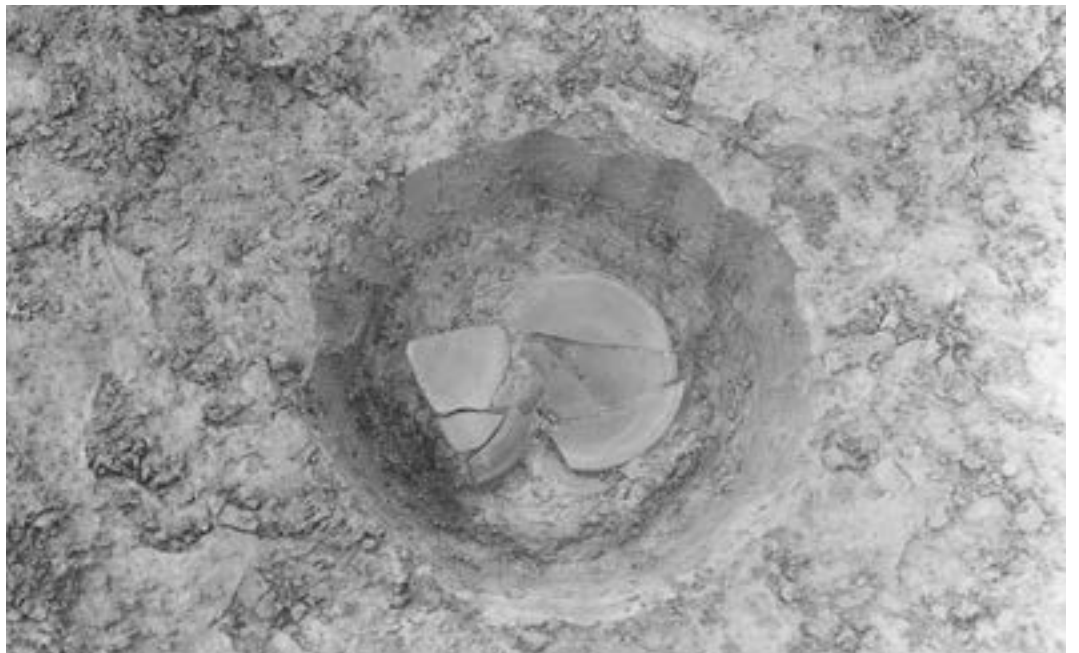
1. 7~9号溝完掘
(東から)



2. P 1 南土層



3. P 9 土器出土状況
(北から)

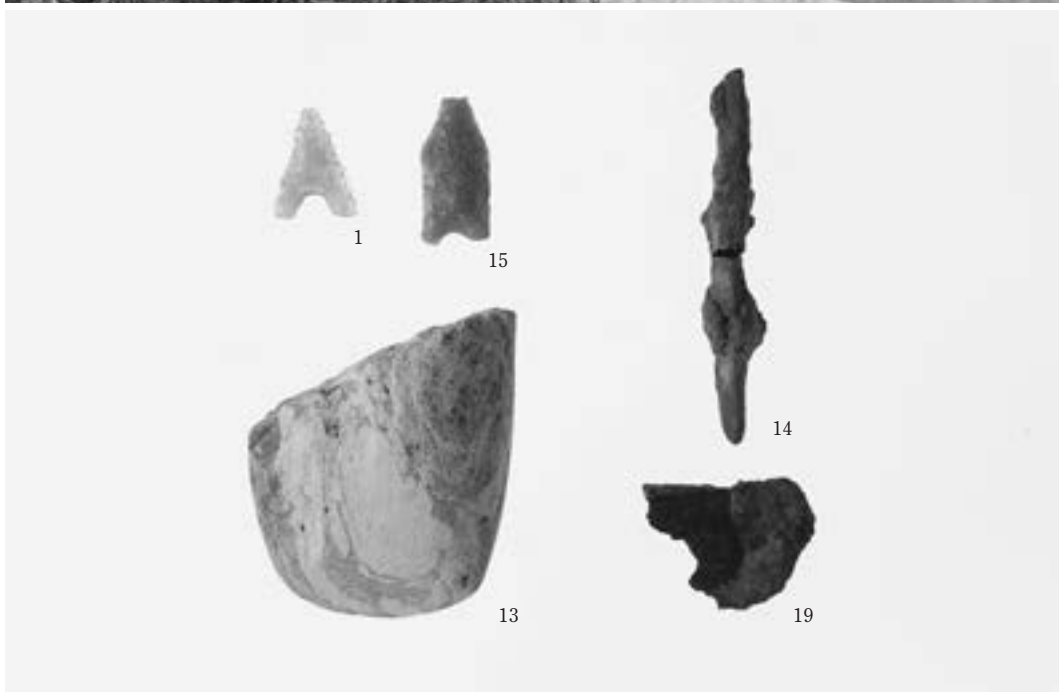




1. 北側調査区全景
(東から)



2. 北側調査区2・3号溝
(南から)



3. ハッ重遺跡2次調査
出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あざみかわのうえいせき・かわらけたいせきにじちょうさ・やっしげいせきにじちょうさ								
書名	皆見川ノ上遺跡・カワラケ田遺跡2次調査・八ッ重遺跡2次調査								
副書名									
巻次									
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	第10集								
編著者名	坂本真一（編） 城門義廣 宮田剛								
編集機関	九州歴史資料館								
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3								
発行年月日	平成25（2013）年9月30日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号	〇'〃	〇'〃			
あざみかわのうえいせき 皆見川ノ上遺跡 2次調査	ふくおかけんみやこぐん 福岡県京都郡 みやこまちおおあざみ みやこ町大字皆見		40625	920081	33° 40' 46"	130° 59' 34"	2010. 7. 11 ～ 10. 20	970m ²	東九州自動 車道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
皆見川ノ上遺跡	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世	竪穴住居跡 土坑 水田状遺構 溝状遺構 不明遺構	3 11 9 7	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	緑釉陶器 瓦器 土師質土鍋 土師器 瓦	製塩土器 土製品 木製品 石製品 金属製品	製塩土器 緑釉陶器	
遺跡の概要									
古墳時代の竪穴住居跡と中世の土坑および水田を確認した。									
かわらけたいせき カワラケ田遺跡 2次調査	ふくおかけんみやこぐん 福岡県京都郡 みやこまちおおあざみ みやこ町大字皆見		40625	920083 (町番号) 920072 (県番号)	33° 40' 37"	130° 59' 42"	2008. 12. 17 ～ 2010. 12. 27	約7000m ²	東九州自動 車道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
カワラケ田遺跡 2次調査	集落 道路	古墳時代 奈良時代	掘立柱建物跡 竪穴住居跡 土坑 溝 道路跡	16 7 23 6	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	瓦 土製品 石製品 鉄製品 鏡	道路跡		
遺跡の概要									
7～8世紀の掘立柱建物跡と古墳時代前期・後期の竪穴住居跡を検出した。また集落跡の南側には古代の道路跡を検出した。									
やっしげいせき 八ッ重遺跡 2次調査	ふくおかけんみやこぐん 福岡県京都郡 みやこまちおおあざしもぼる みやこ町大字下原		40625	920115	33° 40' 30"	130° 59' 52"	2008. 11. 5 ～ 2009. 5. 19	約2500m ²	東九州自動 車道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
八ッ重遺跡 2次調査	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代	土坑 溝	3 9	弥生土器 土師器 須恵器	瓦 石器			
遺跡の概要									
古墳時代と奈良時代の土坑と溝を検出した。									

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 25	登録番号 3

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－10－

砦見川ノ上遺跡・カワラケ田遺跡 八ッ重遺跡

平成25年（2013年）9月30日

発行 九州歴史資料館

〒838－0106 福岡県小郡市三沢5208－3

印刷 (株)富士印刷社

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6－45

TEL 092－641－5131